

柏田盛文

廿六年一ヶ月

始末書

明治九年十二月帰県之趣意及ヒ十年二月県下ニ於テ私学校党之為メニ捕縛サレシ始末巨細ニ可申上之命ヲ受ケ謹テ左ニ申上候

一明治七年七月遊学ノ為メ県下ヲ発足イタシ、同年九月福澤門ニ入学シ、在再始ント三ヶ年ナルニ因リ、一旦帰省スヘキ旨屢父母ヨリ申来候故、客歳十二月ノ休業ニハ是非暫時帰省シテ、老父母ノ憂心ヲ慰度儀ハ既ニ胸衷二期シ居申候、然ル処同シ十二月月上旬ヨリ通路之風説ニ、鹿兒島県下私学校党ハ公然刀ヲ帯ヒ銃ヲ携ヘ、或ハ隊伍ヲ組ミ、或ハ射撃シ、將ニ兵馬ヲ上国ニ弄シテ颯下ヲ蹂躪スルノ景状アリト物議頗ル轟然ナリ、如斯折柄ニ私ノ知友河島ナル者ヨリ委詳彼地ノ実況ヲ報告シテ曰ク、曰々私学校ニ馳セ集ル者殆ト一万人、其勢力甚タ猖獗ナリト、其後私舎弟吉井恭治上京イタシ、私学校党ハ現ニ巷説ノ如ク、銃砲或ハ刀劍或ハ彈藥ヲ(購)構求シ、或ハ彈丸ヲ揃ヘ喋々政府ノ举措ヲ誹謗シ、將ニ一大變動ヲ起サントスルノ徵候アリ、併テ吾郷(即チ平作)

ニ至テハ、当時迄一人モ入校ノ者ナシト雖トモ、先日ハ井口武(当時学校長ニテ頗ル人心ヲ収メン著)郷内ノ壮士ヲ彼ノ宅ニ呼集テ曰ク、子等ハ国家有事ノ日ニハ出テ、義務ヲ尽ス心中ナルヤヲ問タル由、私ハ独り此会ニ列セサル故、其後彼宅ニ行テ、先日ハ子郷内ノ壮士ヲ集テ云々ヲ咄セシ由、抑子ノ所謂有事ナル者ハ何等ノ事ヲ指スヤ、ト尋問スレハ、彼ハ答弁ヲ曖昧ノ間ニ措キタリト逐一県下ノ実情ヲ陳述仕候、之ニ由テ私憂慮シテ以為ラク、方今鹿兒島ニシテ崛起セハ、固ヨリ山口・熊本ノ暴動ノ如ク、一挙シテ鎮定スル能ハス、遂ニハ日本独立ノ安危ニモ関涉スル争乱ヲ醸生スルモ測リ難シ、故ニ之ヲ未発ニ防禦シテ独立之基礎ヲ鞏固ニスルハ、我輩生国ニ報スルノ一大義務ニ非スヤ、且ツ我輩ハ一介ノ書生ト雖トモ、彼等偏ニ私憤ヲ抱キ、怨望ノ余リ国事ノ開進ヲ憤リ、自由同等ノ説ヲ惡ミ、民権進動ノ欄柵トナル賊軍ヲ起シ、治安ヲ乱シ国憲ヲ犯シ、堂々タル王師ニ弓ヲ彎クニ方テハ、平生ノ情義ヲ重シテ傍觀スルニ及ハス、止ヲ得ス涙ヲ揮ヒ声ヲ吞ンテ、干戈ヲ朋友親戚ノ間ニ交エサルヲ得スト雖トモ、如此慘毒ノ場合ニ立チ至テハ、実ニ人倫ノ至愛ニ非スヤ、幸ニシテ我郷

ノ人民ハ未タ一人モ入校ノ者ナキ由、何ソ早ク帰県シテ大義名分且ツ利害得失ヲ諄々吐露シテ、我輩朋友親戚ニ対スルノ義務ヲ尽サ、ルヤ、若朋友親戚ノ暗々ト国賊ノ醜名ヲ受ルヲ知りナカラ、予シメ一言モ忠告セシテハ友情ニ於テ欠ル処アラント思込ミ申候、併テ強ヒテ入校ヲ制遏スル意ニテハ無御座候、何ントナレハ元來外城人民ハ戊辰役ノ賞典祿、或ハ近衛兵役中ノ不公平ヲ大ニ憤懣シタル者多シト雖トモ、今般ノ挙動ヲ窺ヘハ滔々相牽ヒ甘シテ彼ノ馳役スル所トナリ、且ツ西郷ハ国家柱石ノ臣ナレハ、濫リニ無名ノ暴動ヲ働クマシ、然ラハ彼党ノ主義トスル所何カノ名義アリテ人心ヲ甘服サセシノミナラス、西郷モ制止セサラン故ニ、何分ニモ速ニ帰県シテ躬親ク実験シ、彼党ノ主義トスル名義ヲ聞キ、我輩ノ見込ヲ陳ヘ、相互ニ大義ヲ誤認セス、上ハ国安ヲ妨害セスシテ不羈独立之國憲ヲ拡張シ、下ハ倫理ヲ敗紊セスシテ朋友親戚ノ情義ヲ保全センコトヲ熱心シ、帰県ノ志始テ決シ申候、

一同月十七八日頃、私猪鹿倉兼文ヲ訪、新錢座ナル近藤塾ニ差越候処、偶々大山綱介モ来リ、談次遂ニ県下之景状ニ及フ、私二人ニ問テ曰ク、先日我輩之知友ヨリ

該県ノ実況ヲ報告スルニ、当時ノ甚説ハ全ク浮虚ニ非サルニ似タリト、又私ノ志趣ヲ陳説スルニ、彼等ノ心事モ符節ヲ合セタル如ク、依テ帰県ノ儀ヲ粗相約シ置申候、

一同シ二十五六日頃、私將ニ礪川ナル親戚ノ有島宅ヘ行クノ途中、末弘直方ニ出遇候処、私ニ言テ曰ク、子等ノ云々ニ因テ帰県スル趣ヲ向キニ側聞スルニ、其志シ実ニ感服スヘシ、父母ノ邦ヲ愛憶スルハ誰モ人情同シキ故、我等モ同僚四五名ト同キ志趣ヲ抱テ、帰県センコトヲ約シ置キタリシニ、甲説キ乙咄セシニ同志輩モ大ニ増加シ、未タ一面識ナキ者モアル故、今夜ハ淺草ノ園田長輝宅ヘ集テ、日限等モ定メル賦ナル故、子等モ來駕セハ如何ト申故、私答テ曰ク、我輩ハ有島宅ニ行クカラ若シ早ク帰ラハ昇ル可シト言テ相別レ、有島宅ニ差越居候処、猪鹿倉モ幸ニ来リ、俱ニ伴フテ園田宅ニ入テ席上ヲ一見スルニ、書生ノ外私ノ知人ハ安樂・末弘ノ二人ニ過キス、宿主園田長輝スラ初会ニ御座候、衆相議シテ曰ク、各帰県ノ上ハ大義名分ヲ説テ、信実ノ友情ヲ移スカ大主意ナレハ、僅少ノ侮辱ヲ受ルトモ、決シテ抵抗セス、懇々諄々漸ク真正ノ方向ニ導キ、必

ス粗暴ニ激論シテ暴発ヲ促スナキヲ各服膺ス可シト云、日限ハ明日明後日タル可シ、而シテ明朝ハ大山綱昌カ今般婦県人員中一面識ナキ者へ対面シタキ由故ニ、下谷ノ川路邸ニ集マラハ如何ント云フ、我等書生中ハ安樂・末弘ヲ呼出シ、我輩今般婦県ハ自身実ニ止マサル志情ヨリ暢発シタル事件ナレハ、子等モ今度ノ婦県ハ同キ情実ヨリ発シタル私事トハ云モノ、当分在職ノ人々ナレハ、遂ニ世上ニ我輩ハ警視ノ為メニ籠絡サレ、当政府ノ使役スル処トナルト認メラレテハ、甚以残念至極ニ存シ、且ツ自身ヨリ他人ニ不羈独立ノ元氣、自主自治ノ精神ヲ陶冶揮サセント欲シテ、先ツ自身ニ卑屈ノ域ニ陥ルノ景状ニ相成候テハ、素志ニ背馳スルノミナラス、尔来世上ニ対シテ何ノ面目アラランヤト真情ヲ述置キ、夫ヨリ我輩モ二十七八日頃ニ出立ノ賦ナルヲ云放テ婦宿仕、遂ニ会シ申サス、

一同シ二十八日ノ正午頃、末弘・田中ノ二人婦県懸ケニ私下宿ニ立寄ル故、私モ共ニ同道シテ横濱ニ行キ、同日夕方玄海丸へ乗込、直ニ抜錨シテ、三十一日神戸ニ卸錨ス、十年一月一日同所ヨリ日宝丸ナル小汽船へ乗入、五日崎陽(長崎)ニ着、六日大和船ニテ出帆、九日川内川

ニ違シ、直ニ帰宅仕候、

一 県内就中郷内ノ景状ヲ觀察スルニ、東京ニテ吾郷ハ未タニ入校セサルナラント想像スルト大ニ相違シ、既ニ八十名モ入校シテ其勢焰頗ル熾ニ候、如斯私学校党ノ勢力速ニ盛大ナルノ原因ハ種々有之候得共、要スルニ旧区长ヲ退ケ、新ニ該校ノ名士ヲ該職ニ更挙シ、繼テ警察ノ査吏モ亦悉ク該校ノ壮士ヲ募リシヨリ、恰モ猛虎ニ翼ヲ付タル如シ、而シテ各郷ノ入校セサル者ハ漸ク疎セラレテ、遂ニ戸長ノ公職スラニモ安ンスル能ハス、入校シタル者ハ夫ニ引換へ、偏ニ親任愛顧ヲ蒙ル如キノ待遇ヲ受ケシヨリ、百二十外城ノ士人翕然入校シテ、其意ヲ迎向シ鼻息ヲ伺フテ、榮利ヲ博セントスルノ醜態ヲ養成シ、自ら諂諛風ヲナシ、亭々タル自立ノ氣象ハ蕩然地ヲ払ヒ、各争ヒ入校シテ其勢力如斯隆盛ニ相成申候、私郷内ハ僅二十日以前迄ハ、学校長ヤ戸長ナド偏ニ大義名分ヲ説キ、頗ル不羈自立ノ壯論ヲ以テ、一郷ノ方向ヲ定メ置キタル由ナレトモ、如何センヤ素定之氣概足ラサルヨリ種々ナル外面ノ刺動ヲ受ケ、其勢ニ抵抗スル能ハス、驟然トシテ一時ニ入校シタル由ニ候、當時ニ在テハ、最早共ニ談スルニ足テ

未タ入校セサル者ハ花房・三輪ノ二人ノミ、而シテ私
学校党ノ公然刀ヲ帶ヒ銃ヲ携ヘ、或ハ隊伍ヲ組タルハ
何ノ目的ソヤト彼党ニ問ヘハ、漠然トシテ帰着スル所
ナク、唯姦豪ノ口吻ヲ模擬シテ朝廷之姦臣ヲ除カン、
或ハ万民ノ塗炭ヲ救フ、或ハ版圖ヲ支那ニ拈ント云フ
ニ過ス、私モ屢々親戚ノ子弟ヲ諭シテ曰ク、西郷ハ國
家柱石ノ臣ナレハ、万モ無名ノ暴動ハアル間敷ニ思ヘ
トモ、貴重ナル權利ヲ自ラ捨テ、心身共ニ同等ノ人間
ニ委託シテ疑ハサルハ男子ノ愧ル所ニ非スヤ、且ツ私
学校ヘ入校スレハ幸開進ノ時運ニ遇シナカラ、智識ヲ
上國ニ寛ル能ハスナド、説論スルニ、悔悟ノ色ハアレ
トモ今更約ヲ變シ、退校ノ難キヲ憂フノ言ヲ以テ答ヘ
申候、而シテ郷内ノ首魁ヘハ(コレハ差
引人ト唱)漸々花房・三輪
ヲ以テ私共ノ赤情ヲ露ハシ、若シ甘服ノ姿ナレハ私共
モ直接ニ区々ノ情義ヲ開陳シ、相俱ニ国安ヲモ害セス、
倫理ヲモ敗ラサル都合宜キ処ニ身ヲ投セント約シ置申
候、

一二月一日末弘ト伊集院ニ差越、夫ヨリ三日ニハ私一人
加世田ニ差越候処、

右郷之儀ハ猪鹿倉・大山之尽力ニ依テ、十九人ハ明日

退校ノ儀相決シタル由承リ候、四日朝ニ同郷ノ区長持
原某城下ヨリ来越ヲ告ル者有之候故、退校志願ノ者共
ハ区長ニ謁シテ、其情実ヲ述ントテ該所ニ赴キ申候、
私ハ猪鹿倉宅ニ於テ同人及ヒ大山ト變則学校ノ約束ヲ
草シ居タリシ央、門前ニ器譁甚シキヲ覺ヘ、相俱ニ立

テ何事ナラント障子ヲ開クレハ、既ニ三四十名各刀ヲ
帶ヒ、棒及ヒ繩ヲ提ケ、草鞋ナカラ直ニ席上ニ跳リ上
リ、猪鹿倉ハ御用ト言モ終ラス、棒ヲ以テ打ヤラ拳ヲ
以テ突ヤラ咽喉ヲ絞ルヤラ、種々ノ慘酷乱暴実ニ傍觀
座視スルニ忍ヒス、私モ立テ彼等ニ向テ曰ク、御用ナ
ラハ何ソ尋常ニ縛セサル、而シテ乱暴狼藉如斯ハ何ソ
ヤト詰問スレハ、彼等大ニ怒リ、汝モ此席ニ列シテ如
此妨碍セハ分署迄来ル可シト云フ、私曰ク、諾、蓋シ
彼等ハ私ノ何人タルヲ未タ知ラサル也、中途ニ於テ一
人私ノ姓名ヲ問フ故、告ルニ実ヲ以テス、先キニ行ク
一人叱罵シテ曰ク、之モ陸軍大將ヲ暗殺スル同類也ト、
頭ヨリ強ク打据ヘ直ニ後手ニ堅縛ス、始テ彼党ノ術中
ニ陥タルヲ悟リテ驚駭ニ堪ヘス、三人共ニ分署ニ拘引
サレ申候、同日午後三時頃出立スル、路ハ嶮岨泥濘、
夜ハ暗雨寒冽、一步ヲ進ムル毎ニ意ヲ注ケドモ、屢々

躪仆ス、將ニ蹶起セントスレトモ手ハ固ヨリ縛サレテ自由ナラサレハ、速ニ立ツ能ハス、若進マサレハ遅シト云テ後ヨリ打擲ス、其亡狀(毒)一々枚拵スルニ違アラス、而シテ辛ク五日ノ午前三時頃、廣小路ノ第一分署ニ達スレハ直ニ縁柱ニ堅ク縛シ置キ、交ル、引出シ(ト)テ糺彈スルヲ聞クニ拷問ノ音寔ニ甚シ、私ハ黎明調所ニ呼出サレ、該所ニ行テ板敷ヲ瞥見スルニ、果シテ鮮血淋漓トシテ正シク目モ当ラレン慘狀ノ所ニ引据エ、糺シテ曰ク、(向人タルヲ)汝ハ東京ニ於テ何事ヲ為シ居タルヤ、曰ク、福澤ノ書生ナリ、何年ニ上京シタルヤ、曰ク、明治七年七月也、其間何ノ奉職モセサルカ、曰ク、然リ、然ラハ今般ハ何事ニ依テ帰県セシヤ、曰ク、父母ノ命ヲ奉シテ帰省傍ラ当地ノ不穩ヲ仄ニ聞キ、朋友親戚ト同ク大義ノ在ル所ニ身ヲ処シテ国憲ヲ犯サス、亦情義ヲ敗ラサラン為也、彼叱咤シテ曰ク、汝縛サレテ此処ニ出タル以上ハ幾何程包藏スルトモ、逆モ遁ル能ハス、最早連類ヨリ巨細ニ白状イタシタリ、汝ノ帰県スルモ又必ス何所ヨリカ機密ノ命ヲ帶テ来ルニ相違ナシ、早速男子ヲシク明白ニ白状イタセ、曰ク、決シテ右様ノ儀之レナク、唯帰県ノ儀ハ前ニ申上候通ニテ、

更ニ別意無之候ト云ヘハ、彼大イニ忿リ、打テト令スルヤ否ヤ始ヨリ棒ヲ捧ケ後ニ立タル二人、手足背ノ撰ミナク散々ニ打擲ス、彼暫時止メト令シ、私ニ云テ曰ク、早く機密ノ趣旨ヲ白状セサレハ之ニ加フルニ鞫拷ヲ以テセン、曰ク、胸裡ニ存スル丈ハ尽ク白状イタサン、併シ毫モ無キコトニ至テハ、仮令蜜粉ニナルトモ白状シ難シト、彼大ニ怒ツテ曰ク、無キコトヲ白状セヨト云ニ非ス、必ス心中ニ包藏シタル密意アラン、故ニ夫ヲ白状セヨトノ謂ヒ也、曰ク、機密ノ命ヲ帶ヒタルノ仰ニ至テハ甚迷惑ノ次第、私ニ於テハ当政府ノ権官一人モ知リタル者ナシ、唯々顔色ヲ知りタル者僅ニアルノミ、今度警部等ト同縛サレタル故、川路ノ処ニ御嫌疑アルカハ知ラスト雖トモ、彼ノ川路ナル者ハ一度モ顔色スラ未タ見サル人也、然ラハ誰ヨリカ伝命ヲ以テ帶タル旨アラン、曰ク、決シテ無之候、彼曰、此者如斯ク強情ナラハ亦打テト令スレハ、三人同時ニ跳出テ、二人背手ヲ打チ、一人膝ヲ打ツ、私ハ抗弁ノ無益ヲ悟リ黙シテ云ハス、彼因テ止メト令シ、亦々呼出スカラ一先ツ下カレート命ス、守卒速ニ引出シテ本ノ縁柱ニ縛ス、私学校寮ハ始ヨリ調所ニ群集シ、争フテ

此活劇ヲ見ル、此分署ナルモノハ最早警察ノ部局ニ非シテ、宛然タル軍營ニ御座候、

一同日午後三時頃引出シテ、新築地ナル囚獄ニ禁錮ス、

彼党ハ銃ヲ提ケ刀ヲ帯ヒ、正ニ戦地ニ臨ムノ装ニテ、

昼夜ニ獄外ヲ廻衛ス、八日ノ黄昏ニ悉ク(中原ト山崎ハ除ク)県庁

内第四課へ呼出ス、此時ハ所謂拇印也、始一人ツ、呼

出スニ、白洲ニ於テ甚抗争スル声譁ク聞ヘル故、何カ

意外ノ口供ヲ綴リ、強迫シテ拇印ヲサスルナラント思

考イタシ、私ハ五人同時ニ呼出シテ曰ク、今夜ハ汝等

カ口供ヲ読ミ聞カス故謹テ聴聞セヨ、併多人数ノコト

故齟齬スル廉アルト雖トモ、左様承知イタセト云テ、

所謂口供ナル者ヲ読ムニ、果シテ私ノ申立トハ大ニ違

ヒ候故、読ミ終ルヤ否ヤ、大主眼之処全ク相違イタセ

シト申セトモ、如何セン最早一人ハ強ク帯ニ縛シタル

上ニ、打擲サレテ未タ感覺スラ恢復セサル手ヲ拗リ、

一人ハ墨壺ヲ取テ拇印ヲ押サシメタリ、私意フニ我輩

ヲ殺スノ計策既ニ熟シタリ、幾何程抗議スルトモ到底

無益ノミ、何ソ従容トシテ死ヲ待タサルヤ、併各思想

ニスラ浮ハサルコトヲ以テ強迫圧制、遂ニ拇印シタル

ニ非ス、拇印サセラレ冤罪ヲ以テ今夜ヲ今世ノ永訣ト

スルハ、実ニ千載ノ遺憾ト憤懣激昂ニ堪ヘサル処、又

本ノ囚獄ニ投ス故、必ス明日ノ払曉ナラント首ヲ延テ

夜ノ明ルヲ相待居申候得共、何ノ沙汰モナク、然ラハ

出軍ノ血祭ニ供サレント思居申候処、出軍ノ時モ音ナ

ク過キ去リ、遂ニ二月廿六日県庁内ニ至急作造シタル

飯櫃倉ニ移サレ、娑婆ノ形勢ハ毫モ相知レサルヨリ、

只恹トシテ死日ヲ相待ツノ処、豈図ランヤ三月十日

柳原勅使御下向ニテ、官兵ノ御受取ニ相成、虎口ノ危

難ヲ逃レ、宛モ蘇生ノ思ヒヨナシ、衆相目シテ天恩ノ

優渥ナルニ感涙ヲ相催シ申候、依テ始末書如此ニ御座

候、以上、

明治十年四月

柏田盛文拇印

101ノ八
〔第七号〕脱カ)

手続書

樋脇盛苗

今般鹿兒島県暴発之際幽囚サレシ始末御尋問ニ

付左ニ申上候

鹿兒島県ニ在ル陸軍大将西郷隆盛以下桐野利秋・篠原国
幹・村田新八等ハ大ニ人望ヲ得、該県諸郷諸邑ニ私学校

ヲ設立シ、之カ魁首トナリ壯士輩ヲシテ入校セシメ、講スルニ孫子等之書ヲ以テス、説ヲ伝聞スルニ、方今百官有司悉ク奸吏宜シク燈スヘシ、或ハ外債ヲ増加シ自己ノ欲ヲ逞フシ、漫ニ政權ヲ執ル、或ハ人民ノ稅ヲ厚フシ、饑渴ノ苦ミヲナサシム、故ニ万民狐疑ス、忠憤義慨ノ士焦心苦痛措ク能ハスト、現ニ目視スレハ奉職遊學等之志アリ上京スル者ハ、忌憚嫌忌シテ交接ヲ絶チ、或ハ警察・官吏・巡查ハ私学校ノ門ニ入ラサレハ拜スル能ハス、然リ而シテ妄リニ政府ノ不幸アルヲ悦ヒ、幸アルヲ忌ミ(前原暴発ノ際西郷大ニ悦ヒト聞ク)、専ラ党与ヲ募ルヲ勤メ、無知ノ人民ヲ煽動シ、暴威ヲ皇張シ、以テ私憤ヲ逞フセントスル暴挙ノ有様ナルヲ恐レ、盛苗等朋友ト会スル毎ニ、県下少年輩ノタメ大ニ慨歎、日夜憂慮スル此ニ数月、

盛苗九年十月山口県暴動ニ付、命ヲ受ケ該県并ニ広島・島根県ニ出張ス、十二月引揚ノ際、神戸ニ在ル信友某示スニ、頃日鹿兒島県下人心ノ勢ヒ逼迫、既ニ令禁ノ刀銃ヲ携帯シ、政府ニ抗シ開明ノ氣運ニ戻リ、困ニ報スルノ義務ヲ破リ、虚言ヲ以テ人民ヲ煽動シ、実ニ不穩ノ様アルヲ以テス、盛苗着京スルニ県下親戚朋友等ヨリノ寄書アリ、文言ニ、不日西郷建白書ヲ持シ、兵若干ヲ引率シ

上京アル風評云々、事情審カニ記載シアリ、愈々黙止坐視スルニ忍ヒス、信友大山綱昌面会シ、不穩ノ事情相話シ相歎シ、而シテ又朋友安樂兼道・猪ヶ倉兼文・大山綱介・濱島敦以等ト会合シ共ニ語ルニ曰ク、私学校ノ勢ヒ愈々旺盛、少年輩往々勢威ノタメ雷同サレ入校セントス、実ニ慷慨悲憤ニ堪ヘスト、又全県士族高崎親章ト同ク情ヲ以テ相歎息シ、然リ而シテ熟々顧思スルニ、

夫レ兵ハ国家ノ大事ナリ、之ヲ起スハ止ムヲ得サルニアリ、然ルニ若シ彼ノ私学校連、之レヲ起サハ必ス其ノ終リヲ全クセサルヲ信ス、抑モ開明ノ今日ニシテ、政府ヲ顛覆セント謀計ヲ企テ、天下自主自由ノ世ニアリ至重之生命ヲ損害シ、国家ノ乱ヲ釀成シ、臣民タルノ義務ヲ失ヒ、専ラ党与ヲ募リ大ニ慘禍ヲ蒙リ、恰モ彼ノ江藤・前原ノ如キ實際形勢ヲ通觀スルニ、国賊ノ臭名ヲ負ヒ、千載磨ス可ラサルハ必然ナリ、嗚呼愚昧ノ輩方向ヲ詳ニセズ、知ラス識ラス非命ノ死ヲ遂ケ、国家ノ権威ヲ損縮シ、開明之進歩ヲ妨碍スルニ到ルハ、実ニ痛歎慨惜ニ堪ヘス、盛苗警保ノ職ニアリ、最モ切ニ憂慮ス、此ニ於テ乎(桑梓カ)ニ向ヒ、政府ハ人民ノ生命權利所有ヲ保護シテ、之ヲ安全ナラシメンカ為メ、人民ノ上ニ立テ之ヲ統制スルノ大

義名分ト權利義務トヲ有ス、故ニ必ス之ニ對スルノ義務ヲ尽サシメ、若クハ祿制ニ闕シ不平ヲ唱フル者有ルモ、此ノ祿制タルヤ特ニ政府仁厚ノ意ヲ寓スル所ニシテ、士族タルモノ此意ヲ帶シ、一日モ早ク獨立自助ノ域ニ到ルヲ同胞諸輩ニ明弁シ、必ス少年血氣ノ輩決シテ戊辰ノ看ヲ為シ臆臆不及ノ悔ヲ貽ス勿ラシメンコトヲ欲シ、終ニ大山綱昌ニ私情ヲ開通ス、同人懇論スルニ、情義ハ左ノ事ナリト雖トモ、帰県ノ上私学校連却テ激怒シ勢ヒ逼迫ニ立至リ候テハ、予防警察ノ本旨ニモ戻リ^(傳)不容易事ニ付謹慎スヘシト、

同ク十二月廿六日川路氏ノ旧宅ニ於テ、帰県ノ面々會集スルヤニ伝承ス、乃チ參リ、姓名知ラサルモノ等拾余名ト前件ヲ熟議シ、各々親病氣、或ハ休暇帰省等ノ出願ヲナシ、許可之上同月廿七日当地出発、十年一月十一日鹿兒島県ニ着ス、尔来私学校連ト見受ケシモノ門外二寸斷ナク徘徊、口笛等ヲ吹キ單ニ私ノ挙動ヲ伺フノ有様アリ、折柄同ク十七日ノ夜、私学校連四名來宅、種々無根ノ言ヲナシ嘲哂仕候末、無理ニ手足ヲ押シ付ケ、手ヲ以テ散々ニ打擲シ、終ニ小疵ヲ負フ、當時座中ノ障子等ヲ破毀ス、遺憾固ヨリ尠カラスト雖トモ、同胞安樂・高崎其外

ト談合^{此ハ予防警ノ本旨}ノ事アリ、止ムヲ得ス從容罷在候処へ、隣家ノ者響ニ応シ馳セ來リ、右ノ徒ヲ障ヒ各々帰宅ナサシメ候、然ルニ又々同ク十九日私学校連四五名ニテ門外ヨリ悪言ヲ鳴ラシ、大小石ヲ私宅家ニ投入シ、様々粗暴之事アリト雖トモ、前ノ如クニ忍耐仕居候、既ニ此等ノ挙三回ニ及フ、然ル処一月二十七日ノ夜ヨリ、市街嘩キ声有之ニ付様子相伺候得者、私学校連彈藥ヲ盜ミ、各私学校或ハ警察分所等へ、馬・人力車ヲ以テ運送ス、此ニ於テ必ス兵ヲ挙ル近キニ有ヘシト思案罷在候処、二月三日午後五時頃ヨリ、私学校連長崎莊一外ニ四名來宅シ曰フニ、此ノ娑婆長キニアラスト、頻リニ酒飲ヲ催フスニ付、止ムヲ得ス酒席ヲ開キシニ、暫クアリ町田秀ナル者來リ、同ク嘶ニ虚ヲ以テス、此夜談話殊ニ安穩ニシテ、私学校之主意、或ハ桐野之説トモ致シ、同ク十時頃各々帰宅ス、町田ハ泊シ供々ニ醉眠セシカ、同ク一時頃カ、刀ヲ帶ヒ三尺位ノ棒ヲ持チ、私学校連ト見受シ者数十名草鞋ヲ履キナカラ座中ニ暴入シ、大声ニテ悪言ヲ鳴ラシ候ニ付、驚愕シ仰キ見レハ將ニ棒ヲ肩ニトリ、打擲セントスルノ勢威ヲナシ直ニ捕縛ス、私思フニ兼テノ風評ニ、若シ暴発ノ際ニ臨シテハ、他県ノ人々ヲ初メ、頃日帰県セシ輩

ハ悉皆刺殺シ、血祭リニ供スヘシトノ事ナレハ、万々死
ヲ逸ルヘカラスト決心仕シカ、警察第三分所ニ拘引セラ
ル、此ノ夜降雨甚シ、庭前ノ植木ニ繫カレタルニ、雨之
漫漶スルニ從ヒ縛繩愈々締リ、殆ント心口此ニ非サル者
ノ如ク覺エ眼目ヲ閉チタレハ、知己迫田種茂ナル四等巡
査來リ繩ヲ緩メルニ覺メタリ、暫クアリテ同所調所ニ呼
出シ、旧一等巡査山本某^{當時警部}ナラン、

糺問ニ、

其方何故ニ帰県シタルヤ、

答フ、

私儀ハ親病氣ニテ去月十一日大有丸ヨリ着県仕候ト云フ
ニ、ナセ虚ヲ申立ルカ、甚タ不届千万ナル者也ト大声ス
ルニ応シ、両方ノ私学校連并巡査等^之ニ名棒ニテ打擲シ、
下レト云フト雖トモ直立シ難シ、稍ク繩取ニ引カレ元ノ
如ク繫ル、
同ク四日午前七時頃ナラン、私学校連・巡査共六名ニテ
廣小路第一分署ニ連引ス、該所有様恰モ戰場之陣營之如
ク、私学校連・巡査等混淆シ群蟻ス、見ルニ同ク帰県之
者三四名各々柱ニ繫ル、モ土地ニ繫ル、モアリ、取り々
々ナリシカ、耳ニ響クノ拷問喧ク、又ハ氣絶シタルモノ

ニ水ヲ吞スル様子ニテ、殘刻^酷無法ニシテ苟モ人間タルモ
ノ、為ス可ラサル取扱ニ相見ヘ居候、殊ニ旧大尉逸見某
其他区長警部体之者等各々私之顔前ニ立チ、此ノ奴ハ甚
タ不届ナル者ナリ、或ハ弁者ナリ杯悪言ヲ鳴シ、心益々
憤懣ナリ、剩ヘ壯年輩之過クル毎ニ、前件ノ如ク悪口嘲
哂、中ニハ^{此首ハ切テガナ}イ^{或ハ小サン杯}種々ノ言ヲナストイヘトモ、止ム
ヲ得ス穩カニイタシ居シカ、時移リ調所ニ呼出シ、

糺問ニ、

其方何方ニテ何職ヲ務ムルヤ、

答、

私ハ警視庁一等巡査ナリト、

然ラハ其方ハ何日此ニ着シタルヤ、

答、

私親病氣ニテ一月十一日大有丸ヨリ着港仕候、

問、

其方等之連類中原等已ニ御召捕ニ相成リ、悉ク白状致シ
候ニ付、包藏ナク順序ヲ立テ白状スヘシト大声シテ云フ、

答、

私儀連類御座ナク候得共、今般ハ東京ニ於テ県下不穩ノ
説ヲ聞ク、然ルニ私学校ノタメ慷慨スル所アリ、私不肖

ノ身ナカラモ巡查ノ職ニアレハ、予防警察ノ本旨ヲモ尽シ度存念ニ有之、親病氣ニ付帰県仕候、

問、

其本旨トハ何事カ、

答、

本旨トハ即チ善人ヲ探知スルノ深切ナルコト、亦兇徒ヲ探索スルカ如クスヘキモノナレハ、万一暴発ノ際ハ熊本・長崎ニ馳付、電線ヲ以テ東京へ報シ度事ニ候ト云フ言ニ応シ、

四五名ニテ双方ヨリ棒ヲ振上ケ打擲スルモアリ、或ハ棒ニテ衝突シ拷問ヲナスト雖トモ、精神凜然申立ルト云フニ打擲ヲ止ム此ノ點點止シタルニ

其方ハ東京ニ於テ他人數ト申合、容易ナラサル事件ヲ川路大警視ヨリ内命ヲ受ケ、帰県シタル者ニ付白状スヘシ、

答、

私儀ハ内命ヲ受ケタル儀更ニ無之候、全ク親戚朋友等ニ大義名分ト今日之時勢ヲ相話シ、私ト志ヲ同フシ致シ度候、併シ服スレハ可ナリ、服セサレハ措クヘシト決心罷在候、

又拷問打擲スルコト甚シ、

又答、

私儀ハ何程拷問セラル、モ他ニ存意御座ナク候ト黙止ス、此ニテ大声シ下カレト云フニ付、

足立テント欲スト雖トモ立ツ能ハス、亦腰ヲ伸フル能ハス、終ニ縄取ニ引レ元ノ縁ノ柱ニ繫レ困苦罷在候処、

同ク五日午後五時過カ、同所ヨリ三四町程之檻獄ニ、窃盜ト同ク幽囚セラレ居リ候処、同八日五時頃迄、巡查并ニ私学校連ト見受ケシモノ數名呼出シニ參リ、同志之者拾余名縛シ、県庁内第四課エ連引ス、調所ニ於テ、

姓名知ラサルモノ

曰ク、

其方ノ口供ハ多人數ノコトニテ相違ノ廉之アルト雖トモ其俣承知致スヘシト、

聞ニ其ノ音読曖昧能ク聞取り難ク、然リト雖トモ、西郷ヲ暗殺シ続テ私学校党エ離間ノ策ヲ謀リ、剩ヘ塵ニスル等ノ様相覺ヘ、読ミ終リ尋問セント思ヒシカ、声ノ終ルニ応シ直チニ双方ヨリ四五名迄、袴着シタルモノ縛セラレタル手此點點手足ノヲ取り、残酷ニ拇印ヲ捺サシメ、其後同所小使詰所縁ノ上ニ腰ヲ懸ケシメ、暫クアツテ本ノ如ク檻獄ニ幽囚セラル、願フニ再ヒ青天白日ヲ戴クコト万々

能ハス、実ニ冤罪ノタメ暴殺サレント同囚等ト決死シ、
心信ニ上帝ヲ依頼スル而已ナリシカ、二月二十七日頃欵、
県庁内新檻倉ニ移囚セラレ此ノ途見物人夥シ居候処、三月十日官軍
御受取りニ相成リ、初メテ再生ノ縁ヲ戴キタル思ヲナシ、
涕涙淋漓惟
鴻恩ノ厚キ固ヨリ量ナシ、百拜頓首仕候、然ルニ長崎・
大阪・神戸ヲ経テ着京仕候、

鹿兒島県下第一大区五小区

西田常盤村居住

士族

明治十年四月四日

種脇盛苗

一〇ノ九
〔本〕第八号

明治十年四月

始末書

鹿兒島県第拾三大区一小区四番地

喜入郷士族

安樂兼道

今般鹿兒島県ニ於テ捕縛サレシ手続御尋ニ付左

ニ申上候

一私ノ居所ハ鹿兒島城下ヲ距ルコト凡ソ七里ナリ、然ル
ニ西郷党ノ淵邊軍平ハ私学校党ノ魁首連ニテ、桐野・
篠原等同シク権ヲ有シ、頗ル人望アリ、時ニ明治七
年八月頃、私ノ郷里ヘ淵邊参リ壮年輩ヲ諭スニ、方
今ノ政府ハ奸政府ニシテ、一度之ヲ顛覆セサレハ日本
ノ国憲不相定ハ必然ナリト、種々様々政府ノ不幸アル
ヲ悦ヒ、専ラ党与ヲ募ルヲ主トシテ、壮士輩ヲシテ私
学校ニ入校セシメンコトヲ説リ、私等答フルニ程ヨク
遁辞シテ肯ハス、然リ而シテ同年十一月事情探偵ノ名
ヲ以テ、私東京ヘ出京ス、其折同胞ニ約スルニ、天下
事アルノ日ハ大義ニ身ヲ処シテ、進退ヲ共ニセンコト
ヲ懇ロニ盟キ、而シテ三四ヶ月ヲ経過シ郷里ノ同胞ニ
寄スルニ、人民ハ国家ノ体軀ニシテ君主政府ハ之レカ
頭首ナリ、故ニ政府ハ人民ヲ保護誘掖シテ、其安寧幸
福ヲ得セシムルヲ以テ大主旨トシ、人民ハ政府ノ命令
処分ニ恭順スルヲ以テ大義務トスル等ノ事ヲ以テ、彼
ノ私学校党ノ無根ノ浮説、或ハ暴威ヲ逞フシ、人心ヲ
誑惑スルノ策ヲ破壊シ、断然同胞等不羈独立ヲナサシ
メンコトヲ欲シ、屢々書ヲ以テ示ス、尔来同胞大山綱
介・猪鹿倉兼文・平田宗質・田中直哉・柏田盛文等ト

会談スル毎ニ、私学校党ノ勢ヒ日々猖獗ナルヲ悲痛慨歎セサルハナシ、

一明治八年三月警視庁ニ奉職ス、同シ九月十一月山口県(年カ)暴動之際該県へ出張命セラル、十二月十五日帰京ス、然ル時親戚同胞之者ヨリ書簡到来、其文言ニ、私学校党勢ヒ猖獗ニシテ、已ニ暴挙スルノ景況アルヲ報告ス、猶同胞之内濱島千鶴ヲ以テ該県ノ挙動穩ヤカナラサルヲ細カニ告ク、聞クニ倍々慷慨怨憤ニ堪ヘス、則チ同胞大山・猪ヶ倉・平田・樋脇盛苗・濱島敦以等ト会合シ共ニ語ルニ、県地壮年輩ノ只私学校党ノ勢ヒ熾ンナルニ雷同サレ、彼ノ党ニ入与センコトヲ只管憂患シ、濱島敦以ハ一瞬措ク能ハサルノ機ナリト、十二月二十日当地出発セリ、或ル日私、園田長輝・末弘直方等ノ宅ニ到リ、右ノ事情ヲ相話シ、同シク歎息シ、同月廿五日園田長輝ノ宅ニ同僚同胞拾余名会集シ議スルニ、該県乃々一暴挙スルニ就テハ、父母ノ国ニ対シ、且ツ親戚同胞ノ者ト互ニ干戈ヲ交ルハ、誠ニ情実忍ヒサル処ナリト、因テ各自帰県シ、親戚同胞等ニ方今之事情ヲ知ラシメ、大義名分ノアル処ヲ確守スル様、懇切ニ信義ヲ尽シテ弁解シナハ、幾分カ私学校党ノ勢ヒモ潛ミ、

且ツ愚昧ノ同胞等モ名分ヲ誤マタス、国民タルノ義務ヲ尽サシメハ、独リ吾輩ノ幸ノミニ非ス、国家幾分ノ幸ナラント各々協議ヲ尽シ、権大警部大山綱昌ヲ以テ、内情ヲ長官川路大警視ニモ具申ス、然ル処大山氏ヨリ私等ニ懇諭セラル、ニ、情議ハ如何ニモ尤ノ事ナレトモ、此ノ際ニ方り各々帰県シテハ、私学校党却テ激怒シ勢ヒ逼迫ニ立至リ候テハ、甚以予防警察ノ本旨ニモ相戻リ、不容易事ニ付能々慎シム可シトノ言ヲ以テセラル、同二十六日川路氏ノ別邸ニ同行ノ面々再会シ、猶前件ヲ熟議シテ、各親病氣又ハ休暇帰省ノ趣ヲ以テ願書差出シ許可ノ上、同月廿七日当地出発、本年一月十一日着県ス、然リ而シテ私学校党ノ挙動ヲ目視スルニ、常ニ銃器ヲ携へ、或ハ刀ヲ帯ヒ、又風評ヲ聞クニ已ニ兵ヲ挙クルモ近キニ在ラント、誠ニ勢ヒ猖獗ナル景況ナリ、而シテ親戚同胞ノ者モ区長伊藤某等ノ煽動ニテ已ニ六十余名党与イタシ居リ、実ニ日夜憂慮慨歎ニ堪ヘス、或ル日私郷里ノ私学校党ノ頭立タル者ヲ二十余名会集シ、思慮ヲ吐露シテ曰、夫レ人タル者ハ貴賤上下ノ別ナク、身ヲ治ルニ至テハ不羈獨立ノ自由ヲ得シ者ナリ、然ルニ人トシテ自主自立ノ権力ナク、又

其志望ナク、自ラ其固有ノ權利ヲ抛擲シ、心身二ツナカラ羈束ヲ蒙リ、同等ノ人類ニ自在ニ駆役セラレ、終ニ天下ノ大患ニ陥リ千載磨ス可ラサルノ賊名ヲ被ムラントス、吾輩同胞豈前岸ノ火ヲ觀ルカ如クナルニ忍ヒン哉、抑々今日国法アリ、職務ニ章程アリ、苟モ其権限ヲ紊ル可カラサルハ皆人ノ知ル所ナリ、況ンヤ一己ノ私見ヲ主張シ、何程国家ノ為メナリトスルモ、私ニ兵戈ヲ弄スルカ如キ国憲ヲ犯ス者アルニ至テハ、其罪素ヨリ免ルヘカラサル也、故ニ反覆思慮シテ自己ノ意ニ充ツルニアラサレハ、決シテ之レニ与ミス可ラス、彼ノ私学校党ナル者ハ、常ニ政府ノ不幸アルヲ悦ヒ、幸ヒアルヲ忌ミ、専ラ党与ヲ募ルヲ勤メ、一回此ノ党ニ入レハ官途ハ勿論、上京ヲ禁スル等、何ノ故欵開明ノ今日ニシテ斯ノ如ク人ヲ束縛スルヤ、又何故ニ党与ヲ募集スルヤ、是甚怪シム可キノ事ニシテ、今日自主自由ノ世ニ在リナカラ、斯ノ如キノ束縛ヲ受ケ、至重ノ生命ヲ委任スルハ、誠ニ独立ノ気像ナキニ非ラスヤ、因テ皆大義名分ヲ明ニシ、方嚮ヲ詳カニシ、天下事アルノ日ハ臣民タルノ大義務ニ斃レンコト、兼テ企望スル処ナルヲ以テ、屢々忠告ス、彼レ等答テ曰、西郷氏

ハ国家ノ柱石ニシテ勲功アル人ナレハ、素ヨリ大義ヲ誤ルノ挙動更ニ在ル無シ、因テ吾輩ハ西郷氏ニ從事セント決心シ、私学校へ入校シタリト、然レトモ二十余名ノ内八九名ハ心誠ニ悟ル所アツテ、断然私学校ヲ退校セント欲スルノ際、二月四日午前八時頃私学校党ト見受シ者数十名、私ノ門外ニ徘徊スル趣親戚ノ者驚愕ノ色ヲナシテ告リ、依テ平生暴殺スル等ノ風評モ之レアリ、又万々一暴挙スル等ノ事アツテ弥々確實ヲ得シ日ニハ、一瞬早く肥後口へ駈ケ脱ケ、電信ヲ以テ相報スル等ノ事ハ、兼テ談合イタシ置キタ^(ル)事故、隣家へ外シ自家ノ様子ヲ見セシムルニ、所謂私学校党ナル者刀ヲ帯ヒ棒ヲ携エ、数十名草鞋履キナカラ座中へ押シ入り、将ニ乱暴スル勢ヒアルヲ告リ、又実兄新納久参り告クルニ、先般東京ヨリ帰県セシ輩ハ都テ捕縛相成ル由ニテ、已ニ兵ヲ挙クルモ近キニアル趣ヲ報ス、因テ私ハ寸分早く肥後口へ脱ケ電発スル思慮ノ処、私学校党私ヲ探偵スルコト隣家親戚ニモ及フト、仍テ隣家ノ天井ノ上ニ乗り身ヲ潜メ、日ノ暮ル、ヲ待テ夜ニ乗シテ脱ケ出ル覚悟ノ処、追々私学校党人数モ相増シ、已ニ道路ヲ塞キ山川迄モ探偵スルトノ事ニテ、万々逃レ

去ルノ策モ相立難ク、之ニヨツテ断然決心シ私学校党集会ノ中へ自ラ出テ、何カ御用ノ筋之レ有ルヤノ旨ヲ陳フ、然ル処只御嫌疑アルトテ後ロニ手ヲ廻シ、粗暴ニ捕縛鹿兒島へ拘引ス、其途中谷山ニテ亦私学校党二十名ト出逢スルヤ否ヤ、安樂ハ是ナル耶ト無二無三ニ打擲ス、其折頭部ニ疵ヲ被ムリ流血甚シ、為ニ目モ眩ム、而シテ鹿兒島警察第一分署へ五日午前四時頃着セシ処、恰モ陣營ノ如シ、又共ニ帰県セシ輩モ追々捕縛拘引サレ、座中ノ柱或ハ縁ノ柱ニ繫カレ、実ニ惨毒目モ当ラレス、暫時アツテ私ヲ調所へ呼出シ、糺問官三名ノ曰是ハ警部或ハ私学校党ノ人ナラン、其方ハ東京ニテハ何ツ方へ奉職シ、今般ハ何等ノ事件ニテ帰県セシヤト、私答テ曰、警視庁少警部奉職ス、然ル処今般鹿兒島動揺スルノ世評モ之レアリ、又親戚同胞ヨリモ不穩ノ景況アルヲ告クルニヨリ、何分生國ノ事ニテ、父母アリ親戚アリ同胞アリ、旁以心安ゼサルニヨリ、親病氣ニ託シ看病帰省ノ趣ヲ以テ帰県セシト、又曰ク、其方等帰県セシ趣ハ已ニ連類ノ者ヨリ申立テ事判然イタシ居ル、今更其方包藏スルニ於テハ拷問シテ白状サスベシト、私答テ曰、包藏スル儀ハ聊モ之レナク、全ク安心セサルニヨリ帰

県ス、又万々一モ鹿兒島暴発ノ挙動アル日ニハ、親戚同胞ノ者ト互ニ干戈ヲ交ルハ、誠ニ情義忍ヒサル処ナリ、因テ大義名分ヲ明ニシ、進退ヲ共ニセンコトヲ欲シテ帰県セシト、又曰ク、其方ハ西郷陸軍大将ノ立テラレタル私学校へ入校スル者ヲ相支エ、剩へ離間ノ策ヲ謀ル等ノ事、甚以不届ナル者ナリト、大声シテ打擲スヘシト云フヤ否ヤ、側ラニ在ル私学校党五六名、棒ヲ持ツテ所ヲ扱ハス散々ニ撲敲ク、凡ソ五六十名位(同力)モ打擲セシヤ、暫ク止メテ又曰ク、其方等ハ不容易事件ヲ川路大警視ノ内命奉シ帰県シタルニ相違ナシト、因テ私答弁スレトモ更ニ聞カス、只無暗ニ拷問打擲スルコト甚シ、此ニ於テ身体頻リニ悩ム、然リト雖トモ精神毫モ撓マス、斯ノ如キコト三四回ニシテ調所ヲ下リ、同日午後三時頃囚獄所へ廻ハシ幽囚セララル、暫時アツテ又第一分署調所へ呼出ス、其折ハ糺問官一名出テ、始ニ申立タル趣ヲ再問書取シ、終テ分署ノ柱ニ繫カル、コト一晝二夜ナリ、七日ニ至リ又囚獄へ幽囚サル、八日午後六時頃一同中原・山崎
兩人ヲ除ク県庁内第四課へ呼出ス第4課トハ、
警察課ナリ、而シテ老名ツ、調所へ廻ハシ、姓名知ラサル者ノ曰ク、其方共申立ノ趣何分多人數ノ事ニテ、齟齬スル廉モ之

レアル可ク、然レトモ細カニ記載モ出来難キニヨリ摺

印致ス可シト、聞クニ央ニ至リ私学校人員ヲ斃ニシ、

続テ西郷ヲ暗殺スル等ノ事アリ、誠ニ驚愕シ音読成ル

ヤ否ヤ、私ニ於テハ右様ナル儀ハ決シテ思想ニスラ浮

ハス、況ンヤ白状シタルトハ誠ニ意外至極ノ事ナリト

抗弁スルニ、只々速ニ摺印サセヨト云ヤ、直ニ側ニ在

ル守卒^(地)働キモ出来サル様縛シタル手ヲ捫リ、無理ニ摺

印押サシム、此ニ於テカ唯非命ノ死ヲ致ス可キ事ト、

実ニ遺憾心中焦ルカ如シ、一同摺印終ルト又々囚獄へ

入獄ス、而テ一週日余ヲ経過シ、県庁内ノ新檻倉へ移

転幽囚サレ、再ヒ青天白日ヲ拝スルコトハ万々是レ無

キト決心罷在候処、図ラスモ三月十日官兵ニ御請取相

成リ、再ヒ蘇生ノ思ヒヨナシ、実ニ天恩ノ厚キ涯リ無

キヲ知ル、而テ長崎・神戸・大阪ヲ経テ、同月廿五日

着京仕候、此段始末大略如斯上申仕候也、

鹿兒島県第拾三区一小区四番地

喜入郷士族

明治十年四月

安樂兼道印

始末書

鹿兒島県士族

平田宗質

始末書

私儀

今般鹿兒島県下私学校党暴挙ニ付、県地ニ於テ

幽囚サレシ事件御尋問ニ乗シ左ニ上申ス

明治九年十二月始頃、鹿兒島県私学校党ノ將ニ暴挙セン

トスルノ風説区々ナリ、是ニ於テヤ私等父母ノ県騒々敷

ヲ徒ニ傍觀スルニ忍ヒス、同志友人等ト大警視川路公ノ

下屋敷下谷邸ハ極々間暇ノ地ナルヲ以テ之レニ会シ、各

自見込ヲ立テ、天下ノ形勢及ヒ大義名分ノ存スル所ヲ談

論シ、終ニ私学校党ノ王師ニ抗スルニ当テヤ、苟モ無名

ノ師ニシテ、神風連・前原党ノ覆轍ヲ踏ムカ如キコト有

テハ、則チ県下ノ友人親戚彼ノ暴威ニ圧抑セラレ、或ハ

甘マキコト蜜ノ如キ狡猾ノ詐弁ニ陥リ、彼カ勢焰ヲ援ケ

テ、一時ニ方向ヲ誤リ、甘ンシテ死地ニ赴クヲ豈ニ傍觀

スルニ忍ンヤト論決シ、是ヲ以テ早クモ各県地ニ下タリ、

力ノ限り赤心ノ及フ程、友人親戚ニ大義名分ノ存スル所

ヲ説キ、其説ヲ可トスル者ハ幸ヒ、其説ヲ不可トスル者

ハ強テ弁解討論スルニ及ハスト雖トモ、余等ノ懇々タル友情ハ至リ尽サン而已、且職掌アルモノハ側ラ彼ノ挙動ヲ巨細ニ探偵シ、逐一報知センコトヲ約セリ、私婦ルニ及ンテ菅井誠美宅ニ參シ、咄スニ今日各友ト決約セシ云々ノ事件ヲ以テ、菅井^(ス)応シテ曰、余モ亦素ヨリ其意アリト、故ニ齊シク帰県センコトヲ約セリ、其後園田長輝宅ニ會シ、各帰県ノ日限其他帰県ノ上苟モ彼ノ失敬ヲ受ルトキハ如何、且ツ説言ノ方法如何ヲ論シ、終ニ歸日ハ各仕舞次第説言各見込ニ任スヘシ、且ツ失敬ヲ受ルトキハ、成ルベク温和ヲ以テ其鋒ヲ避ケ、決約ノ大主意相立ツヲ以テ善ノ善ナル者トスト相約セリ、而シテ后翌日又下谷ノ邸ニ會スルノ議アレトモ、私等書生輩ハ辞シテ此會ニ預カラス、於是十二月廿七日横濱ヨリ三菱会社飛脚船ネバタ号ノ汽船ニ乗り、神戸ニ暫泊、其ヨリ長崎ニ着シ、鹿児島県内川内ト云フ所ノ県地婦、船ニ乗り替へ一月七日ニ郷里谷山ニ着シ、当県ノ形勢ヲ友人親戚ニ問フニ、曰、夫レ当県ノ形タルヤ私学校党ノ勢甚タ猖獗ニシテ、帯刀ヲ横ヘ銃器ヲ携ヘ、常ニ狙撃ヲ在々処々ニ於テ業トシ、其説タルヤ政府ヲ指シテ姦役員ノ政府ト号ケ、今ノ朝廷ニ事ル役員ハ皆姦人也、之ヲ攘ハサレハ王威振ハスト云

ヒ、内務卿大久保ハ世界ニ於テ二ト称スヘキ煉化石ノ屋宅ヲ構ヘ、其二鏤バムルニ金銀ヲ以テシ、人民ノ膏血ヲ絞ボリ、我国ノ究乏ヲ顧ミス、其身ノ榮華ヲ極メ、奢リノ頂上ナル者也、他ノ役員モ亦之レニ類スル者多シ、大警視川路ハ警察ヲ敵ニシ、之レカ奢リヲ助長セル者也、大藏ノ大輔松方ハ地租改正ノ義ヲ主張シ、人民ヲ苦シメシ者ナリ、其他祿券ノ聖令ヲ不快等、筆スルニ遑アラサル風評様々アレリ^{是レ童子モ笑フヘキ}、私又問フテ曰ク、我郷里ノ形ハ如何^{余未タ殿下ニ在リノ時分家兄宗城及ヒ友人堀興憲等ノ難、信ニ郷里ノ形勢大略ヲ報アレトモ尚ホ詳細ヲ問ヒン也}、曰ク、区长ハ伊東祐高、副区长ハ隈元某、郷校ノ幹事ハ姓名忘却^{皆鹿児島人}セリ、三人共ニ私学校党ナリ^{私学校党諸郷々ノ士族ト己ノ方ニ引キ込ム策略ト}、大抵私学校党ノ者ヨリ派出セリ、^{見ヘテ、諸郷々ノ区长ノ正副ハ、}藤幸内・平井政挙^{皆私学校党ノ人ニテ伊藤氏ノ撰手}・松田弥右衛門・山下兼武^{是ハ私学校党ノ人ニ非ラス、然レトモ彼ニ抗スルノ力ナク、徒ニ從事スル者ナリ}、副戸長ハ全ク私学校党ニ従事スル者ナシト雖トモ、下吏ノ悲キ彼ニ抗スルノ力ナク、適ク抗スル者アリト雖トモ、長官ノ圧抑ニ伏セラレ、徒ニ無益ノ言トナリ遺憾窮リナシ、松田為徳ハ其身役員ニ非ラスト雖トモ、我カ郷土ノ私学校連類ノ巨魁ノ姿ト見ヘタリ、又タ問フテ曰ク、親戚友人ノ進退何レニ着目スルヤ如何、曰、神風連・前原党暴発ノ期ニ至リ、私学校党

ノ動搖実ニ甚タシ、是ヲ以テ同志等暗ニ堀興憲カ宅ニ集
会セリ、其人ニハ長野祐通・伊地知季治・池田庄左衛門・

家兄宗城・大脇爲政伊東氏ノ撰ヲ以テ戸長ニ舉
此人ハ初区長伊東氏當郷ニ来リシ由來歴、論ニ、私学校ニ入校スル、

ヲ以テスレトモ、大義名分ヲ唱ヘテ聞セズ、彼ノ党ニ從ハサル者ナリ、議テ曰、

私学校党ノ暴発スルニ当テ万々一モ無名ノ師タルトキハ、

彼レカ暴発ノ鋒キ実ニ避ケガタカルヘシ、之ヲ避クルニ

他ノ技ナシ、官軍馳迎フ迄ノ間ハ山ニ隱シ、或ハ他処ニ

脱シ、暫ク難ヲ遁レンコトヲ決約セリ、然リ而シテ時日

遷延スルニ随テ、稍々平隱ニ帰セリト雖トモ、盟約ヲ變

ゼズ、毎土曜日ノ夜六時ヲ以テ会期トシテ集會シ、平日

徒ニ多ク來集スルハ世評ニ對シ嫌疑モアリ、且ツハ有事

ノ日軍用ノ寸備ニモ成ルヘケレハ、模合ト名ヲ仮リテ事

ヲ議ス、器原党暴発ノ期ニ乘リ動搖ノ節、我郷土私学校區長ノ命ニヨリ、多ク統

得ヘン杯ノ悪言ヲ吐キ、銃丸製造致届ル所ノ午後六時頃ニ至リ過テ學校ヘ火ヲ生シ、

三軒ノ夜學校一時ノ吹トナレリ、其他区戸長ノ処置人民ニ對シ不公平ノ事多シ、故ニ

人民ミナ、私亦郷友ノ大義名分ヲ誤認セサルヲ大ヒニ感称

シ、毎ニ之ニ席ス、一月十二日菅井着ス、語ルニ右ノ情

態ヲ以テス、菅井其事ヲ聞テ大ヒニ喜ヘリ、其後喜入郷

ノ安樂兼道宅ニ遊ヒ、同所友人ニ遇ヒ語ルニ、大義名分

ヲ以テシ、其夜安樂カ宅ニ宿リ翌日歸ル、其后三日ヲ經
テ田布施郷ノ土宮内慶次當分官私ノ帰県ヲ聞テ來ル、語ル

ニ余カ郷土モ私学校へ党スル者多シ、東京ノ形勢ハ如何、
此末如何成行クヘキヤ、実ニ歎クヘキノ至リ也ト云フ、

私素ヨリ宮内ト友タルヲ以テ隱サス東京ノ形勢ヲ語り、

共ニ語ルニ大義名分ヲ以テシ、翌日宮内ハ歸レリ、其後

二月三日ノ朝、菅井、佐藤ト云フ者ノ宅ニ呼フ佐藤ハ菅井、
カ兄ナリ

至レハ則チ堀興憲等ヲ始メ友人五六輩アリ、時ニ菅井語

テ曰ク、昨日私学校党巢地所々ニ在ル彈藥庫へ押シ入り、

彈藥ヲ盜取シ事ヲ以テス、議シテ曰、官庫へ押シ入り彈

藥ヲ奪シ上ハ賊ニ疑ヒナシ、故ニ菅井ハ早クモ報知ノ為

メ上京スヘシ、私ハ跡ニ止リ同志輩ト共ニ官軍馳向フニ

於テハ、直ニ之ニ馳付テ命ヲ待チ動クベキナレトモ、其

内前原党起リシ時ノ如ク、是迄彼ニ党セサル者ニ從フカ

從ハサルカヲ以テシ、從ハスト云フ者ハ斬テ棄ルコトア

ルトキハ、不從ノ一言ヲ述ヘテ潔ヨク死スヘシト決セリ、

其夜堀・古垣兼成兼成ハ鹿兒島師範學校官費生徒ナリ
故ニ時々鹿兒島ノ形況ヲ報告セリ等私宅ニ來リ

談話數刻ニ及ヒ、十二時頃ニ及ントテ、彼レ暴発ノ節ハ從ハ

サルノ一言ト共ニ頭ヲ授クヘシト躊々ト笑テ別レタリ、

翌朝七時頃暴党等十五六人県下巡查へ私学校党ヲ相雜ヘタリ、其内知者
久留某・禮部某ナリ、聞ク此巢地ノ警察官更
及ヒ巡查ハ私学校党ノ人ニ非サ、
レハ森職ヲ許サストノ由ナリニ立入り、声

ヲモ懸ケス額ヲ打ツ、打レシ時眠覺メ眼ヲ開クヤ否ヤ又

額ニ傷ヲ受ケタリ、透サス暴党等喉ヲ抑へ、或ハ手ヲ取
リ或ハ足ヲ取り杯シテ、後手ニ擲リ上ケテ庭へ引出ス、
時ニ大雨頻ニ降ルニ笠ヲモ与ヘス区長役所へ連行キ、雨
ニ滴カシメナカラ竹垣ニ繫ク家ヲ引出サレルヤ襦袢ノ紐ニ隠所ヲ現
ハルニヨリテ帯ヲ結ヒ面シクレヨト請
ヘトモ、何ニ罪人奴身ノ
体裁ハスラスト叱咤セリ、時ニ頭瘡ノ故ヲ以テ曰晦ミタリ、時ニ
区長附添ヒニテ歩メヨト云フテ臂ヲ二ツ打ツテ連レ行ク
道スガラ、牛馬ヲ引ク時ノ言ヲ以テ引廻シ、種々ノ悪口
叱声止マス、時ニ私心中以為ラク、既ニ死処ニ連行クナ
ラント、辞世ノ一言モ臆想セシガ、計ラズモ鹿兒島県下
第一分署其時分署ハ恰モ
兵隊屯所ノ如クへ連行キ、巡查詰所縁先ノ柱ニ立セ
ナカラ繫キ、間モ無ク白洲へ引出シタリ、調者兩人姓名訪
不知
テ曰、其方儀此白洲ニ引出サル、ニ於テハ、其方ノ身ニ
何カ覺ノアルコト故其レヲ白状セヨト、私対テ曰ク、何
モ此席へ引出サル、処ハ思ヒ付マセン、御尋問ノ筋アラ
ハ御聞セ下サレト陳ヘタリ、時ニ調者曰ク、其方カ東京
ヨリ帰県スル趣意何等ノ事カ、其訳ヲ逐一白状セヨ、対
曰、私帰県致スノ趣ハ、鹿兒島県内今般穩ナラサル風評
区々ナリ、故ニ友人等ト議シ県地ニ下リ、親戚朋友ニ論
スルニ大義名分ヲ以テシ、何レノ筋ナリトモ名分ノ在ル
所ニ固ク方向ヲ定メ、共ニ力ヲ尽サンコトヲ決シ、各仕

舞次第ニ帰県セリ、然ルニ私ノ郷友ハ三十余名志ヲ戮セ、
私学校党ノ王師ニ抗スルヤ大義名分無キヲ以テ、決シテ
党スベカラスト誓ヘリ、是故ニ私モ其論最ナルヲ以テ同
意シ来リシ也、其ヨリ外ニ何モ陳ル儀ナシト陳ルヤ否ヤ、
調者曰ク、其位ノ事ニ非ラス、外ニ訳アリ、其レヲ白状
セヨト云フヤ否ヤ、打テト令ス、令ニ応シテ私学校党ノ
者左右ヨリ三尺余ノ天然棒ヲ以テ、詰打ツコト甚タシ數棒
ハ數ラニ堪ヘ難キヲ以テ、申立ル云マト声ヲ挙ケタレハ、
即打方ヲ止メタリ、曰ク、私東京ニ於テ友人ト兼テ相議
スルニ、私学校党ハ先年近衛兵ノ時私等ヲ極々压制セシ
人々也、故ニ大義名分無ケレハ決シテ同意ス間敷ト、其
余ハ前ニ陳タル如シト云フト、調者兩人共ニ席ヲ起テ奥
へ行キ、一時間許アリテ又来リテ語テ曰ク、汝カ陳述ス
ル言一モ正シキコトナシ、中原同前ノ豪情者衣服ノ襦ラ
サル所ヲ打テト令ス、声ニ応シテ左右ヨリ手ヲ打チ足
ヲ撞キ一時ニ責立タリ、暫クニシテ打方ヲ止メ白状セヨ
ト云フ、私対テ曰ク、前ニ陳ベシコトヨリ外ニ述ル儀ナ
シ、然レトモ私ノ懷ワクヲ云ヘヨトナラハ申サン、調者
曰、其ヲ述ヘヨ、曰ク、私窃ニ以為ク、今ノ政府ハ君主
専制カトスレハ立憲政ニ流レ、実ノ立権政体カトスレハ

君主專政ニ偏リ、今ノ政府ノ為スコト行フコト尽ク能シト云フベキニ非ラス、然レトモ禄券ノ聖令ハ士族ノ禄高ヲシテ天下人民ノ私有地ト平均セシメ、是コソ立憲政体、民権自由同等ノ真ノ端トナルヘキ御聖令ト仰キ入ル所ニ、私学校党ノ人ハ之ヲ憤リテ暴発スル杯ト云フ風評アルハ、私等ノ正ニ嫌フ所ナリト云ヒモ果シテ、不屈者打テヨト云フ、令ト共ニ又打擲キタリ、時ニ以為ラク、政府ノ探偵方ト疑ヒシナラント考ヘ、申上ルメト呼ハリタレハ即チ打方ヲ止メタリ、曰ク、私ハ政府ノ探偵方ト御疑ヒモアレド、更ニ探偵方ニテハ之レナシト陳ヘタリ、調者曰、某ナリ、汝豈ニ探偵方ニ非ズヤ、打テヨト令ス、打レナカラ抗シテ曰ク、決シテ探偵方ニ非ラスミト呼ハリシカハ打方ヲ止メ、其方カ申立ル趣一々正言ニ非ス、故ニ又引出シ、拷問スヘシ、此度ハ席余リ長キニ依テ一時下レト令ス、引カレテ玄関口日覆柱ニ繋クコト一時間計リ、其後縁先ノ柱ニ繋カレテ一夜ヲ過ス、五日午前十時頃醫師来テ疵ヲ治ス頭及手足ニ疵ヲ受ケタリ、午后三時囚獄ニ幽セラレテ獄中ニ物ニ器ニ飯下汁トヲ、糞ヲ日ニ二度ヲ、是ニ於テ私学校党銃器ヲ携ヘ彈藥ヲ負ヒ刀剣ヲ帶ヒ、直ニ戰場ニ赴ク裝束ニテ、昼夜囚獄内ヲ巡邏セリ最ノ間ハ二時間位夜ノ間ハ三十分位ニ隔ルト思レテ巡邏セリ、同ク八日午後六時ニ及ンテ、

十九名召出シノ令アリ、私ハ未タ歩行自由ナラサルヲ以テ、人力車ニテ共ニ県庁内第四課ニ到ル、是ニ於テ一人ツ、裁判、白洲ヘ呼出シタリ、時ニ何か読ミ聞カセ、之レニ抗スル者ハ叱咤シテ取押ヘラレシト、抗言スル声響クトシテ耳ニ徹シ、実ニ悲憤胸ヲ埋メリ、然シテ十二三番目ニ私モ呼出シテ白洲ニ到レハ、調者曰ク、多人數ノ事故口供書巨細取調方モ届カサルニ付、其心得ヲ以テ推シテ摺印致スヘシト云テ、即チ口供書讀ミ聞カセ其読方甚ク明瞭ナラス、聞キ取ラレサル、終ルヤ否ヤ対テ曰、口供書ノ趣私ノ白状致シタル事ト大ヒニ違ヘリ、私口供ハ第一分署御調ヘノ節白状致シタル通、一点モ包藏之レナキニ依テ、然ルベキ御聞取アリタシト陳フ、調者曰ク、可シ、夫レテ初メニ叮嚀ニ違ヒノ所モアルカラ、推シテ摺印ヲ致サネバナラヌト云ヒ聞セ置ヒタデハナイカ、早速致セト云フ令ニ応シ、左右ヨリ五六人取懸リ、動キモ出来ヌ様ニ縛リツケタル手ヲトリ、或ハ頭ヲササヘシテ摺印致サセタリ、実ニ遺憾限りナク、心中ニハ最早死地ニ赴クナルヘシト決テ下ゲラレタリ、然ルトコロ左ハナクシテ、亦タ元トノ囚獄ハ幽セラレタリ、其後二月二十六日県庁内ノ新檻倉新檻倉ハ今回為メニ作レルナリヘ移サル、其日ハ旧城ノ下ニ於テ角力芝居アリ、其

脇ヲ引カレ通りシ故、見物人実ニ夥シク、左右ノ群中ヨリ悪口ヲ云フ者モ亦タ尠ナカラズ、今般私郷土ヨリ縛ニ付ク者菅井誠美・堀興憲・長野祐通・古垣兼成・山下兼一・久留景介・長倉祐利・竹下某・瀬戸山某ナリ、新檻倉モ亦タ囚獄警衛人三十余名、巡邏及ヒ取締向キ等ハ矢張り旧獄ノコトシ、然ル処ニ三月十日官軍ノ御請取ニ依リ漸ク虎口ノ難ヲ脱シ、再生ノ御鴻恩謝スルニ言ナク、覚ヘズ落涙シナカラ官軍汽船神奈川丸へ二十一名ト共ニ護送サレタリ矣、

右之通始末相違無御座候、以上、

鹿児島県士族

明治十年四月四日

平田宗賢

日九年十ヶ月

「〇」第十号」

手続書

中原尚雄

旧鹿児島県令大山綱良ニ係ル引合人トシテ御尋

問ヲ受ケ手続書左ニ奉呈候

向キニ廟堂征韓ノ議発リ、前参議西郷隆盛韓ニ大使タラシコトヲ乞フト聞クヤ、私カニ之レニ随行センコトヲ願フノ央ハ、朝議御破論隆盛及ヒ三四ノ参議職ヲ辞シ、桐野利秋・篠原国幹等モ亦タ職ヲ退キ国ニ就キ、統テ旧近衛兵等役ヲ退ク、時ニ私少警部ノ職ヲ忝フシ、同志四五名ト結合、恒ニ進退ヲ謀リ居リシニ、明治六年歳暮ニ至リ以為ラク、曩キニ征韓ノ議発リタルヤ、此役ニ従事シ身ヲ以テ国ニ報スルノ宿志ナリシモ、既ニ廟議征韓ノ拳ヲ止メラレタリ、然ルトキハ我意遂ケ難キハ論ヲ竣タス、如カス一往退テ時ヲ待タンニハト、是ニ於テ職ヲ辞シ国ニ帰ル、然ルニ翌七年征台ノ役ニ徵集隊第四番小隊半隊長ノ命ヲ奉シ、同年三月出軍、該島牡丹ノ巢窟ヲ屠陥スルノ後龜山本營ニアルトキ、支那ノ葛藤ヲ生シ、柳原全権公使上海ニ於テ支那公使ト談判、決セサルニヨリ、北京ニ赴カレ、該地ニ於テ談判スヘクト発艦セラレシ趣、赤松参軍ヨリ告ケ来ル、此時征役未タ半途ナリシカ、総隊苦役ニ倦ミ不平ヲ鳴ラシ、我政府ハ彼ノ強威ヲ破ルニ力ラナシ、故ニ屈メト曰ヲ空フスルヨリ寧ロ帰朝シ、意ヲ還フスルニ如カスト、誹謗喋々一方ナラス、是ニ於テ西郷都督ヨリ懇ニ御達ニ、柳原公使北京ニ赴カレタル上ハ、必

ス彼ノ政府ニ対シ和戦両様ノ談判何レヘカ結局アラン、其報ヲ得ルモ遠キニアラサレハ、夫レ迄留台致スヘクトノコトナリ、私専ラ之レヲ奉戴シ且此危機ノ際ニ臨ミ、肆マニ私情ヲ吐クヘカラサルノ義ヲ確守シ、之レヲ隊中ニ弁スル再三、更ニ承諾スル者ナシ、故ニ又都督ノ令アリ、曰ク、更ニ交代兵ヲ出スヘキ旨照会致シ置キタリ、因テ八月中旬迄留台スヘシト、則チ八月ニ至リ果シテ交代兵着隊ス、時ニ私病ニ罹リ寝起不自由ノ際ナレハ、止ムヲ得ス交代シテ国ニ帰り床ニ臥スコト八拾余日、病中友人来リ告クルニ、先キニ我輩征台中進止ノ論隊中ト会ハス、留台ノ説ヲ主張セシ者ハ尽ク方向ヲ誤リ、且ツ隊ヲ馭スルノ道ヲ失シタル者ナリ、故ニ私学校ニ入門スルヲ許サス、若シ入校セント欲スル者ハ一通ノ謝書ナクンハ絶ヘテ許ルスコトヲ得スト、西郷始メ私学校党ノ論決シタリト、私学校党淵邊軍平ヨリ承知シタリト云フヲ聞キ、実ニ切齒ニ堪ヘサルナリ、而シテ平愈ノ後出鹿シ、友人ト談スルニ彼レ今我輩ヲ誹謗スル他ニアラス、只政府ノ曲ヲ許キ其非ヲ探リ、常ニ政府ヲ頼サント欲スルナラン、若シ我輩ヲシテ彼カ説ニ従カハ、彼等我輩ヲ擯ケサルコト必セリ、然レトモ物ニ順逆アリ、之レヲ能ク弁セサ

レハ過クルニ千里ヲ以テス、夫レ人民ハ政府ノ下ニ居テ其保護ヲ受ク、非アラハ以テ之レヲ正シ、是アラハ以テ従フハ人民ノ常道ナリ、今彼レカ如キハ許ヒテ以テ直トシ、暴ヲ以テ順ヲ制セントス、其災少ナカラス、然ルニ今我輩徒ラニ快トシテ鬱意ヲ懷ンヨリハ寧ロ共ニ出京シ、政府ノ下ニ仕ヘ微軀ノ心力ヲ尽スニ如カスト相約シ、即チ池端清秀ナル者ト上京シタリ、明治八年八月三十日ニ至リ、警視庁十四等出仕ヲ拜シ、同九年一月四日少警部ヲ拜命ス、然ルニ昨年肥後ノ暴起、次テ長門ノ暴動ニ乗シ、石州路ニ出張ノ命ヲ奉シ、賊徒成クルニ臨テ帰京ス、同年十二月四日ナリ、此時ニ当リ我県固ヨリ胚胎ノ災害愈熾ンニ至ラントス、流説紛々更ニ穩カナラス、然ルニ県内我郷伊集院ノ如キハ、初メ其党ニ与ミスル者五六名而已ナリシカ、肥長暴発以來之レニ与ミスルモノ夥多ニシテ、我親戚朋友モ亦既ニ与シタル由聞及ヒ、日夜憂愁寝起ヲ安ンセス、一タヒ帰県シ彼等ニ説クニ、貴鄭ノ方尙ヲ謬リ身命ヲ毀損スルコト勿レト云フノ理ヲ以テシ、其説ニ服セハ可ナリ、否ラサレハ強ユルニ道ナシ、知テ未発ニ言ハサレハ信ヲ失フト存シ居ル処ニ、同月二十四日ニ当リ、園田長輝・末廣直方来リ其言フ処一々我意ニ

協フヲ以テ、共ニ帰県センコトヲ約セリ、翌廿五日夜園田長輝宿宅ニ菅井誠美其他ト集会シ、我輩帰県スルノ本意タルヤ、我親戚朋友間ニ大義名分ノ存スル処ヲ確守シ、無名ノ党ニ役セラレズ、方向ヲ失ハサルノ真意ヲ説カンカ為メニシテ、固ヨリ私事ニシテ公事ニ非ラス、故ニ務メテ忍耐ヲ旨トシ、彼レ暴ヲ以テ我ニ接スレハ、我ハ温順ヲ以テ之レヲ待シ、彼レヲシテ激怒セシメサルヲ以テ約セリ、是ヨリ先キ時節柄一時数名帰省ヲ願出ルトキハ、長官ノ許可ヲ得ル能ハス、亦巡查一統ヘ疑心ヲ懷カシメンコトヲ恐レ、権大警部大山綱昌ニ就キ長官ヘ本意ヲ開申シ、各々帰省ノ願書ヲ捧ケ許可ヲ得タリ、且往来ノ旅費トシテ月給四ヶ月分前借願出シニ、是又許可ヲ得テ同二十六日川路氏ノ別邸ニ於テ之レヲ大山氏ヨリ請取タリ、其時同人ヨリモ復タ反復、帰県之上ハ万事忍耐シテ粗暴ノ事ナク無事ニ帰ルヘシト大山氏ヨリ承知シタリ、同廿八日玄海丸ニ乗込ミ、本年一月十日千代^(舟内)ニ着ス、同夜串木野郷ノ親類長平八郎宅ニ一泊セシニ、同人ノ話シニ、當時私学校ニ入校セサル者ハ犬羊牛馬ノ如ク嘲罵罵訾シ、昨年以来戎器彈藥ヲ購求シ容易ナラサル勢ヒナリ、亦東京ヨリ帰国セシ者ハ悉ク政府ノ問者ナリトシテ、親戚朋

友ノ交際ヲ絶ツニ至レリ、其甚シキハ途中等ニテ木石瓦礫ヲ抛擲シ、或ハ種々ノ乱暴狼藉ヲナスヨシナリ、故ニ時節柄不慮ノ禍害ニ係ランコトモ計リ難シ、能ク注意致スヘシトノコトニテ、先キニ東京表ニ於テ伝聞セシヨリモ彼ノ党ノ勢ヒ焰熾ンナルコトヲ知レリ、翌十一日市來郷ノ大久保規正^{元中警部奉職在、昨九年五月職ヲ辭シテ帰國セン者ニテ徒モ私ト密事ヲ謀リタルナリトテ拷責セラレ、}、^{前ヨリノ知人ナリ、実第一郎ト共ニ彼ノ党ニ歸セラレ、兄弟トモ鹿児島ニアル市來問屋ニ保警セラレタリ、}ノ宅ニ立寄り候処、同人弟一郎^{通卒創業ノ時ヨリ明治七年マテ警視庁ニ奉職致居タリ}ト共ニ我等兄弟嘗テ警視庁ニ奉職致シ居タル故歟、政府ヨリ探偵ノ命ヲ奉シ帰国シ、万事私学校ノ事情ヲ東京ニ通報スルモノナリトテ、親戚朋友及ヒ郷内中ノ人ヨリ交際ヲ絶レタリ、又東京ヘ当地ノ事情ヲ報セントスルモ、昨年七八月頃ヨリ書面ヲ開封スルト聞及ヒ、不本意ナカラ通知スルヲ得ス、実ニ遺憾限ナシト涙ヲ流シテ語りシニヨリ、共ニ異地ノ形勢ヲ慨嘆シ相共ニ涙ヲ催シタリ、夫レヨリ同処発足同夜郷里ニ着ス、其夜親戚ハ例ノ如ク訪ヒ来リシカ、其待遇上平生ト異ナレリ、其他旧友等更ニ相見ヘサルノミナラス、途中相逢フスラ眸ヲ側タツ位ノコトニテ、誰一人トシテ相話スノ友ナカリシ、日數四五日ヲ経テ諸類家ヘ謝礼トシテ相廻ルノ途中家僕来リ、客アリ家ニ来ルト告クルニ会フテ帰

家セシニ、同族中原太郎兵衛并ニ宇田祐輔ノ兩人来リ、
 応対暫時ニシテ酒ヲ供シ、酒酣ニシテ中原太郎兵衛云フ
 ニハ、汝尚雄聞ク、汝ハ此節帰県スル趣ハ聞者ナルト言
 ヒ終ルヤ否ヤ、突然飛懸リ私ノ喉ヲ挫シク、私ハ殺サハ
 殺セト云フテ抗セス、少ラクアツテ右宇田祐輔彼ヲ引キ
 離シタリ、然リ而シテ坐スルコト須臾ニシテ、私従容ト
 シテ左様ノコトハ之レナキ趣ヲ述ヘタリシニ、更ニ云ヒ
 モ果サス再ヒ飛懸リ痛ク喉ヲ挫シキ、已ニ堪ヘカネル頃
 家内ノ者等大ヒニ驚キ、近隣及ヒ伯父中原郷之丞ヲ招キ
 来リ、右宇田祐輔ト共ニ取り支ヘ浸ヤク彼ヲ連レ去リタ
 リ、其後数日ヲ経テ今泉郷ノ士佐藤信武来^{是ハ佐藤氏第ヨリ宿}
^{許ヘ届ケ品アル故請}
^{取ニ遊業致シ與ルヘキ旨、}手紙ヲ以テ申進シタル故也、語ルニ、県地及私学校党ノ形況ヲ以テ
 シ、雨天故ニ其夜共ニ大義名分ノ存スル処ヲ談論シテ寢
 ス、翌日松下兼清来リ、蒲生郷ノ区長邊見十郎太ナル者
 戸長中ニ向テ曰ク、方今魯国ハ土国ト戦端ヲ開キ戦争最
 中ナリト聞ク、夫レ魯国ハ我国ニ界シ我ヲ覬覦スル日久
 シ、故ニ其余鋒或ハ我国ニ波及センモ識ル可カラス、然
 レハ人臣タル者ハ斯ル外患ニ際シ身ヲ以テ国ニ徇フノ時
 ナラスヤ、故ニ予メ其用意ナカルヘカラス、是ヲ以テス
 ナイドル銃八拾挺郷用金ヲ以テ取り入ルヘシト令ス、戸

長等答テ曰ク、朝令ヲ待スシテ兵器ヲ購求スルハ法ニ違
 フヲ以テ郷中ノ士族不平ヲ囑フハ必セリ、故ニ即座ニ令
 ヲ奉スル能ハスト、是ニ於テ区長邊見又曰ク、然ラハ県
 庁ノ指令ヲ受ケ後チ違スヘシトテ退キタリ、是ニ因テ戸
 長等、若シ彼レ県庁ノ指令ヲ以テ購求ノ令ヲ再ヒ違セラ
 レタルトキノ答辭ニ苦ミ居レリ、故ニ汝ニ其儀相談方ニ
 来レリト話ス、私対テ曰ク、夫レ国ノ危難ニ臨ミ身ヲ以
 テ国ニ尽スハ人臣ノ常ナリ、然レトモ国ニ法アリ、法ニ
 則ラスシテ擅マ、ニ兵器ヲ買求スルノ道アルヘカラス、
 今邊見氏カ令セシ如キハ、畢竟私カニ謀ル処アツテノ事
 ナルヘシ、亦タ県庁ヨリ如此不法ニ兵器購求ノ許可ヲナ
 スヘキノ理ナシ、若シ庁ノ令ナリトテ再タヒ購求ヲ促ス
 ト雖トモ、飽マテ抗争シテ可ナルヘシト云ヒシニ、松下
 モ其議ニ服シ、其翌日松下モ佐藤モ帰郷セリ、後五日ヲ
 経テ森幸左衛門^{私ト聞郷}来リ居ル処ニ、市來郷ノ士弓削弥
 四郎モ来リ共ニ語ルニ、諸郷々大抵残ラス銃器彈藥等ヲ
 取り入レ、私学校党ノ形勢実ニ猖獗ナリ、然レトモ我輩
 ハ大義名分ノ在ル処ニ向テ尽サンコト主張シ、今ニ入校
 セサルコトヲ以テス、私大ヒニ感称シテ曰ク、孰レ詔ノ
 下ル日ニ身命ヲ抛テ尽スコソ人臣ノ常道ナリト申聞ケタ

リ、然リ而シテ彼ノ兩人ハ婦レリ佐藤信武・森幸左衛門ハ私ト何、カ事ヲ談スルヲ以テ紳ニ就ケリ、其後叔父上村平左衛門ノ伴モ亦タ私学校ニ与ミセシヨシヲ聞キ、即チ右叔父ニ説クニ大義名分ノ在ル処ヲ以テシテ曰ク、彼ノ党一タヒ事ヲ挙クルノ日ハ、佐賀・山口ノ轍ヲ踏ムヤ昭然タルニヨリ、若シ教テ噫カス兵トナツテ門ヲ出ルナラハ、門外ニ出サスシテ涙ヲ揮ヒ、其首ヲ刎テ家門ヲ辱カシムルヘカサルコソ正義ナリト、再三懇説致シタリ、其他親戚朋友ニ説クニ順逆ヲ以テセント欲スルモ、勢ノ熾ンナル我説ノ行ハレ難キヲ察シ、日夜憂苦罷在候折、二月下旬末廣直方・柏田盛文来リ互ニ機ニ後レタルヲ談話シ、三月中旬頃帰京センコトヲ約シテ末廣等帰郷セリ、二月二日兼テ知己ナル谷口藤太来リ、此度鹿兒島磯ニ在ル弾薬積込ミノ為メ東京ヨリ汽船差廻ハサレタルニ、私学校党ノ壮年輩右弾薬ヲ掠奪セシニヨリ、私学校党中旧陸軍大少尉佐ノ者等、此時ニ際シ何欵名義ヲ設ケ、兵ヲ拳ンコトヲ西郷ニ迫ラント評議最中ナリ、然シ西郷ハ鹿兒島ニ居ラサルヨシナレトモ、日ナラス此度ハ免スルナルヘシ、且是迄当県巡查ハ私学校党ノ最窮士ヲ救ハンカタメ、貧窮士ノミ奉職サセアリシカ、昨日新タニ強壯ナル巡查百名ヲ募ラレリ、之レヲ以テ東京ヨ

リ下リタル獅子我等ノ同列ヲ云フナルヘシヲ狩リ取ル目論見ナルヨシト申聞ケタリ、実ニ憂慮ニ堪ヘスト雖トモ勢ヒ止ムヲ得ス、故ニ早く帰京セント欲スレトモ、斯ノ如キコトニハ多ク偽説モアル者ナレハ、尚モ実事ヲ探リ而シテ後ト思ヒ留メタリシカ、翌三日類家ニ病氣見舞トシテ差越シ居リ候処、午後四時頃右谷口藤太ナル者使ヲ以テ、町家ノ乙八ト申者ノ処マテ一寸面会致度儀之レアルニヨリ、少クノ用向ハ押テ来会スヘキ旨申来レリ、固ヨリ不審トハ存シナカラ、直チニ招キニ応シテ行ク道チ永平橋ヲ過ル時、後ロヨリ取ツタリト呼ヒ、大抱キニ抱キ倒シタリ、其時抜刀シテ恐嚇スルモアリ、棒ヲ以テ打擲スルモアリ、力ヲノ限り抗スルト雖トモ勢ニ敵スル不能、遂ニ後ロ手ニ縛セラレタリ、時ニ人数二十人計リ、其中見知ル者ハ唯兒玉軍治ナル者一人アリ、即チ兒玉ニ向ヒ、何等ノコトアリテカ、ル乱暴ニ及ハレタルヤト問ヒ懸ケタルニ、汝雄左衛門東京表テハ警部トカ何ントカ云フ役ヲ勤メ居ル由、此位ノ所謂ハレヲ知ラサル者ニアラスト叱咤セリ、夫レヨリ護送シテ鹿兒島西田町警察第三分署ニ至リ、彼レ等別府晋介ヲ呼フニ、折節別府不在故ニ、又廣小路ニ在ル第一分署ニ護送セラル、此途中携銃帶刀ノ壮年輩実

ニ街タニ満々タリ、該署モ戎器ヲ携ヘシ者數百名アリ、少ラクアツテ復タ別府ヲ呼フト雖トモ不在ナリ、夫レヨリ三疊敷ノ一室ニ閉チ込メ柱ニ縛リ付ルコト須臾ニシテ、調所ニ引廻シタリ、其時中島健彦・宮内俊助外二名来リ、中島云フ、汝中原、汝ハ西郷大将ヲ暗殺ニ歸リシ由ト、私大ヒニ愕キ、決シテ然ラス、両親病氣ニ付看病ノ為メ帰県シタリト答ヘシニ、叱声ト共ニ大ヒニ打擲シ、遂ニ半死半生此時両手及ヒ足ニ數カ所ノ疵ヲ受ケ、今ニ手疵ハ平愈セスニ至テ止ミ、中島等退キシ後、彼レ等水ヲ飲マシメタリ、少ラクアツテ復タ来リ詰ルニ、帰県ノ趣川路カ内命ヲ奉セシナランコトヲ以テス、答フルニ前言ノ通りヲ以テス、其後數度ノ調ヘノ中、汝等一緒ニ歸リタルモノアルヘシ、汝ハ此列ノ巨魁ナリ、故ニ必ス知ラサルハナシ、汝ハ伊集院郷ニ於テハ名アルモノナリ、亦タ汝等ノ歸リタルハ誰ノ許可ヲ得シヤト云ヘリ、私答ヘテ曰ク、長官ヨリ許可ヲ得タリト、彼レ即チ問フ、其長官ハ誰ソヤ、若シ汝口上ニテ述ヘラレスンハ四肢ヨリ打出スヘシト、打擲棒ノ当ラサル処ナシ、七篇目ノ調マテハ前言ノ如ク家事ヲ以テ答ヘシカハ、八篇ノ調ニ至リ我輩同列ノ名簿ヲ持来リ、此連簿ハ何故ソト云フ、答フルニ此レ全ク一緒ニ歸ルトキノ覺ヘ書ナリ、

然レトモ此人數ト同列スル趣キハ他ナシ、全ク長官ノ内意ヲ受ケシニアラス、且公事ニモアラスシテ実ニ私事ニ関スルコトナリト、先キニ約セシ帰県ノ趣ヲ始メテ告タリ、二月六日菅井ト共ニ引出シ彼等云フ、汝等カ首ヲ上町辺ニ於テ斬ルヘシ等愚痴ノ恐嚇ヲナシ、互ニ私等ノ胆ヲ取ランコトヲ争ヒナカラ、県庁ヲ距ル七八町ナル囚獄郭内迄引至リ、菅井ト一処ニ列ラネ、汝等此処ソ覺悟ノ場所ナリナド云ヒ威トス、実ニ笑フヘク憎ムヘシ、暫時ニシテ又本ノ分署ニ引歸リ、例ノ柱ニ縛セラレタリ、然リ而シテ又調所ニ引出サル、其時口供ナリトテ彼レ披テ之レヲ誦聞カスルニ、其趣キ大低先キニ申述シタル処ニ異ナラス、唯文尾ニ至リ川路大警視ヨリ私学校ヲ離間セシムル策ノ内意ヲ受シコトアリ、コレノミ不服ナルニ付、直チニ之レヲ弁セント欲セシカ、身体頻リニ疲弊ノ際、恨ヨ含ミナカラ之レニ抗スルニ力ナク、切ニ苦痛致シ居ル処、強テ拇指ヲ押ヘ印セシメ、直チニ囚獄所ヘ連レ行キ獄中ニ押込メタリ、又八日ノ日暮ニ当リ、一処ニ縛セラレタル十九名ノ者ヲ共ニ獄外ニ引出セシニ、私独リ残リタリ、時ニ以テ為ラク、彼ノ人數此夕必ラス斬首ニ逢フナラン、我残リシハ書落シニテ自然呼出スヘシト、今ヨ

限リト切齒シ待居タリシニ、疲労ノ身睡リヲ催シ、只端
ナク眠リ居ル処、人アリ呼ヒ来リ同獄ノ者此レハ外ニ打起
ノ罪人セト命シ、直チニ進ミ入来リ曰ク、汝カ口述外ノ者ノ
申述トハ齟齬セリ、今外数人ヲ糾スニ皆同シクシテ、独
リ汝カ言上誤詐ナリ、コレコソ真ノ口供ナリトテ一通ヲ
持来リシカ、其文面閲見セサルノミナラス、コレヲ読聞
カセモセス拇印サセントス、時ニ答ヘテ曰ク、尋常ニ御
糺シアラハ決シテ順序顛倒ノ憂ヒナシ、然レトモ無理暴
戻ノ責ニ懸リ口述スレハ、仮令ヒ趣意ハ差ハサレトモ、
言語ハ必ス前後セント云ハセモ果テス、痛ミシ手ヲ取リ
無理ニ拇指ニ墨ヲ点シテ強テ押サセ、急速立チ去レリ、
少ラクアリテ同列人数帰リ来リ話スニ、思ヒモ依ラサル
口供ヲ偽作シ、其文中暗殺ノ文字アルヲ聞キ大ヒニ警惕
シ、無根ノ偽口供ニ因テ冤罪ノ名ヲ負ト思ヘハ、憂懣胸
ヲ焦シ恨サ限リナシト雖トモ詮方ナク黙止居タリ、同月
廿六日県庁内ノ新牢ニ移サル、只旦夕無慚ノ死ヲ待ツノ
ミ、時ニ明治十年三月三日勅使御下向ノ官兵ニ御受取相
成、再生天日ヲ拜シ、即チ官船神奈川丸ニ乗込シニ、市
中ニ売買スル私等ノ口供ナリトテ朋友等之レヲ示ス、始
テ之レヲ閲シ、憤懣自ラ禁スル能ハス、後長崎・大坂ヲ

経テ三月廿二日着京、同廿八日前件ノ始末御尋問ヲ蒙リ、
御達ノ旨ニ遵ヒ前書ノ通り申上候、

右之通相違不申上候、以上、

鹿兒島県士族

明治十年四月四日

中原尚雄 拇印

三十一年六ヶ月

〔補遺〕 (以下乙号は「遭難者始末書」により補う)

乙号

中原尚雄

先般御尋問之件々左ニ申上候

本年一月十日千代前内ニ着、同所近郷士族ニテ壮年ナル者
ハ悉皆上京スル賦ナリトテ、雀躍欣喜一方ナラサル由
ヲ、市民ヨリ伝聞ス、

同日千代ヲ発シ同夜申木野郷此里程ニ着ス、同所親類長
平八郎宅ニ立寄り、本人ノ名前ヲ呼ビ、此度宿許ヨリ
愚父病氣ノ段申越シタルニ付、不取敢看病帰省ノ願書
ヲ出シ、許可ノ上只今帰着シタルナリト話セシニ、彼
レ左様カ、先ツ室内ニ入ルベシトテ一室ニ誘ヒ入レ、四
方ノ襖ヲ閉チ込メ、膝元ニ近カ寄り小声ニテ左ノ数件
ヲ話セリ、

一当時私学校徒ノ勢日ニ増シ猖獗ニシテ、既戎器彈藥モ大低相調ヒタリ、然レトモ益々今ニ購求方ノ最中ナリ、概シテ彼ノ校徒ノ主唱スル処ハ、東京官吏ハ奸臣ナリ、故ニ之ヲ殺スベシ、亦兵ヲ挙テ熊本ニ出ルトキハ、熊本台兵ハ鎮庄スルノ勢力ナシ、若シ台兵抗スルトキハ、朝霧ノ間ニ追ヒ払フベシ、銘々用意ノ金ハ僅カ三円ニテ充分ナリ、熊本ニ至レバ鎮台ノ金若干アリ、之レヲ分捕リ路用ニ充ツベシ、亦彈藥ハ百発位ニテ充分ナリ、之レモ熊本鎮台ニ沢山アリナドノ妄説喋々タリト相話ス、

一東京ニ於テ仕官セシ者帰国スルトキハ、政府ノ探偵方トシテ帰リタル者ナリトテ、無理非法ニ狼藉ヲナス、現ニ昨九年平佐郷ノ士田中直哉此レハ前ヨリノ友人ニテ昨年私用アリテ帰國セシナル者帰郷シ、再ビ上京シタルノ後、彼ハ必定政府ノ探索方トシテ帰国セシニ相違無カリシニ、彼レヲ捕ヘテ撻チ殺サマリシハ、実ニ遺憾千万ナリト、鹿兒島ハ勿論当郷及ヒ近郷等ノ校党、喋々相話シ居ルナリ、如斯当地ノ勢ヒナルニ依リ容易ナラサル時節帰県セラレタリ、故ニ仮初メニモ彼ノ党ノコトヲ誹謗スルナドシテハ、不測ノ禍害ニ罹ルコト自然ナルベシ、能ク注意シテ無異ナルコトヲ希望ス、亦都合ニ因ラハ一刻モ早ク上京然ルベシト存スルニ付、

熟慮アルベシ、

一先般鹿兒島居住ノ人ニテ名ハ知ラザレドモ、東京ヨリ帰国ヲシタル処、政府ノ問者ナリトテ、校党名ハ知ラス多人數ニテ無法ニ打擲、非常ノ狼藉ヲナシタルヨシノ風説モアリ、旁以テ念ヲ入レ、カ、ル禍害ニ遇ハサル様注意スベシ、

一私未タ東京ニ在ルノトキ、右長平八郎ハ眇ニシテ尋常強者ニ列シ難キニヨツテ、外見ニ対シ嫌疑ノ恐レモ決シテ有ル可カラズト思慮シ、書翰ヲ置キタルニ付、右書翰ハ届キタルヤト相尋ネ候処、慥カニ届キタリ、去レトモ当地ヨリ発スル書翰ハ総テ彼ノ党開封スル由ヲ聞キシニヨリ、一月上旬比当郷商人肥前ニ行ク者アリ、之レニ県地ノ事情ヲ委シクケケ条書ニ認メタル一封ヲ、肥前ヨリ郵便ニテ差遣シ呉ルヘキ旨相托シ、差遣シタリト答ヘタリ此書付到達セサル、中ヲ京發足仕候、

一前条長ヨリ懇々相話シ候ニ付、親切忝ケナキ旨ヲ述べ、猶此末県地ノ事情万事情應ナシ呉ルベシト依托シ、亦旧曆一月四日頃ニ私宅ニ遊来スベキヲ約シ、同拾一日時同所出立、同日市來郷此里程大久保規止宅ニ立寄候所、同人第一郎ト共ニ左ノ數件ヲ話ス、
一規正曰ク、何等ノ用事在リテ帰国シタルヤト、私親病氣ニ付帰県致シタリト答ヘタリ、

一 我々兄弟ハ嘗テ警視庁ニ奉職シタル故カ政府ノ探偵方ト言ヒ触シ、親戚朋友等ヨリ日常ノ交際ヲ絶タレ、互ニ相談スル人モ無ク、唯兄弟ニテ独立ナシ居レリ、

一 私学校ノ挙動ヲ見ルニ、彈藥戎器等モ大抵具備シタル姿ニテ、先キニ熊本・山口騒動ノ際ハ、已ニ暴発スルノ勢ヒナリシモ、如何ナル故カ当時ハ少シク勢ヒ鎮定シタル向ナリ、サレドモ旧曆正月頃ニ必ズ暴発スルニ相違アルマジク見受クルナリ、

一 県地ノ事情ヲ東京ニ通報セント欲スルモ、彼ノ党書通ヲ開滅スルト聞キ、止ヲ得ス通スル能ハズ、実ニ遺憾至極ナリ、

一 只今帰り掛ケナルニ付、猶委細ニ是迄ノ事情、就中彈藥製造等ノ方法ヲ尋問致度候間、一兩日ノ中私宅へ遊来致シ呉ル可クト問ヒタルニ、一郎答テ曰ク、我々ハ此已前辭職帰国シテスラ、彼党ハ政府ノ間諜ナリト目ス、況ンヤ君ハ此機会ニ帰ラレタルト目視スルハ昭然ナリ、今晚宅ニ帰ラレタルトテ、親類トテモ彼党ニ与ミセシ人ハ来訪セラレマシクト存ス、殊ニ貴郷伊集院ノ如キハ彼党ニ与ミシタル人数多ニテ、其勢モ佗ニ超過シタル風説モアレバ、我々遊来候テハ然ルヘカラスト、私然ラハ夜分来ルベシ、而シテ夜ノ明ケサル中ニ帰館アラバ、外見ニ触ル、ノ

憂アルマジクト云ヒシニ、去ラバ遊来致スベシト、互ニ結約シテ同所ヲ立出、同夜帰着ス、其後右大久保兄弟ハ私宅ニ来ラス、

一 本年一月下旬比、高崎親章私宅ニ来リ、鹿兒島井二加治木郷ノ辺ニ遊行セン為メ来レリト申聞ケ候ニ付、鹿兒島其他ノ形況事情ヲ能ク見聞、帰宅掛ケ亦候私宅ニ立寄り呉レ候様依頼候ニ、同人モ承諾シ私宅ヲ出立タリ、其翌日復タ来リ左ノ話ヲナス、

一 鹿兒島ニ行キ、樋脇盛苗ヲ訪ヒシニ、同人ノ話ニ、先般帰省シタル権大警部横山勇藏ナル者、政府ノ間諜ナリトテ、私学校党ヨリ非常ノ乱暴狼藉ヲセラレ、遂ニ親類ヨリ辭職ヲ願ハセ、今ハ親類ヨリ嚴重ニ監守致シ居ルヨシ、

一 鹿兒島住士族吉國孝之介モ、政府ノ探索ニ帰リタルトテ、親類ヨリ同人ニ割腹ヲサセント致シタルニ、或ル一人ノ親類名ハ云之レヲ支へ、辛フシテ吉國ハ固ヲ脱シタル由、

一 鹿兒島ノ私学校党ハ思ヒノ外勢ヒ猖獗ニシテ、余リ我々所々徘徊候テハ然ルベカラスト存シ、加治木へハ行カザルナリト相話シ、高崎ハ直ニ帰郷セリ、

一 一月三十日谷口藤太此ハ鹿兒島近在枳刺地名居住ノ士族ニテ、通字創業ノ際ヨリ知人ニ相成リ、前台南役ニモ共ニ出陣シ、タルモノナリ、私宅ニ来リ、今日ハ当町ノ市ニ来ルニ、

清藤村ノ或ル者ヨリ名ハズ君ノ屍郷セラレタル段聞及ビ、東京ノ珍説并ニ舎弟某名ハズノ音信ヲモ聞度候テ來レリト、依テ一室ニ招キ入レ左ノ数件ヲ話ス、

一 舎弟ハ君ノ上京後間モナク上京シ、巡查ヲ拜命シテ東京第五方面ニ相勤メ居ル由、自分モ上京ノ仕度致居ル中、舎弟儀何欵免職ニ欵ナリタル由シ、伝聞シタルニ付、暫ラク取止メタリト云ヒシニ付、御舎弟ノ御上京ニ成リタルトハ、全く聞知セザルナリ、故ニ何モ御舎弟ノ事ハ存ゼズト答ヘタリ、此舎弟ト云フハ面体ハ存シ居レトモ、名ハ失念仕候、

一 当時県地ノ形勢ハ如何ナルヤト問ヒシニ、鹿兒島私学校ハ勢ヒ実ニ隆盛ナリ、日々校党カ狙撃ニ行クノ有様ハ、恰モ藩政時分ノ常備兵ニ異ナルコトナシ、毎日砲声ノ絶ル間ハナシ、亦諸郷々陸統之レニ準フテ盛大ヲ極ムト話セシニ依リ、左様カト返答ス、

一 鹿兒島ニ用向アリ、出鹿セント欲スルカ、私学校連中ガ乱暴ヲ仕掛ケハシマイカ、亦タ市來ノ温泉ニモ行く賦ナルガ、是亦湯ノ中等ニテ乱暴シハシマイカト問ヒシニ、昼間ハ無法ノ事ハアルベカラザレトモ、夜間ハ乱暴セズトモ保証シ難シ、温泉モ同様ナルベシト話シタルニ付、非理無法ノ乱暴ヲ為スヘカラザルハ人ノ常道、若シ犯スモノアルモ国ニ法アリ、之

レヲ措テ問ハザルノ道理ハアルマジク、故ニ少シモ屈スルニ足ラズト答フ、而シテ君モ入校セラレシヤト問ヒシニ、自分ハ入校セズト答ヘタルニ付、此者ノ心中明ラカニ相分ラズ、故ニ私学校ノ正邪并ニ私ノ真意ヲ吐露セズ経済上ノ談話等ナシタリ、

一 私学校連中ハ戎器彈藥ノ用意ヲナスナラバ、定テ一度ハ兵ヲ挙ルノ目論見ナルベシ、如何ト問フニ、彼レ然リ、発スルノ時ハ桜時分ナルベシト思フナリ、ト答ヘタリ此桜時分ハ旧ノ三、月ヲサスナルベシ、

一 私学校連中々等以上以上陸軍大中小尉ノ者共、屢兵ヲ挙ケンコトヲ西郷先生ニ迫リタレトモ、名ノ無キニ兵ヲ動スノ道ナシトテ、鎮撫セラレタル由ヲ聞及ベリト話セリ何人ヨリ聞キトリタルカ、其名ヲ云ハズ、

一 西郷先醒(生)ノ見込ハ如何哉ト問フニ、招魂社祭リガ來ルカラト云ハレタル由シ、亦若シ兵ヲ挙テ敗ヲ取リタルハハ、日本ニ於テハ止賊ノ名ヲ下スコト能ハズ、欧州各国ノ公論ニ依テ、初メテ分明スルナリ、ト云ハレタル由ヲ伝聞シタリト話セシニ依リ、左様カトテ話ヲ止メタリ、而シテ同人ハ帰宅シタリ、

一 二月二日右谷口來リ、左ノ嘶ヲナス、
一 此度政府ヨリ、鹿兒島磯ニ在ル彈藥積込ノ為メ、汽船差廻サレタル処、校党ノ壮年輩大ニ激怒シ、右磯

ノ彈藥二万五千発ヲ掠奪シタリ、

一 彈藥ヲ掠奪シタル後、一昨日県庁ヨリ紛失ノ届ケヲ其筋へ成サレタルヨシナリ、

一 私学校党中等以上ノ者等、此時ニ際シ何ニカ名義ヲ設ケ、兵ヲ挙ケンコトヲ西郷氏ニ迫ント、折角評議ヲナス由、実ニ城下ハ騒動一方ナラズ、

一 西郷氏ハ当時鹿兒島ニハ居ラレザル由ナレトモ、此度ハ必定発スルニ疑ヒナシ、亦東京ヨリ下リタル獅子^{是ハ我等カ同列ヲ云フナルヘ}ヲ獵リ取ラントテ、校徒ヨリ強壯ナル百名ヲ撰拔シ、昨日新タニ県庁ヨリ巡查ヲ申付ケラレタル由、邊見十郎太弟^{名ハ云}ヨリ聞タル旨、相話シタリ、

一 今晚ハ雨天ナル故一泊シテ帰ルベシト云ヒシニ、其意ニ随ヒ共ニ臥シ居リ候処、夜半ニ至リ私ヲ呼起シ、自分ガ君ノ宅ニ一泊シタリト彼ノ党ガ聞クトキハ、自分モ鹿兒島ニモ行クコト能ハサルヤウニナルカラ、帰ルベシト申聞ケ候ニ付、然ルベシト答へシニ、彼ハ直チニ私宅ヲ立出タリ、

一 二月三日類家ニ病氣見舞トシテ差越シ居ルノ際、午後四時頃谷口藤太ナル者、使ヲ以テ町家ノ乙八ト申者ノ所マデ、鳥渡面会致度儀之レアルニヨリ、少々ノ用事ハ押テ来会スベク旨申来レリ、素ヨリ不審ト

存シ、病床ニ会スル伯父中原郷之丞・実家中原十郎

右衛門等ニ向ヒ云テ曰ク、先日彈藥掠奪云々ノ事件モアレハ、最早暴発近ミト覚ユ、故ニ横山勇藏ノ如ク暴働ニ遇ハンモ計リ難シ、コレハ覚悟ノ前、若シ

モノ事アツテ、何カ程忍耐シテモ忍バサルトキハ、心得アリ、名ヲ潔クスベシ、君等モ大義名分ノ存スル処ヲ誤認シ、千載朽チザル家門ヲ汚ス勿レ、無名ノ帥ニシテ政府ニ抗スル者ハ、即チ賊ナリ、今学校

党ノ暴発ハ、恐ラクハ之レニ庶幾^{チカ}カラシ、私ガ平生談論スル所ノ辞、數月ヲ出ズシテ理非自ラ弁明セン、其時後悔シ賜フナト離杯ヲナシ、辞シテ歸家シ、拙妻

ニ向ヒ今夜ハ我婦ラズトテ何モ相待ツ勿レト云ヒ、若シモノ事アラバコレガ別レト心中ニ臆測シ、直チニ家ヲ立出招キニ応シ行ク道、永平橋ニ於テ捕縛セラレタリ、

一 右谷口ハ捕縛セラル、ノトキ、及ビ其後一度モ面会ハ仕ラズ候、

一 大久保規正、同弟一郎儀、私学校党ニ捕縛セラレタル次第ヲ聞キ及ビシハ、本年三月中旬、長崎警察所構内ニ拘留相成リ居候砌、兼テ知友ナル三等大警部

中島時則^{是レハ大久保ト同郷ノ者ナリ}、来リ候ニ付、大久保規正兄弟ハ君ト何故密事ヲ謀リタルナリトテ、彼党ニ縛セラレ

痛ク拷責セラレ、鹿兒島ニ在ル市來問屋ニ保管申付
ラレ居リ候ニ付、泉地ニ於テハ方向モ有之聞敷候間、
長崎へ來ルベシト申聞ケ候処、彼レ兄弟モ是非出向
クベシト約束致シ置キタル故ニ、決テ暴徒ニ与ミス
ルヤウノコトハコレナシト相話シ申候事、

右之通相違不申上候、以上、

明治十年四月廿日

中原尚雄
印柳

拾遺号

手続書

園田長輝

旧鹿兒島県令大山綱良ニ係ル引合人トシテ御尋
問ヲ受ケテ手続書左ニ奉呈候

曩キニ私ノ帰県スルヤ他ナシ、往年征韓ノ論廟議御破論
ヨリ、旧参議西郷隆盛・旧陸軍少将桐野利秋・篠原国幹
一時職ヲ辞シ国ニ就キ、続テ旧近衛兵等帰県、遂ニ私学
校ヲ設ケシ、篠原等之レカ魁トナリ、陽ハニ学校ノ体ヲ
ナシ、陰ニハ党ヲ募リ国事ヲ議シ、安穩ナラサルノ事
アルヲ聞キ、日夜憂慮ニ堪ス、然ルニ往年佐賀ニ江藤ノ
乱アリ、又輓近熊本・山口ノ挙アリ、佐賀・山口ノ乱ニ

忝ナクモ出張ノ命ヲ奉シ該地ニ赴キ、魁首初メ暴走ノ隊
長等悉ク捕ニ就キ、巨魁御鞫問ノ席ニ臨ミ、其暴挙ノ真
意源因ヲ白スルヲ視ルニ、曾ニ幾多ノ生靈ヲ損害スルヲ
顧リミス、己レノ私憤ヲ晴サンカ為メ種々ノ名ヲ仮リ、
逆威ヲ恣マ、ニセシニ外ナラス、隊長及ヒ附和脅従ノ兵
士等、其賊軍ニ党セシ源因ヲ問糺スルニ、或ハ一二巨魁
ヲ妄信シ、貴重ナル身軀方向ヲ彼レニ托シ恬トシテ疑ハ
ス、実ニ彼レアルヲ知テ国君アルヲ知ラス、身ヲ滅シ家
ヲ破ルノ徒ナリ、附和脅従ハ固ヨリ勢ノ止ムヲ得サルニ
出ルモノナリト雖トモ、多クハ不明至愚ニシテ名義ヲ弁
セス、恐嚇ノ為メニ身ヲ失フノ徒タルニ過キス、苟シク
モ道義ヲ守ルノ人ニシテ、此機ニ臨ミ何ソソ為スヘキノ
道ナシトセンヤ、是ニ於テ遠ク我郷里ノ事情ヲ思ヒ、若
シ彼レ学校党ヲシテ暴発セシムルトキハ、悉ク此輩ヲ踏
ムノ徒ニシテ、実ニ未兇ニ予防ノ術ヲ施サスンハアルヘ
カラスト、憂苦自ラ禁スル能ハス、后チ該地平定、昨九
年十二月十五日帰京奉職罷在候処、県地私学校党ノ挙動
既ニ外見ヲモ憚ラス兵器彈藥ヲ集メ、亦タ多クハ諸郷々
ノ区長ヲ賒シ、新タニ彼党ノ魁首ヨリ此レハ曾城下ノ士ナリ撰任シ、其
郷ニ就カシメ、無根ノ浮説ヲ唱ヘテ政府及ヒ官吏ヲ誹欺

シ、因襲ノ久シキ常ニ城下士族ノ鼻息ヲ伺フノ外城士ヲ
覚セシメ、彼レノ勢焰日一日ヨリ熾シナルヲ聞クヤ、一
日モ早ク帰県、我親戚朋友ニ大義名分ヲ守リ、不羈獨立
他ニ鎗東セラレス、無名ノ党ニ与ミシ、貴重ナル方向ヲ
謬リ、同族同種ナル一二巨魁ノ為メ身命ヲ毀損シ、一ハ
国安ヲ妨害シ、一ハ家門ヲ辱カシムヘカラサルノ理、併
テ佐賀・山口ノ照鑑ヲ以テ懇篤説解シ、彼レ其説ニ服従
スレハ可ナリ、若シ服セサレハ之レヲ強ユルニ道ナシ、
知テ不発ニ言ハサルハ親戚朋友ノ信義ヲ失フト存シ、帰
県センコトヲ決意セリ、然ルニ十二月日失念、安樂兼道
ナル者米リ、同志輩四五名県地穩カナラサルニ付、親戚
朋友等ニ方向ヲ誤マラサル様弁解センカ為メ、不日帰県
センコトヲ約セリト申聞ケ候ニ付、宿志固ヨリ茲ニアル
ヲ以テ俱ニ帰県力ヲ尽サンコトヲ結約シ、夫ヨリ末廣
直方ト同迫、中原尚雄宅ニ至リ前件ノ次第談話ニ及ヒシ
ニ、同シク帰ランコトヲ同意シ、其後山崎基明・松下兼
清ニモ話セシ処、孰レモ同意、十二月廿五日夜菅井誠美・
末廣直方・中原尚雄・野間口兼一・安樂兼道等外ニ八九
名私宅ニ集會シ、我輩帰県スルノ本意タルヤ、各自県地
ノ穩カナラサルノ報ヲ得テ、我親戚朋友間ニ大義名分ヲ

確守シ、無名ノ党派ニ与セス、方向ヲ失ハサルノ真意ヲ
説カンカ為メニシテ、固ヨリ私事ニシテ公事ニアラス、
故ニ力メテ忍耐ヲ旨トシ、彼レ暴ヲ以テ我ニ接スレハ、
我ハ温和ヲ以テ之レニ接シ、彼レヲシテ激動セシメサル
ヲ本意トセンコトヲ約セリ、是ヨリ先キ時節柄一時数名
帰省ノ儀願ヒ出ルトキハ長官ノ許可ヲ得ル能ハス、亦巡
査一統へ疑心ヲ懷カシメンコトヲ懼レ、権大警部大山綱
昌ニ就キ長官へ本意ヲ開申シ置、銘々帰省願書ヲ捧ケ許
可ヲ得タリ、且往来ノ旅費トシテ月給三ヶ月分前借願出、
是亦許可ヲ得テ、同廿六日川路氏ノ別邸ニ於テ大山綱昌
ヨリ受取タリ、其時同人ヨリモ、反復帰県ノ上ハ万事忍
耐シテ粗暴ノ事ナク、無事ニ帰ルヘシトノ事ヲ大山ヨリ
承知、尤其他電報等ノ義モ何レ第一ノ事ト承諾シタリ、
同廿七日東京発、本年一月九日郷里ニ着ス、当日親類及
ヒ朋友等來リ談話該事ニ及ハス、四五日ヲ経テ実兄弟寺
原宗七及ヒ縁家ナル松永某・寺師某兩人トモ
戸長ナリニ説ク、皆其
説ニ服スト雖トモ、既ニ郷里ハ区長村田三介ノ赴任以來、
一人トシテ入校セサル者ナシ、我輩モ既ニ入校セシニヨ
リ何共今史退校スルノ道ナシ、此上ハ各郷ノ有志輩ト同
盟シ一時ニ退クノ外ナシ、然リト雖トモ此説又一難事、

只惜ム私ノ着スル機ニ後レタルヲトノ話ニ涉リ、其日ノ談話ヲ止メタリ、外朋友私宅ニ遊来スル者ナシ、区长村田ノ止ムル所以ナリト聞ケリ、是ニ於テ酒席ヲ催シ、或ハ種々ノ事ヲ以テ招クト雖モ又来ラス、故ニ一里程隔リタル処ノ温泉ニ行キ湯治罷在候、概シテ学校党ノ首唱スル処ハ、旧知事父子モ西郷ト同論交誼尤モ深シ、故ニ私学校党一タヒ事ヲ挙クルノ日ハ、薩隅日三州老幼トナク風靡セサルナシ、又政府ハ兵力ヲ以テ鎮圧スルノ勢力ナシ、各県士族ハ金鼓ヲ鳴ラサズシテ応センコト必然ナリ、又陸海軍將校ハ尽ク西郷へ私恩アリ、故ニ既ニ内応ノ約ヲナセシ者少カラス、果シテ然ルトキハ土兵ヲ徵集シタル鎮兵、何ヲ以テカ薩兵ニ抗スルヲ得ン、僅ニ六千ノ巡查アリト雖トモ、衆説紛々身ヲ以テ国ニ報セント欲スル者至テ稀ナリ、多クハ二心ヲ懷キ、我ニ応シ或ハ獨立シテ、戦争ヲ好マサル者ナリ等ノ流説ヲ唱ヒ、一郷挙テ大義ヲ守ラントスルノ気力アル者ナシ、故ニ往再彼ノ地ニ在リト雖トモ、遂ニ説行ハレ難キヲ察シ、断然上京センコトヲ決シ、一月廿五日頃出立、出水郷へ罷越シ、野間口兼一ト面会・該郷ノ模様承リ候処、戸長河野某当職ヲ辞シ彼ノ党ニ与ミセス、且外ニ未タ入校セサル者数人ア

リ等ノ談ニ涉リ、又期セスシテ末廣直方モ来リ、未タ看病帰省ノ日限モ数十日アルニ付、三月上旬頃供ニ上京致スヘクト談シ、其際痔疾モ発症シ居故ニ、湯治療養上京致スヘクト決シ、再ヒ帰郷治療致居候内、三月三日夜温泉ヨリ帰宅セシニ、一昨日来学校党ノ壮年輩、鹿兒島磯ニアル海陸軍轄ノ器械所ヲ毀キ、戎器彈藥ヲ奪ヒ小川内（即牛山ニ在ル園界）・玖摩口（同）ノ国界ヲ閉チ出入ヲ禁シ、日ナラス出兵相成ルヘクトノ事ヲ実父ヨリ聞及ヒ、説ク二人ナク脱スルニ路ナク、唯彼等カ刀劍銃器ヲ携帯シ、恣マ、ニ土民ヲ使役シテ兵糧等ノ用意ヲナスヲ傍觀致シ居ルノミ、然ルニ二月六日午前三時頃門ヲ叩キ、巡查三名同郷士族松下祐治ナル者ヲ案内トシテ宅ニ来リ、私ノ姓名ヲ問ヒ、県庁ノ命ヲ以テ捕縛スル旨ヲ伝へ、直チニ両手ヲ背後ニ廻シ痛ク縛シテ警察第八分署ニ拘引セリ、該所ハ当時私学校党ノ屯集所トナリ、凡ソ百余名帯刀携銃群ヲ為シ居レリ、暫ラクシテ何ノ徽章モナキ者来テ腰懸ケニ倚リ、私ヲ面前ニ引出シ年齢官名ヲ問ヒ、次ニ何等ノ公用ヲ以テ帰県セシヤ、既ニ城下ニ於テ同類ノ者白状セリ、等ノコトヲ問ヒタルニ付、全ク実父用右衛門ノ病氣看病之為メ帰レリト答フ、次テ今般政府ノ奸臣ヲ誅セン為メ、薩

隅日三州ニ義兵ヲ挙ケラル、賦ナリ、承知デアラフト暴言以テ罵詈セリ、私ハ左様カト笑フテ答ヘス、暫ラクシテ本県ヘ差廻ハサル、カラ承知セヨト言テ、直チニ巡查ニ命シ私学校党二名ヲ副ヘ、夜白城下ニ送致セラレタリ、当日降雨甚シ、雨着蓑笠モ与ヘス、六日午後四時過キ鹿兒島下町廣小路ニアル警察第一分署ニ進シ、其儘柱ニ繫キ置タリ、時該所モ私学校党ノ屯所トナリ、脚半草鞋ヲ着シ執レモ帶刀ニテ数人私ヲ圍繞シテ、衆口異説罵詈嚼瞬筆紙ノ尽ス所ニ非ス、同七日午前調所ニ出シ、調役三名、姓名ハ存セス、年齢官名ヲ問ヒ帰県セシ趣意ヲ問ヒタルニ因リ、真意^{則チ前ニ述ヘタル}名義^{名義}ノコトヲ以テ答ヘシニ付、其儀ハ私事ナリ、公事ヲ白セ、川路ヨリ内命ヲ受ケシコトアリト、既ニ同類白状セリ、其儀ハ知ラス答ヘシニ、白サスンハ打テト令シ、四五名ニテ無理無法ニ打擲シ、亦密意ヲ受ケシコトヲ白セト、問ヒ懸ケタレトモ知ラスト答ヘシニ、其方ハ段々新聞ノアル者ナリトテ打擲スルコト前ノ如シ、然而調所ヨリ引下シ元ノ柱ニ繫キタリ、同日午後凡ソ該所ヲ距ルコト七八町程ニ在ル獄屋ニ下シ、同八日午後県庁内ニアル警察課ニ呼出サレ、調所ニ於テ二名ノ調役高声ニ、其方カ口書ヲ誦ミ聞ルカラ、多人數故齟

齟スルカラ其通り心得ヨト申付ケ、口書ヲ誦初メタルニ、其誦音曖昧トシテ分明ナラス、就中西郷ヲ暗殺スルトノ言耳ニ徹セス、誦畢ルヤ否ヤ袴ヲ着シタル者兩名ニテ、腰帶ニ縛シ付タル両手ヲ握リ、墨ヲ取テ拇指ニ付テ連名ニテ書タル姓名ノ下ニ押付テ、下カレト令シタルヤ忽チ戸外ニ突出シタリ、而シテ外人數モ相濟ミ、後暗殺等ノ文書アリタル旨同列ノ者ヨリ聞キ、始テ承知殘懷極リナシト雖トモ、固ヨリ一トシテ法則ニ抛ラサル糺彈ナルカ故ニ、如何トモスル能ハス、尤最初調ノ際全暗殺等ノコト彼尋問セシコトナシ、夫ヨリ元ノ獄屋ニ歸リ、同廿六日県庁内ノ新獄ニ移サレ、三月十日勅使ノ御達ニヨリ官兵ニ御受ケ取りニ相成リ、其後長崎、大坂ヲ経テ、同廿二日東京着、寄留所戸長ニ保管セラレ、同廿八日前件ノ始末御尋問ヲ受ケ、御達ノ旨ニ遵ヒ前書之通申上候、右之通相違不申上候、以上、

鹿兒島県士族

明治十年第四月四日

園田長輝 摺印

十年四月 廿二年三月

手続書

松下兼清

鹿兒島県令大山綱良ニ係ル引合人トシテ御尋問
ヲ受ケ候手続書左ニ奉呈候

私儀

先般帰省仕候趣意タルヤ、曩キニ明治六年ノ春頃ヨリ、
西郷・桐野輩首トシテ鹿兒島ニ私学校ヲ設ケ、旧近衛兵
等帰県セシモノ及ヒ其他ノ壮士年輩陸続之レニ入校シタ
リ、然ルニ其名ハ学校ノ名目ナリト雖トモ、陰ニハ戎器
彈藥ヲ用意シ、且隊伍ヲ結ヒ狙撃ヲ専ラニシ、甚シキハ
政体ヲ誹謗シ、実ニ名実相適セサルモノナリキ、而シテ
昨九年ノ春頃ニ至リ、各外城ノ区長ヲ新タニ彼校党ヨリ
撰任シ、各所轄ノ外城士族ヲ巧ミニ鼓舞籠絡シテ入校セ
シム、私ノ郷里蒲生郷ニハ即チ学校党邊見十郎太ナル者
昨九年二月区長トナリテ入郷シタリ、是ヨリ先キ長谷場
純尚ナル者首トナリテ二十余名入校シタリ、区長邊見ハ
赴任以來右ノ二十余名ヲ以テ、他ノ入校セサル壮士輩ニ
入校ヲ促スコト屢々ナリト雖トモ、之レニ従ヒ入校セシ
モノナシ、或ル日副戸長本司某・指宿某等ト共ニ語テ曰
ク、目下彼ノ私学校党ノ挙動ヲ見ルニ、名ヲ学校ニ仮リ

頻リニ党ヲ募リ、亦タ国法ヲモ憚ラス兵器彈藥ヲ購求
ス、若シ此ノ党一タヒ暴発スルノコトモアラハ、実ニ不
名不義ノ乱民タルニ過キス、故ニ不霸獨立決シテ貴鄭ノ
方向ヲ誤ルヘカラスト盟約セリ、後チ昨九年十一月頃ニ
至リ以為ラク、我レ開明ノ今日ニ際シ在苒僻地ニ潜居罷
在候テハ、第一天下ノ形勢ニ通曉セス、且ツ報國ノ目途
モ無之故ニ輦轂ノ下ニ仕ヲ奉シ、拮据勉々報國ノ誠ヲ尽
サンコトヲ欲シ、併セテ右指宿某等ニ目下見聞スル処ノ
天下ノ形勢ヲ通報シ、僻陬不開ノ旧友等ヲシテ漸次開明
ノ域ニ進マシメ、方向ヲ誤マラシメサルヲ欲シ、前件ノ
次第指宿等ニ咄セシ処、皆トモ同意ナルニヨリ、程ナク
県地出発、同月十五日出京、警視庁四等巡查拜命仕候、
然ル処先般熊本・山口ノ乱ニ及ヒ、県地私学校党モ之レ
カ為メ動揺致シ、安穩ナラサルノ趣ヲ追々伝聞シ、亦タ
東京発ノ書翰等ハ皆開封シテ達セサルノ風聞喋々、因テ
書報ヲモ発セサリキ、是ニ於テ我カ故里ノ事ヲ思ヒ、先
キニ約セシ指宿等ヲ初メ旧友等彼ノ私学校党ノ暴威ニ懼
レ、彼レニ党シテ方向ヲ誤ルコトヲ憂慮シ、日夜寝食モ
安カラサル所、同十二月二十日頃園田長輝ニ面会セント
コロ同人ノ咄シニ、近頃鹿兒島県ノ形勢一層動揺スル趣

キ、巷説伝く就テハ親族朋友ノアルアリ、若シ方向ヲ誤リテ暴挙ニ党与スルアラハ遺憾ノ至リナリ、先ツ帰省シテ大義名分ノアル処ヲ示サンコトヲ決セリト語レリ、宿意固ヨリ企望スル処ナレハ、大ヒニ是レニ意ヲ同フス、然ル処十二月廿五日伊丹親恒私寓ニ来リ、今夕園田長輝ノ宅ニ集會シ、帰省願書等ノ事ヲ議スヘキ約束ニ付、共ニ右宅ヘ至ルヘシト申聞候ニ付、同日午後六時頃右宅ヲ訪ニ至レハ、末廣・中原其他数名集會致シ居レリ、其議スル処ハ鹿兒島県私学校党安穩ナラサル趣ニ付、親戚等カ方向ヲ誤ラサル様、共ニ帰省シテ懇ニ名義ノアル処ヲ説キ示スヘシ、若彼覚我レヲ不礼視スルモ決シテ抗セス、叮嚀反復我赤心ヲ彼レニ移シ、彼レヲシテ激動セシメサルヲ本旨トスヘシト相約シ、皆々退散セリ、而シテ私ニハ同廿六日兄病氣看病帰省ノ願書ヲ出セシニ、即日許可之レアリ、翌廿七日三菱飛脚船ネバタ号ニ乗船シ、横濱ヲ出帆シ、本年一月十一日ニ着県、直ニ蒲生郷へ帰宅候処、副戸長本司某来リ訪フ故ニ、帰省セシ実ヲ語り又タ県地ノ実形ヲ尋問スルニ、当郷区長邊見ナル者、私上京以來益々種々ノ口実ヲ設ケ、壮年輩ヲ彼レニ党セシメ、或ハ土国ト魯国ト葛藤ヲ生シ、終ニ兵端ヲ開キ、追々我日

本ニモ魯国ノ銳鋒波及スルノ模様アル由ニ聞及ヒタリ、故ニ朝令ヲ待テ人臣ノ分ヲ尽スハ此時ナルヘシ、然ルトキハ予シメ兵器等モ用意セスンハアルヘカラス、因テ郷内用金ヲ以テスナイトル銃八拾挺ヲ購求スヘシト懇ニ口説キケレトモ、戸長等ハ其私学校ノ為ニ銃器ヲ買ハシメンカ為メニ斯ク詐説ヲ設ケシモノナルヲ察シ、外患内訌ノ難ニ際シ身ヲ以テ国ニ報スルハ人臣ノ分ナリ、然レトモ私ニ兵器ヲ購求スルハ国法ノ宥サ、ル処ナリ、故ニ上令ヲ待タスシテ私ニ之ヲ買入レナハ、蒲生中一統不平ヲ生セントテ程ヨク之レニ応答セシニ、区長又曰ク、余カ言ヲ聞スハ県庁ノ指令ヲ受ケテ達スヘシト、是ニ於テ戸長等ハ、若シ庁ノ令ナリト再ヒ購求ヲ促ストキハ、之レニ答弁スルノ言ハナシトテ大ニ困却シ、致シ方ナクシテ居ルト話セシヲ聞キ、朝命ナクシテ銃器等ヲ買フヘキノ理アルヘカラス、当時銃器ノ売買ハ嚴ニ禁セラル、処ナレハ、仮令ヒ県庁ノ指令アルモ、上朝廷ノ指令ナクテハ決シテ買フヘカラスト答ヘシニ、本司等モ然ルヘシト共ニ屢々議シ、郷内積金ヲ猥ニ耗費スヘカラサルコトヲ約セリ、且ツ朋友親族ニ示スニ、勢ヒノ為メニ雷同セラレズ、屹立シテ以テ方向ヲ誤ルコトナキヲ以テシ、傍ラ彼

ノ党ノ動靜ニ注意致シ居ル処、二月二日加治木住伊丹親恒ヨリ、当郷私学校党百人余鹿兒島ニ至リ海陸軍ノ火藥庫ヲ毀テ、彈藥等數多奪ヒ取り当郷へ運送シ、各帯刀ニテ大ニ騒動シ、大事ニ及フヘキ形勢ヲ生セリト報シタリ、因テ即日家ヲ出テ加治木郷ニ行キ伊丹親恒・前田素志等ニ面會、私学校党已ニ陸海軍ノ戎器彈藥等ヲ掠奪シ、禁令ヲ犯シテ各帯刀携銃シ、実ニ容易ナラサル姿ニ立至レリ、早ク帰京シテ之レヲ報セスンハアルヘカラスト相談シ、伊丹等ハ四日発足、私ニハ四日ニ鹿兒島ニ至リ、猶實際ヲ見認メ明細事情ヲ探索シ、六日ニ発足ノ約束ニテ翌三日帰郷シ、四日早朝発足ノ仕度罷在候処、私学校党ノ者トモ十四五名帯刀ニテ、各棒ヲ携ヘ私宅ヘ乱入シ、一言モ無クシテ無理打擲シ直チニ捕縛シ、当郷ニアル警察分署ヘ拘引シ縁ノ柱ニ繫キ、暫時クシテ鹿兒島ニ送致セラル、其道中種々ノ惡口ヲ以テ散々罵リ、或ハ棒ヲ以テ猥リニ打擲シ、其殘酷云ヘカラス、同日午後第四時頃鹿兒島下町廣小路ニアル第一分署ニ到達シ、直チニ縁先ノ柱ニ繫ナカレタリ、其時該署ハ私学校党ノ屯集所トナリヨレリ、然リ而シテ後チ調所ニ引出シ調役云フ、其方等帰具致セシ趣詳カニ申立ヨト、依リテ私答フルニ、此

節帰省セシハ他ニアラス、県下ノ形勢不穩ニシテ、既ニ暴挙セントスルノ姿アリナド紘々ニ風評アルニヨリ、若シヤ親族朋友等方向ヲ誤シコトヲ憂ヒ、名義ノアル処ヲ講究シ、共ニ方向ヲ定メント、遙ニ帰省セシ実旨ヲ以テス、然ルニ又別ニ大事アル夫レヲ白状セヨト、且ツハ叱リ且ツハ撻チ大ニ拷問スレトモ素ヨリ別意ナキニヨリ、大事ノコト扨トハ全ク無之トノミ答フレハ、先ツ暫ク席ヲ下ケヨト又本ノ柱ニ繫カル、翌五日囚獄ニ幽セリ、同九日午後五時頃呼出シ來リ、県庁内ニアル警察課ニ列レ至リ、須臾ニシテ私ハ前田素志等ト四人一緒ニ白洲ニ引出シ、調役申聞ケ候ニハ、其方共ノ口供読聞スヘシ、併シ多人數ノコトニテ齟齬ノ嫌モアルベシ、夫レハ其儘承服セヨト云ツテ口供ヲ読ミ聞シニ、全ク偽作ノ口供ニシテ、就中西郷ヲ暗殺スル等ノコトアルヲ聞キ、思ヒ懸ケナキコトナレハ一同不服ノ廉ヲ申立タルニ、左右ヨリ頸ヲ押ヘ手ヲ取り、終ニ拇指ヲ連名ニ書タル口供ニ押シ付ケリ、多人數ニテ白洲ヨリ引下ケタリ、夫レヨリ又本ノ囚獄ニ下サレタリ、同廿六日県庁構内新檻倉ニ移サレ、只獄中ニ窘苦シ、世事ヲ聞得ルコトモ更ニナケレハ日々快々タリ、暴人ノ為メニハ死ハ素ヨリ脱レ難キ覺悟ナレ

トモ、此冤枉ヲ明ニセンコトヲ憾スルノミ、然ルニ豈凶
ン、三月十日勅使柳原公ノ命ニ依リ官軍ヘ引取ラレ、再
ヒ青天白日ヲ見ルコトヲ得タリ、同日金川丸ニ乗組ミ、
夫ヨリ長崎・大阪ヲ経テ三月廿二日着京、同廿八日前件ノ
次第御尋問ヲ蒙リ、御達ノ旨ニ遵ヒ前書ノ通り申上候、
右之通相違不申上候、以上、

鹿兒島県士族

明治十年第四月四日

松下兼清印

十年四月 廿八年三月

一〇一ノ四
〔卷〕第十三号

始末書

鹿兒島県士族

西 彦四郎

明治九年十二月初旬頃ヨリ追々鹿兒島県私学校党ノ勢焰
日ニ盛ンニシテ、外城士人ヲ鼓舞シ、多ク是ニ雷同スル
者アリテ、殆ト暴発セントスルノ景況アリト聞キ、慨歎
シテ謂ラク、我日本維新以來日尚淺シト雖トモ、開明日
ニ進ミ月ニ盛ンニシテ、実ニ聖運隆盛ノ秋ナリ、此時ニ
当リ該県果シテ此挙動アラハ、国家ノ一大事ナル而已ナ

ラス、終ニ親子兄弟間ニ干戈ヲ交ルノ域ニ至ン、傍觀坐
視スヘキニ非スト、於是土持ト帰省シテ、親戚友人等私
学校党ニ同盟セシアラハ、之レニ説クニ大義名分ノアル
処ヲ以テシテ方向ヲ謬ラサラシム可ト談セリ、是則チ私
ノ帰県セシ大趣意タル処ナリ、大山・猪鹿倉モ目論見同
シト聞キ、一日大山ニ土持ノ内ニ会シ、該事ヲ論セシニ
果シテ然リ、此時ニ当リ外ニ同志之者十余輩アリ、同月
廿六日ヲ期シ、下谷ノ川路利良ノ明屋ニ会シ談スルニ、
親戚友人等ニ説クニハ大義名分ヲ以テシ、常ニ穩和ヲ旨
トスヘシ、倘シ帰県ノ後校党暴発スルニ至ラハ長崎ニ馳
セ、或ハ熊本ニ出テ速ニ東京ニ電報ヲ成スヘキ等ノ議ヲ
決ス、是ヨリ先キ権大警部大山綱昌ヲ以テ、私等ノ内情
ヲ大警視ヘ告ケシニ、当日同氏ヲ以テ大警視ヨリ鹿略輕
卒ノ挙動等アリテ、国害ヲ醸成スルニ至リテハ、実ニ不
容易事ナルニ因リ、穩和ヲ專ラトスヘキ旨口達アリシ由
シヲ伝ヘラレタリ、於是峩出発等ノ日ヲ期シ、議終リテ
各々退散セリ、而シテ親看病ノ暇ヲ得テ同月廿八日当地
ヲ発シ、本年一月十一日夜鹿兒島ニ着シ、該地ノ模様ヲ
窺ヒシニ、勢ヒ稍靜謐ナルカ如シ、序下ニ逗留スル兩三日
トシテ加世田ニ帰り、該地ノ景況ヲ伺察セシニ麓辺ノ士

族六十名位私学校党ニ同盟シ、「スナイトル」銃數十挺ヲ区长ニ依頼シテ長崎辺ニ注文スル等ノ事アリテ、実ニ不容易形勢ナルニ因リ、親戚友人ニモ粗忽ニ我カ意ヲ述テハ、却テ激動セシムルノ恐れアルカ故、機会ヲ見合居タリシニ、豈計ンヤ二月四日午前頃、友人吉峯國之助来リテ私ヲ呼フ、私少シク不快ナリシ故、床ニ臥シナカラ答フルヤ否ヤ、二十人位帯刀シ棒ヲ携ヘ草鞋ヲ履キ、何者トモ分ラサル者一斉ニ室内ニ飛ヒ入り、警察課ヨリ御用ト呼リテ乱暴セシニ因リ、尋常ニ致サルヘシト云フモ終ラサルニ、早後口手ニ縛シ後ロヨリ押立、該地警察分署ヘ列レ行キ、暫時アリテ大山・猪鹿倉・本田等ヲ縛シ、當時柏田モ当地ニアリシヲ同ク縛シテ、同署ニ引キ来レリ、午後三四時頃序下下町廣小路ノ警察第一分署ヘ拘引セラレシニ、各郷同志ノモノモ数輩縛ニ就キ、該署内外ノ柱ニ繋レ居タリ、私モ同ク縁ノ柱ニ繋カル、該署ノ様子タルヤ宛モ兵營ノ如ク私学校党ト見ヘ、各帯刀シ手ニミミ棒ヲ携ヘ、脚半ヲ着ケ草鞋ヲ履キタルモノ數十名坐中ニ往来ス、然シテ調ヘ所ノ方ニハ拷問ノ音甚タシ、拷問ヲ受ケシ人ヲ見レハ頭部手足等ヨリ出血シテ、実ニ残酷暴戾ナル形状ナリ、私モ亦午前八時頃調所ニ引出サル、問

付人ハ何某タルヲ知ラス、汝ハ西カト問フ、然リト答フ、汝縛ニ就テ爰ニ来リシ所以ハ汝カ心中ニ有ラン、明白ニ申シ立ツ可シ、左無ハ無理ナル責ニ逢ハント云フ、對ヘテ曰ク、縛ニ就キシ所以ヲ知ラス、亦問フテ曰ク、汝此節帰省セシハ何ノ故ナルヤ、對ヘテ曰ク、親看病ノ為メナリ、曰ク否、然ラス打テト云フ声ノ下ヨリ、背ヨリ臂ニ懸ケ何処トナク打ツコト數十、又問フテ曰ク、汝東京ニ於テ何カ命セラレテ来リシ事アリ、此方ニ分リ居レリ、明白ニ申サスンハ打ツ可シト、對ヘテ曰ク、決シテ左様ノ事ナシ、然レトモ今般当県私学校勢ヒ盛ンニシテ、同郷ノ親戚友人等該校ニ同盟セントスル者多シト聞キ、土持・大山・猪鹿倉等ト申シ談シ、大義名分ノアル処ニ方向ヲ定メシムルコソ朋友ノ義務ナリ、傍觀ス可ニ非スト、終ニ親看病ニ托シ帰省セシナリ、決シテ何モ命ヲ受ケシコト更ニ之レナシ、又曰ク、汝ハ東京ニ於テ屢集會セシ事之レアル可シ、有ノ儘ニ申シ出ツ可シト、對ヘテ曰ク、決シテ左様ノ事ハ之レナク、土持ノ内ニ行キシノミ、又曰ク、汝必ス集會セシコトアル可シ、白状ス可シト棒ヲ以テ膝ヲ衝キシト雖トモ、決シテ左様ノコトナシト云フ、其時汝ハ一先下ケ置クニ因テ、能ク考ヘテ明白ニ申シ立

ツコシト云テ、調所ヨリ引出サレテ元ノ柱ニ繋カル、午後三四時頃ニ至リ、新地ノ三番囚獄へ投セラレタリ、同七日日八、鐘昼時分呼出ニ逢ヒテ、警察第一分署ニ列レ行カレ、暫時アリテ調所ニ引キ出サル、問付人兩名何某タルヲ知ラス、問テ曰ク、汝此節帰省セシハ何カ趣意アル可シ、有ノ儘ニ申シ立ツ可シト、對ヘテ曰ク、丁度先日申シ上ケシ通りニ相違ナクシテ、決シテ別ニ趣意アルコトニ非スト、過日述ヘシ趣キヲ申セシニ、一先ツ下カレノ令アリテ、表ノ柱ニ繋ル、暮ニ及ヒテ第四課へ廻サレ、午後十二時頃何事ナクシテ元ノ囚獄ニ下サル、同九日薄暮ヨリ同志ノ者ト一緒ニ、第四課へ引キ行キ一人宛呼ヒ出セシカ、終ニ私ハ柏田・前田・高橋・松下等ト五人白洲ニ呼ヒ出シ、兩名ニテ其方共ノ口供ヲ申シ渡ス、多人數ノコトナルニ因テ、齟齬スル廉モアルヘケレトモ、其通り承知シ拇印致スヘシトノ前言ニテ、偽口供ヲ讀ミ渡スヤ否ヤ銘々ノ手ヲ取りテ、無理ニ拇印ヲ成サシメ、直ニ引キ出シ一緒ニ元ノ囚獄ニ入レシナリ、同二十六日県庁内ニ俄ニ設ケシ仮檻倉へ移サル、三月十日檻倉ヨリ呼出サレ、知己ノ警視官等采リ居リシヲ見テ爽快ヲ覚フ、而シテ県庁門外ニ整列ノ官軍ニ護送セラレテ、海岸ニ出

テ該港碇泊ノ金川丸へ召シ乗セラレ、始メテ勅使ヨリ御受取相成リシヲ知ル、該港ニ碇泊スル二日、同十二日抜錨、長崎・神戸・大坂ヲ経テ、同二十二日東京ニ達シ、大審院ニ於テ寄留地ノ戸長係管被仰付、第二大区二小区櫻田本郷町五番地織茂利一郎方へ止宿、同三十日司法省内臨時裁判所へ御呼出ニ相成、是迄ノ始末御尋問ニ付、具サニ言上仕、尚始末書ヲ以テ可申上御達ニヨリ、此段申上候也、

右之通相違不申上候也、

明治十年四月四日

西 彦四郎拇印

一〇、一五
〔卷〕第拾四号

始末書

鹿児島県第六大区一小区

加世田郷士族

大山綱介

右同

猪鹿倉兼文

私共儀、明治七年ヨリ東京留学ノ大山ハ中江氏ノ仏學塾ニアリ、外務省通學生ナリ猪鹿倉ハ志藤氏ノ塾ニアリ罷在シ処、九年十一月ヨリ鹿児島県動搖ノ兆アリトノ

街説ヲ聞キ、且新聞紙上ニモ之ヲ見、頗ル憂慮セシ折、

一日十二月初旬日友人柏田ト共ニ芝ニ会ス、彼予等ニ語テ曰

ク、曩キニ福澤氏ノ門ニアリシ川島某予ニ一書ヲ郵送ス、

鹿兒島ノ景形府下ノ流言ノ如ク、外城士族モ陸続私学校

党ニ同盟セントスル勢ナリト、是ニ於テ予等慨歎シテ曰

ク、方今朝廷改政ノ際、不平ノ士及ヒ愚民ノ烽起スルア

リ、随テ国用日ニ乏キニ至ル、尔今鹿兒島県頑然暴挙ス

ルニ於テハ、政府ノ威力ヲ以テストモ、恐クハ驟カニ撲

滅シ難ルヘシ、然ルトキハ国愈疲弊シ救フヘカラサルニ

至ン、假令城下士ノミニシテ事ヲ挙ルモ人寡ク、力微ニ

シテ深ク憂フルニ足ラサルカ如シト雖トモ、聞クカ如ク

全外城士族ノ私校(マセ)ニ党スルニ至ラハ衆相倍蓰シ勢愈猖獗

ナラン、然レトモ我外城友人等ハ、戊辰軍功賞典ヲ初メ、

凡百ノ事彼レノ圧抑ヲ蒙リ、齊ク士族ニシテ同権ヲ得サ

ルヲ憤ル日久シ、曩キニ我輩同族ニシテ同権ヲ得サルハ、

畢竟不明不学ノ致ス処ナリ、故ニ今後宜ク文学ニ従事シ、

或ハ遊学シ、或ハ郷校ニ於テ勉学シ、各自ノ力ニ依テ憤

発勉勵、不羈独立ノ精神ヲ確守シ、務メテ城下士ノ羈束

ヲ脱シ、彼等ノ頤使ヲ受ケザルヲ要スルノ盟約モアリ、

且ツ去ル十月頃迄ハ屢消息ヲ通シ、曾テ其志ノ異ナルア

ルヲ見ス、然ルニ今日ニ至リ豹然其志操ヲ變スルノ理ナ

シ、然リト雖モ若シ此事アルニ於テ、私学校暴挙スルニ

至ラハ義私親ヲ顧ルヲ得ス、兄弟良朋ノ間ニシテ、刃ヲ

接セサルヲ得サルニ至ランモ未タ知ルヘカラス、如此不

義ノ域ニ陥ルヲ徒ラニ傍觀シ、一言ノ忠告モ為サ、ルハ

倫理友義ニ悖戾スト云フヘシ、然ラハ重責ノ光陰モ吝シ

ムヘキニ非ラス、須ク速ニ帰県忠告スルニ大義名分ノア

ル処ヲ以テシ、予等兄弟朋友ニ対スルノ義務ヲ尽スヘシ

ト論議シタレトモ、未タ帰県ノ義ハ確定セスシテ其日各

別レタリ、

大山申上ル、兩三日ヲ経テ友人田中直哉上京セント聞

キ、鹿兒島ノ実情ヲ彼レニ聞知セント欲シ、平田宗質・

宮内震志ト共ニ、本郷末廣直方ノ寓ニ田中ヲ訪ヒシニ、

猪鹿倉モ来ルニ逢ヒ、共ニ私学校党ノ勢日ニ熾盛ナル

ヲ歎シ、且ツ外城人ノ常操ナク、自ら卑屈ニ安スルヲ

或ハ笑ヒ或ハ憤リタレトモ、帰県ノ儀ハ未タ決定セサ

リケリ、然レトモ私ト平田ハ安樂兼道ノ招ニ応スル為

メ、午後彼ノ旅宿ニ赴キシニ、極脇盛苗及ヒ濱島猛ア

リ、我県ノコトヲ慨歎スルニ、彼等ノ論議モ私共ノ意

見ト稍符合シ、後土持・西等ト該事ヲ論セシニ、目論

更ニ異ルコトナシ、十二月廿一日頃ナリシカ、安樂ノ寓ニテ土持・平田・猪鹿倉・安樂等帰県ノ儀ヲ決ス、濱島氏ハ其翌日発途ノ賦ナリシヲ以テ、私ハ一翰ヲ彼ニ托シ、古郷ノ友人等ニ忠告セリ、其概略ニ聞ク、外城人勢ニ雷同サレ私学党ニ同盟スル者多シト、ナンゾ無氣力ノ卑屈人多キヤ、君等ニ於テハ確然常操ヲ守リ、前盟ヲ忘レズ独立サル、儀ハ疑ヲ容レサレトモ、念ノ為メ此書ヲ寄ス、不日土持モ帰県スヘシ、其時細事可申遣也、

同廿二日は非友人ト同ク帰省セント欲シ、親病氣トテ看護ノ為メ往来ヲ除キ、三十日間ノ暇ヲ外務旧権大丞小安氏ヘ歎願セシニ、幸ニ許可ヲ得初メテ帰県ヲ決ス、二十五日友人菅井・園田長輝ノ宅ニ相会セント申遣シタリ、其夕彼方ニ赴キシニ、

猪鹿倉申ス、田中上京シ、一日柏田ト共ニ私ノ塾ニ來ル、互ニ恙ナキヲ賀シ鹿兒島ノ形況等ヲ聞キ、頗ル憂悶ニ堪ヘサリキ、後日又末廣ノ宅ニ行キ、田中・大山等ト県下ノ形勢ヲ慨歎セリ、翌日大山來リ云フ、土持等ト安樂ノ宅ニ相会ヲ約セリト、爰ニ於テ安樂ノ宅ニ行キ、鹿兒島県ノ事ヲ談スルニ、各意見相符合セシニ

ヨリ終ニ帰県ニ決心ス、二十五日ニ至リ末廣ノ知ラセニヨリ柏田ト共ニ園田ノ宅ニ行シニ、

他日帰県ヲ約セシニ、友人ノ外ニ拾余名ノ警部巡查等モ來会ス、是ハ私他日論議ノ旨ヲ友人ヨリ友人ニ伝ヘ、同、意ニテ來会セル人ニテ園田ヲ初見ノ者多シ、其席ノ議ニ、今度帰県ノ上ハ粗忽ノ挙動ナキヲ第一トスヘシ、各郷々ニ於テ私学党ノ勢自ラ異ナルヘケレバ、説論ノ条目ハ預シメ申シ談シ難シ、唯心情ヲ友人等ヘ移サンノミト決論ス、猶明日川路氏ノ明屋敷閑静ノ地ナルニ依リ、彼方ニ出会セント云者アリキ、然レトモ予等論シテ曰ク、既ニ帰県説論ノ議モ決ス、明日予等再会スルヲ要セス、尤今夜警部連多シ、予輩彼等ニ籠絡サレシ如ク見ラレテハ、素志不相立ルカ如ク遺憾ノ極ナリトテ、断然出会ヲ辞シ、歸ル、廿七日鉄道ヨリ発京、横濱ニテ郵船ニ乘リ出帆、神戸へ着、大阪へ行キシニ同郷人ノ上京スルニ逢ヒ、初メテ我郷友人モ私学校ニ同盟セシヲ聞ケリ、十年一月九日頃カ大有丸へ乗込ミ該港出帆、同十二日午前一時頃鹿兒島へ着歸郷、直ニ加世田私学校ノ首ラシキ春成兼致方へ行キ、今般帰県ノ趣意ヲ具サニ陳シ、且ツ彼等常操ヲ翻シ入校セシ意尋ネシニ、春成少ク慙愧ノ色アツテ曰ク、旧約ヲ違ヘシハ申訳ナシト雖トモ、三十日前城下非常ノ

勢ニテ連モ屹立シカタク、私学校へ六十人ノ友輩ト同盟セリ、此上ハ退校ノ儀ハ至テ難カルヘシ、尤私学校ノ大趣意ニ上ヲ尊ヒ下ヲ憐ムハ学文ノ本旨、此儀ヲ守ルヘシ、国難ニ当テハ身命ヲ投ツヘシ等ノコトアレハ、該校モ惡シキ趣意ニテハアルマシク、仮令区々タル一郷独立ストモ、益城下ニ庄サル、ノ外ナシ、聞ク、方今ノ政事当ヲ失ス、九州一円ハ既ニ外国ニ質タリ杯、其他種々取ルニ足ラザル流言ヲ信シ、私学党ニ左袒ノ口氣多シ、私共駁シテ曰ク、君ノ言フ処浮説多シ、我等素ヨリ政府ヲ完全無欠ト云フニ非レトモ、凡ソ天下ニ全備ノ人ナキハ喋々ヲ待タス、然ルトキハ今日廟堂上ノ人ト雖トモ同シク無欠ノ人ニアラス、其処置ナレハ少々不当ノ政令アルモ自然止ムヲ得サル処ナリ、只我等ハ我県ト他県トノ政治ヲ比較シ、大ニ我県人民ノ酷政ニ苦シムヲ信シ、私学校へ依頼スヘカラサルヲ悟ル、私学校ノ勢ハ遙ニ県庁ノ上ニアルカ故ニ、日今見ル処ノ依然タル藩政ハ校党ノ欲スル処ナリ、如何トナレハ我県内ニテ彼等欲スル所為ニシテ、成ラサルハナケレハナリ、抑今日ノ日本ハ西郷氏等廟堂ヲ去ラレシ時ト同日ノ論ニ非ス、人民ハ大キニ自由ヲ得、文明ノ域ニ進マントス、然ルニ我県ノ封建政ヲ以テ全国

ニ及ントストモ、日本人民豈之レヲ肯シヤ、私学校ノ条目ハ正明正大ナリト雖、慢リニ党与ヲ囂集シ、国法ヲ犯シテ帯刀シ銃器ヲ携へ、平民ヲ苦シメ、實際ハ却テ上ヲ脅カシ下ヲ苦ルノ外ナラサレハ、大義名分ノ該校ニアルヲ知ラス、若シ西郷氏今政ヲ矯正セント欲セハ、宜シク叮嚀反覆忠諫アルヘシ、然レトモ今ノ形情ヲ以テ論スレハ到底暴挙アラシ、然ルトキハ直ニ賊名ヲトリ、嗾（俗習）・山口等ノ轍ヲ踏ムヘシ、若シ然ラス暴威ヲ以テ一時政權ヲ握ルモ後世之レヲ尊氏視スルニ外ナラス、勢ヒニ関セス大義ヲ唱へ志操ヲ變セス独立シテコソ勇マシケレ、然リ而シテ我郷独立シ、新ニ学校ヲ設立シ教育ヲ盛ニセハ、他郷モ其例ニ習フカモ難計、然ルトキハ私学校如何共スル能ハス、暴威自ラ殺ケ、上ハ国安ヲ害セス、下ハ倫理友義ヲ全シ、外城人モ権力ヲ得ルニ至シ、予等ノ見込ハ如此、君之レヲ理トセハ退校シテ共ニ尽力アランコトヲ望ム、若シ入校スヘキ理アラハ、予輩モ無論正理ニハ承服スヘシ、仮令之レヲ拒ムトモ友情ヲ以テ悟シ給エ、然レトモ未タ入校スヘキ大義名分ヲ見ス、君ノ進退如何ト問ヒシニ、理ニハ服シタレトモ衆ト盟約上ノコト故、後日返答スヘシト答ヘタリ、夫ヨリ帰家ス、其後他ノ友人

トノ談論モ、右春成ニ於ルト大同小異ニシテ、勢ニ雷同
サレ入校セシヲ悔ヒル者モアリキ、戸長等ハ陰ニ私学党
ヲ嫌忌スト雖トモ、区长ニ餅原アリ、副区长ニ西郷小平
アリ、私学校党ニ左袒愆愆スルニヨリ勢勝タス、戸長役
所及ヒ郷校ノ金ヲ以テ、スナイトル銃八拾挺ノ購求ヲ約
シタリシカ、予等戸長等ト論ヲ合セ其買入レヲ拒ミ、變
則学校ヲ設ケ、東京ヘ一ケ年ニ四人宛遊学セシムルノ儀
ヲ決セリ、終ニ六十人ノ内十九人ハ前非ヲ悔ヒ、断然退
校ニ決心ス、其頃友人予等ニ告クルニ、城下辺ニテハ先
頃ヨリ帰県ノ人ヲ、政府ノ聞者ナリト風聞スルヲ以テス、
予等笑テ曰ク、私学校ノ不正ナル、此ヲ以テ証トスヘシ、
若シ名分アラハ何ソ政府ノ聞ヲ惧ル、ニ足ラン、尤予等
ハ間牒(謬)ニ非ス、流言ニ関セス、一月三十一日來入(意)城下ヨリ七
ヨリ距ヨリ安樂兼道ヘ返金ノ事モアリ、且ツ該郷ノ形情ヲ見ニ
離同ニカ為メ該地ニ行キ、二月二日帰郷大山ハ城下加世田間屋、便船ノ通
事ヲ告テ帰レリ、此夕柏田盛文來リ、城下ニテ官庫ヲ開キ彈
菓ヲ奪掠セシ風聞アリト、通路ノ説ヲ予輩ニ告ケタレト
モ、予等之レヲ信セサリキ、二月三日右同意ノ十九人ハ
加世田私学校ニテ議論ノ上退校シ、猶翌日城下私学校ニ
行キ、温順ニ申シ断リ退校ノ賦ノ処、四日ハ大雨降り、

翌日ニ遷期ス、然レトモ退校ヲ孤疑スル四十一人ノ中ヨ
リ二人ハ雨ヲ冒シテ、伍列組直シノ為メ城下ヘ行キシト
聞リ、猪鹿倉ノ宅ニテ柏田ト三人ニテ變則学校ヲ設クル
ノ趣意及ヒ其規則ヲ草稿セシ折此草稿ヲ城下ニ放火ノ書ナリシト流
言セン由ヲ、金川丸ヘ乗込ノ上田尻
順ケリ、四拾壱人中ノ兩人春成・川越來ル、意ラク、彼等
ハ未タ他日論議ノ答ヘヲ為サス、定メテ夫レカ為メ來リ
シナラント、暫時アリテ使來テ彼ノ兩人ニ向テ曰ク、只
今区长餅原來リ、戸長役所ノ広間ニアリ、君等ニ急用ア
リト、直ニ兩人ハ使ト共ニ帰ル、是ニ於テ十九人内ノ猪
鹿倉ノ兄曰ク、区长來リシナラハ城下ニ行クニ及ハサル
ヘシ、二三友ト共ニ退校ノ儀ヲ彼ニ申シ聞届クヘシトテ
出テ行キタリ、予等ハ首ヲ延テ其結局ヲ聞ント待チ居タ
リシ、卒然門外ニ騷動ス、午後一時頃ナリ、予等愕然ト
驚キ思フニ、四十一人ト十九人ノ争ヒナラント、直ニ障
子ヲ明ケ縁先ニ出テシニ、豈凶ンヤ城下私学党ト見ヘシ
者帯刀草鞋ニテ各手ニ棒ヲ持チ、三十人計リ二三ノ巡查
ト闖入シ、

大山申上ル、縁ヨリ引キ落トシ、無理無慙ニ打カケ、
御嫌疑ノ訳アリ、御用ノ訳アリトテ、或ハ咽ヲ握ルモ
アリ、蹴リ斃サントスルモアリ、予彼等ニ向テ曰ク、

何方ヨリノ御嫌疑カ、又何レヨリノ御用ナルヤト問ヒ
 タレトモ更ニ聞入レス、直ニ首ヘ繩ヲカケ後手ニ堅縛
 ス此時頃ニ、
傷ケラル、坐中ニ踏上リ猪鹿倉ヲ縛セントスルヲ一目
 シ、且ツ彼母姉啼泣ノ声ヲ聞キナガラ門外ニ引出サレ、
 野町分署ニ至リシニ、既ニ西モ拘留サレ居タリ、予ニ
 三ノ校党ニ向テ曰ク、尋問ノ筋アラハ直ニ聞ント言ヒ
 シニ、汝剛毅ノ言ヲ吐ク勿レヤト云フヤ、直ニ堅ク東
 ネタル縛リ繩ヲ以テ、痛ク面部ヲ打擲セシ三度ニシテ、
 左鼻ニ傷ケ鼻血ヲ出ス、亡状陳シ難シ、暫クアリテ猪
 鹿倉・柏田・本田弘モ同シク拘引サル、猪鹿倉ノ面ヲ
 見シニ流血淋漓タリ、猪鹿倉申ス、無法ニ棒或ハ傘或
 ハ拳ヲ以テ散々ニ打擲スルニヨリ、不得止之レヲ支エ、
 何故ニ斯ク乱暴スルヤト問シニ、御用ナリト衆口罵詈
 嘩シ、御用ナラハ直チニ行クヘシト共ニ門外ニ出行ク
 コト数歩、又頭ヲ打擲スル二三、凡テ頭傷キ血流レテ
 止マス、直チニ拾余名ニテ予ヲ打握ヘ縛シ、野町加世苗
町名分署ニ拘引ス、大山・西・本田モ縛サレ居タリ、続テ
 柏田モ拘引サル、

計リニテ夜入ル、雨日路甚タ滑カナル上、坂多キ街道ナ
 レハ行歩大ヒニ艱メリ、手ノ自由ナラサルヨリ屢泥中ニ
 顛蹶ス、歩少シク遅ケレハ、タナ大ヲ撃ク繩ヲ鹿兒
島言ニタナト云フ引ケト命
 シ、數ル時ハ一疋ニ疋ト呼ヒシ等ノコト明状シカタシ、
 山中ノ茶屋ニ小休シ蕎麦一椀ヲ与ヘ、草鞋ヲ踏ミカエサ
 セタリ、辛シテ谷山ニ下リシニ、護衛人ハ民屋ノ側ニテ
 桑ノ火キ燵ヲトル、爰ニテ来入安樂（音）ノ縛サレ過ルヲ見ル、
 五日午前三時頃カ廣小路第一分署ヘ拘引サレシカ、屋内
 恰モ兵營ノ如ク、校党帯刀銃器ヲ持チ、各三尺余ノユス
 木名ヲ携ヘ脚半草鞋ニテ畳上ニ踏上リ雑沓ス、後ロ口ノ方
 ニハ拷問ノ声甚タシク耳底ニ徹セリ、程ナク夜明ケシニ、
 曩キニ約束帰巢セシ者ノ過半ハ爰ニ拘引サレ居タリ、各
 拷問ヲ受ケテ又柱ニ繫カル、ヲ見レハ、或ハ頭ヨリ流血
 スルモアリ、手足ノ先キヨリ血ノ滴ル、モアリ、

大山申ス、午前八時頃血ニ染ミタル板間ニ引キ出サレ
 シニ、上壇ニ三人アリ、其後ロニハ私学校党救拾人列
 ヲナシ居タリ、啖人中山ト申人
ト聞ケリ予ニ向テ曰ク、汝東京ニテ
 何ヲナセシヤ、書生ヲ、何年ナルヤ、殆ト三年、如此
 長ク書生ヲスルモノデハナイ、何故ニ帰巢セシヤ明白
 ニ可申ト、答テ曰ク、在京中鹿兒島不穩トキ、居タリ

シニ、柏田ノ友人其レヲ鞞スル有テ、弥其然ルヲ知り、東京ニ在テハ不安心、帰県可然ト、五六ノ友人ト談シタリ、何故不安心ナルヤト、答ヘテ曰ク、鹿兒島ハ生国ニテ父母兄弟ノアル処ナレハ、穩ナラスト聞テ不安心ナリト、勿論ノコト余計ナコトヲ云フ勿レ、可打ノ令アルヤ直ニ四五人ニテ、一時ニ譬ヨリ背部ニ懸ケテ打ツコト甚シ、後チ止メ、下ケノ令ニテ分署前面ノ日覆柱ニ繫キ、午後四時頃新地ノ四番囚獄へ安樂・柏田ト共ニ幽セラル、六日午後予ヲ又第一分署へ引出ス、糺問人ハ前日ト同人、彼曰ク、汝昨日ハ種々ト利功^(功)ノ申シ分ヲ成セリ、然レトモ外ノ者共ハ明カニ白状セリ、汝モ明瞭ニ白セ、答ヘテ曰ク、今更包蔵スル訳ハ毫モ無之ト、東京ニテ約束ノコトヨリ帰郷後ノコトマテ申シ述シニ、不届ナ、打テノ令デ校覚交ル々我レニ一棒ト競ヒ来テ打擲スル甚タシ、止メト令シテ又曰ク、昨日汝ハ五六ノ友人ト帰県ヲ約束セリト申タレトモ、同類ノ白スニ此ノ人アリ、然ラスヤ、答ヘテ曰ク、然リ、又曰ク、汝ハ蔵シタ、可打ト令シ暫ク打タシメ後止ム、其時予曰ク、私ノ申立ヲ信用ナキナラハ、希クハ加世田私学校覚ヲ呼テ之レニ問エ、帰県後二十余日

間、彼等ニ心情ヲ明カセリ、余計ナコトヲ申スナ、下カレト令ス、然レトモ我急ニ起ツコト能ハサリシニ、又引キ落トセト令ス、縄取役手ヲ添エ予ヲ起シメ、署ノ末ノ間ニ繫キ置キ、夜県庁部内第四課ノ白洲へ呼出シ糺問稍前日ニ同シ、後又入牢セラル、八日ノ夜^{ヨク覚}又第四課へ呼出ス、糺問人曰ク、汝ノ口供ヲ読ミ聞カス、連名ノコトニテ齟齬スル廉モアルベケレトモ、其レハ承知セネバナラス、耳ヲ傾ケ聞キ居タリシニ、説方甚タ不明ナリシト雖トモ、川路ノ内命ヲ受ケ、西郷ヲ暗殺シ、私学党ヲ鑿スル等ノコトヲ慥カニ聞キシ故、愕然ト驚キ意ラク、是等ノコトハ鞞問モ受ケス申シモセサルコト、然ルニ如斯偽口供ヲ以テストハ、予ヲ殺スノ企ナラント激然トシテ、口供大ヒニ齟齬ス、閣下知ル如ク、其ノコトハ糺問モ不受、勿論申シ上モセヌコトユエ承服シカタシト云ヒシニ、側ニ居タル三人暴ニ手ヲ押ヘ咽ヲ握リ、印肉ヲ指ニ付ケ強テ拇印ヲナサシメントス、此時予ハ縛サレ居タルノミナラス、手足ノ痛ミアルヲ以テ屈伸自由ナラサリシト雖トモ、之レヲ拒メリ、然レトモ力不足残念ナル哉拇印ヲサセラレ、下ケノ令ト共ニ庭中ニ引キ出サレタリ、直ニ殺サレン

カト思ヒシニ、豈計ンヤ復入獄セラル、翌日ハ大陰曆十二月二十七日ニテ、旧藩政ノ断首日ニ当ルヲ以テ、慘然トシテ黎明ヲ待チ居リシニ、猶モ殺サレス、因テ風聞ノ如ク出軍ノ血祭リタラント考ヘ、尔来死ヲ旦夕二期シ居リシニ、四五日経テ校党獄ニ交番セサルヲ以テ出軍アリシコトヲ知レリ、此ニ於テ考フルニ、戦端ヲ開ク不日ニアルヘシ、私学党不利ノ日カ或ハ官軍艦前ノ浜ニ入ルノ日ニハ殺サルヘシト、猶モ三四日ヲ過キテ新タニ縛ニ就キ入獄セシ者アリ、其時予等ノ偽口供ヲ名分トシ出軍セシヲ初メテ聞キ、或ハ驚キ或ハ怪シメリ、又風説アリテ曰ク、廟堂二分シ巡查ハ各辞表ヲ出シ、朝廷私学党ヲ制スルノ力ナク、既ニ西郷ハ戦ハスシテ熊本ヲ過キシト、予慨歎シテ曰ク、嗚呼廟堂ナンソ人面獸心ノ人ニ富ルヤ、彼等偽口供ヲ名分トシ、出テ政權ヲ取ラハ到底予等ニ生路ナシ、如何トナレハ若シ予等ヲ免ルサハ冤ヲ訴ヘ、彼等天下ニ信ヲ失フノ恐レアルヘシ、予末タ川路氏ヲ一見セシコトスラナキニ、彼ノ内命ヲ受ケ一身ヲ挺チ、不正ノ刺客タル卑屈人ノ冤ヲ蒙ル残念サヨ、父母是等ノコトヲ聞カハ予ヲ不孝子視セン、嗚呼ナンノ罪アリテ天予等ノ良民ヲ害

スルヤ、只冤罪ノ後世ニ霽ルアルヲ待ノ外ナシト切齒セシ数日、二月廿六日県庁内ノ新築仮檻倉ヘ移ツサル、八疊敷ニ七人ナリ安樂・柏田・前田・高、橋野村・曾山崎照天、初テ盜賊ト齡セサルヲ以テ稍快ヲ覺フ、三月十日朝兵隊行軍ノ喇叭ヲ聞キ、七人歎シテ曰ク、国道ナク予等ノ命將サニ尽ントス、此兵ハ他日風聞セシ如ク、政府西郷ニ抗セス、大兵ヲ要セサリシヲ以テ、小倉辺ヨリ帰リシナラント云中ニ、獄番來テ予等ノ所持品ヲ小簿ニ記載ス、予等益前議ヲ疑ハス、満室詩歌ヲ吟シ命ヲ待チシニ、午後一時頃吏数人來リ、予等ヲ呼出ス、県庁門ヲ出テシニ、豈凶ンヤ鎮台巡查兵ノ堂々整列シタルヲ見、初メテ未タ皇威ノ隆ンナルヲ悟リ、不覺感涙ヲ流シ、官軍ノ擁護ヲ受ケ再生ノ恩ヲ辱シ、金川丸へ乗り込シ処、西郷以下暴動ニ付キ、勅使柳原公御下向、予等ヲ御受取ノ旨ヲ拝聴セリ、猪鹿倉申ス、五時頃紅席ニ引出シ、先ツ東京ニアリシ時ノ履歴ヲ聞ク、予答フルニ芝新選座(總)近藤氏ニ遊学セシヲ以テス、又問フ、汝今般帰県セシ旨意ハ何等ノ訳ナルヤト、答テ曰ク、東京ニ在テ鹿兒島ノ安穩ナラサルヲ聞キ、若シ親戚友人等ト方向ヲ異ニシ、其際ニ当

テ事起ルトキハ、互ニ涙ヲ振りテ干戈ヲ交ヘサルヲ得サルノ域ニ至ルモ計ル可ラス、故ニ共ニ大義名分ノアル処ニ身ヲ処センコトヲ談論スル為メナリシト、又問フ、其趣意ニテ帰県セシニ非ルヘシ、汝等東京ニ於テ何か大事ヲ盟約シテ帰リシナラン、故ニ捕縛シ鞫問ス、其事ヲ白状スヘシト、然レトモ素ヨリ無根ノ誣言ナレハ、答フルニ敢テ其儀ナキヲ以テスルヤ否、大ヒニ叱咤シ打テ今ト云ヤ、直ニ左右ヨリ三尺有余ノ棒ニテ臂或ハ手指ヲ打ツ、其数ヲ知ラス、校覚拙者ニ一打チト云テ交ル々打ツアリ、止メテ後、下カレノ令ニ応シ守卒来リ、手添ヘテ立タシメ引出シ柱ニ繋ク、同日午前十時ノ頃又糺席ニ廻ハス、席上血充チテ恰モ人ヲ殺害セシ跡ノ如シ、爰ニ坐セシメテ云フ、汝前キニ白状セス強情ヲ張ルト雖トモ、同類已テニ白状セリ、早速明白ニ申セヨト、答テ云フ、共ニ帰県セシ友人モ多シ、今更何ヲカ包藏セン、然レトモ帰県ノ大主意ハ先キニ申シ出テシ所ト異ナルナシト、猶園田ノ宅ニ会セシコトヲ詳カニ陳述セリ、又問フ、汝鹿兒島ノ事情ヲ探索シテ東京ニ報知センカ為メニ帰リシ由、此事ヲ汝ノ友人既ニ白状セリ、相違ナカル可ト、之レニ答フルニ無根

ノ忘説ナルヲ以テス、爰ニ於テ又拷問ニ逢フ、止メト令シテ云フ、汝如何ニ包藏ストモ友人已ニ白状セリ、能ク勘考セヨ、下レノ令アリ守卒直ニ来リ引出シテ柱ニ繋ク、同日午後一時ノ頃病院ヨリ医師黒木某外ニ一名来テ傷者ヲ療ス、私モ亦頭及ヒ死傷ノ治療ヲ受ク、後第一分署ヨリ友人二三名ト共ニ引立、海浜ノ方ニ行クヲ以テ暴殺スルナラント思ヒシニ、豈料ンヤ囚獄所ノ第六番ニ入牢セラレタリ、此夕又第一分署ニ送致ス、至レハ末弘・田中等モアリキ、翌六日午後五時頃、田中等ト共ニ県庁内ノ第四課ニ送致シ、六時頃白洲ニ引出シテ云フ、汝前日種々申立シト雖トモ、友人ハ鹿兒城ノ事情ヲ探索シテ東京ニ報スル為メニ帰県セシト白状セリ、汝モ亦白状セヨト、答テ曰ク、前日已テニ申述タル通ノコトナリ、此場ニ至リ何ヲカ藏サント、彼大ヒニ叱シテ曰ク、汝不屈ナ強情ヲ張ル、汝一人白状セサルノ訊ナシ、打テミト云フヤ直ニ兩名ニテ左右ヨリ打ツ此棒ハ皮ニテ包ミテ者ト覺フ、数拾余ニシテ止メ、相違ナカル可シト云フ、答ヘテ曰ク、警部等ニ在テハ事情ヲ報知スル素ヨリ職務ナルヘケレトモ、私ニ於テハ決シテ其事ナシ、然レトモ共ニ帰県セシ近郷ノ友人トハ互ニ声息

ヲ通シテ、在郷ノ友人ニ談論弁解スルニ、名分ノアル
 処ヲ以テスヘキノ約ヲナシタリト、是レヨリ引出シテ
 又人牢セシム、八日欵ノ夕ニ至リ、私共十八名ヲ引出
 シ第四課ニ送致シ白洲ニ廻ス、前禮ニ三名アリ、吾人
 云ク、汝ノ口供ヲ詭聞ス、併シ連名ノコトニテ、申立
 テノ廉ト少シク齟齬スト雖トモ承知スヘシト、即チ詭
 メリ、耳ヲ傾ケ是ヲ聞クニ甚タ明瞭ナラスト雖トモ、
 西郷陸軍大將ヲ暗殺シ、私学校人員ヲ擧スル等、川路
 利良ノ内命ヲ受ケ帰県シ云々ノ語アルニヨリ、只今聞
 ク処ノ口供一度モ尋問モナク、申立モセサルコトニテ、
 此ノ如キ偽口供ハ不承知ノ旨ヲ申立ルト雖トモ、四五
 名前後ヨリ手ヲ振り或ハ腰ヲ抱キ、切齒シテ争フト雖
 トモ羈束ノ身ニシテ痛所多ク、如何共スル能ハス、終
 ニ拇印ヲサセラレタリ、下カレノ令ニ応シ突出タス、
 扣所ニ至レハ各一線ノ繩ニ連綴シ、又人牢ス、同室ニ
 中原・高崎・伊丹等アリ、二月十七日ノ夜ニ至リ、陸
 軍大尉川上親賢同獄ニ繋カル、彼レ曰ク、予ハ財部・
 樋渡ト共ニ東京ヲ発シ神戸ニ来リ、彈藥奪掠ノコトヲ
 初メテ聞知シ、夫レヨリ鹿兒島ニ帰リシニ三人共ニ拘
 引サレ、残酷ナル拷問ニ逢ヘリ、而シテ西郷ハ君等ノ

口供ヲ持シ、政府ニ尋問ノ為メ出発シ、大山県令ヨリ
 ハ各鎮台府県ニ其口供ヲ廻送セリ、故ニ西郷ハ無難ニ
 シテ已ニ熊本ヲ過キシナラン、政府ハ決テ抗スルノ勢
 ナシトノ街説ナリト、是レヲ聞キ始メテ前キニ我輩ヲ
 強ヒテ刺客トシ、無根ノ口供ヲ羅織シ、無理ニ拇印ヲ
 ナサシメシハ名ヲ借ルノ姦計ナリシヲ悟リ、憂憤置ケ
 コトナシ、川上ニ語テ曰ク、嗚呼予等ノ偽口供ヲ名ト
 シ、政府ニ尋問トハ何等ノコトソ、私学校ハ予輩ヲ縛
 セサル前已ニ彈藥ヲ奪掠シ、刀ヲ帯ヒ銃ヲ携ヘ、國ノ
 大典ヲ犯シ反跡既ニ顯然タリ、然ルヲ政府之レヲ討ス
 ル能ハサルトハ怯モ亦甚シ、謂ラク、此説ヲシテ果シ
 テ信ナラシメ、西郷政權ヲ掌握セハ、予輩ノ冤罪又齊
 ル、期ナシ、実ニ川路ノ内命ヲ受ケ卑劣ノ所為ニ及ヒ
 シト、世人ノ譏ヲ受ケルハ必セリ、人多キトキハ天ニ
 勝ツノ語果シテ信ナリ、然レトモ後日又天人ニ勝ツノ
 期ナキニ非サルヘシト、爰ニ安シテ疑ハス、二月二十
 六日ニ至リ、県庁郭内ノ仮檻倉ニ移サレ、常ニ切齒冤
 ヲ天ニ訴ヘシノミ、三月十日午後一時頃、曩キニ共ニ
 帰県シタル松山新吾等官吏数名来リ、私共ヲ呼出シ、
 県庁門外ニ至レハ鎮台巡查兵正々堂々ト整列ス、爰ニ

於テ皇恩ノ厚キヲ感シ涕淚ヲ催ス、直ニ金川丸ニ乗組、
初メテ勅使柳原公ノ命ヲ以テ私共ヲ官軍ニ御請取り相
成リタル旨ヲ聞ク、

右之通り相違不申上候、

明治十年四月四日

大山綱介 拇印

猪鹿倉兼文 拇印

「〇」ノ一六
〔朱〕「第十五号」

始末書

東京府士族

菅井誠美

鹿兒島県下私学校党頻リニ党与ヲ募リ、銃器彈藥等ノ
用ヲ急ニストハ追々巷説モ有之、然ルニ旧県谷山郷ノ
友人原地兼義ハナリ警部補嘗テ親病氣ニテ帰県致シ居、十二
月二十日頃帰京ニ付、県地ノ事情等逐一尋問スルニ、
長州前原党ノ暴拳鹿兒島ニ伝聞セシヨリ、私学校党俄
ニ動揺シ、或ハ銃器ヲ携ヘ或ハ刀剣ヲ帯ヒテ横行スル
者アリ、人心洶々市街騒然不穩ノ形勢、又此ノ機ニ乘
リシ私学校党百方手ヲ伸ハシ、外城士族藤摩ノ方言ニテ
田舎武士ヲ云フノ
入校ヲ頻リニ勸メ、僕古郷谷山郷ノ如キモ松田為徳ヲ

巨魁トシ、既ニ四五拾名程モ入校シ、益古為徳等煽動
シテ曰ケ、事成ルノ後ハ相応ノ賞典禄ヲ賜ルトカ、却
テ党与セサル者ハ士族ヲ剝キ平民ニ墜ストカ、甚シキ
ニ至テハ出軍ノ血案ニ致ストカノ暴言、或ハ甘言ヲ示
シ、之レカ為メ恐怖シテ党与スル者多キニ至ルトノ巷
説專ラ有之トノコト、殊ニ僕親戚ノ者最早四五名入校
セリトノ談話モ略ホ承リ、実以テ遺憾憂懣ニ堪ヘサル
折柄、十二月二十三日頃友人平田宗實醫生ニテ當
地ニ在ル来リ語ル
ニ、頃日県地不穩ニ付、親戚友人等方向ニ迷ヒ、追々
私校ニ党与スル哉ノ趣ニ依リ、友人大山綱介・猪鹿倉
兼文醫生、其他警部末弘直方・土持高・安樂兼道・松山
信吾其餘數輩ト議シ、暫時帰県致シ古郷友人等ニ懇々
上国ノ事情ヲ相語り、親シク大義名分ヲ相論シ度ト申
聞クルニ付、僕ノ宿志モ此ニ在リ、即チ応シテ曰ク、
縦令ヒ我輩ノ説ヲ不容トモ、旧友ノ信誼モ相貫キ申ス
ヘシト、同廿六日中警部園田長輝旅宿ニ会八名末弘・園田・
山崎・高崎・菅井・通脇・西・松下・伊丹・猪ヶ倉・大山・平田・柏田・野間
口・松山・病氣ニテ会セズ・前田・田中・高橋・此後加ルル・松山・私学校党等・藥業
ヲ盜モシ由、此会タルヤ各自見込ヲ談論シ、帰県ノ上ハ
説クニ大義名分ヲ主トシ、万一私学校党暴発ニ及ハ、之
レヲ避ケシメ、官兵ノ来ルヲ待チ朝命ヲ仰クニ如カス

ト決セリ、且ツ多人數帰省ニ付テハ、此折柄許可ヲ得ル能ハサルヲ以テ、権大警部大山綱昌ニ就キ帰省ノ願書等ヲ相托シ、内情ヲ長官ヘ開申ス、而シテ廿六日ノ夜下谷龍泉町川路大警視旧宅ヘ会シ、大山ノ報待ツ警生カラス此会ニ預、暮方大山参リ、大警視ノ口達ナリ、帰省ノ儀差支無シ、然リト雖トモ帰省ノ上ハ至極温和ヲ旨トシ、私学校党ヲシテ決シテ激怒致サシメサル様勸謹致シ、疾ク帰京アルヘシト云フヲ一同承諾シ、最モ路費用トシテ月給ノ前借願出置キシニ、大山持参セルヲ請取り、翌廿七日午後一時頃当地出発実光ノ家屬ヲ引、連レテ帰省ス、飛脚船ネバタ号ヨリ同五時頃横濱ヨリ出帆、同二十九日神戸へ着港、直ニ上陸、海岸通り中井屋ニ宿ス、県地ヘノ船ヲ問フニ、今四五日ヲ經過スレハ琉球船大有丸大坂ヨリ県地ヘ出帆スト聞キ、同一月三日此間如、ヲ遊覽ス、大坂ヘ到リ、土佐堀虎屋ヘ宿ス、此ニ留連スルコト三日、同七日乗船スト雖トモ洋中風波起ルヲ以テ、天保山沖ニ碇泊、同九日出帆、海上無恙同十二日鹿兒島前ノ浜ヘ達ス、上陸、古郷谷山郷実父佐藤夢介方へ着ス、此日親戚長野祐通ヲ始メ數輩来訪ス私校ヘ遣リ、私者不來、酒杯ヲ汲ミ東京ノ事情杯雜談セシノミニテ、各夜ヲ込メテ帰宅セリ、同十

三日長野祐通・堀興憲・佐藤清操等来リ語シテ曰、私校党ノ者共頃日処々ニ於テ盛ニ狙撃ヲ為シ、剩ヘ戸長役所ノ郷用金ヲ以テ、私校用ノ銃器等ヲ數多買入レ、其他上福本村百姓共沸騰セシ事件杯申聞ケ、頻リニ歎息セリ、是ヨリサキ各々ノ区長及ヒ副区長ノ任ハ、尽ク旧城下私校ヨリ派出セリ、谷山郷ノ区長ハ伊藤祐高、副ハ隈元某ナリ、此者共任セシヨリ只管私校ヲ盛ニスルノ意アツテ、人民ニ利アラス、數々戸長、長野祐通・吉井友輔・伊地知季治・平田宗城等ヲ説クニ入校センコトヲ以テス、遂ニ義合セス、事公平ニ出サルヲ以テ、長野・吉井・伊地知・平田等退職シタリトノ事、是ニ於テ本田親男・平井政拳・佐藤幸内等戸長ノ命ヲ奉ス此ハ伊東等、ノ攘ナリ、而シテ松田爲徳・本田親男等百方奸策ヲ廻シ、遠近ニ住居スル無智文盲ノ士族等ヲ凡ソ百二十三程モ募リ、既ニ私校ヘ名簿ヲ差出シタルヨシ、然レトモ抑モ麓ニ住スル壯士輩此ハ旧常備兵ニテ上等ナル者ヲ云フ、凡ソ三十名余ハ確乎トシテ不動此ハ長野・堀・平田、等ノ尽力多キニ肩ル、依テ長野・堀・平田・平井・竹下・伊集院・吉井・大脇等ノ數輩ト追々処々ニ会シ、議スルニ大義名分ヲ以テシ、必ラス方向ヲ誤マラサル様、迭ニ忠告セリ、又私校党ノ松田爲徳・佐藤幸内・

平井政義^(マ)・松田操介・山下精五等モ両三度面会シ、上
國ノ事情モ移シ、數々名義ヲ談論スルト雖トモ、彼レ
等ハ一向ニ西郷・桐野等ノ説ヲ妄信シ、朝廷役員ヲ誹
謗スルノミナラス、一以テ取ルニ足ラサル浮説ヲ主張
シ、却テ嘲弄スルノ口供等不勲、到底僕ノ説容レサル
ヲ以テ、此後ハ人々ノ見込通り尽スニ如カスト別レタ
リ、十二月廿五日頃伊丹親恒・前田素心^(志)・松下兼清來
リ、不日帰京ノ旨ヲ告ク、翌日俱ニ喜入郷安樂兼道方
ヘ同行ス、此行タルヤ喜人・加世田郷ノ形況ヲ尋聞セ
ンカ為メナリ、其夜一泊翌日俱ニ帰り、谷山ニ於テ別
レ去ル、同ク二月二日早朝友人太坪信吾馳セ來リ、昨夜
私学校連海軍ノ彈藥ヲ掠奪シタルコトヲ告ク、然レト
モ何レノ庫ヨリ盜ミ何レヘ持運ヒタルヲ聞カサレハ、
直ニ城下ニ至リ探偵スルニ略々分り、不日帰京ニ決意
シ、出帆船ヲ聞合スルニ已ニ本日出帆ノ船アリ、又三
四日ヲ過レハ安寧丸出帆スト聞キ、其レヨリ兩人裁判
所十四等出仕小河重任ノ寓居ニ立寄りシニ、今朝僕迎
ヒニ出シ置キタリトノ事、是レ他ニ非ス、昨夜海軍彈
藥ヲ盜ミ事件ニ付、水尾検事ヨリ内談アリトノ事ニ付、
小河ト同行、到レハ留主ナルヲ以テ、小河ノ宅ヘ帰り、

午後第九時頃去リ、帰途武ノ橋ニ至レハ、私校連ト見
受ク壯士輩六七十名計リ、名々彈藥箱ヲ負ヒ早々御船
手ノ方ニ運搬ス、僕追跡スルコト凡ソ二町計リ、然ル
ニ路傍ニ壱人アリ、突然出來リ僕ノ行ク先ヲ問フ、僕
左ヲ指シ用向アリト云テ帰途ニ付テ、翌三日早朝家兄
ノ宅ヘ平田宗質ヲ招キシニ、幸ヒ長野・堀其他三四名
來リシニ、昨夜目撃セシコト杯逐一相語ルニ、平田曰
ク、暴拳近キニアラン、疾ク帰京シテ事実ヲ報セヨト、
又曰ク、我輩ハ跡ニ留リ可成ハ逃避シ、止ヲ得サレハ
此輩ト進退ヲ共ニシ、唯死アルノミト云フ僕、不日出
京ト決シテ別レタリ、同ク四日午前第二時頃臥シ居シ
ニ、隣家松田爲徳來テ戸外ヨリ僕ノ名ヲ呼フ、起出テ
内ヘト云フ、坐シタリシニ松田平七座敷ヘ來リ、相互
ニ挨拶^(秘)ヲナシ居リシニ、突然四方ヨリ帶刀セシ者十八
九名、フスマヲ蹴^(マ)迎シ無言ニテ飛來リ、棒ヲ以テ撃モ
アリ、或ハ指ヲ以テ眼ヲクジルモアリ、其内壱人ト組
ンテ座中ヘ臥シタリ、終ニ両手ヲ背後ニ痛ク縛シタル
ヤ否ヤ、壱人刀ヲ拔テ斬ントス、其ヨリ庭ニ引出シ罵
テ曰ク、其方ノ党類中原尚雄ハ昨日捕縛シ事白状セリ
ト云フ、僕笑テ不對シテ老父ヲ呼ヘトモ不答、故ニ御

心配成サルナト云フニ、賊曰ク、何ニ不屈者ト後ヨリ
 棒ニテ突き、其儘雨ヲ冒シテ戸長役処ヘ連行ク此時久留
 来ル、板敷ニ引据ヘ巨魁ト見ヘシ者戸長ニ伺テ曰ク、

此者共西郷大将ヲ暗殺ノ為東京ヨリ来リシコト発覚シ
 テ縛シタリ、依テ此旨管下ノ人民ヘ示サルヘシト云フ

此者武郷兵衛ナリ、僕意外
 ナル言ヲ聞テ始テ驚愕セリ、其ヨリ城下ヘ引連レ、途中廿四五

名ニテ前後左右ヲ護衛ス、最モ縛極メテ強ケレハ步行
 意ニ任セス、然ルヲ後ヨリ急ケト棒ニテ突き、急ケハ

又前者急クナト突止メ、悪路少ク避クレハ傍ヨリ棒ヲ
 挙テ打擲シ、其慘酷切齒ニ堪ヘサリキ、凡ソ二里半余

ノ離程ナレハ、明方ニ城下廣小路ナル警察一分署ヘ達
 シ、縁ノ柱ニ繫キタリ、而シテ久留景介ヲ引出シ嚴ク

拷問スル声聞ヘケルニ、僕曰ク、久留ノ身上ニ付陳シ
 度コトアリト述レハ、程ナク僕ヲ白洲ヘ引出シタリ、

此時調者三人、老入ハ宮内俊助ナリ、僕曰ク、先刻ヨ
 リ久留ヲ敲シク御調ニ相成ル様子ナリ、該人ノ帰県セ

シ件ハ拙者尽ク承知セリ、先キニ巡查ヲ勤メ居甚タ不
 品行ノミナラス、加フルニ現今病体ナリ、故ニ実父某

病氣ノ奥印ヲ戸長ニ願ヒ帰県ヲ催シタル者ニテ、決シ
 テ外ニ子細ナキ者ナリ、此事戸長共ニ御聞取アレハ明

白ナリト云、調者曰ク、然レハ汝等カ謀リシ事ヲ白状
 セヨト云フ、答ヘテ曰ク、僕旧冬前原ノ暴発ニ際シ、

越後表ヘ出張ノ命ヲ奉シ、同ク十二月上旬帰京ノ処、
 鹿兒島県動搖ノ巷説ノ紛々、西郷氏無名ノ師ヲ欲セス

百方説諭在セラル、ト聞ク、然レハ無名ノ師ヲ起ス人
 ニ非ラスト信シ居リタリ、而シテ十二月二十四日友人

平田宗質參リ、近日帰県致、親戚友人等ニ大義名分ヲ
 親シク相諭シ度トノ事故、僕ノ素志モ是ニ在リ、即チ

之レニ応シ、同シク廿六日中警部園田長輝宅ニ会シ、
 帰県ノ上大義名分ヲ主トシ各友ヲ諭スノ説言ヲ相送ニ

議シタリ、是レ全ク私事ナリ、而シテ時節柄帰県ノ願
 書ヲ数名差出シ候テモ、許可ヲ得ル能ハサルニ依リ、

権大警部大山綱昌ニ就キ此議ヲ長官ヘ開申シ、翌廿六
 日大警視川路氏ノ旧宅明家ヲ留守人ヘ借受ケ、大山ノ

報ヲ待ツ、暮方大山来リ大警視ノ口達ナリト云フ、内
 情ノ趣委細承知セリ、帰省ノ儀聊カ差支無之、雖然各

帰県中ハ温和ヲ旨トシ、必ス私学校党ノ激怒セサル様
 謹ム可シトノ事ヲ懇々承知致シ、一月十二日帰着シタ

リ、帰県ノ後ハ親戚友人等ト大義名分ヲ數々談論シタ
 ルノミニシテ、其他決シテ暴状無之、先刻戸長役所ニ

於テ大將暗殺ノ云々御達ノアリシヲ聞ケリ、是レ誠ニ意外ノ冤罪ナリト述フルカ否ヤ、調者怒テ曰ク、其レデナヒ、言ハサレハ打テトノ令ト共ニ、四五名附添シ者左右ヨリ声懸ケテ打敲スルコト凡六七拾計リト思ヒシ頃、手首ヲ打タネハイカント云ヒナカラ、縛手ヲ打ツコト甚シ、程ナク止メテ下レト引立元ノ柱ニ繫キ付ケ、少モ動ヲ得ス^{横八何レモ、三四尺ナリ}

一同日八時頃又白洲へ出ス、調者曰ク、最前ヨリ其方ノ申立ルコト皆偽ナリ、能ク聞ケ、其方ノ役所ニモ長官カアルダロウ、答ヘテ曰ク、然リ、調者曰ク、私校ニ於テモ夫レ々長タル人アリ、其方等之ヲ謀リシコトアリ、夫レヲ白状セヨト云フ、僕曰ク、左様ノ事ハ決シテ無之、僕不肖ナリト雖トモ警部モ勤メテ、是迄盜賊ヲ調ヘシコト数度アリ、何程之強情者ト雖トモ到底隠シ得ヘキニ非ラス、此上卑怯ナ事ハ決シテ申マセント云フカ否ヤ、又打ツコト前ノ如シ、又休テ又聞ク、答フルコト前ニ同シ、調者曰ク、汝中警部ノ身トシテ知ラサルトハ何ノ言ゾヤ、必ラス川路ヨリ托セラレシ事アルニ相違ナシト云フ、僕答ヘテ曰ク、成程中警部云々御尤ニ似タレトモ僕諸友ト議セシコトハ、廿五日ヨ

リノ事ナリ、其ヨリ前ノコトハ決シテ知ラス、最モ急速出帆ニ付、大警視へモ面会不致ト云フカ否ヤ又打ツ、又止メテ白洲ヲ下ケ元ノ柱ニ繫ク、此兩度ノ拷問ニ兩手痛クハレ太トリ、右ノ手ハ最モ甚シ、為メニ外皮破レテ縛縄肉ニ籠レリ、血脈殆ント通セス、故ニ政ニ少シク緩センコトヲ請フ、巡查来不届ナト罵リツ、却テ首筋ノ縛縄非常ニ強クシメタリ、於是身体措ク処ヲ知ラス、眼暗ミ忙然トシテ人色ヲ弁ヘサルカ如シ、流汗頻リナリ、然ルニ宮内俊介来リ繩ヲ解キ、両手ヲ前廻セヨト云ヘトモ曲伸自由ナラス、漸クニシテ前ニ縛ス、

一同日又白洲ニ出シ、調者曰ク、川路ヨリ托セラレシコトヲ逐一申立テヨト云フ、僕決シテナシト答フル前ノ如シ、此調ハ一通リニテ打擲ナシ、

一同五日午前十一時頃、守者相進ミ耳語シテ曰、中原・菅井ハ今日斬ル筈ニ決シヨキタリト物語ヲ密ニ聞ク内ニ、菅井ヲ引立テト云フ、僕笑ヲ含ミ最早憚ル処ナク、三四間程表ノ方ニ縛サレ居リシ友人樋脇ノ名ヲ呼び、御先キニ行クト別レヨ告ケテ立出ル、繼ヒテ中原・樋脇・高崎ヲモ引出シタリシニ、刑場何所ナラント思ヒシニ、遂ニ囚獄ニ行ケリ^{是時末弘・田中モ縛サレ、レテ分置ヘ来ルヲ見ル}、然ルニ中原・

菅井ハ引返セト、又中原・菅井ハ爰カ決心処ト云フヲ聞キ、中原ト同シヨウシテ笑ヒツ、又先ノ分署ヘ到ル、中原ヲ白洲ヘ廻シ口書読聞セ、繼ヒテ僕モ白洲ヘ引出シ口書ヲ読聞カスルニ、大概僕等ノ申立テタル通りナリ、少シク違ヒコト間々之レアルヲ聞取レリ、西郷ヲ暗殺杯ノ文字ハ更ニ無之、依テ速ニ拇印ヲ為シタリ、而シテ又元ノ扣所ニ連行キ、此者ハ市木勘助斬ル賦リナリ杯ト、僕カ面前ニテ罵リケルニゾ、僕少ク見知りシ小使水ヲ汲ミ来ル、僕笑ヒナカラ之ニ托シテ曰、快ク死スルナリ、請フ、之レヲ愚兄ニ告ケヨ、又曰ク、我死スト雖トモ書籍ハ決シテ売ル勿レト云フ、賊等罵テ曰ク、此者ハ未タ棒カ足ラント此ハ未タ打方カ少ト云ト見ユト語リ合、間モナク引出シ浜辺ヲ指シテ中原ト共ニ連レ行キ、又元ノ囚獄ヘ引込シニ、夜ニ入りテ斬ルコトナラント獄中ニ待居リシニ、其夜ノ難モ免レ、同八日午後六時頃一同県庁ヘ呼出シ、一人ツ、白洲ヘ廻シ口書ヲ読ミ聞カセル様子ナリシニ、何レモ不服ヲ弁スルノ声ヲ遙ニ聞ク、而シテ名順ニ僕モ呼出、多人数ニテ齟齬セシ処モアルニヨリ、左様心得ト申聞ケ読ミ上ル、其読方甚タ明瞭ナラスト雖トモ西郷暗殺云々并ニ川路ノ命ヲ

受ケシ云々ハ髓ニ聞取リシニ付、不服ノ旨ヲ申立ルニ大声シテ拇印ヲ為セヨト云フヤ否ヤ、左右ヨリ三人ニテ両手ヲ取り、無法ニ押付ケ、遂ニ拇印ヲ為サシメタリ、実ニ遺憾憤懣ニ不堪、懇ニ其後県庁内仮檻倉ヘ移シ、只日夜死ヲ待ツ而已、然ルニ計ラスモ今般勅使御着県ニ付、官軍ヘ御引取相成リ再生ノ御供恩謝スルニ言ナク感涙數行、去月二十二日当地ヘ御送致戸長ヘ保管被仰付候、以上、

右始末御尋ニ付口記ノ儘奉呈仕候、

東京府士族

明治十年四月五日

菅井誠美印

二十八年

右手痛ニ付代筆

右甥佐藤良之助印

十七年

一〇一七
〔卷〕第拾六号

始末書

鹿兒島県士族

伊丹親恒

帰省中於鹿兒島捕縛サレシ始末御尋問ニ付左ニ
申上候

私儀

先般帰省スル趣意タルヤ、在県中去ル明治七年之初夏、
郷里ニ於テ私学校ヲ設、如何トナレハ廢藩立県ニテ常備
兵解隊ニ付、壯士輩柔弱ニ流レ、後日救フヘカラサルニ
至ランコトヲ恐レ、故ニ一致同心互ニ切磋シテ、以テ風
俗ヲ正フセンタメ建設セリ、因テ入校シ攷メ研究ス、然
ルニ時日ヲ経ルニ從テ、鹿兒島私校ニ御擬シ、初メソノ
趣意ニ相反シ、第一上京奉仕ノ志アル者ヲ嫌惡シ、或ハ
東京諸生等ノ目的アル者モ是レカ為メニ束縛セラレ、又
甚キニ至テハ上廟堂ヲ目シテ姦朝ト唱へ、漸今日ニ至ル
ノ景況アリ、已ニ黙止ス可ラサルノ勢ニヨリ、実ニ憂痛
ニ堪ヘサリシニ、同年ノ秋ニ至リ有志輩異論ヲ発シ、數
日議論ニ涉リ、遂ニ二十七名断然絶交ス、尋テ別府晋
介ナル者郷里ノ区长トナリ、夫ヨリ学校ノ人員益加増シ、
退校セシ者トハ親族ノ交リヲモ断タシメ、其勢実ニ盛ナ
リ、然ルニ九年八月ニ至リ銃器ヲ購求シ、剩ヘ戸長役所
ニ於テ彈丸ヲ製造シ、益不穩ノ景況アルニヨリテ、除校
シタル同士輩ト相議スルニ、一同上京ニ決ス、於是先ツ

前田素志ナル者ト兩人出京シ、余ハ跡ヲ踵テ追々上京セ
ンコトヲ堅約シ、同年十月廿三日ヲ以テ鹿兒島港出帆、
同三十日東京ニ着スルヤ、熊本・山口ノ暴挙アリ、直チ
ニ警視庁ニ奉仕センコトヲ出願セシニ、十一月一日三等
巡查ヲ拜命ス、時ニ鹿兒島益不穩ノ甚説アリ、因テ県
地ニアル朋友等ノ上京ヲ待ツコト曰ニ久シ、然ルニ同月
下旬ノ報ニハ県下動搖一層甚シク、已ニ勢ヒ相迫リ、遺
憾ナカラ暫時出京不相叶、其後音信不通ニ屬セリ、故ニ
前田ト議シ、彼ノ學校徒ニ脅從サレシカ、又ハ弁駁サレ
タルカ、他日ノ誓約ハ水泡ニ歸シ遺憾切齒ニ不堪、併シ
飽クマテ信ヲ尽スハ、固ヨリ朋友間ノ常ナレハ、一往県
地ニ馳セ歸リ、名分大義ノ有ル処ヲ深ク討論シ、一人タリ
トモ不分明ニ陥ラサルヲ尽力セントノ談話ニ涉レリ、折
柄前田ニハ次城県下騷擾ニ付、出張ヲ命セラル、尚独り
県地景況ヲ憂ヒ偏ニ措クヘカラス、然ルニ安樂兼道ナル
者ハ兼テ知己ノ者ナリシカ、此度帰省スル事ヲ側ニ聞キ、
彼ノ宅ニ行キ談話セシニ、其ノ趣意一ニシテ共ニ帰京セ
ンコトヲ相約ス、尤園田長輝ナル者モ帰省ノ趣ニヨリ、
明晩彼ノ宅ニ集会シ、発足ノ期ハ勿論願書等ノ談ニ及フ
可シト、其翌日園田宅ニ參リシニ、數輩追々來集シ、或

ハ知己ノ者モアリ、或ハ初メテ面接セシ者モアリ共、議スル処勢ハ実ニ可恐者ナレハ、名義ヲ説クニモ必ス機ヲ察セサル可ラス、却テ彼等カ激動ヲ迎ヘサルヲ要スト、其夜ハ各退散ス、翌廿六日前田ニモ茨城県ヨリ帰京セシニヨリ語ルニ、前条ノ議ヲ以テス、共ニ同人モ帰省セント願書等差出ス、然ルニ其日ノ午後ニ至リ、願置キシ月給前借、下谷川路ノ宅ニ受取りニ參ルヘキ旨承ル、差越候処菅井其他七八名參リ居リ、暫時アリテ大山綱昌ナル者月給持來リ銘々ニ相渡シ、尚懇ニ談話及フニ、彼レ等カ激動ヲ醸サ、ルヲ要スト、夫レヨリ各帰宿セリ、同二十七日東京発足、廿八日横濱ヨリ三菱玄海丸ヘ乗り込、同三十日神戸着、十年一月三日大坂ニ廻リ、同六日大有丸ヘ乗船、同月十一日ノ夜鹿兒島ニ着港、翌十二日郷里ニ着ス、則親戚朋友等伝聞シ、追々入來セシニヨリ、先ツ県内動搖ノ事ヲ尋問スルニ曰ク、先般熊本・山口ノ暴拳ヨリ県地拳テ動搖シ、白昼ニ帶刀携銃ニテ往來シ、或ハ隊伍ヲ組ミ狙撃ヲ勢ニシ、^(ママ)既ニ東京ニ押上ラントスルノ勢ナリシカ、方今少シハ其機モ過キタリト、因テ知己朋友等ニ説クニ、遠キハ佐賀等ノ事ヲ以テシ、近キハ熊本・山口ノ事ヲ以テシ、共ニ名義ノアル処ニ依リ、必ス方向

ヲ誤ル可ラサルヲ論スルニ、素ヨリ同意ノ者共ナレハ速ニ意ヲ決シ、愈共ニ上京ニ決議セリ、然リト雖トモ今は機ニ乗シ、一同上京シテハ彼等ノ激動ヲ醸サンモ難計、先ツ木佐貫・川上等ヲ以テ同行シ、余ハ踵テ上京ノ積ナリ、余ノ私学校連ハ中々談話スル等ノ勢ニアラス、同廿八日城下三菱会社ニ行キ、上方向キノ蒸氣ヲ尋問セシニ、二月初旬ニアリト云、其船ヨリ上京決シ居タリ、時ニ二月二日ノ夜郷内私学校連大ニ騷擾シ、数百名帶刀ニテ海陸ヨリ城下ニ馳セ附タリ、翌日ニ至テモ尚不止、因テ探訪スルニ、海軍御用トシテ彈藥ヲ運送ニ來リシニ、学校黨鹿兒島ニアル処ノ彈藥庫ヲ破毀シ許多掠奪シ、拾余艘ノ上荷船ヨリ郷里戸長役所ノ土蔵ニ格護ス、尚或ル友人ヲ以テ貴島清ナル者ノ宅ニ遣シ探索セシニ、貴島云フニ、最早愈盛ニナリタリ、吾等始メノ見込ハ斯ル者テハナカリシト大ニ歎息セリト云、因テ前田ト議シ同四日ノ未明発足ス、尤木佐貫・川上ノ兩人ハ固ヨリ上京ノ積リニテ、先般県庁ノ許可モ得タル者ナレハ、共ニ同行センコトヲ約セシカ、川上ハ始メテノ上京ニテ、親族離杯等ノ義アリ、少シ遅刻ニ可及ト吾等先キニ出發シ、県内吉田ノ駅ニ到着ス、從テ木佐貫・川上モ來着セリ、共ニ寢臥

ニ居タルニ午後七時頃ニ至リ、帯刀携銃ノ者、中ニハ巡查ノ徽章アル者モアリ、四五拾名突然家ノ四方ヨリ飛入、県庁ヨリ御用ト云ヒモ果ス、散々ニ打擲シ、遂ニ五人ヲ縛シ直ニ庭ニ引出ス、能ク見ルニ多クハ私学校ノ徒ナリ、途ニ至テ川上我名ヲ呼ヒ、文天祥正氣ノ歌ハ如何ト云フ、我答フルニ、古語ニハ聞ツ、カト云ヒシニ、川上則是ヲ吟ス、然ルニ護送ノ者側ヨリ飛懸リ、炬ヲ以テ川上ノ面体ヲ打ツ、炬火消滅ス、川上切齒シ何故ニ失敬ナルヤト云フ、時ニ又左右ヨリ大ナル棒ヲ以テ道ノ傍ニ打倒ス、川上一言ヲ発セス愈死セリト見ヘタリ、吾等遭縛ノ身救フニ術ナク、心中如燃、暫クシテ起上リ歩行ニ就ケリ、夫レヨリ横川ニ至リテ夜明我郷内ニ入りシハ五日午後一時頃ナリ、尤郷内市中ニハ鹿兒島警察ノ第四分署アリ、彼ノ方ニ拘引サレ庭前ノ垣、或ハ縁ノ柱ニ繫カレタリ、暫シテ又城下ノ方ニ拘引サル、其夜旧城下内ニ入りシニ、銃器ヲ携へ番兵嚴重ニシテ則戰場ノ体ナリ、十時頃第一分署ニ着ス、然ルニ同列ニ帰県セシ末弘其他白綿ヲ以テ頭上ヲ捲キ、或ハ手足ヲ巻身体血ニ染ミ、半死半生ノ体ナリ、直ニ吾ヲ後手ニ縛リ糺問所ニ引廻ス、其場ニ臨メハ三尺計皆血ナリ、其上ニ坐セシム、糺問スル者ハ一名、

其一人ハ宮内俊介ナル者ナリ、因テ彼レ問フニ、先般上京セシ以來、今般帰県シタル次第詳ニ上申スヘシト云フ、因テ前条ノ始末詳細陳述スル央ニシテ、其言ヲ留メ打ト云フ令ヲ発ス、然ルニ左右ヨリ散々ニ打チ、其方儀全ク探索ニ帰リシニ相違ナシト云、我ハ探索テハナシ、右ノ趣意ニテ婦リシト答フ、後ニアマリ打ニヨリテ、探索ト言フ者ナレハ探索テモアラフ、併シ婦リシ趣意ハ前条ノ通りナリト言ヒシニ、彼又言フ、其方等此度捕縛ニナリシハ探索ノ訊ニテ捕縛シタルテハナシ、外ニ大事ナル申合ヲ致シタル儀アルニヨリ、夫レヲ白状ス可シト言、一向存寄モナキコト故、夫レハ何等ノコトニテ候ヤト言ヒシニ、其次第ハ何ノ答モナク、只言ヘ々ト云フテ非常ニ打タシム、然レトモ何等ノコトヤラ一向存セサル事故、左様ナル儀ハナシト云フ、時ニ宮内俊介余程声柔カニ、一先ツ下リ篤ト勘考スヘシト云、夫レヨリ引下ケラレ元ノ処ニ繫カル、翌六日午後八時頃ニ至リ囚獄ニ送ラル、同九日午後五時頃獄卒呼出ニ来リ、十八名ト共ニ縛サレ県庁内ニ至ル、銘々裁判白洲ニ呼出ス、時已ニ燈火ス、正面ノ高席ニ二名アリ、同ク汝口供ヲ読聞セル、併シ趣意ニ於テ大同小異モアレトモ、夫レハ不問ニ置キ承

伏セヨト読上ル、其文意全ク偽作ニテ、固ヨリ無根ノ事故、吾ヨリ申セシ儀ニアラス、又彼ヨリ尋問セシニモアラヌ事ニテ大ニ恐愕シ、只読終ルヲ待チ兼、是レハ意外ノ事承ル、如何ノ事ヲ以テ如此ノ口供ニ候哉、聊左様ナル儀ハ不存、一切拇印セサル旨ヲ答フレハ、其儀ハ採用セス、拇印サセヨト言ニ応シ、側ラニ附タル三四名左右ヨリ取囲ミ強テ拇印サセントス、然レトモ尚大声ヲ揚ケ不服ヲ述フ、時ニ又三四名来リ後ヨリ咽ヲ締メ、左右ヨリ手ヲ取り左ノ指ヲ折リ墨ヲ附ントス、元ヨリ彼カ勢ヲ察シ死ノ免レサルハ飽マテ格護ニ候得共、全ク無実ノコト故、声ノ限り身限り不服ノ旨ヲ陳述スル漸ク久シ、然ルニ如何シテ拇指ニ墨ヲ塗リ紙ニ附ケシ乎、引下ケヨト言フ、一人ハ繩ヲ引、又吾人ハ後ロヨリ擠ス、吾レ尚後背ヲ顧ミ大声陳述ス、遂ニ庭ニ引出サル、尚高声ニテ承服セスト述ルニ、吾ヲ庭ニ押倒シ、二名ノ巡查棒ヲ揚ケ打タントス、其時ニ至リテ嗚呼我事茲ニ終レリト口ヲ閉ツ、夫レヨリ拘繫サレテ後チ又旧ノ囚獄ニ下サル、二月廿六日県庁内新檻倉ニ移サレ巡查尤厳ナリ、固ヨリ幽囚ノ身ナレハ世事聞クヲ得ス、唯何レノ日乎死ニ就ヤヲ待ツノミ、然リト雖トモ無根ノ口供ヲ偽作シ、其他暴悪ナ

ル所為公明正大ナル裁判ニ上告スル由ナキヲ恨ミ、日夜快トシテ獄中ニアリシニ、三月十日天恩ノ辱ヲ蒙リ、ニタヒ青天白日ヲ仰キ、金川丸へ移サレ、同十三日長崎へ廻リ、統テ神戸・大坂ニ廻リ、同廿二日東京帰着候也、右ノ通始末相違無御座候、以上、

鹿兒島第五十九大区一小区

二百拾六番地士族

明治十年四月日

伊丹親恒 拇印

一〇ノ一八
〔朱〕「第拾七号」

始末書

鹿兒島県士族

前田素志

帰省中於鹿兒島県ニ幽囚サレシ始末御尋問ニヨ
リ左ニ申上候

私儀

先般帰県スル其趣意タルヤ他ニアラス、昨年前在県ノ砌リ郷里ニ於テ、明治七年ノ夏ヨリ常備兵解隊ノ後ナレハ、士風遊惰ニ流レ、口ニ開化ヲ唱フト雖トモ、其実甚タ輕シ、於是壯士輩ト同心共力、以テ風俗ヲ正フシ学文ヲ研

究セン為メ、私学校ヲ建設シ共ニ勉強罷在ル、其後同八年ノ夏ニ至リ遂ニ鹿兒島私学校ノ体裁ニ徇擬シ、第一県外旅行スルヲ差止メ、偶少年輩東京諸生等ノ志アル者モ相拒ミ、陽ニハ朝規ニ順從スト雖トモ、陰ニハ政府ヲ誹謗シ、或ハ討ツトカ云ノ時機ニ立至レリ、当世ニ於テハ益都会ノ地ニ押出シ研究スヘキノ折柄、却テ他出等ヲ嫌悪スル儀、知識進歩ノ道モ閉リ、始メノ趣意ニ反對スルヲ憤リ、有志輩遂ニ除校ノ議ヲ主張スル者凡ソ七八拾名ナリ、然ルニ彼レ等ノ巨魁ト見認メタル者乎、私等二十余名ニ交際ノ儀ヲ絶センコトヲ謂ヘリ、此儀元ヨリ意トスル処ナレハ断然退校ス、然リ而シテ同年ノ冬ニ至リ、私学校徒ノ別府晋介ナル者郷里ノ区長トナリ、浮説ヲ以テ人心ヲ鼓舞シ、正副戸長ハ勿論小学校ニ至ルマテ改革ヲ始メ、多クハ諸役員ヲ私学校ヨリ選拔セシニ、私学校ノ人員倍加増シ、其勢甚タ盛ンナルニ至レリ、翌九年夏頃ニ至リシニ、百姓所有ノ地面ヲ共有地トナシ、甚シキハ町人等ヲシテ猥リニ銃器ヲ買入レシメ、且ツ彈藥ノ製造ヲ始メ稍今日ニ至ルノ景況ヲ萌セリ、因テ伊丹親恒ナル者ト相談シ、当今ノ形勢不容易、到底国安ヲ害スルノ時機モ難計シト察シ、同士輩ヘモ議スルニ曰ク、吾輩ノ

力ニ於テ是ヲ抑制スヘキ術モ無ケレハ、速カニ上京シ夫レ々々方向ヲ相定メ可然ト決セリ、故ニ先ツ伊丹ト同道上京シ、其他友人ハ追々上京ニ相約シ、同年十月廿三日ヲ以テ発足ス、同三十一日着京ノ処、熊本・山口暴挙ノ状ヲ聞達スルニヨリ、一口モ猶豫スヘカラス、速カニ警視庁ニ奉仕センコトヲ志願セシニ、十一月六日四等巡查ヲ拜命ス、因テ尚ホ県地ニ在ル友人ノ上京相待ツ日ニ久シ、時ニ十二月十七日茨城県下動揺ノ機ニ際シ出張ノ命ヲ蒙リ該地ヘ赴ク、同二十六日ヲ以テ帰京シ、同僚ノ伊丹ヘ面会スルニ曰ク、我県地ノ景況日増シ不穩ニ屬スルニヨリ、堅約ノ友人等上京モ不叶段申シ来レリ、此ヲ以テ親戚朋友間ノ不名分ニ陷溺センコトヲ日夜憂苦ニ不堪、大義ノアル処ヲ共議セン為メ、一先ツ帰県ニ決セリト、其儀ニ於テハ自分ニモ素ヨリ企望シ居タル処ナリトテ、共ニ帰省センコトヲ相約シ、早速帰省願書并ニ月給前借ノ願ヲ立テ、許可ノ上同廿七日伊丹同道横濱ヘ向発足、同廿八日三菱玄海丸ヘ乗組ミ、同三十日神戸ヘ着シ、十年一月三日汽艦ノ都合ニヨリ大坂ヘ轉移シ、同六日琉球藩ノ大有丸ヘ乗組、同十一日鹿兒島ヘ着、翌十二日郷里ニ歸ル、時ニ親戚朋友等モ追々来臨セシニヨリ、私帰省

ノ深情ヲ明シ、且ツ該地ノ景況ヲ諮問スルニ曰ク、私学
校徒曩キニ熊本・山口暴挙ノ際ハ一層動揺モ甚シク、已
ニ今日ト雖トモ白昼ニ刀ヲ帶ヒ銃器ヲ携フルモノアリ、甚
然リト雖トモ白昼ニ刀ヲ帶ヒ銃器ヲ携フルモノアリ、甚
シキニ至リテハ隊伍ヲ組ミ、狙撃等ヲ相為ス、其勢甚タ
猖獗ナリト、故ニ親戚朋友ニ説クニ大義ノ有ル処ヲ以テ
方嚮ヲ一ニシ、名分ヲ不可誤ルヲ以テスルニ、固ヨリ上
京云々ノ先約モアレハ、倍ス丹心ヲ堅フシ、早クモ上京
シ各臣子ノ義務ヲ尽ス可キニ決セリ、然リト雖トモ是ノ
機ニ乘シ一同上京スルハ、彼レ等ノ激動ニモ恐レアレハ
一先ツ吾等三四名上京セン、其他ハ踵テ上京可然シト談
合シ、同ク廿八日伊丹同道鹿兒島三菱社ニ至リ汽船ノ都
合ヲ聞キシニ、来月初旬琉球ヨリ入港ノ艦有之由ニテ帰
宿シ、尚耳目ニ相触ル、コトハ、職務ニ於テ猶予スヘキ
ニ非レハ、傍ラ探偵ニモ注意シ罷在ルトキニ、二月一日
ノ夜半ニ至リ郷里俄然トシテ動揺シ、彼私学校徒帶刀ニ
テ、百五六拾名県庁下ニ馳セ付タリ、何等ノ挙動アルヲ
不知、翌日ノ夜分ニ至リ小舟七八艘ニ彈丸火藥ヲ積乘セ
通送シ、該郷役席内ノ土蔵ニ收入セシニヨリ、或ル友人
ヲシテ県庁下ノ実況ヲ探索セシメタルニ、数ヶ所ノ火薬

庫ヲ破毀シ奪掠シタルヲ見認メタリト報セリ、故ニ暴挙
是ニアルヲ案シ直チニ上京シ実況ヲ報セント、同日四曉
ニ一時頃伊丹・高橋ト同道、風雨ヲ冒シテ発足ス、然ル
ニ私友人木佐貫重帥・川上親晴ナル者、素ヨリ上京ノ積
リニテ、以前ヨリ県庁ノ許可モ得タル者ナレハ、共ニ同
行センコトヲ約セシカ、右川上儀初ツ旅行ノ事故、親族
等離盃ヲ催スニヨリ、出足遅刻ニ可及シトノ儀ニ付、先
行シ吉田駅ニ投宿ノ処、木佐貫・川上ニモ從テ来止ス、
共ニ寢臥居タルニ、午後七時頃帶刀ニテ棒ヲ携ヘタル者、
間ニハ巡查ノ徽章アル者モアリ、突然戸障ヲ破リ乱入シ、
散クニ打擲シ、同行ノ者共ト一同ニ捕縛シテ、県庁御用
ト直チニ引立ラレ、道ニ就ク途中ニ於テ、同道ノ川上元
トヨリ暴徒ノ為メ捕縛サレシト思ヒタルニヤ、所謂天祥
ノ正気歌二三句ヲ発セシニ、護送ノ者共声ニ応シ前後左
右ヨリ取捲キ、罪人ノ身ヲ以テ吟咏スル不屈者ト叱咤シ、
無ニ無三ニ打擲シ、或ハ炬ヲ以テ面部ニ打付タレトモ、
川上少シモ不屈、失敬ナト抗言スレハ尚ホ強ク擲キシ故、
遂ニ精神モ絶ヘタリト見ヘ、路傍ニ倒レタリシカ、幸ニ
シテ未タ死ニ至ラサルヤ、起上リ又步行ニ付ク、憐レ遭
縛ノ身ナレハ是ヲ見ナカラ如何トモスルニ術ナク、悲憤

胸ヲ焦シ遺憾ニ不堪、実ニ錐ノ席ニ坐スルカ如シ、其殘酷名状ス可カラス、行ク道路泥滑ニシテ歩ニ艱ミ横川ノ駅ニ至リ、夜明ケ午後一時頃ニ至リ郷里ノ警察分署ニ着ス、暫時シテ又道ニ就ク、午後八時頃ニ鹿兒島県下第一分署ニ護送サレ、縁ノ柱ニ繫レタリ、署内ノ体裁タルヤ、帯刀ニテ草鞋ヲ付ケタル者数百人雜沓シ、悪口訛言ハ云迄モナク、恰モ暴徒ノ兵營ト覺タリ、其後テ調所ト見ヘタル処ニ引出サル、板席血ニ染ミタル上ニ坐セシメ、兩側ニハ棒ヲ携ヘタル者四五名、正面ノ高席ニ二名アリ、曰ク、其方此節帰県セシ趣キ詳カニ申立ヘシト、依リテ前件ノ始末遺漏ナク申述ント欲シ、未タ数語モ終ラサルニ、忽チ声ヲ勵シテ叱叱シ、不屈強情者ト云テ打テト下令スルニ、兩側ヨリカラニ任セテ打擲ス、暫クシテ止メシメ又曰ク、其方東京ニ於テ同士輩ト談合シ、川路ノ命ニテ探偵方トシテ帰県セシ次第判然タリトテ、又打テ謂ヘト云ノ声計リシテ詰打ツ久シ、如此スル数回ナリ、然リト雖トモ固ヨリ異議ナキヲ以テ他ナキヲ抗言ス、時ニ又止メシメ、篤ト勘考セヨ一先ツ下クルト云時、既ニ打撻ノ苦ミヨリ身体ノ屈伸モ自由ナラサルニ至レハ、小使ト見ヘタル者兩人ニ相抱ヘラレ、元ノ柱ニ繫カレタリ、

翌六日午後六時頃県庁内第四課ノ扣所ニ送ラレ、暫クシテ引出サレ調所ニ至レハ、又正面ニ二名左側ニ一名アリ、曰ク、其方先日申立ル趣悉ク採用シ難シ、今日ハ包蔵ナク白状セスンハ夫レ々々折檻ノ仕様モアリト強フ、私ニ於テハ先日申述タル通り聊モ異儀無之、当県不穩ノ巷説アルニヨリ、親戚朋友ト方向ヲ一ツニシテ、大義ヲ不誤ヲ共ニ議セン為メ帰県セシナリト始末ヲ述レハ、声柔ラカニシテ先ツ下カレト令ス、後九時頃新地ノ囚獄ニ送ラル、同ク九日午後六時頃又四課ヘ廻サレテ、西彦四郎・高橋爲清・松下兼清・柏田盛文四名ト一同ニ白洲ニ呼出サル、時ニ又高席ニ二名兩側ニ四五名アリ、曰ク、其方共ノ口書読聞スヘシ、併シ多人數ノ口供一紙ニ綴リタレハ齟齬ノ廉モアルヘシ、其儀ハ強テ承服スヘシト誑上ル、其文意全ク無根ノ事故不服ヲ声スニ聞モ果サス、左右ヨリ兩手ヲ押ヘテ無理ニ拇指ヲ取リテ紙ニ付ケタリ、遭縛サレシ身ナレハ如何トモスルニ由ナク、心中只一死ヲ帰スル而已ナリシカ、案外ニシテ又元ノ囚獄ニ送ラル、同廿六日県庁内ニ二重ノ柵ヲ構シタル新檻倉ニ送ラル、在舊三月十日ニ至リ柳原公使御下向ニ付、官兵ノ御救介ニ預リ、二タヒ太陽ヲ仰クコトヲ得テ、恰モ蘇生ノ思ヲナ

シ、鹿兒島滯港ノ金川丸へ護送サレタリ、同十二日出帆
ニテ長崎へ着、同十六日同港出帆、同十八日神戸へ着、
翌十九日大坂へ廻サル、二十日又神戸ヨリ三菱名古屋丸
乗込、翌日二十二日横濱へ着、同日汽車ニテ着京也、
右之通相違無御座候、以上、

鹿兒島第五十九大区

二小区十四番地士族

明治十年四月

前田素志

一〇一ノ一九
〔朱〕第拾八号〕

始末書

鹿兒島県士族

土持 高

明治九年十一月下旬頃ヨリ十二月初旬ニ至リ、母病危危
篤ニ付、速ニ帰県致スヘシトノ郷書再度到来、帰県ノ決
心罷在リ、折柄鹿兒島動揺ノ街説甚ク、一日西・大山ト
会セシニ同人等ノ話ニ、若シ在県ノ友人等大義名分ヲ不
弁、徒ニ私学党ニ同盟シ粗暴ノ挙アルニ於テ、友義ヲ尽
スニハ須ク帰県忠告ス可キニ如クハナカル可シトノ事ニ
ヨリ、私ニ於テハ素ヨリ帰省ノ含ミナレハ、帰県ノ後ハ

互ニ尽力可然ト、夫ヨリ愈帰県ニ決心仕候、又一日友人
安樂兼道ヲ訪ヒ、猪鹿倉兼文モ爰ニアリ前件ヲ談ス、廿
五日安樂ヨリ前田長輝ノ宅ニ出会ヲ申シ送り、午後同氏
ニ至リシニ、大山・猪鹿倉・末弘・安樂・平田・菅井等
モ会ス外、皆初見人、因テ前件帰県ノ儀ヲ談セシニ、何レモ皆帰
県ノ後ハ友人ニ説諭スルニ、沈重柔順ヲ旨トシ、妄ニ激
動シテ困安ヲ害スルナキヲ要スヘシ、細微ノ如キハ此地
ニ於テ決シ難シト申シ合セ、猶明日川路氏ノ明家ニ於テ
大山綱昌ニモ会談ス可シトノ義ニテ、私ハ多忙ニ付速ニ
此席ヲ立退キ候、翌廿六日亦川路氏明家ニ会シ、談議ノ
次第モ前夜ト大同小異ニシテ、万一モ鹿兒島暴発ニ及ヒ
候ハ、速カニ熊本ニ赴キ東京ニ電報スヘシト決約、猶
忍耐ヲ旨トス可キ段、長官ノ口達ナリトテ大山綱昌ヨリ
承知仕候、二十八日妻子ヲ引キ列レ発京致シ、十年一月
十一日夜鹿兒島ニ着シ、叔父某ノ宅ニ三日滞在、同十五
日帰家致シ候処、母重病ニテ外出等モ致シ兼、常ニ母ノ
枕頭ニアリ看護中、二月四日午后一時過門外何カ騒敷、
数人闖入致シ候ニ付、兼テ私学校覚警視官ヲ嫌忌スト聞
キ、且彈藥等モ奪掠セント其日風説有之故、今果シテ乱
暴ニ殺ノ為メ来ルナル可シト相考、此状態ヲ母ニ見セ候

テハ、一層病悩ヲ増スヘシト思ヒ、直チニ逃ケ出シ親類ノ中ニ潜匿シ、其夜密カニ金策ヲ成シ、上国ヘ報告ノ為メ船路ヨリ逃ケ上ル合ノ処、搜索甚タ緻密ニシテ空ク其夜ヲ明シ、終ニ翌五日午后三時頃捕縛ニ相成申候処、巡查棒ヲ携ヘ、汝等不屈ノ者ナリ、直チニ可殺ト云ヒ、強ク手足ヲ打擲致シ、野町ト云フ処ノ分署ヘ列レ行キ、小牢ヘ押し込メ申候、六日午前八時該所ヨリ鹿兒島庁下第一分署ヘ拘引、其夜署中ノ柱ニ繋キ、七日午后三時頃札問所ヘ引キ出シ、警部如キノ者申シ候ニハ、其方儀東京ヨリ搜索ノ為メ帰県セシナル可シトノ事ニ付、全く不然、親病氣ニ付帰県セシト相答ヘ候処、左右ヨリ棒ヲ以テ打ツコト凡ソ三四十、因テ私説示候ニハ、在県下此県ノ不穩ヲ聞キ、若シ在県ノ友人等大義名分ノ如何ヲ不顧、只勢ヒニ圧倒セラレ、私学党ヘ同盟スル時ハ懇ニ説諭シテ、以テ押し止ルノ含ニ有之候ナリト申シ候処、又警部如キノモノ打ツ可シト差函セシ処、一時ニ打ツコト尤甚タ數、実ニ残酷粗略言語ニ尽シ難ク有之候、漸アリテ警部体ノ者猶追々糺問ス可キニ付キ、此席ヲ退クヘシトノ事ニテ、直ニ囚獄所ヘ幽セラレ候、八日夜県庁内第四課ヘ呼び出シ、警部申渡シ候ニハ、其方等ノ口供ヲ讀ミ聞カス、數

人数ニテ事ノ齟齬スル廉モアルヘケレトモ、宜シク承服スヘシト、其説方甚タ曖昧ニシテ、私学党ヲ鑿ニスル等ノ事有之候ニ付、異議ヲ申立候ヘトモ左右ヨリ粗暴ニ手ヲ押ヘ、強テ拇印ヲ成サシメ、無理ニ庭中ニ引出シテ、後又牢中ヘ押し込メ申候、十六日午后四時頃獄番親類ヨリノ書翰ヲ渡セシニヨリ、開キ見ルニ母ノ訃音ニシテ、去ル十四日死去セリトアリ、廿六日県庁内ノ仮檻倉ヘ移サレ、且暮暴殺ヲ待チシニ、豈計ンヤ三月十日官兵該地ヘ来リ、終ニ牢獄ヨリ抜き出サレ、虎口ノ難ヲ免レ、忝クモ再ヒ天日ヲ拝シ、皇恩ノ難有ヲ感佩仕候次第ニ御座候也、

右之通相違不申上候、以上、

明治十年四月五日

土持 高拇印

一〇一ノ二〇
〔朱〕第拾九号

明治十年四月

始末書

鹿兒島県士族

高橋爲清

先般帰省中県下暴挙之際就縛ノ始末御尋問ニヨ

リ左ニ具上仕候

昨明治九年九月迄ハ在県ニテ、所謂私学校党ノ挙動實際目撃スル、平日帶刀或ハ隊伍ヲ結ヒ、狙撃等ヲ専ニシ、彈藥ヲ製スル等、現ニ国憲ヲ憚カラサルノ所為日ニ甚シク、因茲常々親シキ同志輩ト屢々議シ、方今ノ形勢黙止ニ屬シカタキハ勿論、吾等モ早ク方向ヲ定ムヘキ機ナリト、先ツ友人五名ト上京、警視庁ニ奉仕シ、尚追々上京スヘキニ決シ、九月廿七日県地発足、十月五日着京、同行ノ森兼友ナルモノ嘗テ知己ナル、当時権中警部是枝頼行宅ニ行き、県地ノ実勢細ニ陳述シ、且一書ヲ綴リ長官ノ聞ニ達センコトヲ託セリ、尔后十一月二日四等巡查ヲ拜命ス、尤モ県地ニ在ル友人等ト共ニ、彼我ノ事情報答スルコト数回ニ及ヒシカ、十二月ノ始ニ至リ私学校ノ勢ヒ已ニ相逼リ、止ヲ得サルノ勢ナルコトヲ報セル故ニ、儼シ暴威ノ為ニ脅迫サレ、方向ヲ誤ルコトアラシモ量リ難ケレハ、日夜憂慮ニ日ヲ渉ル、時ニ十二月廿六日は枝頼行書ヲ以テ招ク、之ニ応シテ速ニ到ルニ、同人懇ニ県地友人等ヨリ寄書ノ趣尋問セルニヨリ、残ルコトナク事實ヲ語り、親族朋友等圧服サレテ暴拳ニ党与、方向ヲ誤ルコトアラハ実ニ遺憾ナリトノコトヲ相談ス、是枝申ニ

ハ、十一月尔来ハ動搖一層甚シキニヨリ、野間口兼一
 県地親族朋友ノ方向ヲ誤ンコトヲ憂苦シ、不日ニ帰省セ
 ル旨ヲ示セリ、是固ヨリ企望スル処ナレハ、即チ兼一宅
 ニ参リ事実ヲ問ヒ、共ニ同道帰省センコトヲ冀望セル実
 ヲ話シ、且発足ノ期日ヲ約諾シ、親病氣ニ名ヲ托シ、帰
 省願書ヲ差出シ許可ノ上、十二月二十七日横濱ニ向テ発
 足、翌二十八日三菱ノ汽船ニテ同三十日神戸港ニ着ス、
 十年一月七日琉球藩ノ大有丸ニ乗り、同十一日鹿兒島港
 ニ着、翌十二日宿許ニ帰着、然ルニ追々親族朋友等來訪
 スルニヨリ、帰省セシ実ヲ語り、且県地ノ事情ヲ尋問ス
 ルニ、十一月頃ハ動搖甚シク、已ニ暴発ノ勢ヒナレトモ、
 今日ニ至リテハ漸々醒メタリ、尤十一月ノ上旬地租改正
 ノ際、区长別府晋介見込ヲ以テ、百姓等ノ地面ヲ共有地
 ト名ケ、一種ノ方法ヲ設ケタルコトヲ不服、一時動搖ノ
 挙アリ、夫レカ為メ百姓ノ家宅ニ暴人乱入シテ、疵ヲ負
 ハセルモノ八九名、其残酷云フヘカラス、近頃ハ亦十日
 町・納屋町・松原浦ノ三ヶ所ニ、金四百余円ヲ醸スルニ、
 多クハ窮民ニシテ夏用ノ蚊帳等ヲ典^(転カ)売シテ出金セリ、之
 レヲ以テ戸長黒江豊比古等宮崎表へ銃器購求方ニ數回奔
 走シ、今ニ戸長役所ニ於テ彈藥製造頻リナリト、然ルニ

幸ヒ親族朋友等ノイマダ党与セサルモノアルヲ以テ、共ニ名義ノ有ル処ヲ購求シ、決シテ勢ノ為メニ方向ヲ誤ルコトナキヲ示シ、且傍ヲ動静ヲ探偵イタシ居シニ、二月二日ノ午前八時頃ヨリ、私学校党ノ者共百四拾人、帯刀ニテ県庁下ニアル火薬庫ヲ破毀シ、彈藥ヲ奪竊、陸軍省ノ徽章アル箱数多ヲ戸長役所へ運送シテ動搖スルヲ見認メ、是レ暴拳ノ近キニアランコトヲ察シ、一日モ猶予スヘカラス、速ニ上京シテ実況ヲ報セント、同志ノ伊丹・前田等ト談シ、四日ノ午前三時頃ヨリ同道、雨ヲ冒シテ発道ス、郷里ヲ距ル拾壹里、吉田ノ駅ニ投宿睡眠イタシ居シニ、午后七時頃帯刀棒ヲ提ケタル者共四五十名、戸障ヲ破毀シテ突然寢所ニ躍入、只散々ニ打擲、何事ナルヤト云モ聞入レス終ニ捕縛、鹿兒島県ノ御用ナリトテ直ニ引立、暗道ニ炬ヲ取り帰道ニ赴ク、五日ノ午后一時頃第四分署ニ着、庭上ノ垣ニ繋ク、時ニ見物ノ老若男女群集シテ分署ヲ擁ス、其雜沓ナルコト名状スヘカラス、又三時頃ヨリ護送サレテ、八時頃県庁下ノ第一分署ニ着ス、縁柱ニ繋カレタリ、署内ヲ見レハ知己之者共疵ヲ負タルナラン、白木綿ヲ以テ頭部ヲ捲キ、破衣ハ皆血ニ染ミ、見ルニ不覺慘然タリ、又縛ニ就キ護送サル、モノ踵ヲ接

ス、十一時頃ニシテ調所ニ差廻サル、場ニ臨ミ見レハ、四枚敷程ノ板席滿面滑血ニ染ミタル上ニ坐セシメ、両側ニハ棒ヲ提ケタルモノ四五名扣へ、正面ノ高席ニ三名アリ、其壹人曰ク、其方等此節帰省セシハ何故ナルカ、其趣意具ニ申立ト云、答テ曰ク我輩帰省セシハ他ニアラス、県下ノ形勢不穩ニシテ已ニ暴発セル等ノ巷説伝ニヨリ、親族朋友ノ方向ヲ誤ンコトヲ憂ヒ、共ニ名義ノアル処ヲ覓メンタメニ、遙カニ帰省セシ旨ヲ答フルニ、則声ヲ励マシ、汝茲ニ至リ包ムコトナカレ、已ニ同類ノ者共白状ニ及ヒ其実明カナリ、大事ヲ含ミ帰省セシ旨ヲ一々申セト大ヒニ叱咤シテ、打撻セヨト令スレハ則両側ノ者共棒ヲ以テ非常ニ打撻セリ、如斯スルコト数次ナリ、固ヨリ別ニ意ナケレハ、大事ヲ含ム等ノコトハ決シテ之レナキノミト答フルニ、其責時ヲ移スニ一先下ケヨトテ引出ス、腰間ノ屈伸自由ナラサレハ、介セラレテ本ノ柱ニ繋カル、六日ハ柱繋サレテ午后十一時頃県庁内ヨリ呼出セトモ、責席ニハ出テス、七日ノ午前二時頃囚獄ニ下サル、九日午后五時頃呼出ニ来ル、拾八名共ニ護送サレテ県庁内ニ至ル、松下・前田等ト五名一同ニ白洲ニ引カレ、面々兩名列シテ曰ク、其方共口供読聞セル、併シ多

人数ノ口上ヲ一紙ニ綴リタレハ齟齬ノ廉モアルヘシ、ソレハ不問ニ承服セヨト誦上ル、文意全クノ作文ナル故、一同不服ノ旨ヲ申立ルニ、採用シカタシトテ大ニ叱リ、搦印サセヨトテ左右ヨリ手ヲ取り、無理ニ搦印サレタリ、固ヨリ遭縛ノ身ナレハ如何トモスル能ハス、口上争フトイヘトモ力ラニ及ハス、又本ノ囚獄ニ下サル、二月廿六日県庁内新檻倉ニ移サル、暴人ノ為メニ死ヲ免レカタキハ覚悟ナレトモ、此冤枉ヲ天下ニ明ニセサルコトヲ憾メリ、然ルニ三月十日官軍へ御引取ニアイナリ、再ヒ青天ヲ仰クコトヲ得タリ、夫ヨリ去月廿二日東京へ到着仕候事、

右之通始末相違無御座候、此段申上候也、

鹿兒島第五十二大区

三小区帖佐郷九拾四番地

住居士族

明治十年四月

高橋爲清印

(本文中ハ √内ハ「遭難者始末記」より補う)

(補遺) (以下「遭難者始末」により補う。高橋爲清分)

鹿兒島県帖佐郷ニ於テ私学校ニ党与セズ、専ラ名分ヲ

正シ方向ヲ不誤様約セシ八名、左ノ通ニ御座候、

岩 爪 隆 介

右ノ者ハ固ヨリ私学校党ト方向ヲ異ニシ、常ニ名分ヲ正シ、郷内ニ於テモ人望有ル者ナリシガ、区长別府等ガ私学校ヲ盛ニセント戸長ニ命シタル事モアレトモ、即チ病氣ニ名ヲ託シ職ヲ辞シ、私学校党不礼ノ挙動ヲ平常怏憤致居レリ、先度邊見等カ肥後地ヨリ募兵ニ帰県セシ時モ、抗シテ不応ヲ惡ミ終ニ捕縛、人吉ニ列行キ殺害セシ由、其後^{旧曆四月六日夕方}賊六名家内へ乱入、土藏内家財ハ悉皆封印、追テ取ニ来ル故一切手掛間敷ト、家内ノ者共へ嚴重ニ申置、其夜ハ猥ニ飲酒乱暴シテ、翌日立去リタル由、

中野太左衛門

右ノ者ハ旧副戸長ヲ相勤メ居タル者ナリ、常ニ私学校党トハ方向ヲ異ニセシ者ニテ、我輩ノ帰省セシ時ハ大ニ歎ヒ、方向ヲ共ニシテ尽サント親シク約シ置シガ、其後五月廿四日マデハ募ニモ不応、依然在宿ノ由、其後殺害サレシヤ如何不相分、

高橋爲右衛門

右ノ者ハ旧戸長在職中ニモ私学校ニ与カラズ、彼等ノ無礼ヲ常ニ憤リ居リシニ、暴発ノ後モ不与ヲ以テ暴苦サレ、一時暴ヲ避ケント家ヲ立去リ、其後踪跡不分明ノ由、

伊藤 彦八

右ノ者モ暴挙ニ与カラズ在宿ノ処、勅使御下向ノ際、賊ノ彈藥潜匿ノ处在等報セシ処、官軍御引上ノ後賊等歸リ来ツテ大ニ怒リ、既ニ殺害サル、ノ勢ヲ知り、三月廿九日家ヲ出デ山野ニ潜ミ居、漸ク難ヲ櫻島ニ避ケ居リ、再ヒ官軍入県ノ折ニ第三旅団ノ内ニ到リ、其後応分ノ職ヲ奉シ尽サント、水俣口ニ赴キ遊撃隊ニ編入、今現ニ鹿兒島ニ在陣ノ由、

大窪磯右衛門

右ノ者モ旧戸長ニテ、暴発ノ際ハ不与、其後貴島清ガ口実トスル処ニ欺レ、貴島ニ同道出張ノ処、豈不凶肥後地ニ於テ官軍ニ抗スルニ至リ、恐懼之事ニテ、尋テ病氣ト偽リ一週間ノ暇ヲ乞婦宿_{肥後地}ヨリ、今何方ヘカ潜伏セシ由、

毛利 雄藏

右ノ者ハ埼玉県警部奉職中、県地ノ形勢不穩ヲ憂ヒ、是モ親族親友方向ヲ不誤様ニ為説諭帰ノ処、暴挙_(三)ノ遭遇シ、嫌疑ノ廉アルトテ親族受合禁足申付置タル由、然ル処三月十日勅使御下向ニ逢ヒ、官軍隨行願濟ノ上、病院事務掛拜命、八代口ニ出張之処、其後別働第三旅団一大隊本部伝令司附屬ヘ拜命、現今鹿兒島ニ在ル、

_(不明)
□毛長左衛門

東郷 靜介

高橋渡之助

横山小藤太

和田莊左衛門

山路 榮進

愛甲源左衛門

中原佳左衛門

右之者共ニハ勢ニ逼シ、名簿ヲ島津学校ニ容レタル由、今櫻島辺ニ在ルト云、愛甲・中原ノ兩名ハ止ヲ得ス賊ノ募ニ応シタルトモ云フ、

重留郷居住^(巻)

旧戸長 酒匂龍五郎

帰省中隣郷ノ形況ヲモ同志輩ニ伺問スルニ、重富郷ニ於テハ右酒匂ナル者名分大義ヲ主張シ、同志輩数拾名ト相誓ヒ私学校党ト趣ヲ反シ、区长邊見十郎太ナル者ト屢々抗論シ、終ニ議相適ハス辞職シテ居ルト聞キ、元来同人ハ至テノ懇意ナルヲ以一月廿二夕刻ヨリ同人ヲ訪ヒシニ、折能ク在宿ニテ迎ヘ、共ニ無事ナルヲ悦ビ、東京ノ形勢トモ相話シ、次ニ県地ノ談ニ至テ同人大ニ慷慨悲憤シテ曰ク、旧城下ハ勿論諸郷ニ私学校ノ勢ヒ日益盛大ナルモ、自郷ニ於テハ吾人モ入校スルモノ無キニ、邊見等区长赴任後、色々ノ事ニ名ヲ仮リ士族ヲ鼓舞シテ入校ヲ勸奨シ、且戸長役所銃器等モ皆私校ノ者共ニ借渡サントス、故ニ御主意ニモ相悖リ甚不容易事件、且ツ彼等ガ常ニ説ク所一トシテ名分ナキヲ憤リ、数度議論ニ相渉レトモ、悲哉勢ニ圧セラレ議相行レズ、尽力ノ及バサルヲ恥テ辞職セリ、初メ同志ノ輩ニ拾名余ナリシガ、途ニシテ志ヲ変シ今ヤ親族親友纔ニ拾二三名ナリト云ニ依リ、同人ノ議ヲ贊シ、假令勢ヒ相逼

ル共志ハ変スヘカラズ、方向誤ルベカラズ、実ニ名分ハ恐ルベキ者ナリ、倘シ暴拳ノ事アルモ只名義ノアル処ニ随ヒ、共ニ国家ヲ護シテ斃シノミト堅ク相約シ、尤三月ニ至ラハ是非上京スヘキノ事ニテ、其夜ハ緩話時ヲ移シ、尚後日再会ヲ期シテ帰宿ス、其後暴拳之際ニハ嫌疑ノ廉アルトテ同シク幽囚、後チ東京ニ來テ警部補拜命セリ、

右人名、私初メ在県中ヨリ進退ノ方向共ニ相約シ置候者共ニテ、先般帰省ノ砌ニモ大ニ欲ヒ尚相誓ヲキ候間、暴拳ノ後ハ如何御座候哉ト苦慮罷在候処、鹿兒島毛留毛利雄蔵ヨリ粗々探偵報知仕候ニ付、始末書記差上置申候也、

十年七月八日

高橋爲清

一〇二二
〔巻〕「第二拾号」

上

東京第拾大区三小区

浅草吉野町七拾壹番地寄留

鹿兒島県士族

野間口兼一

先般鹿兒島県へ歸リ被縛候始末御尋問ヲ蒙リ左
ニ具ニ申上候

旧警視庁へ奉職中、所謂鹿兒島県下私学校党ノ暴状アル
ヲ聞ク久シカリシカ、昨明治九年八月伝聞スルニ、各区
々長モ右私学校党ニアラサレハ之ヲ黜ケ、学校党ノ人ヲ
以テ之ニ宛テ、巡查モ亦然リト、而シテ諸士族ヲ勸奨シ
テ其党ニ結与セシム、已ニ其党ニ入ルモノハ銃器刀劍非
常ノ備ヲナス、戸長等モ亦タ戸長役所ニ於テ、手カラ彈
薬ヲ製スルノ勞ニ服シ、然シテ自ラ其為ス何ノ目的、何
ノ為メナルヲ知ラス、是皆附和ナリ、幸ヒ吾出水郷ニ於
テハ、其党ニ与ミスルモノ僅ニ三四人ノミト、十一月ヨ
リ十二月ニ至リ伝聞尤甚シ、若シ其聞ク処ノ如クナラハ、
国憲ヲ憚カラサルノミナラス、名義ヲ破リ国家ノ治安ヲ
妨害シ、且ツ維新ノ功績モ水泡ニ属スト杞憂苦慮ノ際、
茲ニ十二月廿日頃同僚末廣直方第五方面第四署ニ来リ、
鹿兒島県下ノ景況ヲ相話シ、曰ク、一タヒ郷里ニ帰、親戚
朋友ニ接シ懷ヲ聞キ誠ヲ露ハシ、其志ス処ヲ聞キ名義ノ
アル処ヲ講シ、其方嚮ヲ定メシメ、若シ暴拳アリ、之ニ
与ミセントスルモノアラハ、之ヲ未然ニ救ハンコトヲ謀
ル如何ン、只恐クハ今日ニ至リ帰県シテ其功力アリヤ否、

尚思考セント東西相話シ、然シテ當時警視庁權大警部大
山綱昌ナル者、兼テ県下ノ動靜ヲ探偵シ予防保安ノ事ニ
尽力スルヲ以テ、一日綱昌ヲ訪ヒ鹿兒島県下ノ形勢ヲ商
量シ、父母ノ国親族朋友ノ在ル処監視スヘカラス、又職
務上保護ノ一端、速ニ帰県努力センコトヲ議セシニ、綱
昌曰ク、善哉、此由シ一タヒ長官ヘ其誠意ヲ申達シ、許
可ヲ請ハンコトヲ肯フ、此ニ於テ窃ニ心ヲ帰県ニ決ス、
其夜園田長輝ヲ訪ヒシニ、来リ集ルモノ數輩アリ、座上
一面識ナキモノ半ヲ過ク、各曰ク、郷里ニ歸リ朋友ニ接
シ、其志ス所ヲ聞キ、名義ノアル処ヲ諄々ト講究シ、丈
夫兒ノ大方向ヲ定メシメント、此ニ於テ不期不知同契一
符故ニ約シテ曰ク、県地ニ帰ル日各温和ヲ旨トシ、毫モ
激烈ニ涉ラス、狠ニ無礼ヲ加フルモノアルトモ、耐忍シ
テ争ハス、但我精意ノ貫クコトヲ要セント、即チ九年十
二月廿六日湯治暇并四ヶ月分月給前拝借ノ願書ヲ以テ、
大山綱昌ニ依頼セシニ、綱昌曰ク、庁内繁忙雜沓シ、恐
クハ遅延セン、何処カ宜シカラシ、幸川路利良私邸空舎
アリ、暫ク那処ニ俟テト、同夕綱昌許可ノ書并金円ヲ齎
シ来リ、曰ク、海陸各恙ナキヲ祈ル、請フ努力セヨ、鹿兒
島県地ニ至リ朋友ニ接スルニハ柔和ヲ以テシ、暴客ト争

フコトナク我精忠ヲ朋友ノ胆ニ移シ、化ヲ永日ニ望ミ功ヲ自然ニ期シ、必ス彼ノ怒ヲ挽キ起スコト勿レ、議相合サレハ信義隨テ貫カス、故ニ交誼ヲ厚フシテ破ルコトナク、同志ヲ誘ヒ帰京ノ早キヲ竣ツ旨ヲ陳述セリ、然シテ平時ハ書牘ヲ以テ通シ、若シ異事アラハ電信ヲ以テ報セシコトヲ約シテ去ル、十二月廿八日常々來往ノモノ數輩來訪ス、之ニ語ルニ、若シ天下分裂擾乱ノ世トナルトモ、志ヲ動ス勿レ、共ニ闕下ヲ衛ランコトヲ以テス、是日発途、明治九年十二月廿九日三菱汽船金川丸へ乗り、三十一日横濱出帆、明治十年一月二日神戸へ至リ逗留、同六日汽船名古屋丸へ乗り、同九日長崎へ着、同十二日鹿兒島県出水郷ニ帰着、郷里素ヨリ士族千二百余戸アリ、聞ク、私学校党ニ誓与ノモノ已ニ二百余人、此徒皆兵器ヲ弄ス、戸長竹添某ナルモノ奔走周旋、首トシテ諸準備ヲナス、以下副戸長幾人アルヲ知ラス、聞ク、是ヨリ先キ区長山口孝右衛門等衆ニ示シテ曰ク、私学校ニ入ラサルモノハ、士族ヲ剝キ家禄ヲ沒収セント、曰ク、東京ノ官吏ハ悉ク軟弱ナリ、一蹴シテ殲スヘシ、或ハ曰ク、海外ノ患ヒ曰ヲ逐テ染及セリ、今ヤ危急存亡ノ秋ナリ、男兒当ニ奮起スヘシ、吾志少々ナラス武威ヲ海外ニ振ハンナ

ト、異口同称シ、殆ント過激ノ暴風ヲナス、加之官林ノ如キモ私学校ヨリ請願スレハ輒ク許可ヲ得、間々之カ暴ヲ憂フルモノアリト雖トモ、唇ヲ拊ミ終ニ他ハ皆恐怖草偃ス、故ニ私学校党日益熾ニシテ益増加ス、其勢甚タ猖獗ナリ、此時ニ当リ朋友ニ接シ曰ク、吾日本寢々トシテ開明進歩シ、政体モ曰ヲ逐テ精良ナリ、海陸ノ備モ亦前日ノ比ニアラス、兵器ハ政府ノ命ナクシテ人民ノ私スルモノニアラス、国憲犯ス可ラス、今一朝ノ勢盛ナルニ乗シ、大義如何名分ヲ顧ミス、一タヒ史乘ヲ汚セハ長ク醜声ヲ後世ニ貽ス、謹マサルヘケンヤ、夫勝敗ハ兵隊ノ常議ス可ラス、唯名義ニ殉スヘキナト、時ニ触レ物ニ託シ、或ハ杯酒献酬ノ間機ヲ見テ相話ス、一日学校党ニ与ミセントスルモノ拾数人アルヲ聞キ、苦口ニ説テ之ヲ止ム、已ニ与シテ悔悟スルモノモ亦尠ナカラス、然リト雖トモ才力ノ菲薄、其ヲシテ方向ヲ定メ確然ト動カサラシムコト至テ難シ、コ、ニ於テ又手一策ヲ案シ河野某ニ語テ曰ク、我將ニ云々セントス如何、曰ク善シ、謀マサニ施サントスルニ遺憾ナリキ、明治十年二月五日午前第二時過キ、臥榻ノ間ニ数人棒ヲ持チ突然躍入ル、其所以ヲ問ヘトモ答ヘス、静ニセンコトヲ請ヘトモ聽カス、妄ニ頭部

諸所ヲ毆撞シ終ニ縛シ、御用ト云テ警察分署ニ拘引シ曰ク、県庁ヨリ御用ニ付鹿兒島ヘ差回スト、四人ニテ護送ス、途中刀ヲ帯ヒ銃ヲ把ル者往々有之、同六日鹿兒島警察第一分署ニ到ル、該署ヘ出入スルモノ皆戎服脚半草鞋、或ハ靴ヲフミ刀ヲ帯ヒ棍棒ヲ杖ク、其景況陣營ノ如シ、勢ヒ名状ス可ラス、牢地ニ数人面前ニ来リ、肝ハ我取ラシ、頸ハ我斬ランナド悪言罵詈ス、然シテ縁柱ニ縛ス、同僚其他モ同ク囚繫セラレテ署中ニ在ルヲ見ル、我曰ク、尋問ノ事アラハ速カニ問ハレンコトヲ請ヒシニ、頃之アツテ調所ニ引出シ問テ曰ク、其方何ノ職務ナルヤ、曰ク、東京警視権中警部、又問テ曰ク、此節帰県セシハ何ノ主意ナルヤ、此ニ於テ曰ク、帰県ノ主意ヲ聞カハ之ヲ話サン、我ヲ捕縛セシハ何ノ罪ナルヤ、其所以ヲ聞カント、反シ問フ、彼レ高声叱咤シテ曰ク、捕縛セシ儀ハ今自ラ分ル、帰県ノ主意ヲ白状セヨト拷問ス、曰ク、東京ニ於テ風評ノ甚シキニ因リ、鹿兒島ハ父母ノ国、親戚朋友ノ在ル処黙視ス可カラス、一タヒ郷里ニ帰り親戚朋友ニ面接シ、懐ヲ開キ誠ヲ露ハシ、其志ス処ヲ聞キ、名義ノアル処ヲ講究シ、各自ニ相当ノ権力ヲ保持シ、其方向ヲ定メ、若シ暴挙アリ之ニ与ミセントスルモノアラハ、之ヲ

未然ニ止メント帰県セシ事実ヲ陳述ス、觀ルモノ屏列、時ニ傍ヨリ加リ打撻センコトヲ請フモノ二人アリ、糺問者之ヲ可ス、背後ニアルモノ幾人ナリヤ、共ニ撻テ止マシ、強ヒ問テ曰ク、仔細ハ同類ヨリ白状ニ及ヒ明瞭ナリ、其方探索ニ帰リシコトヲ白状セヨト、曰ク、事実ノ外言フコトヲ得ス、必ス探索ニアラスト、其方不屈モノ明白ニ申セト、又杖撻スル酷シ、曰ク、探索ノ為メ帰ルニアラスト雖トモ、警察ハ我職務中ノ事、經過ノ地耳目ノ觸ル、処ヲ察シ、若シ異事アレハ以テ之ヲ具状スルコト之アルヘシト述レハ、棒ヲ揮テ頸ヲ抑サヘ、髮ヲ擱ミ引倒シ左右ヨリ撻ツ、斯ノ如キコト数次ナリ、水ヲ把リ口ニ灌クモノアリ、然レトモ之ヲ飲マス、彼レ曰ク、一旦下ケ置クト、乃チ把繩者ニ倚リ漸ク旧ノ柱下ニ至テ又繫カル、手足ニ流血淋漓、拭ハンコトヲ請ヘトモ聽サス、翌七日囚獄ニ入レル、二月九日県庁内白洲ヘ引出シ、県官ナリヤ二人アリ、一人曰ク、多人數連名故齟齬スル廉モアラン、同類之ヲ承服ス、其方モ承服セヨト、口供ト謂テ読ミ拇印セヨト言フ、之ニ服セス、二人山崩ルノ威勢ヲ以テ拇印ヲ強ユ、曾テ聞カス夢ニモ知ラサル儀、決シテ不服ト反覆之ヲ陳言ス、時ニ左右後二人アリ、無体

ニ捉搦シテ拇指ヲ開カントス、力争ヘトモ終ニ拇印サセシヤ、白洲ヲ挽キ下ケ柱ニ縛シテ動クコトヲ得サラシム、然シテ復タ囚獄ニ入レラレタリ、二月廿六日新造ノ檻倉ニ移サル、始メヨリ斬ント云ヲ以テ、斬殺ノ脱レ難キヲ知り、彼等カ暴戻無法ノ所為、一タヒ官ニ告ケ憾ナカラシコトヲ欲スレトモ、懇ルニ由ナク幽鬱窮獄中ニ在リ、三月十日ニ拾名ト同シク、官軍ノ援キ出ス所ト為リ、勅使ノ命ヲ聞キ感泣自ラ制スル能ハス、辱モ官警吏ヲシテ廿一名ヲ東京ニ護送セシメ、三月廿二日到着ス、右之通始末無相違上陳候也、

東京第十大区三小区淺草吉野町七十一

番地寄留

鹿兒島県薩摩国出水郡出水郷士族

明治十年四月

野間口兼一拇印

熊本鎮台戦闘日記

明治十年二月二十二日ヨリ四月十五日迄

熊本鎮台戦闘日記

明治十年二月十四日

鹿兒島士族私学校徒数千人兵器ヲ携へ、暴挙スルノ形跡顯ハル、ヨ以テ、本日將校ヲ本台ニ会シ、地図ニ依リ諸隊守戦ノ部署ヲ定メ、城郭内外守城ノ準備ヲ為ス、本日午食ヨリ隊外將校以下小使・從僕・馬丁・雇夫ニ至ル迄現賄ヲ支給シ、獄ノ丸ニ炊事場ヲ設ク、糧米五百石其他薪炭等之ニ応シ貯蓄ス、武庫主管ニ於テ職工ヲ雇入シ、且地雷火ヲ製造セシム、是ヨリ先キ鎮台病院出仕鳥丸一郎ヲシテ鹿兒島県ニ赴カシメ、暴挙ノ事実ヲ探ラシム、県界出水ニ入ラントシテ忽チ賊ノ守兵ニ拘引セラレ、同所警部出張所ニ於テ通行ノ旨趣ヲ問ハル、偽テ帰省ノ許可ヲ得帰ルモノナリトス、賊之ヲ肯ンセス、再ヒ出水ノ守線外ニ護送放還セラレ、帰台スルヲ以テ始メテ県界ヲ閉塞スルノ確報ヲ得タリ、亦本台出仕川崎良澄ヲシテ水俣ヨリ川尻地方ノ搜索ヲ為サシム、暴挙ノ動靜悉ク此報知ニ因ルモノナリ、

二月十五日

城中獄ノ丸及ヒ櫓方ノ両処ニ火薬庫ヲ作り、敵彈ノ射

入爆発ノ憂ヲ避ケンカ為メ數個所貯蔵ス、

二月十六日

砲兵隊ヨリ火工下長及ヒ砲卒數人ヲ要シ、武庫主管ニ於テ砲彈ニ炸薬ヲ装填セシム、工兵隊ヲシテ棒安坂上ヨリ同所空壕へ降ル坂路ヲ開達セシム、

二月十七日

富岡県令ヨリ報知ニ曰ク、暴徒二万五千人米ノ津迄陸行、夫ヨリ舟ニテ八代へ上陸スルカ否、海陸ノ分配未タ分明ナラス、且鹿兒島地方ノ郵便ハ已ニ廢絶セリト、本日午後第九時、新堀門ヨリ法華坂ニ至ル間、一般人民ノ通行ヲ差留タリ、

二月十八日

本年一月來鹿兒島県士族私学校ニ嘯集シ、該県ニ貯蔵スル処海陸軍ノ彈薬ヲ掠奪シ、本台ヲ襲撃スル景況陸統報知ヲ得ルニ依リ、以テ予テ設ケシ部署ノ通り、地雷ヲ埋メ柵ヲ結ヒ、砲臺ヲ築造シ、防禦ノ策最モ嚴ナリ、

九年負傷者ニテ已ニ治癒セシモノヲ山鹿ノ温泉ニ避ケシメ、又罪囚ヲ赦シ軍役ニ就カシメ、以テ実効ヲ奏シ前罪ヲ償ハシメントス、

二月十九日

本日午前第十一時四十分本城火ヲ失ス、偶々西南ノ風烈シク瞬間四方ニ延焼シ、遂ニ天守台ニ及フ、時ニ午後第三時漸ク鎮火ス、斯ノ如キ火勢ノ甚タ熾ナル、固ヨリ消防ノ及フ所ニアラスト雖モ、兵器彈薬ノ此災ニ罹ラサルコトヲ力メ、各官皆倉庫ニ登リ部下ヲ励マシ、或ハ之ヲ運搬セシメ、遂ニ殃禍ヲ免レシムルヲ得ル、実ニ天幸ト謂ツヘシ、然リト雖トモ凡ソ三十日間ノ糧米食料尽ク灰燼ニ帰セリ、此火災ニ遭フニ及テ士氣倍々振起シ、速ニ糧米ノ調収ニ着手シ、會計官等ヨシテ市中或ハ近傍ノ村落ニ奔走セシメ、糧米其他ノ食物ヲ購求シ陸統城内ニ運搬ス、而シテ城中ノ出火坪井寒林ノ民家ニ延焼ス、城下ノ人民老若男女周章斜ナラス、或ハ家財ヲ負担シ奔竄陸統シテ縦横恰モ織ルカ如シ、黄昏ニ至リ火勢四方ニ延蔓、焰煙天ニ漲リ、黒煙城壘ヲ掩フ、

小倉屯在歩兵第十四聯隊第一大隊左半大隊、午後第五時着台ス、直ニ之ヲ点検シ守線ノ予備トス、酒肴ヲ給シテ其勞ヲ慰ス、

鹿兒島県令大山綱良書ヲ送り、西郷大将以下上京ノ主

意ヲ通ス、其文ニ曰ク、
別紙書面一通陸軍大将西郷隆盛ヨリ其御台へ依頼ニ付
送致候条、御落手可給候也、

明治十年二月十五日

鹿兒島県令大山綱良

熊本鎮台

御中

別紙

拙者儀、今般政府エ尋問ノ廉有之、明後十七日県下発
程、陸軍少将桐野利秋・陸軍少将篠原國幹及旧兵隊ノ
者随行致候間、其台下通行之節ハ、兵隊整列指揮ヲ可
被受、此段照会及候也、

明治十年二月十五日

陸軍大将西郷隆盛

熊本鎮台

司令官

又鹿兒島県庁ヨリ専使ヲ派遣シ、宇宿某外二名ヲシテ
西郷大将始上京ノ主義書ヲ齎ラシメ、本台ニ来ル、樺
山中佐之ニ応接シ其意ヲ排斥シ、且兵器ヲ携へ国憲ヲ
犯シ、強テ城下ヲ通行セント欲スルモノハ、悉ク兵力ヲ

以テ鎮圧スヘキヲ告諭シ、尚之ヲシテ還リ報セシム、
西京発ノ電報ニ曰ク、鹿兒島賊徒已ニ熊本県下ニ乱入
ノ赴キ、本日征討被仰出、二品親王有栖川宮征討総督
被仰付タリ、

野津少将ヨリ大阪発ノ電報ニ曰ク、下官第一旅団三好
少将、第二旅団各司令長官ノ命ヲ奉シ、明旦当港解纜、
不日博多ニ着、且山砲一大隊ハ百貫ニ着ス、

熊本県庁并ニ裁判所ヲ御船町ニ転移ノ報アリ、

二月二十日

東京警視隊四百名、少警視綿貫吉直引卒九州地方ニ出
張ス、途中ニ於テ内務卿ノ命ヲ奉シ、直ニ熊本城ニ投
セント欲シ、城下盗島沖ヨリ上陸、午後十二時ニ至リ
悉ク入城ス、賊已ニ川尻ニ到着シ、間々又城下ニ潜入
ス、歩兵第十三聯隊第三大隊軍曹岡本銳威ヲシテ、川
尻ノ賊状ヲ探偵セシム、銳威衣服ヲ変シ車夫ニ扮シ川
尻ニ至リ、還リ報シテ曰ク、賊已ニ川尻ニ充滿シ、其兵
数凡ソ二千ナルヘシ、隊伍整肅ナラスト雖トモ勢甚タ
慄悍ナリト、我兵益々守備ヲ嚴ニシ防戦ノ準備大ニ整
頓シ、又要衝ニ砲台ヲ増築シ地雷ヲ埋ム、而シテ山崎・
塩屋町・京町等ノ各所連日失火延焼ス、

二月二十一日

川尻ノ賊管ヲ放火セシメント欲シ、午前第一時大尉隈岡長道・同小島政利ノ二中隊ヲ遣ル、適々賊ノ哨兵之ヲ知覺シ、先ツ銃ヲ発ス、我兵彼レノ備アルヲ知り、且天已ニ明ルヲ以テ戦ハスシテ退ク、伍長小松義正・片山岩太、兵卒熊井善五郎等路ヲ失シ、行ク所ヲ知ラ

ス、午前第七時賊城下ニ侵入シ坪井通町ヲ通行ス、嶽ノ丸及ヒ千葉城ノ守兵之ヲ火撃ス、賊之ニ応ス、其他各所ニ散在ス、其状地形ヲ探偵スルモノ、如シ、又城外障碍アル所ノ家屋ニ放火シ、下馬橋ヲ撤シ倍々守備ヲ嚴ニス、而シテ諸兵ノ部署左ノ如シ、

地名	隊号	官名
下馬橋	十三聯隊第一大隊第一中隊 巡查五番組五十名	大尉福原豊功 中尉大庭宣之 <small>二等中 警部</small> 池端 蛙 <small>少尉 試補</small> 井上顯雄
県庁	十三聯隊第二大隊第四中隊 巡查四番組百名	中尉不破政利 中尉立石正義 少尉伊藤信一 <small>少尉 試補</small> 石原 廬 <small>二等 警部</small> 渡邊佳介
古城	十三聯隊第一大隊第三中隊	大尉隈岡長道 中尉松平實之進 少尉靜間浩輔 少尉今橋知勝 <small>少尉 試補</small> 新井太郎
一日亭	同 第二大隊第二中隊	中尉岡本一布 少尉重富時宜
法花坂二ノ丸 <small>田江邸</small>	同 第一大隊第二中隊	中尉山本盛英 少尉友岡正順 少尉土肥實信 <small>少尉 試補</small> 沼田政治

砲兵配布表

藤崎神社	地名
山野砲 白砲	砲種
一一二	門数
大尉 大崎長寛	官姓名

野砲營	片山邸
山野砲 山砲	山砲 白砲
一一	一一
大尉 左乙女英武	少尉試補 河井令信

藤崎神社	同 第三大隊第一中隊	大尉 小島政利 少尉 永田盤之助
片山邸	巡查一番組一小隊 十三聯隊第三大隊第二中隊 巡查二番組一小隊	大尉 瀧川忠教 少尉 石川博 中尉 保田周安 少尉 澁谷精 三等大尉 川路利行 警部中 池田清秀
漆畑及ヒ野砲營	十三聯隊第三大隊第三中隊 巡查三番組一小隊	大尉 寺内清祐 少尉 河部勝連 中尉 小林清吉 少尉 高並連壽 警部 赤羽友春 少尉 安藤格
埋門棒安坂	十三聯隊第一大隊第二中隊 巡查六番組一小隊	大尉 宮崎定毅 少尉 湯川春尚 少尉 志賀範之 警部 加藤清明 少尉 井手昇
千葉城	十三聯隊第一大隊第四中隊	大尉 小葉竹直綱 少尉 森利邦 中尉 夏目勻 少尉 板垣堯春
嶽ノ丸	同 第二大隊第三中隊	中尉 佐武廣命 少尉 山形忠之丞 少尉 星加居綾 少尉 宮崎富雄

新野砲營	埋門	千葉城	城内	下馬橋	県庁	法華坂	計
山砲 白砲	山砲 白砲	野砲 山砲	野砲 白砲	山砲	山砲 白砲	山砲	山野砲 山砲
一 一	一 二	一 一	一 二	一	二 二	二	十七 二十六
	少尉試補 佐藤栄信	少尉 小出正直	同試補 村上慧	曹長 貴志一郎	中尉 高山信明	少尉試補 田原鑑一	

(以上は刊本「熊本鎮台戦闘日記」より補う)

戦闘日記

二月二十二日、此日午前第六時賊兵城ノ西南安巴・長六ノ二橋ヨリ進ム、我カ下馬橋ノ砲台ヨリ其賊ノ先登ヲ撃ツ、飯田丸及ヒ千葉城ノ砲兵、獄ノ丸守地ノ歩兵並ニ之ヲ拒ク、須臾ニシテ賊兵鋒ヲ東南ニ転シ千葉城ニ向フ、復タ撃テ之ヲ卻ク、然ルニ賊兵京町及ヒ錦山神社ノ境内ニ出没シテ埋門ヲ狙撃ス、輒チ之ヲ撃ツ、賊退テ寺原ニ屯ス、又タ砲撃スルコト二三回、賊遂ニ辟易シテ散乱ス、同第七時賊高田原ニ散布シ、我カ下馬橋ニ向テ進ム、飯田丸砲台ヨリ榴弾及ヒ榴霰弾ヲ連発シ、下馬橋ノ守兵ト共ニ防戦ス、賊モ亦タ火力ヲ熾ニシテ漸ク進テ、旧花畑ノ地物ニ拠リ射撃スルコト最モ劇シ、賊ノ一部隊山崎及ヒ新町ノ焼跡土塚等ニ拠テ、県庁並ニ藤崎神社ヲ襲フ、然レトモ我カ両守地ノ銃砲発火猛烈ニシテ、殊ニ十字火ニ射撃スルヲ以テ、賊進退スル能ハス、屈登シテ新町ノ賊ハ高麗門ヲ指シテ敗散ス、藤崎神社ノ守兵野砲ヲ以テ、高麗門ニ集合スル賊ノ敗兵ヲ撃射スル最モ効力アリ、時ニ參謀長樺山^(資忠)中佐藤崎神社ニ於テ賊ノ銃丸ニ中リ負傷ス、又タ西北ノ^(資忠)賊^(資忠)四方地^(資忠)村ヨリ我カ片山邸ヲ攻撃ス、茲ニ於テ、連隊長與倉^(資忠)中佐賊丸ニ中リ負傷ス、日向崎村ヨリ來

ル者ハ、我カ野砲營ニ向フ、然シテ賊ノ四方地村及ヒ花岡山ニ在ルモノハ、専ラ戦備ヲ整エ、復タ將ニ我カ藤崎神社ヲ衝カントスルノ勢アリ、是ニ於テ、我カ県庁及ヒ藤崎・片山邸ノ守兵等益々守備ヲ嚴ニス、我カ野砲營ノ守兵モ亦タ山野砲ヲ発シ応戦ス、已ニシテ賊兵凡ソ一小隊日向崎村ヲ出テ、其前面田畑ノ溝中ニ入り、以テ我カ砲台ヲ狙撃ス、日向崎村ノ賊兵一中隊許、又タ將ニ進テ島崎村ニ向ハントス、我カ榴弾飛テ群賊ノ中ニ破裂シ、為メニ斃ル、者アリ、賊兵隊伍頗ル乱ル、忽チ分テ二部トナリ、一部隊ハ日向崎村ニ向テ退キ、一部隊ハ走テ島崎村ニ遁ル、此時ニ当リ、賊兵高麗門ノ田畑ニ散布シ、溝渠家屋等ニ抛リ、我カ守地ニ迫ルコト甚急ナリ、時ニ全面戦ヒ最モ猛烈ヲ極ム、

ヲ点検スルニ、小隊長宇都宮良左衛門ト書シ、其他要件数条ヲ登録セリ、之ヲ以テ大ニ賊情ヲ知ルヲ得タリ、偶マ又タ賊ノ一部隊凡ソ三百名花岡山ヲ下リ、兵ヲ高麗門ヨリ田畑ノ間ニ増加シ、益々藤崎及ヒ片山邸ニ迫ル、其一部乃チ軋シテ段山ニ抛ル、漆畑及ヒ野砲營ヨリ其側面ヲ撃ツ、応セス、益々地物ニ抛リテ片山邸ヲ狙撃ス、統テ我カ兵死傷頗ル多シ、是ニ於テ、瀧川大尉ノ部下一半隊ハ、中尉保田周安之ヲ卒ヒ、^(健忠)福原大尉ノ部下一半隊・^(広命)巡查二十名ヲ合セテ、少尉試補井上頼雄之ヲ卒ヒ、佐武中尉ハ自ラ一半隊ヲ卒ヒ、工兵ノ半小隊ハ少尉島尾政之助之ヲ卒ヒ、並ニ片山邸ヲ救フ、已ニシテ又タ瀧川大尉及ヒ小島大尉ノ部下各二十名ヲ合シ、少尉試補澁谷精之ヲ卒ヒ、以テ賊ノ右翼即チ高麗門ヲ衝ク、小尉黒萩重和尋テ進ミ、各々家屋ヲ火シテ帰ル、少尉石川博モ亦タ進ミ、火ヲ放テ帰ル、^(清忠)同時寺内大尉ノ部下二十名・巡查若干名少尉試補安藤格之ヲ卒ヒ、井芹川ニ沿ヒ殆ント段山ノ左翼ヲ衝ク、賊島崎村ヨリ我カ背面ヲ撃ツ、依リテ退テ守地ヲ保ツ、時ニ我カ二名ノ傷者アルヲ聞キ、再ヒ兵ヲ出シ之ヲ引揚ケント欲スレトモ、遂ニ果サスシテ帰ル、我カ県庁ノ砲兵モ亦タ片山邸ノ劇戦ナルヲ以テ、軍曹木

村丑徳及ヒ兵卒五名ヲシテ、十二搦臼砲一門ヲ引ヒ之レカ応援ヲ為サシム、當時片山邸攻撃ノ賊益々兵ヲ段山ニ出シ、砲火猛烈狙撃甚々密ニシテ、城兵苦戦且ツ死傷多キヲ以テ、藤崎ヨリ山砲一門ヲ分遣シ、復タ之ヲ救ハシム、片山邸ノ守兵援兵ノ次第ニ加フルヲ以テ大ニ勢ヒヨ得、防戦午時ニ至ル、而シテ藤崎及ヒ千葉城ノ戦鬪猶ホ未タ息マス、

同第十一時頃ニ至リ、賊島崎村ヨリ初メテ砲撃ス、我カ藤崎ノ砲兵之レニ応ス、同時ニ又タ花岡山及ヒ四方地村ヨリ、山砲長四斤ヲ以テ連放城中ヲ攻撃ス、尋テ銃火ヲ大ニシ四面城ニ迫ル、我カ軍砲火ヲ逞フシ力戦之ヲ防ク、同第十二時ニ至リ、戦鬪再ヒ熾ナリ、又タ工兵隊ハ古城ノ前ニ於テ地雷ヲ埋メ、野砲營ニ胸壁ヲ築キ、又タ各所ノ展望ノ障碍物ヲ除却シ、且ツ一半隊ヲシテ片山邸ヲ援ケシム、^(此時)當時四面戦鬪猶ホ盛ナリ、然レトモ片山邸及ヒ漆畑ノ兩守地ヲ以テ、其最モ劇戦ナル者トス、

病院日誌

將校已下ノ傷者陸續入院ス、

武庫日誌

此日戦争最モ^(激烈)猛烈ナルヲ以テ、兵器ノ損傷及ヒ彈藥ノ消

耗從テ多シ、即チ飯田丸ヲ以テ支給場トシ、銃工若干名ヲ派遣シ小損ノ器具ヲ修理セシム、其毀損甚シキ者ハ、之ヲ本工廠ニ送リテ修理セシム、

二月二十三日、昨夜來賊兵ノ攻撃毫モ撓マス、就中午前第一時ニ及ヒ、我カ片山邸守地ノ戦最モ劇シ、同第三時ニ至リ、賊兵新町ヨリ法華坂ニ迫ル、我カ兵榴霰彈ヲ発シ之レニ応シ、小笠原邸及ヒ古城ヨリ之ヲ挾撃ス、賊群易シテ退ク、同時片山邸ノ砲声稍衰フト雖トモ、賊段山ノ要地ニ抛リ我カ軍ヲ狙撃スルコト甚々密ニシテ、死傷モ亦タ從テ多シ、少尉今橋知勝一小隊ヲ引卒シテ日向崎ニ向ヒ、以テ攻撃ノ如何ヲ偵察ス、会々先行ノ搜兵途ニ賊ノ哨兵ニ遇フ、即チ之ヲ狙撃ス、賊兵狼狽シテ走ル、我カ兵尾撃シテ日向崎村ノ入口ニ至リ、兵若干ヲ分チテ村林ノ左右ニ配布シ、以テ村内ニ入ル、時ニ天未タ明ケス、我カ兵之レニ乘シ、直チニ賊ノ胸壁ニ迫リ之ヲ陥レ、益々進テ又タ胸壁ヲ拔キ、該村ヲ占領スルニ及ヒ、賊ノ援兵來ルニ値フ、是ニ於テ暫時防戦ス、已ニシテ天將ニ明ケントス、乃チ新井少尉^(太郎)試補兵卒十名ヲ卒ヒ、以テ退路裁斷ノ患ヲ防ク、別ニ櫻井軍曹・秋山軍曹ニ命シ、胸壁ニケ所ヲ毀タシメ、以テ兵ヲ返ス、帰途賊兵本妙寺近

傍ノ田畝ヨリ我カ兵ヲ横撃ス、同第四時賊鹽屋町方位ヨリ我カ県庁ノ守地ニ迫ル、須臾ニシテ退去ス、然ルニ昨夜来旧花畑及ヒ花岡山・四方地村並ニ高麗門ノ賊兵ハ、未タ以テ攻撃ヲ熄メス、同第七時花岡山ノ賊壘ヨリ再ヒ我カ県庁ニ向ヒ、砲三門ヲ以テ頻リニ攻撃ス、我モ亦タ之レニ応ス、偶賊ノ昨夜築造セシ花岡山及ヒ四方地村砲台ノ処在ヲ確認シ、乃チ藤崎及ヒ飯田丸ノ砲台ヨリ山野砲及ヒ二十拇臼砲等ヲ連発シテ、之ヲ掃蕩セント欲ス、賊モ亦タ之レニ応ス、時ニ我カ野砲榴弾四方地村ニアル賊ノ砲台ノ砲車ヲ撃碎セリ、払曉賊急ニ我カ千葉城ヲ襲フ、頗ル猛烈、我カ守兵奮戦遂ニ侵入スルコト能ハスシテ退却ス、午后第一時、賊再ヒ我カ千葉城ヲ襲フ、撃テ之ヲ却ク、此時日向崎村及ヒ島崎村・今京町等ノ賊、齊シク我カ野砲管ニ発火ス、又タ撃テ之ヲ防ク、既ニシテ賊兵本妙寺ニ屯集スルヲ視テ、乃チ焼弾ヲ発シ家屋ヲ蕩燼セント欲ス、同第一時三十分、板垣少尉(飛奉)已下三十六名坪井ニ進ミ糧食ヲ収集ス、会賊ノ哨兵ニ衝突ス、則チ撃テ之ヲ卻ケ、糧米若干ヲ得テ帰ル、

(前)

同夜賊兵又タ我カ千葉城ニ迫ル、暫時ニシテ退去ス、色ヲ示シ、急ニ喇叭及ヒ口笛ヲ以テ散兵ヲ嘯集シ、台下ニ肉

薄シテ河流ヲ徒渉セントス、守兵克ク防戦ス、彼モ亦タ其侵スヘカラサルヲ察シ、暫時ニシテ退去ス、此日工兵隊ハ胸壁ヲ獄ノ丸ニ築キ、交通路ヲ千葉城ニ開ク、又タ(前)佐土原少尉兵卒十名ヲ卒ヒ山崎操練場近傍ヲ巡偵ス、賊白川ノ堤坡及ヒ他ノ地物ニ潜伏スルヲ発見シ、戦ヲ開クト雖トモ暫時ニシテ退ク、而シテ段山ノ戦闘昼夜止マズ、片山邸愈固守シテ胸墻ヲ嚴ニス、故ニ死傷稍減シ頗ル力戦セリ、

武庫日誌

彈薬ノ消耗及ヒ兵器ノ損傷前日ニ異ナラス、而シテ彈薬ヲ收藏スヘキ倉庫ニ乏シキヲ以テ、勉メテ賊彈ヲ避ケ危険ナキ地位ヲ覓メ、乃チ数ヶ所ノ石垣下或ハ凹地ニ就キ、天幕ヲ張りテ纜カニ雨露ヲ蔽フ、然レトモ現今賊彈ノ飛来セサル地ナキノミナラス、夜ニ入りテ島崎及ヒ新町方位ヨリ発射セル所ノ四斤彈、我カ彈薬貯蓄所近方ニ落彈スルコト勘ナカラサレハ、其危キコト薄氷ヲ履ムカ如シ、乃チ之ヲ工兵方面ニ商議シテ、飯田丸ヨリ平左衛門丸ニ通行スヘキ屈曲セル所、及ヒ地藏門跡ナル地ニ坑倉ヲ穿チ、以テ各種ノ彈薬ヲ轉移シ、而シテ砲銃彈薬ハ、之ヲ本城空壕ノ射の場ニ置ク、此地彈丸ヲ避クルニ適スレハ

ナリ、

會計日誌

昨二十二日、酒四樽ヲ第三大隊ニ、同六樽ヲ警視隊ニ、同各一樽ヲ會計役夫及ヒ病院ニ給ス、本日ヨリ第三大隊賄ハ十三聯隊賄所ニ於テ之ヲ支給ス、而シテ十三聯隊糧米ノ消費ハ、一日ニ七石二斗ナリ、県官ヨリ日々二十人ニ供スヘキ糧食及ヒ天幕一張・毛布二十領・藁若干ヲ請求セリ、並ニ之ニ応ス、又酒一樽ヲ武庫主管十四聯隊ノ一中隊及ヒ警視隊ニ、同二樽ヲ砲兵隊ニ給ス、

二月二十四日、午前第一時、賊嶽ノ丸及ヒ厩橋ノ守地ニ迫ル、撃テ之ヲ却ク、同第三時一ハ洗馬山崎ヨリ、一ハ高田原ヨリ並ニ県庁ヲ襲フ、又撃テ之ヲ却ク、下馬橋・飯田丸ノ守兵モ亦発砲シテ之ニ応ス、同第四時段山ノ賊一斉ニ発砲シ、片山邸ヲ攻撃ス、守兵乃チ応戦ス、同時賊千葉城ヲ攻ム、守兵直チニ撃テ之ヲ却ク、因テ其近傍ヲ索ムルニ十屍アリ、中、首級ナキモノ一アリ、其他兵器僅クヲ残セリ、又鳥邸ノ守地ヨリ段山ニ対シ新ニ砲台ヲ築ク、同第八時不意ニ砲発ヲ初メ、兼テ漆畑守地ノ中尉小林清吉ニ令シ、少尉試補安藤格・軍曹石橋仰嚴ヲシテ兵卒十五名ヲ卒ヒ、其不意ニ出テ段山ノ側面ヲ横撃セシ

ム、賊兵狼狽、走テ処々ノ藪林或ハ家屋ノ間ニ潜匿シテ防戦ス、片山邸ノ守兵モ亦頻リニ之ヲ狙撃ス、須臾ニシテ中尉小林清吉輕ク兵ヲ収ム、警視五番組長二等警部池端蛙・警部補一名・巡查十名ヲ出シ、其退路ヲ保護ス、是ノ時ニ當リ、四方地村及ヒ花岡山ノ賊壘ヨリ頻リニ我カ法華坂及ヒ片山邸・藤崎等ノ守地ヲ砲撃ス、三守地ノ砲兵之レニ応ス、藤崎ノ守地ヨリ発射セシ野砲榴弾、四方地村ノ賊壘ニ方テ適応ノ距離ニ炸裂ス、時ニ火薬ノ黒烟熾ニ起ル、蓋シ我カ榴弾火ヲ賊軍ノ火薬庫ニ点火セシナラン、午后兵ヲ京町ニ出シ、其形勢ヲ偵察セシム、而シテ昨日已來攻撃甚タ緩ニシテ、我カ射程距離ニ胸壁ヲ築キ持久ノ形ヲ為ス、故ニ唯砲戦ノミ、又タ我カ守線ニ於テハ、益々守備ヲ嚴ニシ胸壁ヲ修築ス、且ツ是迄ノ胸壁頗ル低ク、匍匐シテ漸ク身体ヲ掩フ、之レガ為メニ、彼ニ狙撃セラル、コト甚タ少ナカラス、故ニ竹木及ヒ尋常堡籠ヲ以テ之ヲ増築シ、各胸壁ノ間ニハ交通路ヲ掘開セシム、想フニ、当時賊軍ノ大砲ハ六門ニ過キス、花岡山ニ一門、四方地村ニ二門、長六橋ニ一門、安臼橋ニ一門、其、他ノ一門ハ、時々位置ヲ交換スル者ノ如シ。此日胸壁ヲ片山邸内ニ築キ、又タ交通路ヲ千葉城ニ設ケ、且ツ砲兵ノ為メニ同所(熊本県)ニ火薬庫ヲ造ル、本日監獄穴戸正輝及ヒ県庁官吏布田直

記・古藤秀雄ヲ南ノ関ニ遣ハシ、以テ城中防守ノ状ヲ報
 セシム。百貫沖ニ当リ、砲声ヲ聞ク、必ス我カ軍艦ノ同所ニ來援セシ者ト認定シ、
 之レニ城中固守ノ状ヲ報センカ爲メニ、監獄六戸正卿ヲ撰ヒ軍艦ニ投
 送ニ東軍本營ニ至ランメントス、又タ富岡県令ノ乞ニ依リ、布田直記・古藤、
 秀雄ヲ正卿ニ隨行センメ、各衣服ヲ奪テ、下馬橋ヨリ切カニ城外ニ出サシム。
 武庫日記

攻守ノ形状較々緩ナリ、然ルニ賊十二斤ノ施条大砲ヲ我
 カ城中ニ試ム、偶焼弾飛ヒテ我カ飯田丸ノ兵器庫ニ墮落
 シ、殆ント出火ニ及ハントセシガ、溜水ヲ注キテ僅カニ
 之ヲ消滅スルコトヲ得タリ、当時賊ノ四斤榴弾同所ニ飛
 來セルコト最モ烈シキヲ以テ、屋上日ニ七八ノ彈ヲ受ケ
 ザルハナシ、故ニ諸器物格納ノ困難モ亦タ從テ甚タシ、
 會計日誌

此日蕃藏ノ酒十一樽、悉ク之ヲ各隊・各部及ヒ警視隊・
 巢官等ニ配當シ、是ニ至リテ全ク竭ク、
 二月二十五日、賊ノ段山ニ抛ルモノハ、尚ホ我カ島邸及
 ヒ片山邸ヲ攻撃ス、我モ亦タ之レニ応ス、午前第八時三
 十分、少尉鈴木重郎兵卒二十名ヲ卒ヒ、埋門ヨリ常盤口
 ニ向ヒ、少尉志賀範之モ亦タ兵卒二十名ヲ卒ヒ、樺安坂
 下ヨリ柳川町口ニ向ヒ、並ニ京町地方ヲ偵察ス、已ニシ
 テ鈴木少尉賊ノ胸壁百米突ノ地ニ達ス、乃チ我カ兵銃ニ
 劍ヲ裝シ、進テ其胸壁ヲ衝ク、賊走テ第二ノ胸壁ヲ保ツ、

志賀少尉モ已ニ其左側ニ達シ、因リテ左右ヨリ之ヲ挾撃
 ス、賊兵力ヲ揮フテ防キ守ル、乃チ火ヲ京町学校ニ放テ
 退ク、賊兵肯テ追撃セス、同第十時我カ古城ノ中尉松平實
 之進・少尉試補新井太郎等モ、亦タ兵卒数名ヲ卒ヒ、高
 麗門ニ向ヒ賊情ヲ偵察ス、賊兵専ラ胸壁ノ修理ニ従事ス
 ルニ会シ、我兵ノ來タルヲ知ラサルナリ、因リテ急ニ撃
 テ之ヲ却ケ弾藥數十発ヲ得タリ、我カ兵攻撃ヲ主トセサ
 ルヲ以テ肯テ之ヲ追ハス、下馬橋守地ノ中尉大庭宣之兵
 卒十名巡查十名ヲ卒ヒ長六橋方位ヲ偵察ス、賊兵数名墜
 ニ抛リテ発射ス、我カ兵之ヲ支ヘ暫時ニシテ帰ル、午後
 第二時三十分少尉板垣堯春・少尉森利邦並ニ曹長落合兼
 知等兵若干ヲ卒ヒ、厩橋近傍ヲ偵察シ、突然賊ノ屯所ヲ襲
 ヒ、二人ヲ斃シテ直チニ線内ニ退ク、同第三時段山ノ賊
 始メテ放火ヲ歎ム、是ニ於テ少尉星加居綾・少尉試補長
 澤子之助等相謀リテ、霰彈ヲ數林ノ中ニ放ツ、賊兵復タ
 応戦発火最モ劇シ、其他周圍ノ砲台ヨリ、賊ノ屯所或ハ
 行軍或ハ胸墻築造等ノ動作ヲ認メ、発砲之ヲ妨ケ、而シ
 テ我カ野砲管ノ砲台ヨリ、本妙寺近傍ノ寺院並ニ民家ヲ
 焼ク、又賊ノ砲台ヨリモ我カ線内漆畑ノ家屋ヲ焼ク、延
 焼十余戸ニ及フ、此日正午頃ヨリ植木地方ニ當リ、本城

ヲ距ル三四里内外、頻リニ砲声轟ク、而シテ薄暮ニ至リ、金峯山背後ノ海上ニ當リ、数声大砲ノ響音アリ、衆皆奮フ、是ニ於テ十四騎隊ヨリ過日入城セシ山脇大尉・丸井大尉ノ二中隊ニ、「スナイドル」銃ヲ以テ「エンピール」銃ニ交換ス、又彈藥ノ欠乏ヲ慮リ、夜中探射ノ為メニ各守地へ「エンピール」銃ヲ備ヘシム、此日工兵隊片山邸内ノ砲台ニ交通路ヲ鑿チ、及ヒ屯營近傍ニ尋常堡籠ヲ作ル、

病院日誌

本日ヨリ騎隊病室ノ伍長ニ諮リ、該室ノ水風呂二個ヲ借り、病兵ヲシテ入浴セシムル方法ヲ定ム、

武庫日誌

十四騎隊ノ携帯セルモノハ悉ク「エンピール」銃ナルヲ以テ、之ヲ「スナイドル」銃ニ替ヘシメ、且各堡壘ニ「エンピール」銃ヲ給与シ、夜間ノ探偵射撃ニ供ス、

會計日誌

新町地方ノ線外ニ於テ糧米二十俵ヲ得ル、

二月二十六日、未明ヨリ砲戦前日ノ如シ、正午ニ至リ古城守地大尉隈岡長道ノ部下少尉今橋知勝ヲシテ兵十五名ヲ率ヒ、新町ヨリ明八橋下ノ賊ノ胸壁ヲ襲フ、隈岡大尉ハ

自ラ兵卒十五名ヲ以テ鹽屋町裏小路ヨリ明八橋ニ赴キ、其側面ヲ射撃ス、賊退テ前岸ノ胸壁ヲ保ツ、我カ兵之ヲ狙撃シテ三四名ヲ殲シ、午后第一時兵ヲ収ム、同時曹長・軍曹各一名及ヒ兵卒十二名ヲシテ坪井近傍ヲ偵察セシムルニ、唯数名ノ賊兵伍ヲナシテ処々ニ奔走スルモノアルノミ、当時片山邸ハ段山ノ賊ニ當リ、法華坂・藤崎神社ハ、花岡山ノ賊ニ抗シテ砲戦最モ烈シ、又タ坪井ノ寺院中ニアル賊ノ炊事場ヲ認メ、千葉城ヨリ発砲二回ニシテ之ヲ焼滅ス、同第七時三十分、賊二十名許手取鷹匠小路ヨリ牆壁或ハ樹陰ニ抛リテ、凡ソ三百米突ノ距離ヨリ火撃ス、我カ嶽ノ丸ノ守兵応戦ス、暫時ニシテ賊兵退キ走ル、(盛烈)福原大尉ノ部下段山ニ分遣スルモノヨリ、出京町地方ニ偵察兵ヲ出シ、「エンピール」彈ノ模型ヲ得タリ、又タ障礙物ヲ除却セン為メニ段山ノ民家ヲ火シ、是ニ於テ七連銃一挺及ヒ彈藥五十発ヲ得タリ、同第十時本台ヨリ花火ヲ揚ク、今日ニ至ルマテ家屋凡ソ一万戸、街市凡ソ十分ノ九ヲ焼却セリ、(本日城中防守ノ状ヲ報センカ為メ、伍長各村計介ヲ高瀬ニ遣ハシム、一畧本にヨリ補)

病院日誌

開戦以來今日ニ至ルマテ、負傷百六十人ニシテ、中、死スルモノ四十四人ナリ、

會計日誌

精米ヲ県庁ヨリ本台ニ輸入ス、

二月二十七日、賊攻圍ノ方略及ヒ兵員ノ多寡ヲ諒知セン
為メ、午前第四時喇叭手ヲ一地ニ集合シ、運動ノ譜ヲ吹

奏セシム、午后我カ軍左ノ部署ヲ定ム、

賊拋草場學校侵襲ノ部署

指揮官大迫大尉

參謀官黒澤大尉

伝令使白井少尉 下士若干之レニ属ス

右翼歩兵三小隊

第十三聯隊第一大隊第二・第四中隊ヨリ一小隊

司令山本中尉・友岡少尉

同 第二大隊第四中隊ヨリ一小隊

司令伊藤少尉・石原少尉試補

同 第三大隊第四中隊ヨリ一小隊

司令高並少尉

左翼巡查一小隊

五番・六番組ヨリ一小隊

司令池端二等中警部

援隊一小隊

同第一大隊第四中隊ヨリ一小隊

司令森少尉

右翼ハ手取ヨリ水道丁ニ進ミ、左翼ハ淨行寺町ヨリ坪井
廣小路ヲ出テ、草場學校ノ賊ヲ挾撃セントス、

別ニ

歩兵一小隊

巡查二十名

司令北川大尉

右ハ、京町賊ノ本拠ヨリ草場學校ニ応援ノ路ヲ阻格ス、

同第二時三十分ヲ以テ始メテ戦ヲ開ク、賊胸壁ヲ校前ニ

築キテ固守ス、我カ右翼ノ兵漸々進入シ胸壁ニ迫ルト雖

モ、賊兵倉庫ニ潜伏シ側面ヨリ狙撃スルヲ以テ進ムコト

能ハス、大迫大尉銃丸ニ中リ負傷ス、左翼ノ兵モ亦タ進

ミ、賊ノ右側ヲ突カントシ、池端二等中警部亦タ銃丸ニ

中リテ死ス、然ルニ正面ヨリ進ム所ノ兵次第二進撃シ、

胸壁ヲ距ルコト五十歩ノ地ニ迫ル、城内飯田丸ノ守兵、

山砲一門ヲ櫓ノ焼跡ニ備エ、坪井横町ノ賊軍ヲ砲撃ス、

千葉城及ヒ埋門ノ守兵モ亦タ山野砲ヲ以テ、距離五百五

十米突ノ家屋及ヒ賊ノ胸壁ヲ望ミテ、榴弾・霰弾ヲ発シ

テ我カ軍ノ進路ヲ開キ、接戦數刻ニ至ルト雖モ抜ク能ハ

ス、日暮ニ至リ火ヲ各所ニ放チ兵ヲ収ム、賊肯テ追跡セ
ス、同第五時兵若干高麗門近傍ニ至リ、賊ヲ探偵ス、
会賊兵四十名許急ニ出テ狙撃ス、我カ兵直チニ退キ還ル、
法華坂ノ守兵為メニ山砲ヲ発シテ賊兵ヲ散乱セシム、是
ヨリ先キ、我カ片山邸攻撃ノ賊兵段山能場ニ抛リ、頻リ
ニ小銃ヲ発ス、該守地ノ兵乃チ白砲ヲ放チ応戦シ、遂ニ
之ヲ挫折ス、此日賊ノ「スナイドル」銃彈藥百発ヲ奪ヒ、
並ニ野砲管ノ守兵榴彈ヲ以テ賊ノ彈藥ヲ火ス、工兵モ亦
タ軋堡籃及ヒ尋常堡籃ヲ屯管近傍ニ於テ造ル、

武庫日誌

夥多ノ焼燐藥ヲ製シ、進撃ノ拳アルゴトニ各隊ニ支給ス
ルニ、必ス各數十個ヲ以テス、本日賊二十擲白砲ヲ安巳
橋近傍ニ備エ、昼夜間斷ナク之ヲ我カ城中ニ放ツ、然ル
ニ其飛彈恰モ頭上ニ落ルカ如ク、甚タ猛烈ニシテ他ノ砲
彈ノ比ニ非ラス、之カ為メニ壘陰蔽ノ地全ク防守ノ術ヲ
失スル言ヲ俟タス、亦タ彈藥ノ貯藏ニ困シミ、之ヲ坑倉
ニ収ムルモ、其工業固ヨリ容易ナラス、況ンヤ其ノ性質
或ハ湿氣ノ害ヲ受ケ、或ハ酸氣ヲ醸シ、土中ニ置クヘカ
ラサルモノニ於テヲヤ、

會計日誌

京町地方ニ聚糧シ、濁酒數十樽ヲ会津屋ニ得タリ、城中
本台前ニ於テ酒ヲ与へ、兵士ヲ慰ス、

二月二十八日、令ヲ軍中ニ下シテ曰ク、賊ノ巢窟或ハ我
カ軍ノ展望ニ妨害アルノ外ハ、命ヲ待タスシテ縦ニ民舎・
倉廩等ニ放火スルコト勿レ、且ツ軍用必須ニ非ラサルヨ
リハ、諸物品ヲ徵収スヘカラスト、嚴ニ規律ヲ公布セリ
ト、

午后第三時、賊ノ四方地村花岡山ニ屯集セルモノ、壘ニ
抛リテ砲撃ス、我カ法華坂・藤崎及ヒ嶽ノ丸ノ兵之レニ
応戦ス、此日工兵隊ハ砲台ヲ野砲管内ニ築キ、尋常堡籃
ヲ屯管近傍ニ造ル、下馬橋・野砲管・埋門及ヒ千葉城ハ、
休戦スルモノ、如シ、是ヨリ先キ、漆畑守地ノ兵卒齋藤
彌七ナルモノアリ、二十二日官賊激戦ノ時ニ際シ、賊壘
ニ迫リ重傷ヲ受ケ身ヲ起スコト能ハス、乃チ偽リ死セル
ノ状ヲナシ、夜陰ニ及ヒ匍匐シテ遂ニ我カ守線ニ退ク、
飲食ヲ絶ツコト一週間ノ久シキニ至リ、危殆ニシテ歸ル
ヲ得賊情ヲ語ル、後数日ヲ経テ終ニ疲労シテ死ス、其堅
忍ノ状衆皆感慨セリ、

武庫日誌

賊彈飯田丸兵器庫ニ落下シ、大イニ庫内ヲ破壊ス、当時

銃工ヲ督シ頻リニ「スナイドル」銃ヲ修理セシム、
會計日誌

午后第一時、保護兵四十人ヲ出タシ山崎地方ニ聚糧シ、
米四十苞ヲ得ル、時ニ賊兵向町方位ヨリ襲撃スルヲ以テ、
乃チ引キ揚ル、帰途又タ味噌一樽・粟九俵及ヒ小麦一俵
ヲ得タリ、

三月一日、令ヲ軍中ニ下シテ曰ク、各守地夜間敵ニ警戒
ヲ加フルハ固ヨリ論ヲ須タス、然レトモ持久月ヲ涉リ、
未タ必スシモ怠慢ノ憂ナキニアラサルナリ、自今以來歩
兵一中隊ゴトニ士官各一名、下士各四名、兵卒各三分ノ
一ヲシテ交番シ、徹夜警戒スヘキノ方法ヲ設ケヨ、其他
小隊分遣ノ場所モ亦此法ニ準抛スヘシ、且ツ砲兵ノ護衛
モ歩兵ノ任ト雖トモ、砲ヲ監守センカ為メ、其一門或ハ
二門ノ間ニ砲卒一名ヲ居クヲ要ス、又曰ク、自今守線内
ノ人民所有ノ倉庫ヲ封シ、兵士妄リニ之ヲ開鎖スルコト
ヲ禁ス、

午前第十時三十分、賊兵安巳橋ヨリ来ルヲ見ル、我カ嶽
ノ丸・飯田丸ノ砲兵榴弾ヲ発シ之ヲ逆撃ス、賊兵散乱、
午后第三時三十分、賊花岡山及ヒ四方地村・千原村ノ砲
台ヨリ、齊シク城中ヲ砲撃ス、嶽ノ丸・藤崎・飯田丸・

片山邸ノ各砲台並ニ之ヲ逆ヘ撃ツ、当時段山ノ賊稍増加
シ、時々城中ヲ狙撃ス、此日工兵隊厩橋ヨリ千葉城下ニ
至ルノ防禦線ニ交通路ヲ開キ、尋常堡壘ヲ屯管近傍ニ造
リ、且ツ火薬坑ヲ藤崎神社ノ境内ニ、単射坑ヲ片山邸内
ニ鑿開ス、

會計日誌

午后第一時坪井地方ニ聚糧シ、玄米四十五俵ヲ得タリ、
當時貯所ノ白米五百五十五石五斗ナリ、以テ十九日余
ヲ支フヘシ、玄米ハ則チ百十六石一斗ナリ、而シテ之ヲ
精白ニシ、百一十石二斗ニ減スルモ亦三日ト三分ノ二ヲ
支フヘキナリ、然ラハ糧米ノ統計ハ六百六十三石九斗九
升ニシテ、一日ノ消費ハ二十九石ナリ、以テ自今二十二
日ト三分ノ二ヲ支フルニ足ル、塩・味噌・干魚等ノ如キ
ハ尚余ス所アリトス、

精米六百六十三石九斗九升二十四石四斗九升ヲ加ヘテ、
六百七十八石四斗八升ヲ得ル、而シテ本月一日ヨリ八日
ニ至ルマテノ消費ヲ以テ、二百三十二石トスレハ、余ス
所即チ四百四十六石八斗八升アリ、以テ十五日余ヲ支フ
ヘシ、若シ夫レ一日一人ニ給スヘキ七合二勺五才ヲ減シ
テ六合トナストキハ、十九日ト三分ノ二ノ糧食ニ充ツヘ

キナリ、

三月二日

守兵配置表

- 同 警視二番組一小隊 三等中警部池端清彦、
○ 野砲官 十三聯隊第三大隊第四中隊 中尉三木一、少尉高並連壽、同河部勝連、
- 同 警視三番組一小隊 二等中警部赤羽友春、
○ 埋門樺安坂 十三聯隊第二大隊第一中隊 大尉宮崎定毅、中尉石川浪彦、少尉鈴木重郎、少尉試補吉井昇、
- 同 警視六番組一小隊 二等中警部加藤清明、
○ 工兵營裏 十三聯隊第二大隊第二中隊ノ内一小隊 少尉志賀範之、少尉試補湯川春尚、
- 千葉城 十三聯隊第一大隊第四中隊、大尉小葉竹直綱、中尉夏目勻、少尉板垣堯春、同森利邦、
- 同 十三聯隊第一大隊第一中隊ノ内一小隊 中尉大庭宣之、少尉試補井上頼雄、
- 下馬橋 十四聯隊第一大隊第三中隊 大尉山脇鎬太郎、中尉福田昌博、少尉吉川元永、少尉試補小泉勇次、
- 嶽ノ丸及ヒ本丸 十四聯隊第一大隊第四中隊 大尉丸井政重、中尉齋藤惟一、少尉試補石塚烈三郎、
- 東南部予備 十三聯隊第一大隊第一中隊ノ内一小隊 大尉福原豊功、少尉佐土原祐吉砲兵營、
- 西北部予備 十三聯隊第二大隊第三中隊 中尉佐武廣
- 同 警視五番組一小隊 三等大警部梁川濟、
- 古城 十三聯隊第一大隊第三中隊 大尉隈岡長道、中尉松平實之進、少尉今橋知勝、少尉試補新井太郎、
- 旧八代邸 十三聯隊第二大隊第二中隊ノ内一小隊 中尉岡本一布、同山本盛英、少尉重富時宜、同靜間浩輔、
- 法華坂右側 十三聯隊第一大隊第二中隊 少尉友岡正順、少尉試補沼田政次、
- 片山邸 十三聯隊第三大隊第一中隊 大尉小島政利、少尉黒萩重和、少尉試補永田盤之助、
- 同 警視一番組一小隊 同四番組一小隊 三等大警部川路利行、二等中警部渡部佳介、
- 藤崎神社 十三聯隊第三大隊第二中隊 大尉瀧川忠教、少尉石川博、少尉試補澁谷精、
- 漆畑 十三聯隊第三大隊第三中隊 中尉小林清吉、少尉試補安藤格、

命、少尉星加居綾、同宮崎富雄、同山形忠之丞^{步兵營}

○備考 十四聯隊ノ二中隊ヨリ城中ノ風紀衛兵ヲ出ス、

大砲配置表

○藤崎神社 野砲二門・白砲一門 大尉大崎長寛、

○片山邸 山砲二門・白砲一門 少尉試補長澤子之助、

○野砲營 山砲三門・野砲一門・白砲一門、少尉試補村上慧、

上慧、

○埋門 山砲二門 大尉左乙女英武、

○千葉城 野砲一門・山砲一門 少尉市川孝徒、

○城内 野砲二門・白砲一門 少尉富山茂郎、

○下馬橋 山砲一門・白砲一門 少尉試補田原鑑一、

○県庁 山砲二門・白砲二門 中尉高山信明、

○法華坂 山砲二門 少尉試補大須賀利勝、

統計野砲六門・山砲十三門・白砲七門

午前第一時、賊數十名山崎本町ニ来ル、我カ兵之ヲ狙撃ス、同第九時賊兵凡ソ数百名、八王子村辺ヲ絡繹来往スルヲ見ル、同第十一時、花岡山ノ賊壘ヨリ城内ヲ砲撃スルコト数十発、島崎村ノ賊壘ヨリ又夕砲三門ヲ以テ、我カ片山邸ノ守地ニ連射ス、又夕線外ニ徘徊スル土人ヲ捕エ、敵情ヲ探シ為メ軍曹並ニ兵卒四名ヲ、厩橋ヨリ安巳

橋方位ニ赴カシム、帰路賊兵十人計リ高田原ノ家屋或ハ

倉庫ノ間ヨリ不意ニ我カ兵ヲ狙撃ス、我カ兵地物ニ抛リ

且ツ戦ヒ且ツ退ク、午后第四時、軍曹櫻井莊一兵卒十名

ヲ卒ヒ、新町ヨリ高麗門ニ至リ転シテ明八橋方位ヲ偵察

ス、賊ノ守備甚タ敵ナリ、又夕西北八百米突ノ地ニ於テ、

賊ノ輜重陸續ス、此日工兵隊ハ、昨日来従事セル厩橋ヨ

リ千葉城ニ至ルマテノ交通路ヲ完成ス、又夕竟日单射壕

ヲ片山邸ニ鑿チ、及ヒ花畑作業場ノ急造対壕崩壊シ、尋

常東柴・尋常堡壘ヲ造ル、

會計日誌

午後第一時、唐人町ノ倉庫ニ貯蔵セシ玄米ヲ収聚セント

ス、賊予メ距離一二町ノ所ニ在リテ、我カ兵ノ至ルヲ望

ミ発砲ス、尚ホ衆ヲ励マシ、纒カニ四十俵ヲ得タリ、己

ニシテ花岡山ノ賊弾頻リニ来ルヲ以テ、飯田丸ノ守兵応

戦ス、困リテ潜カニ該所ノ彈薬ヲ會計部天幕跡ニ移シ、

而シテ金櫃ハ之ヲ宇土櫓ニ移ス、同第四時、會計各課長

各隊計官ト出張ノ準備ヲ議ス、是ヨリ先キ米苞ノ県庁ニ

在ルモノ四十五、悉ク之ヲ本部ニ輸シ、且ツ自今俘囚ヲ

シテ精米ノ役ニ服セシム、

三月三日、各処ノ砲戦前日ノ如シ、午前第十時、我カ片

山邸ノ守兵火ヲ段山ノ家屋ニ放ツ、賊兵モ亦タ同シク之ヲ焼ク、正午井芹村ノ街道賊ノ輜重進行スルコト猶ホ昨日ノ如シ、又タ野砲營ヨリ榴弾ヲ以テ之ヲ発射ス、午后我カ野砲營ノ守地篝火ヲ拳ケントスルニ際シ、段山ノ賊急ニ小銃ヲ発シ之ヲ妨ク、此日工兵隊単射壕ヲ片山邸ノ中ニ鑿チ、胸壁ヲ既橋ノ側ニ築キ、且ツ其家屋ヲ毀チ凸角堡ヲ棒安坂下旧屯營裏ニ造リ、交通路ヲ野砲營ニ穿チ、尋常堡監ヲ屯營近傍ニ造ル等竟日息メス、是ヨリ先キ、監獄宍戸正輝使命ヲ奉シ、二月二十四日城ヲ出テ高瀬南ノ関本營ニ達シ、本日帰城ス、即チ賊ノ状況數十条ヲ陳ス、曰ク、高瀬街道全ク梗塞セリ、曰ク、賊兵番船ヲ百貫沿海ニ備フ、曰ク、去月二十五日賊兵凡ソ七百横島ヨリ高瀬ニ向フテ進ム、曰ク、去月二十六日我カ第十四聯隊高瀬・植木ノ間ニ転戦ス、曰ク、高瀬以北悉ク官軍ノ有トナル、曰ク、山鹿ハ賊兵之ヲ占領ス、曰ク、高瀬ヨリ南ノ関ニ至ルマテハ、山野見ル所トシテ官兵ナラサルハナシ、曰ク、兩旅団ノ本營ハ南ノ関ニアリ、曰ク、南ノ関ニ來ル電報ニ云フ、去月百貫沖ニ碇泊セル軍艦ノ士官一名・水夫八名上陸シテ行ク所ヲ知ラス、曰ク、高瀬ノ賊軍中熊本県士ヲ混セリ、而シテ賊軍巨砲ナシ、曰ク、

電信線ハ南ノ関ヨリ通セリ、曰ク、聞ク、山鹿ノ賊ハ大約三千人ナルヘシト、曰ク、聞ク、賊兵大津街道ニ出張セルモノアリト、曰ク、当県士其上等ニ属スルモノハ毫モ志ヲ変セスト雖モ、其壯士体ノ如キモノニ至リテハ、専ラ賊軍ノ間ニ周旋奔走シテ愚民ヲ煽動シ、為メニ党与ヲ嘯集セリ、曰ク、農民中賊ノ為メニ薪水ノ役ヲ助クルモノアリ、或ハ為メニ金錢ヲ贈ルモノアリ、曰ク、西郷隆盛ハ坪井辺ニ潜伏シ、夜々寢処ヲ定メス、曰ク、賊声名ヲ得ンガ為メニ愚民ヲ誑カスニ、汝等ノ為メニ政令ヲ旧ニ復セント欲ス云々ノ言ヲ以テス、曰ク、且下官軍南ノ関途上腹切坂ノ嶮ニ抛リテ賊ヲ拒ク、曰ク、去月二十六日賊兵火ヲ高瀬町ニ放チ、過半之ヲ焼失セリ、曰ク、賊兵中或ハ白布ヲ頭ニ纏ヒ、甲冑身ニ着スルモノアルヲ見ルト、且ツ一書ヲ齎ラシ帰ル、其略ニ曰ク、二月二十八日陸軍少將三好重臣・同野津鎮雄書ヲ熊本鎮台長次官ニ贈ル、当地ニ旅団ハ不日將サニ其地ニ突入セントス、戰狀ノ如キハ委曲之ヲ宍戸監獄ニ問エト、因リテ軍中ニ令シテ曰ク、是ヨリ先キ宍戸監獄ヲ高瀬南ノ関ニ遣ハシ、以テ官賊ノ勢ヲ目撃セシメシニ、今日帰台具サニ報スルニ、処々ノ戰爭官軍屢々利ヲ得テ、不日將サニ大挙シテ

進撃応援セントスルノ確報ヲ以テス、由リテ更ニ周ク部下ヲ慰勉シ、心力ヲ竭サシメヨト、此日四方地村ノ賊星ニ軍旗ノ如キ旗ヲ掲ク、

武庫日誌

本日ヨリ歩兵當前ノ射的場ノ堀内ニ、二箇ノ坑倉ヲ穿テ、三日ヲ経テ功ヲ竣ル、乃チ彈藥ヲ其中ニ藏ス、又タ更ニ坑倉ヲ宇土櫓ノ北堀乃チ櫓方ヨリ空壕ニ下ラントスルノ地ニ開鑿シ、火藥及ヒ彈藥等ヲ区画シテ之ヲ格納セリ、該坑倉ノ広濶ニシテ土壤及ヒ位地ノ適切ナルハ、他坑ノ能ク及フ所ニアラスト雖トモ、新墾ノ路險ナルヲ以テ、其出入運搬等ノ艱難ハ又タ免ルヘカラサルナリ、然レトモ敵彈ヲ避クルニ至リテハ、最モ要地ト謂フヘシ、

三月四日、不日援軍ノ將サニ到ラントスルヲ以テ、城兵其機ニ投シ各方面ノ賊ヲ掃攘スル為メ略其部署ヲ定ム、本日花岡山及ヒ段山ノ賊星ヨリ大小砲ヲ以テ、我カ飯田丸並ニ県庁ノ守地ヲ射撃スルコト間斷ナシト雖トモ、兩守地ノ兵ハ肯テ応戦セス、午后第七時火ヲ段山ノ下ニ放チ、民舎ヲ焼ク、又タ工兵隊ハ塹溝ヲ樺安坂下旧屯營門側ニ築キ、交通路ヲ野砲營中ニ設ク、

病院日誌

砲彈頻リニ病室ニ墮落シ、就中一室ノ如キハ、屋上ヨリ樓ヲ穿チテ牀下ニ洞ス、

三月五日、法令書數章ヲ各隊中ニ頒布ス、曰ク、凡ソ兵員タル者ハ上官ノ命令ヲ奉戴シ、忠誠ヲ旨トシ、実義ヲ主トシ、国憲ヲ固守シ、万民ヲ保護スヘキモノナレハ、誤リテ兵員ノ名ニ反シ、声誉ヲ失ハサラシメンガ為メ、左ノ數目ヲ設ケ、以テ予メ之ヲ告諭ス、若シ夫レ之ヲ犯ス者ノ如キハ、当サニ嚴科ヲ以テ之ヲ処スヘシ、曰ク、上官ノ命ナクシテ火ヲ公私ノ家屋・山林等ニ放チ、及ヒ之ヲ毀損スルコト勿レ、曰ク、兵威ヲ恃ミ人民ヲ強迫シ、財貨ヲ掠奪スルコト勿レ、曰ク、軍用ニ充ツル必須ノ米塩等、時アリテ之ヲ官ニ收取スルヲ以テ、分捕ト誤認シ妄リニ人民儲藏ノ物品ヲ抄略スルコト勿レ、曰ク、人民・家畜ノ鳥獸及ヒ菜蔬ノ類凡テ飲食ノ資ニ供スヘキモノ、恣ニ之ヲ取ルコト勿レ、曰ク、兇暴ニ因リテ人民ヲ劫虐シ、婦女ヲ強姦スルコト勿レ、曰ク、人民ノ金銀ヲ強借シ、及ヒ強買強奪スルコト勿レ、曰ク、戦利ノ貨物ヲ私スルコト勿レ、曰ク、恣ニ降虜ヲ殺戮スルコト勿レ、曰ク、妄リニ營外ニ出テ、及ヒ絳線内ヲ離ル、コト勿レ、曰ク、哨兵ニ当リテ擅ニ守地ヲ離レ、及ヒ睡眠スルコト

勿レ、曰ク、軍中ニ在リテ叫呼シ人ヲ駭カシ、及ヒ浮説ヲ唱エテ軍氣ヲ沮喪セシムルコト勿レ、曰ク、飲酒度ヲ過ゴスコト勿レト、又タ軍中ニ令シテ曰ク、武器及ヒ分捕品ハ、會計部中被服課ニ於テ一切之ヲ処置スヘキモノナレハ、其之ヲ分捕セシモノ、隊号及ヒ姓名ヲ記シ、以テ之ヲ出タスヘキナリト、

払曉ヨリ高瀬・木ノ葉及ヒ植木地方ニ於テ、頻リニ砲声ヲ聞ク、午前第八時、我カ片山邸ヨリ段山ノ賊ヲ砲撃ス、同第十時、花岡山ノ賊壘ヨリ発セシ十二斤施条ノ白砲榴弾、我カ砲兵病室ノ中ニ炸裂シ、患者ニ傷ツキ大ニ家屋ヲ破壊ス、

酒並ニ烟草已ニ消耗シテ余ス所ナキヲ以テ、時々濁酒ヲ線外ヨリ収領シ、或ハ茶ヲ以テ烟草ニ代用シ、以テ城中ノ勞ヲ慰ス、

三月六日、午前第九時、賊安巳橋近傍ヨリ二十擲白砲ヲ以テ、我カ千葉城ノ守地ヲ射撃スルコト十一発、其砲彈甚タ烈ケシ、已ニシテ飛彈我カ砲床ノ側ニ破裂シ、伍長一名ヲ傷ツク、而シテ又タ段山ノ賊我カ片山邸ニ迫リ、昨夜ヨリ戦ヒ未タ息マス、我カ県庁及ヒ藤崎ノ守兵モ亦タ、時々銃砲ヲ以テ賊ト相闘ク、又タ安巳劇場ニ白砲ヲ

備エ、頻リニ城中ヲ射ル、我カ兵乃チ榴彈ヲ発シ之レニ当ル、已ニシテ賊兵凡ソ四百許隊伍ヲ編シ、八王子村近傍ヲ往来ス、直チニ野砲ヲ発シ之ヲ散乱セシム、其他終日砲戦ノミ、或ハ曰ク、是ヨリ先キ、城西小萩山方位ニ砲声アリト、此日工兵隊交通路ヲ野砲管中ニ穿チ、千葉城西裏ノ交通路ヲ修理シ、单射壕ヲ片山邸内ニ、胸壁ヲ千葉城下柵門ノ左右ニ築ク、

會計日誌

午后第一時京町ニ聚糧シ、粟百九十二俵ヲ會津家ニ得タリ、

三月七日、午前第八時四面ノ賊齋シク城ニ迫リ、兵鋒最モ鋭シ、暫時ニシテ退去ス、頃日來賊頻リニ攻撃ヲ試ム、我カ工兵隊又タ交通路ヲ野砲管内及ヒ埋門ニ穿チ、又タ門外ニ砲台ヲ築キ、尋常堡壘ヲ屯管近傍ニ造ル、此日約スラク、旅団兵已ニ熊本ニ達スレハ、各隊宜シク其守地ヲ棄テ力メテ攻勢ヲ取ルヘシト、乃チ進撃ノ部署ヲ定メ曰ク、歩兵二中隊ヲ以テ川尻口ノ先鋒トシ、同二中隊・砲兵一分隊^{第六大}内ヲ応援トシ、該歩兵ヲシテ砲兵ノ護衛ヲ兼ネシメ、歩兵六中隊・砲兵四分隊・工兵一小隊ヲ以テ本隊トシ、歩兵二中隊ヲ後衛トシ兼ネテ輜重ヲ護衛セシ

ム、且ツ予メ突圍隊ヲ編製シ、賊ノ退路ニ從フテ之ヲ尾撃セシム、然ルニ將サニ圍ヲ突カントスルニ当リテハ、兵員ノ甚タ寡少ナルヲ以テ、勢ヒ一守地ヲ棄テサルヲ得サルナリ、今千葉城ヲ捨テ樺安坂ヲ拒守シ、而シテ突圍隊ハ賊兵ヲ驅逐スル後チハ迎町ニ會シ、終ニ本隊ニ合スヘシ、又タ川尻口ノ先鋒ハ、先ツ長六橋ヲ過キ、白川ノ堤防ニ沿ヒテ直チニ川尻ヲ衝キ、二中隊ヲ其後方ニ置キ以テ諸方ノ応援ニ充ツ、又タ後衛ヲ置キテ輜重ヲ護衛セシメ、而シテ高橋口ノ兵ハ花岡山ヲ越エ高橋ヲ突キテ、直チニ松尾村ヲ經テ小島ニ出テ、其一中隊ハ同所ヲ守リ、他ノ一中隊ハ又タ川尻ニ到リテ本隊ニ合スヘシ、然レトモ、是レ川尻ニ突貫スルノ心算ヲ以テ決定セシモノナレハ、賊退去ノ方位ニ因リテ變換スルトキハ、更ニ本營ヨリ之ヲ指揮スヘシ、且ツ各隊其守地ヲ去ルノ後チ、後衛ハ直チニ聯隊管内ニ集合シテ命令ヲ待チ、衛戍ノ諸兵モ亦タ同時ニ予メ定ムル所ノ各守地ニ配布スヘキナリ、

病院日誌

砲彈ノ頻リニ聯隊病室ニ飛來スルヲ以テ、重病患者ヲ第一大隊第二中隊營舎ノ階下ニ移ス、

會計日誌

午后第四時三十分、賊彈我カ被服ニ番庫ニ破裂セシヲ以テ、各官拳テ之ヲ救ヒ、遂ニ消滅シ、金庫ヨリ悉ク金函ヲ出ス、後チ之ヲ暗道途中ニ埋ム、

三月八日、午前第八時三十分各地ノ賊城中ヲ砲撃ス、工兵隊ノ作業ハ昨日ニ異ナルコトナシ、

武庫日誌

運搬役夫隙ヲ窺フテ逃亡スルモノアリ、

會計日誌

午后第三時觀音坂地方ニ聚糧シ、粟二十九苞ヲ得タリ、三月九日、終日砲戰前日ノ如シ、夜ニ至リテ小萩山ノ方位ニ砲声ヲ聞ク、

進軍ノ輜重糧食並ニ厨器支給ノ方法ヲ設ク、曰ク、進撃ノ際糧米ハ予備トシテ、人員ニ応シ現品ヲ以テ三日ヲ支フヘキモノヲ給ス、且ツ之ヲ運搬スルニハ牛ヲ要シ、屠人ヲシテ之レニ從ハシメ、以テ不時ノ求ニ応セシム、曰ク、一人ニ給スヘキ梅干ハ、一日五勺ノ比例ヲ以テス、曰ク、一中隊ニ給スル塩ハ、一斗入一苞ヲ以テス、曰ク、炊事ハ各隊自カラ弁シテ足レリトスルトキハ、精米六合ト金六錢トヲ以テ目途トス、若シ夫レ土地ノ便宜ニ依リ、民舎ニ在リテ其支給ヲ受クルトキハ、金二十二錢ヲ目途

トシテ之ヲ償フヘシ、曰ク、行厨・吸筒ハ各隊支給ノ器ヲ携帶スヘシ、然レトモ戦地ノ景況ニ依リテ背囊ヲ脱スル等ノ事アルトキハ、兵糧彈藥相通シ用ル囊一個及ヒ行厨器代用ノ竹皮、或ハ紙ヲ給ス、曰ク、三角繙帶ヲ各人ニ一個ヲ給ス、曰ク、一名各「ヒスコイト」^(ビスケット)六個ヲ給シ、以テ臨時ノ糧ニ充タシム、曰ク、隊馬ノ牟麦ハ三日ヲ支フヘキモノヲ給シ、薔苳ハ其地方ニ就キテ之ヲ購求ス、尤モ歩兵士官ノ乗馬ハ其方向ニ依リテ定則ノ価金ヲ付与スヘシ、曰ク、兵食炊爨ノ為メ坪釜二個・平釜二個ヲ一中隊ニ給ス、曰ク、右ニ挙クル如キ諸品ヲ荷担スルニ便ナラシメンカ為メ、尺目籠四個・琉球筵一枚ヲ一中隊ニ給ス、若シ一大隊ナルトキハ二十個ヲ以テス、且ツ雨覆ヒノ如キハ、油紙ヲ以テ琉球筵二枚ノ間ニ挿ミテ之ヲ綴ル、曰ク、茶鐺及ヒ「ブリッキ」盛水器各四個ヲ一中隊ニ給ス、曰ク、「ラントール」ハ一中隊コトニ各二個ヲ給ス、曰ク、草鞋ハ六足乃チ三日ヲ支フヘキモノヲ給ス、而シテ足袋ハ一足ヲ以テス、曰ク、一中隊荷物ノ量ハ、彈藥ヲ除クノ外五百三十五貫目トシ、其半大約二百七十五貫目ハ、駄馬十一頭ヲ要ス^{当地方駄馬多クハ牝馬ヲ用ヒルニ由リ一頭コトニ數二十五貫目ヲ以テス}、余ス所ノ二百六十五貫目ハ役夫三十七人ヲ要ス^{毎一人ニ數七、貫目ヲ以テス}、而シテ別ニ

馬夫十一名ヲ付スルヲ以テ、役夫ノ通計四十八人ナリ、曰ク、定ムル所已ニ前ノ如シト雖トモ、土地ノ遠近、道路ノ難易ニ依リテ実行スヘカラサルモノアルトキハ、臨機応變ノ議決ヲ取リテ以テ之ヲ処分ス、又タ運動病院患者ノ処置方法ヲ定ム、曰ク、凡ソ戦地ニ在リテハ、其創痍患者ノ比例全軍ノ五分ノ一ナルヲ以テ、一中隊ノ兵員二百六十四名ナルトキハ傷者五十三名ナリ、乃チ軍医一名・看病人及ヒ卒各一名ヲ附屬セシム、曰ク、「ラントセル」一個・小長持一掉・葉籠一荷・葉鐺一個・輸送台三個ヲ要ス、曰ク、傷者ヲ保護シテ繙帶所ニ送ルニ看病卒六名ヲ付ス、曰ク、治療器械藥劑ヲ除クノ外ハ、患者ノ糧食及ヒ衣服・被衾ニ至ルマテ、現品ヲ以テ之ヲ受ク、曰ク、茲ニ治療需用ノ消耗物ヲ挙ク、即チ木綿一千反・撤糸量二貫目・繙帶百十卷・綿量五百目・油紙三十枚・三角繙帶七十個是ナリ、又タ令シテ曰ク、各隊各部ニ於テ使用セル所ノ小使・給仕・傭夫・從僕・馬丁ニ至ルマテ、朝昼夕夜凡ソ四回点呼シテ之ヲ検査セヨ、曰ク、公務ヲ奉シテ線外ニ出ツル者ハ、允可ノ証ヲ參謀部ヨリ受ケヨ、曰ク、守城中事細大トナク怪異ノ者ヲ認ルトキハ、疾ク調査ヲ遂ケト、

病院日誌

賊弾ノ我カ病室ヲ撃破セルヲ以テ、患者中死傷アリ、因リテ請テ患者十三名ヲ第一大隊第二中隊ノ営舎ニ移シ、余ハ之ヲ病院ニ移ス、

會計日誌

午前第十時、賊ノ彈丸我カ第二炊事場ヲ衝擊シ、奥山軍吏補為メニ即死シ、宍戸監獄モ亦タ重傷ヲ左腕ニ被ル、此日天幕ヲ暗道ニ移シ以テ本営皆茲ニ転ス、

三月十日、砲戦前日ノ如シ、午后第三時三十分、軍曹一名兵卒十名ヲ率ヒ、鹽屋町明八橋方位ニ派遣シ、別二軍曹一名ニ兵卒十名ヲ付シ、新町ヨリ蔚山町・職人町ニ向ハシメ賊情ヲ探ラシム、賊ノ守備前日ノ如シ、此日工兵隊胸壁ヲ片山邸内ニ築キ、交通路ヲ野砲管内ニ開キ、空壕ヲ棒安坂上ニ鑿チ、及ヒ尋常堡籃ヲ屯営近傍ニ造ル、段山ノ賊矢文ヲ島邸ノ守地ニ発射ス、其他縁外各処ノ尤モ見易キ所ニ同文ヲ書シテ揭示ス、其文ニ曰ク、

政府明リニ暗殺ヲ謀リ、自ラ国憲ヲ犯ス、西郷陸軍大將衆ヲ帥キテ、行キテ將サニ罪ヲ問ハントス、然ルニ当県鎮台名義ヲ弁セス、城ヲ閉チテ拒キ守リ、以テ天下ノ民ヲ害ス、其罪甚シ、我カ衆憤怒シ、將サニ日ヲ刻シテ城

ヲ屠ラントス、但蒙昧脅從ノ輩、其情憫ムヘキモノアルヲ以テ、前非ヲ悔ヒ兵器ヲ捨テ帰順スル者アラバ、必スシモ其罪ヲ問ハサルナリ、且ツ山鹿・高瀬諸道ノ如キハ我レ己ニ悉ク之ヲ撃破ス、所在義兵モ亦タ將サニ争ヒ起リテ、其窟ヲ勤セントス、公等果シテ誰カ為メニ孤城ヲ守リ、糧竭キ援絶エ、殆キコト臨深履薄ノ甚シキニ至ルヤ、兄等其レ速ニ向背ヲ決セヨ、

會計日誌

出征中留守ノ人ヲ定メラル、午后第四時賊弾ヲ第一賄所ニ発射シ、為メニ炊夫二人ヲ傷ツク、

三月十一日、午前第九時古城ヨリ伍長一名・兵卒八名ヲシテ高麗門近傍ヲ偵察セシム、法華坂ノ守地モ亦タ下士五名ヲシテ同地方ヲ偵察セシメシカ、賊ノ哨兵三十人許、概ネ十米突乃至十五米突ノ距離ヲ以テ散在シ、堡壘ヲ寺院ニ築キ、男女混雑シテ運搬ノ役ヲ取ラシム、己ニシテ

賊我カ兵ノ到ルヲ見テ、急ニ起テ発射ス、我カ兵モ亦銃ヲ発シテ応戦シ、漸次ニ退キ還ル、其他砲戦前日ノ如シ、就中午后第二時賊兵赤尾口田畑ノ砲台ニ抛リテ、我カ野砲ヲ撃スルヲ以テ、該守地ノ兵野砲ヲ放チテ之レニ応ス、戦方ニ關ナルトキ、会我カ砲弾賊ノ砲台右翼ノ砲

眼ヲ撃破シ、復タ戦フコト能ハサラシム、又タ城ノ南方
白川堤ニ砲台ヲ築キ、砲二門ヲ以テ飯田丸ヲ攻ム、同第
十時賊兵數十名寺原ニ砲台ヲ築ク、本丸及ヒ千葉城・飯
田丸ノ各砲台ヨリ榴弾ヲ連発シテ、遂ニ之ヲ払除ス、此
日工兵隊胸壁ヲ嶽ノ丸ニ築キ、交通路ヲ野砲營ニ開穿ス、
三月十二日、午后第一時諸方面砲戦ヲ始ム、会片山邸ヨリ
発セル砲弾、段山ノ人家ニ破裂シテ之ヲ焼ク、賊兵数名
遁レ走ル、警視隊川路警部・池端警部等此勢ヒニ乗シテ
又タ兵ノ甚タ寡少ナルヲ測リ、輕拳シテ之ヲ抜カントシ、
兵ヲ分チテ二トナシ、一ハ僅カニ十五六名右翼ノ山下ニ
沿ヒ、一ハ其正面ニ向フテ齊シク進ム、近ツケハ則チ其
果シテ空塞ナルヲ以テ、正面ノ兵益々進ミテ賊ノ根拠ヲ
距ルコト僅カニ二三間ノ所ニ迫ル、然ルニ賊兵突然連射
シテ防禦ス、是ニ至リテ城中始メテ段山ノ戦ヒ起ルヲ知
リ、遽カニ小林中尉以下二十名ヲ遣リ応援ス、而シテ山
本中尉ノ部下一中隊ヲシテ史ニ攻撃ノ部署ヲ定メ、鳥邸
ノ前ニ至リ中隊ヲ分チテ二トナシ、一ハ段山ノ南ニ進ミ、
一ハ段山ノ北ニ進ミ以テ之ヲ救フ、是ノ時ニ当リ、我カ兵
向キニ右翼山下ニ沿ヒテ進ムモノ已ニ賊ノ背後ニ出テ、
急ニ之ヲ蹙ム、賊支フコト能ハス、走リテ阜山ノ胸壁ヲ

保ツ、会マ池端三等大警部銃丸ニ中リテ死ス、川路等屈
セス兵ヲ督シテ進ム、然ルニ彼我ノ間太タ相ヒ接近スル
ヲ以テ、銃ヲ発スルニ違アラス、瓦礫ヲ擲ミテ之ヲ投争
ス、其猛戦不撓見ルベキモノトス、當時花岡山及ヒ赤尾
口ノ賊、頻リニ段山ヲ砲撃シテ我カ進路ヲ遮断セントス、
而シテ野砲營片山邸ヨリ又タ段山ノ賊巢ヲ撃テ、飯田丸・
県庁・法華坂等ヨリハ花岡山ノ砲台ヲ砲撃ス、此ノ如ク
段山ノ戦ヒ方ニ酣ニシテ、勝敗未タ以テ決セサルナリ、
仍テ澁谷少尉試補ハ兵卒十二名ヲ率ヒ本妙寺巖ニ向ヒ、
高並少尉ハ一半隊ヲ率ヒ砂薬師坂下ヲ守リ、以テ賊ノ左
側ニ備フ、而シテ段山ニ塹溝ヲ築造シ、相戦フコト夜半
ニ至ル、賊塁モ亦タ甚タ堅牢ニシテ、且ツ兵勢ノ増加ス
ルヲ以テ未タ抜クコト能ハス、四面ノ賊兵モ亦タ盛ニ我
カ各守地ヲ砲撃ス、守兵力戦シテ之レニ当ル、此日ノ戦
ヒ固ヨリ偶然ニ起ルヲ以テ、我カ各隊曾テ之ヲ知ラス、
故ニ兵員甚タ寡少ニシテ配布全カラサレハ、抜クヘキノ
塁モ亦タ抜ク能ハサルナリ、山本中尉ノ兵ヲ出スニ及テ
ハ、賊ノ警備已ニ全ク整ヒ、安巳橋ノ賊兵モ亦タ来援ス
ルヲ以テ、両軍戦ヒ最モ猛烈ニシテ死傷モ亦タ従テ多ク、
深史ニ達スレトモ戦鬪終ニ罷マサルナリ、此日工兵隊小

壕ヲ穿チ、下馬橋ノ渠水ヲ疏通セシメ、又タ胸壁ヲ獄ノ丸ニ築ク、本日賊使白旗ヲ携エ書ヲ旗竿ニ附シ、我カ下馬橋ノ守線ニ來ル、乃チ之ヲ捕フ、

病院日誌

此日死傷最モ多ク、入院スルモノ三十四人ニ及フ、

武庫日誌

小銃及ヒ彈藥等ハ之ヲ片山邸ノ前ニ輸シ、武庫主管一人ヲシテ請求ニ応セシム、

會計日誌

役夫數十名ヲ率ヒ山崎地方ニ聚糧シ、精米六十九俵ヲ得、京町會津屋ニテ濁酒七八樽ヲ得ル、又タ別ニ魚油二十六樽ヲ県庁前ノ河中ニ得タリ、此日夜食ヲ給ス、元來夜食ヲ兵士ニ給スルハ戰場ノ常ナリト雖トモ、糧食ノ欠乏ナルヲ以テ、開戦以來全ク之ヲ廢セリ、故ニ特ニ之ヲ茲ニ記ス、

三月十三日、段山ノ激戦昨夜來勝敗未タ決セス、而シテ賊兵ハ漸ク増加シ、我カ軍益々疲勞セルヲ以テ、戦兵ヲ交換セシメンカ為メ先ツ第一中隊ヲ二分シ、段山・大森辺乃チ我カ軍ノ左翼ニ進ミ、三分隊ハ第二中隊ト交換シ、余ス所ノ二分隊ハ、我カ中央ニ在ル台上ニ於テ防禦線ヲ

鈍角形ニ配布シテ、同第二中隊ト交換シ、警視隊ト共ニ

賊ノ正面ニ当ル、別ニ黒萩^(重砲)少尉兵卒四十余人ヲ率ヒ右翼

ノ畑ニ配布シ、段山ノ北賊壘ニ向テ攻撃シ、且ツ彼ノ迂

回ヲ絶ツ、此ノ如ク新兵交交シテ銃声モ又從ツテ烈ケシ、

然ルニ曉霧ノ未タ霽レサルヲ以テ、賊軍ヲ確認スルコト

能ハス、徒ニ彈丸ヲ浪費スルノミ、已ニシテ天方ニ明ケ

霧始メテ霽ル、両軍相對スル其間僅カニ数十歩、我カ軍

奮激乃チ猛ニ之ヲ射撃ス、賊走リテ山上中央ノ凹地ニ潛

伏シ、尚屈撓セスシテ狙撃ス、我カ軍死傷頗ル多ク、戦

ヒ最モ苦シム、因テ策ヲ決シテ之ヲ衝突セントシ、午前

第九時澁谷少尉試補兵卒三十八名ヲ率ヒ、警視隊ト共ニ

装剣銃ヲ揮ヒ、吶喊シテ齊シク進ミ直チニ数歩ノ近キニ

迫ル、然ルニ賊ノ胸壁山上ニ在リテ我カ兵遂ニ抜クコト

能ハサルノミナラス、死傷甚タ多キヲ以テ、止ヲ得ス兵

ヲ還シテ旧線ニ復ス、當時大庭中尉ノ三分隊ハ、一時賊

ノ右側山上ノ胸壁ヲ奪フト雖トモ、久シク拋守スヘカラ

サルコトヲ慮リ、壁ヲ棄テ退ク、大庭中尉・井上少尉試

補等モ亦タ殪ル、原田軍曹兵若干ヲ率ヒ、我カ右翼ナル

田島ニ配布シ、席或ハ板ヲ以テ簡易ナル楯ヲ造リ、段山ノ

北賊壘ヲ攻撃シ、兼ネテ其迂回兵ノ援路ヲ絶ツ、午后第

(敵通)

一時三十分我カ丸井大尉ノ一小隊、右翼井芹川ヲ潛行シテ迂回シ、段山ノ背後ニ出ツ、是ヨリ先キ、賊ノ応援井芹川ノ下流ニ潜伏シテ、屢々我カ迂回兵ヲ阻防セリ、因テ其上流ヨリ迂回シテ、殆ント段山ノ背後ヲ衝カントスル時、川中ノ賊兵ト相会シ、堀山軍曹兵卒五名衆ニ先チ進ンテ、銃剣ヲ以テ賊兵ヲ斃ス、川中ノ賊支フルコト能ハスシテ走ル、因リテ益々進ミ、川中ヨリ吶喊シテ段山ノ背後ヲ衝ク、是ニ於テ正面ノ兵モ亦タ齊シク突撃シテ火ヲ賊巢ニ放チ、三面合撃賊軍倉惶出ル所ヲ知ラス、死傷算ナク争テ羣ヲ脱シ、四方地・島崎諸村ヲ望ミテ潰走ス、時ニ午後第三時ナリ、是ヨリ先原田軍曹ノ散兵ヲ布テ漸ク進ムヤ、段山ノ北砲台ヲ射撃ス、然ルニ我カ台上ノ散兵彼我ヲ判スルコト能ハサルヲ以テ、第十四聯隊「オロフラン」ヲ吹カシムルニ、凶ラサリキ、賊兵惶遽逃走ス、故ニ我カ右翼兵益々進ミ、鈍角形ノ散兵モ亦タ勢ニ乗シ、遂ニ午前衝突セシ巢窟ヲ覆シ、一晝夜ノ激戦ヲ以テ段山悉ク我カ占領スル所トナル、因テ片山邸ノ山砲二門ヲ移シ、砲歩兵ヲシテ之ヲ守ラシム、此戦ヒ賊ノ屍ヲ得テ之ヲ埋ムル者七十有三、生捕四、且ツ飯田丸・千葉城ノ如キモ亦タ、安巳橋及ヒ花岡山ノ賊ト砲戦シ段山ノ声援ヲ

ナス、県庁・片山邸・野砲營・藤崎ノ砲台ヨリ花岡山ノ

砲台ヲ撃射ス、而シテ法華坂ノ守兵ハ、賊ノ火薬庫北岡

村ニ在ルモノヲ焼滅ス、是ニ至リテ令ヲ出タシ、段山ノ

賊ヲ掃蕩セシコトヲ告ク、此日工兵隊ハ銃丸ヲ冒シ、塹

溝堡ヲ段山ニ造リ、大捷後直チニ胸壁及ヒ砲台ヲ其周圍

ニ築キ、交通路ヲ開キ、井芹川ノ石橋ヲ撤ス、又タ生捕

ヲ糾問シテ賊情ヲ告ケシム、曰ク、西郷・桐野・篠原等

ハ川尻ニ在リシカ、篠原ハ已ニ植木口ニ戦死セリ、別府

モ亦タ二日以前ニ死セリ、又タ曰ク、四方攻城ノ賊ハ其

衆ハ小隊ナリト、

病院日誌
死傷最も多ク、入院スルモノ九十三名、即死者四十名ニ

至ル、

會計日誌

京町会津屋ニ於テ濁酒十樽ヲ得ル、此日進撃中濁酒數樽

ヲ給ス、而シテ段山ニ於テ得ル所ノモノハ、粟三十八俵・

小麦十二俵・玄米十七俵・切干大根一俵・大豆一俵・唐

芋一俵・粳米二十俵・餅米一俵、是ヨリ別ニ精米二十九

俵・玄米一俵ヲ小笠原邸ニ得タリ、

武庫日誌

賊ノ小銃二百三十余挺・彈藥數百発ヲ得タリ、然ルニ此小銃ハ其種類甚タ多ク、大概「エンピール」「スナイドル」「ウルソン」及ヒ和銃等ナリ、就中「エンピール」銃ヲ以テ最も多シトス、而シテ其彈藥函ハ背囊ニ模倣セシ木製ニシテ、其表面ニ第五番大隊八番分隊ト書シ、側面ニ国府ト記セリ、

三月十四日、軍中ニ令シテ曰ク、収獲藥品ノ流動物及ヒ粉質物ヲ誤認シ、葡萄酒・酒石酸等ノ物ト誤認シテ、ア
ンモニヤ或ハキニヒネヲ服シ、不測ノ禍害ヲ醸セシ者アレハ嚴ニ之ヲ禁シ、必ス医官ノ検査ヲ経ルヘシ、又夕午
前第八時兵若干ヲ出シ、坪井・廣町・千反畑方位ヲ偵察セシメ、暫クシテ城ニ帰ル、午后第三時一小隊ヲ出タシ
日向崎村ヲ偵察セシメ、別ニ島崎ニ進撃シ、行途諸所ニ
火ヲ民舎ニ放チ、島崎ノ賊ト戦ヒ輕ク兵ヲ収ム、日向崎
村ニ向フモノモ亦夕火ヲ放チテ還ル、此日工兵隊胸壁及
ヒ交通路ヲ段山ニ造リ、其周圍ノ樹木ヲ伐リ鹿柴ヲ植エ、
夜ニ入りテ井芹川ノ下流ヲ塞キテ水ヲ湛ヘシメ、以テ段
山前面ノ守備ヲ固フシ、並セテ漆畑前面ノ畑中ニ灌溉シ、
賊ノ侵入ヲ除キ、我カ守兵ヲ減セント欲ス、此日谷司令
長官感状ヲ下タシテ曰ク、一昨夜來賊ノ險壘ヲ攻撃シ、

昨午后ニ至リ戦ヒ頗ル困メリト聞キ、乃チ親ラ哨所ニ臨
ミテ之ヲ点検セシニ、十四聯隊迂廻兵ノ勇進、十三聯隊
及ヒ警視隊ノ力戦ヲ以テ、遂ニ賊ノ險寨ヲ抜クコトヲ得
タリ、是レ將校節度ノ宜ヲ得ルニ頼ルト雖トモ、亦夕下
士兵卒ノ力ヲ効スニ非サレハ、安ソ能ク此ニ至ルヲ得ン
ヤ、且ツ砲兵ノ精、工兵ノ巧ノ如キモ亦夕深ク感賞スル
所ナリ、因リテ將サニ之ヲ上陳シテ命ヲ請ハントスルニ
先タチ、今權リニ之ヲ各部下ニ告ク、

病院日誌

千葉城及ヒ古京町ノ小繙帶所ヲ廢シ、医官ハ之ヲ病院ニ
合ス、

會計日誌

正午賊彈ノ為メニ第二賄所ヲ擊破セラル、午后第五時三
十分ニ及ヒ、賊ノ彈丸再タヒ宇土櫓ニ破裂ス、此日賊ノ
屍ヲ埋ムルニ当リ、各自所有ノ金五拾九円七拾二錢一厘
ヲ得タリ、因リテ請フテ其半額ヲ發見セシ役夫ニ与ヘ、
余ハ之ヲ埋屍ノ役夫ニ賜ヒ以テ慰勞奨励ノ為メニス、

三月十五日、昨夜來植木駅ノ方位ニ於テ銃聲頗ル熾ンナ
リ、本日ニ至テハ砲声ヲ交フ、蓋シ我カ応援ノ兵進撃シ
近接スルヲ以テ、遂ニ激戦ニ及ヒシナラン、午前第八時

県庁ノ守兵花岡山及ヒ長六橋辺ニ屯集スル賊ヲ見テ、數回之ヲ砲撃ス、已ニシテ賊兵凡ソ一小隊花岡山ヲ下タリ、段山ノ砲台ヲ距ルコト一千七百米突ナル石山ニ登リ、漸ク進ンテ小萩山ニ向フ、須臾ニシテ二小隊許又タ次キ進ム、段山ノ守兵乃チ榴弾ヲ以テ之ヲ撃ツ、之ヨリ先原田軍曹ヲシテ兵卒四名ヲ卒ヒ、高麗門辺ヲ探偵セシメシニ、賊卒然塁ニ抛リテ狙撃ス、原田軍曹銃丸ニ中ツテ殞ル、因リテ更ニ兵五名ヲ出タシ、其屍ヲ揚ケント欲スレトモ、復タ其狙撃スル所トナリ、進ム能ハス、松平中尉モ亦タ一小隊ヲ率ヒ、牧崎及ヒ本妙寺ヲ偵察ス、異事ナキニヨリ該寺並ニ島崎村ニ放火シテ帰ル、午后復タ偵察斥候ヲ山崎ヨリ長六・安巳二橋ノ近傍ニ派遣シ、途中賊ノスナイドル・彈藥百発ヲ得テ帰ル、又タ玄米數十俵ヲ段山燒跡ニ得タリ、但法華坂・藤崎ノ花岡山ニ於ケル野砲營ノ出京町ニ於ケル唯互ニ砲戦スルノミ、此日工兵隊ハ前業ヲ継キテ、胸壁・交通路等ヲ段山ニ造リ、鹿柴ヲ植エ及ヒ漆畑ヨリ段山ニ至ルマテ、坂路ノ側ニ交通路ヲ穿ツ、三月十六日、砲戦前日ノ如シ、午前第七時三十分、長六橋賊拠ノ近傍ニ方テ火ヲ失フニ会ス、県庁及ヒ飯田丸ノ守兵山野砲ヲ放チテ之レニ乘ス、賊兵狼狽喚呼ス、同第十時

三十分、賊兵數名段山守地ノ溝内ヨリ潛カニ我カ線内ニ入ラントス、哨兵認メテ之ヲ射撃ス、賊伏匿行ク所ヲ知ラス、時ニ賊兵千原ノ近傍ニ進入シテ発射ス、我カ兵応戦暫時ニシテ止ム、夜間植木口ノ砲声甚タ近キヲ覺フ、此日工兵隊交通路ヲ段山ニ開キ、又タ別ニ交通路ヲ漆畑ヨリ段山ニ至ル間ノ側ニ設ケ、胸壁ヲ段山高麗門通りノ間ニ築キ、鹿柴ヲ樹ユ、

武庫日誌

近日記スヘキコトナシト雖トモ、花岡山及ヒ山崎等ノ賊彈我カ飯田丸ノ兵器庫ニ落下スルモノ、未タ全ク減セス、又「スナイドル」銃彈藥ノ大ニ減少スルヲ覺フ、但「エンプール」銃彈藥ハ、夜間ノ探射ニ要スルヲ以テ日々之ヲ支出ス、而シテ砲彈ノ消耗漸ク減スト雖トモ、藤崎・県庁・飯田丸・野砲營諸塁ノ如キハ敢テ異ナラス、

會計日誌

午后第二時三十分、牧崎ニ聚糧シテ玄米百九俵ヲ得タリ、而シテ北川大尉ハ魚油二樽、丸井大尉ハ玄米五俵ヲ送付ス、別ニ粟七十一俵ヲ得タリ、

三月十七日、午前第九時城内飯田丸ノ守兵、下通町及ヒ白川堤ノ賊ト砲戦ス、其他野砲營ノ守兵ハ柿原村砲台ノ

賊ト砲戦シ、千葉城ノ守兵ハ時々安巳橋ノ賊ト戦フ、又
 タ偵察兵士卒十五名ヲ安巳橋辺ニ派遣ス、賊兵七八名炬
 火ノ準備ヲナスヲ見、直チニ之ヲ狙撃ス、彼レ狼狽遁走
 ス、此日工兵隊交通路ヲ段山及ヒ漆畑ヨリ段山ニ至ルマ
 テノ間ニ造リ、尋常堡籠ヲ屯管ニ造ル、夜ニ入りテ井芹
 川ノ堰堤ヲ修理セシム、

會計日誌

玄米十一俵・粟十一俵・麦二俵・大豆二俵ヲ聚糧ス、此
 日糧米ヲ算スルニ精米五百五十石・餅米二十石・粟三十
 石アリ、之ヲ合スレハ則チ六百石トナル、因テ一日ノ消
 費平均凡ソ二十石ト見做ストキハ、以テ三十日ヲ支フヘ
 シ、

三月十八日、植木駅方位ノ砲声昨夜来最モ劇シ、蓋シ兩
 軍ノ戦ヒ方ニ關ナルヘシ、賊牧崎村及ヒ柿原村ニ胸壁ヲ
 築ク、段山ノ守兵之ヲ認メ、乃チ実弾及ヒ榴弾ヲ発シテ
 之ヲ妨ク、千葉城ノ守兵モ亦タ安巳橋及ヒ山崎ノ賊ト砲
 戦ス、又タ日々ノ砲戦砲彈ノ欠乏ヲ慮リ、賊彈ノ破裂セ
 サルモノハ、悉ク之ヲ収獲シテ我用ニ供ス、薄暮ヨリ大
 津地方一帶ノ連山ニ放火ス、夜ニ入りテ銃声ヲ小萩山方
 位ニ聞ク、此日工兵隊交通路及ヒ胸牆ヲ段山ニ設ケ、且

ツ堡籠ヲ以テ小橋ヲ段山ノ右翼ナル小川ニ架ス、
 會計日誌

午前第七時濁酒九十樽ヲ坪井八百屋町ニ得、及ヒ薪凡ソ
 三万貫目ヲ坪井ニ得タリ、

三月十九日、去ル十五日ヲ以テ命ヲ賊彈ニ殞セシ原田軍
 曹ノ屍、並ニ携帶ノ兵器ヲ収復セシム、又タ士卒五名ヲ
 出タシ、山崎ヨリ安巳橋辺ヲ偵察セシム、通町ニ於テ賊

十人計リヲ見、直チニ之ヲ射撃シテ帰ル、午后第四時二
 十分賊兵頻リニ砲撃ス、我カ段山・県庁及ヒ飯田丸ノ守
 兵齊シク応戦ス、頃日来已ニ滋養物ニ乏シクシテ、負傷者
 ノ食事ニ充ツヘキ物品ナキヲ以テ、城内ノ池水ヲ切り落
 シ鯉・鮒ノ類ヲ漁シ、或ハ豆腐・飴・菓子ノ類ヲ製シ、

以テ之ヲ給ス、賊兵守備ヲ嚴ニセンカ為メ、花岡山下井
 芹川・坪井川トノ合流ヲ堰ク、是ニ於テ段山及ヒ野砲營
 前面ノ田畑悉ク漲水トナリ、光景恰モ一大湖水ノ如シ、坪
 井川ノ満水ハ寺原ノ田畑ニ注ギ、却テ我カ守線ノ利トナ
 ル、是ヨリ先段山ヲ攻略スルヤ、守線頗ル延長ナルヲ以
 テ、段山ノ前面井芹川ヲ関キ田畝ニ水ヲ注キ、防禦ノ一
 助タラシメントノ計画ヲナス、今日却テ賊ノ為ス所ト為
 リ、以テ我カ突出ノ道ヲ塞キ、攻兵ヲ減スルモノトス、

我亦大ニ守兵ヲ滅シ、他日突出ノ余力ヲ充分ナラシム、其利害果シテ何レニアルヲ知ラス、此日工兵隊段山ニ於テ交通路及ヒ横牆ヲ設ケ、並ニ尋常堡籃ヲ屯宮近傍ニ築ク、三月二十日、午后第十一時賊兵數十名京町及ヒ加藤社辺ニ散布シ、劇シク城中ヲ狙撃ス、是ニ於テ野砲營・埋門・千葉城等ノ守地ヨリ応戦ス、須臾ニシテ賊兵ヲ収メテ出京町ニ退ク、県庁ノ守兵モ亦タ北岡村ヲ砲撃セシニ、其照準頗ル精密ナルヲ以テ、賊兵辟易ノ色アリ、植木地方火勢甚タ熾ナリシカ、後チ又砲声ヲ聞ク、此日二月二十二日ヨリ昨十九日ニ至ル迄テノ台兵及ヒ警視隊ノ死傷ヲ算スルニ、死者百二十人、内將校十人・警部六人・下士卒七十二人・巡查三十二人ナリ、而シテ傷者三百四十八人、内將校九人・警部七人・下士卒二百四十七人・巡查八十五人ニシテ統計四百六十八人ナリ、是ヨリ先キ潜使ヲ発シ、第一旅団ニ報セシメテ曰ク、此地戦利アリ、尔来唯相砲戦スルノミニシテ、賊兵モ亦タ僅カニ八百余ニ過キス、城中益々警備ヲ嚴ニシ、賊ヲシテ侵スコト能ハサラシム、且ツ本日ヨリ後チ二十日余ノ食ヲ余セリ、今日ノ安危実ニ此孤城ニ在リ、然ルニ賊兵長圍ノ策ヲナシ、以テ我カ軍ノ糧ノ尽クルヲ待ツ、聞ク、

今田原ニ戦フト、間々又タ砲声アリ、其地若シ速ニ賊軍ヲ撃破スルコトヲ得ハ、此地ノ賊ハ戦ハスシテ自ラ潰走センノミ、城中ノ者皆頸ヲ延テ旅団ノ疾ク来リ進ムヲ俟ツ、且ツ高橋辺賊兵甚タ寡ナシ、因リテ翼クハ一併隊ヲシテ海路ヨリ進撃シ、別ニ軍艦ヲ阿久根辺ニ出タシ、賊ノ彈薬及ヒ糧道ヲ断タンコトヲ、余ハ仔細ニ之ヲ使者ニ質セヨ、

會計日誌

此日聚糧シテ玄米四俵ヲ坪井ニ得、粟及ヒ小麦各九俵ヲ千葉城ノ近傍ニ得タリ、

三月二十一日、昨夜賊兵凡ソ二十名我カ段山ノ守地ヲ襲フ、哨兵撃テ之ヲ退ク、本日士卒十八名ヲシテ山崎及ヒ安巳橋辺ヲ偵察セシム、午后第四時頃植木地方ニ於テ放火所ニ熾ナリ、又タ銃声ヲ聞ク、夜半ニ至リテ例ノ如ク最モ烈ケシ、又タ県官古城貞ヲ潜使トシテ南ノ関ニ赴カシメ、以テ城中ノ形勢ヲ報セシム、此日工兵隊交通路ヲ段山ニ穿チ、千葉城ニ胸壁・砲台・交通路等ヲ設ケ、及ヒ尋常堡籃ヲ屯宮近傍ニ築ク、

武庫日誌

過日來花岡山及ヒ山崎等ノ賊壘ヨリ我カ飯田丸ノ兵器庫

ヲ砲撃ス、屋上為メニ破壊シ、恰モ蜂巢ノ如シ、三月二十二日、午前第九時我カ飯田丸ノ守兵、下通町白川堤ノ賊ト砲戦シ、同第十一時四十分ニ至リテ息ム、已ニシテ兵若干ヲ山崎及ヒ安巳橋ヨリ坪井ニ出タシ探偵セシム、其他各所共ニ砲戦ノミ、当時周囲ノ賊衆口霧々、或ハ鐘鼓・琴・三味線等ヲ鳴シ、或ハ罵詈訾シ、或ハ諧謔ス、我カ兵之レニ応シ舌戦甚シ、夜ニ入りテ北方ノ銃声最モ劇シ、此日工兵隊交通路ヲ段山ニ穿チ、並ニ之ヲ修理シ、胸壁ヲ千葉城ニ築キ、且ツ尋常堡籠ヲ屯營近傍ニ造ル、

病院日誌

賊弾病院ノ門ヲ撃破シ、為メニ役夫一人ヲ傷ツク、武庫日誌

近時ハ氣候陰鬱ニシテ時々大雨アルヲ以テ、射的場空壕ノ彈藥坑倉ハ、其地最モ低下ナルヲ以テ全ク雨水ノ浸ス所トナル、是ニ於テ城ノ本門内升形ノ地垣ヲ升形ニ築キタル所ヲ云フニ移シ、且ツ工兵方面ニ商リ、木板ヲ以テ仮リニ屋ヲ葺キ、僅ニ雨露ヲ避ク、

會計日誌

午前第十時新堀門辺ニ聚糧シテ、薪凡ソ千貫目ヲ得ル、此

日現在ノ人員ヲ算スルニ三千七百六十九人アリ、之ヲ大別スルニ、歩兵營賄所ヲ千四百九十名トシ、砲兵營賄所ヲ九百十三名トス、而シテ第一賄所ニアルモノ三百零一名、第二賄所ニアルモノ五百九十一名、病院ニアルモノ四百七十四名ナリ、

三月二十三日、京町口ヨリ牧崎・日向崎及ヒ坪井・寺原等ヲ攻襲セントス、其部署左ノ如シ、吉井(昇)少尉試補一小隊ヲ以テ、藤崎(繁樹)少尉ト共ニ京町口ニ向ヒ、今橋(知勝)少尉一小隊ヲ率キテ日向崎ニ進ミ、立石(正善)少尉兵三十名ヲ督シテ牧崎ニ進ミ、石塚(烈三郎)少尉試補兵三十一名ヲ以テ、黒澤(順之)中尉ト共ニ坪井・寺原ニ向フ、午前第四時日向崎進行ノ前兵途中賊ノ番兵ニ遇フ、即チ火撃シテ進ミ、展望兵ヲ村端ニ置キ、余ハ之ヲ撤兵ニ配布シテ直チニ村内ニ突入ス、時ニ天未タ明ケス、会賊ノ胸壁ニ到ル、賊兵狼狽、僅ニ塁ニ抛リテ防戦ス、我カ段山ノ守兵声援ヲ為シ之ヲ砲撃ス、因リテ共ニ之レニ迫ル、賊遂ニ支フルコト能ハス、胸壁ヲ棄テ、逃走ス、又タ尾撃シテ後村ニ至リ、再ヒ賊ノ援兵来リ到ルニ会ス、時ニ天將サニ明ケントスルヲ以テ、我兵肯テ進マス、賊ノ二塁ヲ毀チ、徐カニ兵ヲ収メテ退ク、然ルニ賊ノ伏兵本妙寺ノ田畑ニ起リ、我カ兵ヲ横撃

ス、因リテ溝中ニ伏シ、且ツ戦ヒ且ツ退ク、段山ノ守兵之ヲ見テ、大小砲ヲ放チテ為メニ退路ヲ開キ、併セテ日向崎村・四方地村及ヒ本妙寺ノ諸壘ニ向フテ榴弾・霰弾ヲ連発ス、向キニ牧崎村ニ進ミシモノ先ツ砂藁師坂ニ至リ、兵ヲ分チテ二トナシ、潜カニ牧崎村ヲ過キ、直チニ進ミテ長岡邸ノ背面賊壘ノアル所ニ出ス、因テ戦鬪數分時ニシテ、日向崎村ノ賊凡ソ四十名我カ兵ノ左翼ヲ撃ツ、乃チ鋒ヲ転シテ之レニ当ル、而シテ賊兵肯テ迫ラズ、天明ルニ及ヒ兵ヲ引キ揚ケテ返ル、京町口ノ攻襲兵モ亦潜カニ進ミテ賊ノ不意ヲ撃ツ、賊周章シテ走り各胸壁地物ニ抛ル、是ニ於テ兵ヲ分チテ二トナシ、一ハ藤崎少尉之ヲ率キテ裏京町ヨリ進ミ、一ハ田畑ノ間道ヨリ進ミ、吉井少尉試補之ヲ指揮ス、賊兵左右ノ胸壁ニ抛リテ頻リニ防戦ス、我カ兵屈セス、遂ニ進ンテ之ヲ抜ク、賊退キテ後面ノ胸壁ヲ保ツ、我カ兵左右ヨリ急ニ之ヲ屈燈シテ又タ之ヲ抜ク、賊遂ニ走ツテ最後ノ胸壁ニ集テ固守ス、然ルニ當時左翼日向崎・牧崎ノ諸隊已ニ引キ揚クト聞キ、乃チ令ヲ伝エテ軍ヲ還ス、坪井口進行ノ兵ハ賊ヲ見ス、唯京町口ノ賊死傷者ヲ運搬セルヲ以テ、一斉ニ之レニ発火シ、賊若干ヲ燈シ、且ツ其抛ルヘキ家屋ヲ火シテ帰ル、

同第五時賊兵三十名計リ我カ藤崎ノ守地ヲ望ミテ来ル、該守地ノ兵撃テ之ヲ却ク、午后第六時賊京町地方ヨリ我カ埋門ヲ狙撃ス、時ニ城南雁回山ノ後面ニ烽火起リ、炎焰天ニ漲ル、同第十一時収糧ノ為メニ千葉城ヨリ士卒三十六名ヲ坪井ニ出タシ、賊ノ歩哨ヲ撃ツ、夜半我カ城東飯田山辺及ヒ城北ニ当リテ銃声ヲ聞ク、此日工兵隊交通路ヲ段山ニ開穿シ、砲台ヲ千葉城ニ築キ、及ヒ洗馬橋ノ漲水ヲ防ク、去ル二十日巡查中村匡行ヲ潜使トシテ城ヲ出タサシメシカ、果サスシテ帰ル、唯云フ、植木口ノ官軍ハ該地ヲ火シ向坂ニ来ル、且ツ去ル十九日ノ夜、高瀬口ノ官軍戦ヒ勝ち進ミテ出羽ニ至ル、而シテ敗賊ハ野出村ニ屯ス、其中ニ熊本県士ヲ混濬スト、又タ曰ク、我カ軍艦八艘長洲・河内ノ海岸ニ投錨シ、賊ト時々相砲戦シ、或ハ端舟ヨリ陸ニ近ツカント欲スト雖トモ、賊兵海岸ヲ防守スルヲ以テ、意ヲ達スルコト能ハスト、

病院日誌

午前第九時賊弾我カ病院薬局ニ破裂片碎シ、一課ノ椅子二脚及ヒ小蒲団ヲ毀損シ、又ターハ薬局ヲ貫キ硝子窓ニ中リ、肉碎ケ骨折レ、如何ナル靈術モ亦タ医スヘカラサルニ至レリ、

會計日誌

午後第一時坪井町地方ニ薪若干ヲ得タリ、

三月二十四日、午后賊數回我カ県庁ノ守地ヲ砲撃スルヲ以テ、直チニ応戦シ五発ニシテ止ム、其他休戦異状ナシ、高瀬及ヒ植木地方ニ大小砲ノ聲響頻リナリ、夜川尻方位ニ火ノ起ルヲ見ル、此日工兵隊砲台及ヒ胸壁ヲ千葉城ニ築キ、又タ洗馬橋下ノ水ヲ防ク、
武庫日誌

賊ノ砲彈多ク我カ職工廠近地ヲ発射シ、甚タ危殆ナルヲ以テ、工人ヲ分チテ天守台ノ下ノ石門近傍ニ於テ工業ヲ為サシム、

會計日誌

役夫上田甚藏逃亡ス、

三月二十五日、午後第三時我カ飯田丸及ヒ県庁ノ守兵、花岡山及ヒ長六橋ヲ砲撃スルコト六回、同第八時賊兵數名上林通米屋町ノ寺院ニ入り、墓石ヲ以テ壘ニ代へ、或ハ罵リ、或ハ歌ヒ以テ我カ線内ヲ狙撃シ、時トシテハ故サラニ虚勢ヲ張り、連発シテ急ニ襲ヒ来ラントスルノ状ヲ示ス、我カ兵之ヲ知り肯テ応セス、植木地方大小砲声昨日ノ如シ、薄暮火ヲ阿蘇山ニ揚ク、此日工兵隊砲台・

胸壁・横牆ヲ千葉城ニ築キ、尋常堡籠ヲ屯營近傍ニ造リ、及ヒ洗馬・厩前橋下ノ水ヲ防ク、

三月二十六日、午前第六時三十分下士卒十名ヲ出タシ、山崎ヨリ安巳橋辺ヲ偵察セシム、会賊兵六名菜ヲ通町ニ摘ム、因リテ急ニ之ヲ狙撃シ、其三名ヲ殲シ一名ヲ傷ツク、午后ニ至リ花岡山ノ賊壘ヨリ法華坂ノ守地ヲ砲撃ス、宇土及ヒ松橋地方ニ大小砲声ヲ聞ク、且賊兵一小隊計リ該地応援ニ赴クモノ、如シ、我カ軍又城中ノ消息ヲ通セシガ為メ、潛使トシテ県官坂田吉郎ヲ高瀬ニ派遣ス、此日工兵隊横牆ヲ千葉城ニ築キ、尋常堡籠ヲ屯營近傍ニ造ル、
三月二十七日、各隊防禦線配賦

○県庁 十三聯隊第一大隊第一中隊 大尉福原豊功、中尉夏目勻、少尉佐土原祐吉、

○古城病院 十三聯隊第一大隊第二中隊 中尉山本盛英、

少尉友岡正順・同靜間浩輔、少尉試補沼田政次、

○法華坂 十三聯隊第二大隊第三中隊 中尉佐竹廣命、

少尉星加居綾、少尉試補山形忠之丞、

○藤崎 十三聯隊第三大隊第二中隊 大尉瀧川忠教、少

尉石川博、

○片山邸及ヒ島邸 十三聯隊第三大隊第一中隊 大尉小

島政利、少尉黒萩重和、少尉試補永田盤之助、

○段山 十三聯隊第一大隊第三中隊 大尉隈岡長道、中

尉松平實之進、少尉今橋知勝、少尉試補新井太郎及ヒ同

聯隊第二大隊第四中隊ノ内一小隊 警視五番組一小隊

中尉不破政利、少尉伊藤信一、三等大警部染川濟、

○漆畑 十三聯隊第二大隊第四中隊ノ内一小隊 中尉立

石正義、少尉試補石原廬、

○京町正面及ヒ右側 警視一番組一小隊 二等中警部三

橋勝到、一等少警部小野俊十、

○野砲營 十三聯隊第三大隊第四中隊 中尉三木一、少

尉高並連壽、及ヒ警視三番組一小隊 二等中警部赤羽

友春、

○埋門左側 警視六番組一小隊 二等中警部加藤清明、

○京町 十三聯隊第一大隊第四中隊 大尉小葉竹直綱、

少尉板垣堯春、同森利邦、及ヒ同聯隊第二大隊第一中

隊 大尉宮崎定毅、中尉石川浪彦、少尉試補吉井昇、

○樺安坂関門 衛戍分遣隊、

○工兵營 十四聯隊第一大隊第四中隊 大尉丸井政亜、

中尉齊藤惟一、少尉石塚烈三郎、

○千葉城 十三聯隊第二大隊第二中隊 中尉岡本一布、

少尉重富時宜、同志賀範之、少尉試補湯川春尚、

○下馬橋及ヒ嶽ノ丸 十四聯隊第一大隊第三中隊 大尉

山脇鎬太郎、中尉福田昌博、少尉吉川元永、少尉試補

小泉勇次、

○予備 十三聯隊第三大隊第三中隊 中尉小林清吉、少

尉鈴木重郎、同宮崎富雄、及ヒ警視四番組一小隊 二

等警部渡邊佳介、

京町進撃ノ部署

指揮官林少佐(兼之助)

伝令使藤崎少尉、白井少尉、小川軍曹之三属ス、

正面並ニ右翼

歩兵一中隊十四聯隊第一大隊第四中隊

警視一小隊六番組

山砲二門

工兵三十名

左翼

歩兵一中隊十三聯隊第三大隊第一中隊

別働隊

參謀黒澤中尉

伝令使内野伍長

歩兵一中隊十三聯隊第三大隊第四中隊

迂回兵

歩兵一小隊十三聯隊第三大隊第二中隊ノ内

警視一小隊三番組

繃帶所

埋門内及ヒ古京町

正面及ヒ右翼ハ三年坂及ヒ出京町ノ賊壘ヲ突ク、別働隊ハ牧崎ヨリ井芹村ノ砲台ヲ拔キ砲ヲ奪ヒ、其迂回兵ハ本妙寺ヲ突キ、行々胸壁ヲ毀テ、井芹ノ本隊ニ合ス、

黎明歩兵二中隊及ヒ山砲一門ヲ以テ、裏京町ノ賊ヲ侵襲ス、警視一小隊及ヒ山砲一門ハ其右翼ヨリ中坂上ニ進ミ、正面ノ砲兵ト共ニ賊ノ砲台ヲ砲撃シ、歩兵ノ進路ヲ開ク、而シテ星加少尉ハ別ニ警視隊及ヒ歩兵ヲ卒キテ田畑ヲ迂回シ、連リニ進ミ賊ノ右翼ヲ突ク、已ニシテ全軍モ亦タ踵キ到リ、賊ノ胸壁ヲ距ル二百五十米突ノ地ニ達ス、賊兵各所ノ胸壁ニ抛リ、急ニ我カ軍ヲ防ク、乃チ散兵ヲ布キ以テ之レニ応ス、驟カニ之レニ迫リ、勇戦數時我カ軍死傷甚タ多ク、遂ニ兵ヲ退ルコト八十歩、此時ニ當リ我カ左右翼ノ兵ハ已ニ進テ賊ノ一胸壁ヲ拔キ、益々進ム、然ルニ賊兵後方ノ左右翼ノ胸壁ニ抛リテ防戦ス、我カ兵

地物ノ抛ヘキナキヲ以テ戦ヒ頗ル苦ム、北川大尉衛戍兵四十名ヲ卒キテ中坂ニ至ル、丸井大尉等モ亦タ一小隊ヲ寺原二分テ、余ノ一小隊ヲ以テ来リ会ス、賊中坂上ノ胸壁及ヒ土蔵ニ抛リテ防戦ス、我カ兵魚貫シテ胸壁ノ下ニ蟻附ス、賊壘ヲ距ル僅カニ十米突ノ竹叢ニ侵入シ、士官及ヒ警部等ノ銃ヲ携ヘサルモノハ瓦石ヲ執リ之ヲ擲チ、兩軍戦ヒ最モ力メ、勝敗未タ決セス、正午丸井大尉衛戍兵六十九名ヲ引卒シ、警視隊ト共ニ臼砲一門ヲ以テ賊ノ胸壁ヲ撃チ、遂ニ其土蔵ヲ焼滅ス、是ヨリ先キ星加少尉半小隊ヲ卒キテ、裏京町ノ左翼ヨリ迂回シ、石川中尉モ亦タ士卒九名ヲ卒キテ来リ会ス、既ニシテ我カ右翼戦ヒ將サニ利アラントス、林少佐機ニ応シ、令ヲ下タシテ急ニ賊壘ヲ衝カシム、賊兵果シテ支フルコト能ハス、遂ニ壘ヲ捨テ、遁ル、我カ兵進テ之ヲ火シ、北クルヲ追フテ柳川町ニ至リ、遂ニ七八ノ胸壁ヲ奪フ、而シテ左翼ノ胸壁ハ未タ之ヲ拔クコト能ハス、是ニ於テ正面ノ警視隊及ヒ衛戍兵ハ、直チニ其鋒ヲ軋シ裏京町ノ賊ヲ撃ツ、佐武中尉モ亦タ半小隊ヲ督シテ会戦シ、而シテ別ニ左側ハ裏京町ヨリ、右側ハ柳川町ヨリ各迂回シテ火ヲ各所ニ放ツ、賊兵宇土小路ノ胸壁ニ抛リ防戦、數時ニシテ終ニ支フル

コト能ハスシテ走ル、日既ニ暮ル、乃チ工兵隊ヲシテ略取スル所ノ胸壁ヲ破壊セシメ、又タ柳川町・京町等ニ哨兵ヲ置キ、徐カニ兵ヲ収ム、初メ小林中尉ノ一小隊・三中尉ノ一小隊、及ヒ赤羽二等中警部ノ一小隊ハ共ニ牧崎村ヲ撃タシム、小林中尉・赤羽二等中警部ハ、各其兵ヲ以テ井芹村ノ迂回ニ備エ、潜カニ該所ニ到リ、敵ニ発砲ヲ禁シ、疾ク進ンテ將サニ其胸壁ヲ突カントスル時、天未タ明ケスシテ彼我相弁スル能ハス、唯暗中ニ接戦セリ、然レトモ事偶然ニ起ルヲ以テ兩軍交々退キ、互ニ地物ニ拠リテ発射ス、然リト雖トモ賊ノ胸壁高処ニ在ルト竹柵ノ堅固ナルトニ由リテ、遂ニ之ヲ抜クコト能ハサルノミナラス、花岡山ノ賊兵金峯山ノ麓ヲ経テ援兵ヲ出シ、島崎村ノ田畑及ヒ井芹村ノ胸壁ヨリモ、亦タ十字火ヲ放ツニ依リテ我カ兵甚タ苦戦ス、是ニ於テ山本中尉ノ一隊ヲ三木中尉ノ一隊ト交換シ、以テ該地ノ応援トシ、赤羽二等中警部ハ渡邊中警部ト交換ス、而シテ別ニ不破中尉ノ一隊ハ牧崎村ノ彈藥運搬ニ供シ、同第六時兵ヲ返ス、初メ戦ヒ方ニ酣ナルヤ、野砲營ヨリハ赤尾口田畑砲台並ニ宇土小路裏ノ胸壁ヲ望ミテ山野砲ヲ放チ、段山ノ守兵モ亦タ榴弾ヲ以テ、四方地村及ヒ日向崎・島崎等ノ賊壘

ヲ撃チ、遙ニ我カ迂回兵ノ声援ヲナス、一時兩軍戦ヒ最モ激烈、死傷モ亦タ從テ多シ、本日ノ拳ハ京町口ノ賊ヲ退却薄弱ナラシメ、旅団ノ連絡ヲ便ナラシムルヲ以テ目的トセシニ、是ニ至リテ竟ニ出京町迄退却セシメ、充分目的ヲ達スル能ハスト雖トモ、京町ハ我カ守線内トナリ、其利ナキニ非ス、此日工兵隊ハ乍チ一壘ヲ毀チ、乍チ一壘ヲ築ク、作業ノ速ニシテ且ツ精ナルコト、攻守間ニ最モ功力ヲ奏セリ、植木及ヒ松橋地方ノ砲声前日ノ如シ、病院日誌

死傷百三十五人多キニ至ル、

武庫日誌

進撃ノ令下ルニ及ヒ、直チニ銃砲及ヒ器械・彈藥・燃燒等総テ之ヲ埋門内並ニ片山邸前ニ出タシ、主管者ヲシテ各隊ノ需求ニ応セシム、然ルニ、運搬役夫其員甚タ寡ナキヲ以テ、若干人ヲ工兵方面ニ商リ、共ニ其役ニ就カシム、又タ十二擲臼砲榴弾ヲ砲兵隊ニ給ス、然ルニ剩ス所甚タ少ナシ、故ニ昨九年演習ニ用キタル四百四十有余ノ彈丸ヲ以テ、之ヲ応用セシメンカ為メ之ヲ修繕シ、其信管ニ代フルニ木栓ヲ以テシ、而シテ紙管ノ能ク挿入スヘキ小孔ヲ穿チ、其用ニ充テシム、独リ此ノミナラス摩擦

管及ヒ紙管等モ亦タ大ニ欠乏セルカ故ニ、門線ヲ以テ摩
擦管ニ代用スルノ議ニ決シ、「アルコール」数瓶ヲ病院
ヨリ得テ僅カニ製作ス、然レトモ、紙管ニ代用セシムヘ
キモノナキヲ以テ、止ムヲ得ス仮リニ水器械^(マ)ヲ造ラシメ
テ之ヲ試ムルニ、其秤数等殆ント差違ナシ、
會計日誌

糧食分配所ヲ新堀門内ニ設ケ、以テ之ヲ戦地ニ輸送ス、
三月二十八日、午前花岡山ノ賊壘ヨリ榴弾ヲ連発シテ、
我カ段山ノ砲台ヲ撃ツ、乃チ左砲車ヲ南方ニ転シ、急ニ
造堡ヲ起シテ応戦ス、同第八時岡本中尉部下ノ右小隊聚
糧護衛ノ為メ、内坪井ヨリ寺原ニ進行シ、途ニ哨兵ヲ内
坪井ノ堤上ニ配布ス、進ンテ坪井一丁目ニ到ルヤ一空壘
アリ、然ルニ、賊ハ中島ノ寺院ヨリ発射ス、会山形少尉
試補モ亦タ兵ヲ卒キテ来ル、因リテ協力シテ之ヲ攻メ、
遂ニ火ヲ放チ、一丁目ノ砲台ヲ窺フニ、倉庫其南北ニ屹
立セリ、我カ兵直チニ之ヲ奪ハントセシニ、賊兵寺ノ楼
門ニ拠リテ下射シ、進ムコトヲ得サラシム、適風起ルヲ
以テ火ヲ風上ノ民舎及ヒ行福寺ニ放チ、兵ヲ散布シテ前
面ニ向フニ、風俄カニ変シ焰烟熾ニ南方ニ漲リ、為メニ進
路ヲ断タレ進ムコト能ハス、行福寺ノ墓地ニ転戦シ、別

ニ士卒若干観音橋ヲ渡リテ寺原ニ向フ、賊又タ之ヲ遮ル、
正面ノ兵モ亦タ随テ退ク、午后第四時長六橋ニ偵察兵ヲ
出ス、賊延壽寺ノ墓畔ニ伏シ直チニ発射ス、会賊ノ応援
三十余人長六橋ヨリ進ミ来ルヲ以テ、兵ヲ退ク、本日植
木旅団ノ潜使福田丈平来ル、曰ク、山鹿地方ノ官軍其守
線七里ニ及フ、然ルニ昨日向坂ヲ略シテ木留ニ陣ス、賊
軍彈丸已ニ竭クルヲ以テ、土民ヲシテ我カ軍ノ射ル所ノ
モノヲ拾ハシメ、一個二厘五毛ノ彈ヲ以テ之ヲ買フト雖
トモ、唯其代価ノ証書ヲ与フルノミ、人民乃チ之ヲ属吏
ニ請エトモ、敢テ金ヲ与エス、土民モ亦タ其詐欺ヲ怨ミ、
今復タ之ヲ拾ハスト、此日工兵隊暫溝堡ヲ金峯山町左方
ニ築キ、屯營近傍ニ於テ転堡籃ヲ造リ、夜間砲台ヲ本町
口ニ築ク、

會計日誌

彈丸我カ第一賄所ニ破裂シ、雇夫一名為メニ即死ス、
三月二十九日、昨夜半我カ段山ノ守兵日向崎村ノ賊壘ヲ
砲撃ス、午前花岡山ノ賊我カ法華坂ノ守地ヲ砲撃シ、午
后ニ至リ細工町ヨリ再タヒ砲撃ス、同第一時下馬橋ノ守
兵曰砲一門ヲ京町ニ出タシ、賊ノ屯集セル家屋ヲ射撃ス、
埋門ヨリモ亦タ砲兵ヲ分遣シ、寺原及ヒ出京町ノ賊巢ヲ

撃ツ、彼レ肯テ応セス、同第四時賊兵數十人、段山砲台ノ西北一千六百米突ナル林中ニ屯集ス、段山ノ守兵榴彈ヲ放チテ之ヲ散乱セシム、安巳橋及ヒ山崎ノ賊兵、我カ千葉城ヲ砲撃ス、同第六時賊兵復タ段山ノ守地ヲ砲撃ス、乃チ応戦須臾、同第八時賊兵長六橋ノ砲台ヨリ我カ梟庁ヲ砲撃ス、其彈丸四層樓ノ上階ニ破裂シ、火氣將サニ起ラントス、哨兵早ク之ヲ認メ、馳セ集リテ漸ク之ヲ撲滅スト雖モ、文書ハ悉ク燒燼セリ、兩三日前ヨリ近傍ノ川流漲溢ス、賊是レ坪井・井芹両川ノ合流ヲ壅塞セシ故ナリ、又タ阿蘇山ノ火焰、木留口ノ砲声夜間益々盛ナリ、此日工兵隊劍頭堡並ニ凸角堡ヲ柳川町ニ、砲台ヲ本町ニ、凸角堡ヲ裏京町及ヒ木裏町ニ築キ、尋常堡監ヲ屯營近傍ニ造設ス、

武庫日誌

(源本題)

兒玉少佐ノ命ヲ以テ抛擲彈ヲ製ス、先ツ厚硝子瓶中ニ火薬及ヒ釘ノ兩頭ノ截断セシモノ、及ヒ厚硝子ノ碎片トヲ填実ス、紙ト布トヲ以テ数重硝子瓶ヲ貼シ、木管ヲ其口ニ挿入シ、門線ヲ導火トナス、即チ之ヲ試ムルニ、能ク其効力ヲ為スモノトセリ、依ツテ大小ノ硝子瓶百五十余个ヲ病院ヨリ出サシメ、之ヲ造リ、一週日間ヲ経テ殆ン

ト一十個ヲ製ス、是ヨリ先キ突圍ノ準備ヲ以テ、小銃及ヒ大砲ノ精良彈藥ヲ撰ヒ、簡易ニ運搬スヘキノ手段ヲナシ、以テ緩急ニ応セント欲シ、予メ之ヲ天守台下ノ堅固ナル石門ニ貯藏ス、

會計日誌

本日ノ食數ヲ算スルニ、歩兵官廩所ニ一千四百七十人、砲兵官廩所ニ二百九十九人、第一賄所ニ八百五十九人、第二賄所ニ五百九十六人、病院ニ五百零二人ナリ、

三月三十日、午前第六時百畷石沖ニ當リ、海軍ノ砲声最モ烈シ、千葉城ノ守兵、坪井賊ノ根拠ヲ砲撃ス、午后ニ至リ士卒六名ヲシテ山崎ヨリ安巳橋辺ヲ偵察セシム、城北大津及ヒ木留辺ノ砲声終日間断ナシ、此日工兵隊凸角堡ヲ柳川本町並ニ裏京町ニ築キ、尋常堡監ヲ屯營近傍ニ於テ造リ、及ヒ鹿柴ヲ京町ニ樹ユ、

三月三十一日、午前第七時花岡山及ヒ細工町ノ賊、我カ法華坂ノ守地ヲ砲撃ス、午后第一時ニ至リ、野砲營ヨリ山砲一門ヲ京町ニ分遣セシメ、以テ出京町及ヒ坪井建町ヲ砲撃ス、賊兵出テ戦ハス、然ルニ花岡山ノ賊ハ再タヒ法華坂ノ守地ヲ射撃ス、同第二時埋門守地ノ兵、臼砲一門ヲ京町ニ出タシテ賊ノ胸壁ヲ撃タシム、賊兵又タ応セ

ス、日向崎村及ヒ花岡山・四方地村ノ賊塁ヨリ、頻リニ我カ段山ノ砲台ヲ狙撃ス、我カ兵榴弾ヲ発シテ之レニ当ル、是ヨリ先キ士卒六名山崎ヨリ長六橋ヲ探偵ス、木留口ノ砲声昨日ノ如シ、此日工兵隊凸角堡ヲ柳川本町並ニ裏京町ニ築キ、尋常堡盤ヲ屯營近傍ニ造リ、及ヒ鹿柴ヲ京町口ニ樹ユ、而シテ別ニ横牆ヲ柳川町ニ築キ、且ツ尋常東柴ヲ下馬橋ヨリ屯營ニ運送シ、下馬橋ノ胸壁ヲ修理ス、

病院日誌

賊ノ砲弾病院第五号甲室ノ東南隅ヨリ西北隅ヲ洞射シ、火將ニ起ラントス、幸ヒニシテ救フテ之ヲ消滅スルコトヲ得タリ、因テ其患者ヲ歩兵營ニ移ス、

會計日誌

貯蔵ノ糧米ヲ算スルニ、精米三百十三石七斗一升、餅米九石九斗三升、粟四十三石ナリ、統計三百六十六石六斗四升、以テ一日ノ消費ヲ二十石ト概算シ、粟ヲ以テ之レニ雜フレハ、尔来十八日間即チ四月十七日ニ至ルマテ支フヘシ、因テ四月六日ヨリ各隊咸ク粟ヲ食セントス、且ツ開城后精米其他二十四品買取ノ方法ヲ本台ニ請フ、四月一日、午前第十時士卒五名ヲ出タシ、山崎ヨリ安巳

橋辺ヲ偵察セシム、時ニ花岡山ノ賊法華坂ノ守地ヲ砲撃ス、午后第一時復タ士卒十一名ヲシテ厩橋ヨリ三年坂ヲ探偵セシム、途中山崎賊哨ノ射撃スル所トナル、我カ兵顧ミスシテ進ミ、遂ニ通町ヨリ草場町・坪井廣町ニ至ル、隻兵ヲ見ス、婦路賊兵堅町方位ヨリ発射ス、我カ兵復タ顧ミスシテ還ル、時ニ同第五時ナリ、花岡山ノ賊屢々我カ線内ヲ砲撃スルヲ以テ、藤崎神社守地ノ砲兵乃チ応シテ之レニ当ル、此日小萩山ニ放火ス、而シテ木留地方ノ砲声昨日ノ如シ、工兵隊胸壁ヲ京町中坂上・金峯山町左側ニ築キ、及ヒ横牆ヲ柳川町ニ垣東柴ヲ屯營近傍ニ設ケ、

夜間對壕ヲ本町口ニ鑿ツ、

四月二日、是ヨリ先キ段山己ニ陥リ、賊兵攻撃ノ術ナキヲ以テ、坪井・井芹等ノ川流ヲ壅キ、以テ合囲ヲ嚴ニシ、本城ヲ困シメントス、是ニ至リテ河水益々溢レ、城ノ周圍始シト一大湖水トナル、埋門ノ守兵曰砲二門・山砲一門ヲ京町ニ出タシ、賊ノ胸牆及ヒ屯所ヲ撃ツニ彼レ遂ニ応戦セス、初メ諸道ノ砲声益々近ツキシカ、午后ニ至リ御舟・川尻ノ砲声其最モ近キヲ覺フ、此日小萩山ヲ火シ、夜間出町ヲ焼ク、

武庫日誌

各種ノ彈藥余ス所已ニ甚タ多カラサルヲ以テ、本台ニ請
ヒ各隊ニ告クルニ、注意シテ徒費スヘカラサルヲ以テス、
會計日誌

令アリ、曰ク、本台逃亡ノ役夫二十一人、開城後其跡跡
ヲ得ルアラハ、乃チ速ニ之ヲ捕ヘヨト、

四月三日、午前第六時千葉城ノ守兵建町ノ賊ヲ砲撃ス、
賊亦タ該所ニ放火シ、我カ線内ヲ射撃スルコト甚タ猛ナ
ルカ故ニ、我カ兵応戦ス、須臾ニシテ銃声全ク止ミ、怪シ
ムヘキノ風景アリ、故ニ斥候ヲ出タシ偵察セシムルニ、
賊既ニ退走シ、処々ニ刀劍及ヒ小銃若干アリ、已ニシテ
又タ士卒十名ヲシテ坪井ヲ偵察セシメシニ、賊ノ哨兵線
ヲ後方ニ退ケ以テ一直線トナシ、家屋ノ展望ヲ妨クルモ
ノヲ火ス、午后第一時偵察兵十一名ヲ山崎ヨリ安巳橋方
位ニ出タス、途ニ坪井ヲ過キ賊兵数名胸壁中ニアルヲ見、
直チニ之ヲ狙撃シ、同第二時ニ至リテ還ル、花岡山ノ賊
頻リニ県庁守地ヲ砲撃スルヲ以テ乃チ応戦ス、法花坂守
地モ亦タ花岡山及ヒ細工町賊兵ノ砲撃スル所トナル、同
第四時本妙寺前ノ賊塁上ニ白刃ヲ振フテ躍ルモノアリ、
段山ノ守兵榴弾ヲ以テ之ヲ射撃ス、此日坪井建町ノ西南
ヨリ出火シ、東ニ延焼スルコト概ネ三丁、御舟・甲佐辺

モ亦タ火ノ起ルヲ見ル、且ツ城ノ南北植木及ヒ川尻ノ砲
声昨日ノ如シ、而シテ金峯山方位ノ砲声ハ是レ海軍ノ戦
ヒ方ニ酣ナルモノナラン、工兵隊横溝ヲ柳川町ニ、凸角
堡ヲ金峯山町ニ築キ、重対壕ヲ本町口ニ穿チ、及ヒ尋常
堡盤ヲ屯管近傍ニ造ル、

四月四日、午前第八時三十分賊兵数十名、數個ノ櫃類ヲ
本妙寺近傍ニ運搬スルヲ以テ、我カ段山ノ砲兵榴弾ヲ発
射ス、賊兵遁レテ林中ニ入ル、賊又県庁及ヒ藤崎ヲ砲撃
スルコト前後二回、県庁ノ守兵之レニ当ルニ山砲・白砲
ヲ以テス、已ニシテ士卒九名ヲ出タシ、坪井草場町ノ学
校ヲ火シテ其近傍ヲ偵察セシカ、賊兵凡ソ十名草場町北
方ノ砲台ヨリ遽カニ発射シ、為メニ兵卒一人ヲ傷ツク、
下馬橋及ヒ棒安坂ノ守兵モ亦タ山崎ヲ経テ安巳橋坪井近
傍ヲ偵察スレトモ異事ナシ、而シテ別ニ山崎ニ聚糧セル
モノハ、彈藥・火藥及ヒ「サーベル」ヲ得タリ、又工兵隊
ノ作業昨日ニ異ナルコトナシ、只別ニ野堡ヲ旧一日亭ニ
築ツク、現時火カニ銃声ヲ南方ニ聞ク、或ハ云フ、我カ
応援ノ別働隊突撃シテ來ルモノナリト、且ツ城中ノ消息
ヲ報センカ為メ、県庁雇熊野五藏ヲ高瀬ニ遣ル、
病院日誌

武庫王管ノ請求ヲ以テ即時三瓶ノ「アルコール」ヲ給ス、
會計日誌

茲ニ糧食ヲ算スルニ、現在余ス所ノ米粟及ヒ餅米ノ統計
凡ソ二百七十五石六斗四升ナリ、因テ各官廳ハ、朝夕二
餐ハ粥ヲ用キ、昼餐ハ粟飯ヲ食ヒ、各隊ハ朝餐ニ粥ヲ啜
リ、昼夕ノ二餐ハ粟飯ヲ喫シ、工兵隊及ヒ役夫ハ総テ粟
飯ヲ食スヘシ、此ノ如クスレハ則チ一日ノ消費スル所拾
五石五斗四升七合ナルヲ以テ、明日ヨリ後チ十八日間即
チ本月二十二日ニ至ルマテヲ支フヘシト、議遂ニ決ス、
城中其不撓不屈ノ精神ハ、是ニ至リテ益々堅シ、

四月五日、午前第九時三十分、賊衆四方地村ノ砲台ニ集
合セルヲ以テ、段山ノ守兵榴弾ヲ以テ之ヲ撃ツ、賊兵走
リテ仏閣後方ノ藪中ニ入ル、因リテ再タヒ榴弾ヲ放チテ
之ヲ射撃ス、午后木原山ヲ隔テ黒烟天ヲ蔽ヒ、砲声地ニ
震フ、是レ小川駅ノ戦ヒナルヘシ、其他諸道ノ大小砲声
昨日ニ異ナルコトナシ、又夕線内樟安坂・病院病室・住
江邸ノ各処ニ胸壁ヲ築ク、是レ郭中ノ第二線ナリ、工兵
隊野堡ヲ旧一日亭ニ、砲台ヲ嶽ノ丸ニ築キ、及ヒ尋常堡
籠ヲ屯宮近傍ニ造ル、此日花岡山並ニ長六橋ノ賊時々発
砲セシカ、偶一弾我カ県庁ニ着発シ、火將ニ屋ニ及ハン

トス、幸ニ県官及ヒ守兵等ノカラニ依リ之ヲ消滅スルヲ
得タリ、

病院日誌

賊弾ノ我カ病院ヲ発射スル、其未タ破裂セサルモノ二十
個ヲ収メ、之ヲシテ本台ニ送ラシム、

會計日誌

山脇大尉ヨリ聚糧ノ玄米二十三俵ヲ送付ス、

武庫日誌

安巳橋近傍ノ賊塁ヨリ射撃セシ二十拇白砲ノ弾丸、頻リ
ニ我カ飯田丸及ヒ嶽ノ丸ニ落下シ、其甚タ危殆ナルヲ以
テ、厚サ一寸計リナル木板数十枚ヲ以テ、該処土倉^{彈藥格納所ナリ}
ノ屋ヲ重蔽ス、且ツ賊弾ヲ飯田丸野砲々廠ニ発射セルヲ
以テ、彈藥車ノ各部分並ニ車輪四個トヲ損ス、

四月六日、午前第六時三十分士卒十一名ヲシテ、坪井・
六軒町・廣町ヲ偵察セシム、賊兵二十名鳥町・千反畑ノ
両所ヨリ頻リニ発射ス、我カ兵顧ミスシテ退ク、午后第
四時再タヒ士卒九名ヲ出タシ、賊ノ胸壁ヲ出ツルモノヲ
狙撃セシメ、安巳橋方位ニ進ミ、旅籠町寺院ノ墓畔ニ潛
伏シ、以テ賊ノ出ツルヲ俟ツニ、賊兵三名胸壁ヲ徘徊ス
ルヲ見、直チニ之ヲ狙撃シ、其一人ヲ殲シ二人ヲ傷ツク、

時ニ賊兵二十名卒然安巳橋ノ砲台ヨリ我カ兵ヲ射撃ス、乃チ之レニ当ル、然レトモ其衆寡相ヒ敵スヘカラサルヲ慮リ、遂ニ兵ヲ退ク、会通町山崎辺ノ賊兵、三年坂近傍ノ藪林ヨリ東方ヲ望ミテ発射ス、安巳橋ノ賊之ヲ見テ以テ官兵ナリトシ、急ニ鋒ヲ軋シ相ヒ撃ツ、是ヨリ先キ別ニ士卒二十五名ヲ長六・安巳二橋ノ近傍ニ出タシ、探偵セシメシニ、賊兵大小砲ヲ放ツヲ以テ我カ兵応戦シ、正午ニ帰城ス、先キニ砲台ヲ旧一日亭ニ築クニ当ルヤ、賊兵復タ砲撃シ之ヲ妨ク、埋門ノ守兵モ亦タ先キニ山砲一門ヲ京町ニ分遣シ、出町及ヒ坪井辺ヲ砲撃ス、此日県庁復タ賊彈ヲ蒙リ、將ニ焼却セントスルモノ二回ニ及ヒシカ、県官並ニ守兵、力ヲ尽シ、以テ僅カニ之ヲ撲滅スルコトヲ得タリ、諸道ノ大小砲声昨日ノ如シ、工兵隊ノ作業モ亦タ前日ニ異ナルナシ、又タ別ニ砲台ヲ十三聯隊病室ノ側ニ築キ、且ツ交通路ヲ漆畑ヨリ段山ノ間坂路ニ開穿ス、

武庫日誌

近日諸道ノ戦声漸ク近接シ、遂ニ突圍ノ策ニ決セルヲ以テ、之レカ準備ヲナスニ、甚タ彈藥運搬ノ役夫ニ乏シキガ故ニ、戦線内ノ使役ニ供センカ為メ、若干人ヲ工兵方

面ヨリ雇役スルヲ商議シ、並ニ一切ノ物品配与ノ人員ヲ定ム、且ツ兵士ノ携帯銃ハ、仮令小損タリト雖トモ必ス之ヲ交換セシメ、至当ノ彈藥ヲ該隊ニ支給セシムルニ決ス、

會計日誌

一兩日前ヨリ県庁内ニアル竈ヲ以テ焼酎ヲ製ス、今宵ノ如キハ將ニ明ケニ達スルマテ之レニ従事ス、今朝粟飯ヲ工兵隊ニ給センカ為メ、之ヲ第二賄所ニ報ス、且ツ米・粟ノ分量ハ、米一舛ニ粟三合ヲ加フルナリ、然レトモ進撃ノ時ニ際シテハ、敢テ此ノ法ヲ株守スルニハアラサルナリ、

四月七日、司令長官(千城)谷少將自カラ突圍議案ノ文ヲ草ス、

曰ク、旅団ノ進入ヲ俟ツコト既ニ四旬ヲ過ク、然ルニ今ニ至ルマテ只砲声ノ聞ユルノミ、未タ独騎ノ熊本ニ入ルアラス、前ヲ以テ後ヲ計ルニ、其数日間ニ来リ援クルモ亦タ期シ難シ、然ラハ則チ兵食ノ余裕ヲ存シ、突貫ノ策ヲ決セサルヘカラス、我レ請フ、来ル八日ヲ以テ突圍ノ期ト為サン、其法凡ソ左ノ通り、

突圍ノ時ニ当リテハ、段山・千葉城或ハ藤崎等ヲモ断捨シテ二丸門・住江門ヲ固守シ、旧一日亭ヨリ延テ県庁ニ

至ルヲ守線トナシ、二大隊ヲ以テ城ニ充テ、其余ヲ以テ突圍ニ充ルコト、

突圍ノ前二時間出町口及ヒ建町地方へ向ケ諸口ノ大砲ヲ揚ケ来リ、凡ソ十門余ヲ配列シ、迅速猛烈ニ砲撃シ、二時間ノ至ルヲ待チテ各小隊ヲ縦隊ニナシ、装剣ヲ以テ三口或ハ四口ヨリ進撃ノ喇叭ニテ一斉ニ衝突シ、先ツ出町ヲ放火シ、足ヲ止メス直チニ植木ノ後ヲ衝キ、旅団ノ進路ヲ開クコトヲ主トス、

但此一戦ハ全城死生ノ分ル、所タルヲ以テ、突貫ノ兵味方ノ死傷ヲ顧ミス、又タ賊ノ他道ニアル者ヲ顧ミス直チニ進ムヲ要ス、既ニ出京町ヲ突貫スルノ後チ、別ニ城中ヨリ兵許多ヲ出タシ死傷ヲ収ムヘシ、彈藥ハ每一人二百二十発、兵糧ハ二食分ヲ携帯スヘキコト、

既ニ突貫シテ味方ニ合スレハ自ラ嚮導ヲナシ、猛烈ノ進撃ヲナシ本城ヲ来援スヘキコト、此戦ハ本城安危ノ係ル所タルヲ以テ、干城自ラ戦頭ニ立チテ指揮スヘシ、樺山・兒玉両君願クハ患者及ヒ後事ヲ料理アラシコトヲ請フト、

本日十三聯隊第一大隊ヲ以テ突圍隊トシ、(保塞)奥少佐ヲシテ

指揮タラシメ、樺山中佐、谷少将ニ代ツテ惣指揮官タラシコトヲ請フ、許サス、因テ島大尉(志摩如亮)ヲシテ参謀トナシ、諸將校ヲ会シ突圍ノ令ヲ下シ、且ツ地理ニ応シ突圍ノ難易ヲ議セシム、或ハ曰ク、整々堂々京町ヨリ出町ノ賊塁ヲ突貫セント、或ハ奇兵ヲ以テ寺原ヨリ出京町ノ裏ヲ突カント、衆議遂ニ奇兵寺原ヲ突クニ決ス、準備全ク整ヒ、城中幸テ八日ノ到ルヲ待ツ、

右ノ議案ハ、植木口ヲ突貫セシカ為メニ草セシモノナリ、議決スルノ后偶々川尻ノ戦争頗ル猛烈ニシテ、且ツ益々近接スルヲ以テ、又タ之レカ進路ヲ開カサルヲ得ス、然リト雖トモ城中ノ兵太々寡少ニシテ、固ヨリ兵ヲ南北ニ割クコト能ハス、俄カニ兵鋒ヲ南方ニ転シ、川尻ニ進軍セントノ議ニ変ス、

午前南方ノ戦声最モ甚タシキヲ以テ、飯田丸ノ守兵発砲シテ之レカ声援ヲナス、午后第四時立田山近傍ノ賊二百名津ノ浦ニ向フテ進行スルヲ見、我カ千葉城ノ守兵、距離大約二千六百米突ノ地ニ於テ榴彈ヲ発射ス、而シテ第十三聯隊第一大隊ハ、已ニ明日ヲ以テ突貫ノ令ヲ受ケ、各之レカ準備ヲナス、此日又タ工兵隊交通路ヲ漆畑ヨリ段山ノ間坂路ニ開穿ス、

會計日誌

去月二十七日京町進撃ノ時ニ際シ、能ク毘勉尽力セシ役夫ニ金各五拾錢ヲ賜フ、此日馬肉三頭分・餅一人コト・焼酎水筒ニ入ル、モ一人毎二個ヲ突圍隊ニ送付ス、

四月八日、突圍ノ議已ニ昨日ニ決スルヲ以テ、今朝其部署ヲ定ム、

突圍隊

指揮官奥少佐

參謀官大迫大尉・白井少尉、河原伍長之レニ屬ス、

軍医以下及ヒ定則ノ看病人、卒傷者運搬役夫十名コト

ニ取締二名、

彈藥運搬役夫一人毎六百發ヲ負擔ス十五名コトニ下士二名之レニ屬ス、

歩兵一大隊第十三聯隊第一大隊

安巳橋ヨリ囲ヲ衝キテ川尻ノ援軍ニ合ス、

侵襲隊

指揮官小川大尉(又次)

歩兵一中隊第十四聯隊第一大隊第三中隊

警視一小隊五番組

安巳橋ヲ侵襲ス、

歩兵一中隊第十三聯隊第二大隊第二中隊

明午橋ヲ侵襲ス、

予備隊

歩兵二中隊第十三聯隊第二大隊第三、第四中隊

突圍隊ノ服裝ハ、晴雨ヲ論セス外套ヲ携ヘス、彈藥ハ各自百五十発、及ヒ混和水城中ニテ製スル水筒ニテ製スル水吸器ニ盛ラシム、

將校以下悉ク縋帶「リント」ヲ懷ニシ、草鞋ヲ穿テ、餅

四箇・握飯一個・馬肉大約五十目ヲ糧食ニ充ツ、且給養

軍曹・炊事伍長ハ、突貫ノ進路ニ於テハ別ニ職務ナキヲ

以テ、分隊欠員ノ軍曹或ハ軍曹代ニ補シ、準備已ニ全ク

整頓シ、互ニ訣別ノ情衆心ヲシテ感慨セシムルカ如シ、

午前第四時侵襲隊ハ坪井ヨリ明午・安巳二橋ノ方位ニ進

行シ、突圍隊之ニ次ク、賊ハ安巳橋近傍ニ篝火ヲ焚キ、

哨兵ヲ張ル、警視隊ノ前哨兵窺カニ之レニ近ツクニ、賊

見テ味方ト思ヒシヤ、曰ク、敵来タリシヤト問フ、前哨

答フル憂フルコト勿レト、乃チ急ニ退テ之ヲ本隊ニ報ス、

其一隊ハ乃チ吶喊直チニ突キテ賊数名ヲ斬リ、続テ近傍

ノ數量ヲ抜ク、賊兵狼狽争ヒテ兵器ヲ棄テ遁ル、会々

一二ノ抵抗スル賊アルモ、輒ク驅散シテ之ヲ過キ、尚ホ

奮進シテ手取水道町ニ至レハ天既ニ明ク、直チニ白川河

岸ノ賊塁ヲ距ルコト凡ソ百米突ニ至レハ、賊兵之ヲ防戦
 スト雖トモ、侵襲隊ノ突撃其勢ヒ猛烈ナルヲ以テ賊潰散
 ス、我カ突囲隊機ニ投シ、銃鎗ヲ揮ヒ砲烟ノ間ニ挺身シ、
 関声ト共ニ突進シテ河岸ノ塁ニ至リ数人ヲ斫リ、或ハ銃
 鎗ヲ以テ之ヲ斃シ、接戦僅カニ数分時ニシテ安巳橋ヨリ
 距離百米突ノ上流ヲ洩ル、賊兵ハ新屋敷及ヒ向町方位ニ
 遁逃セルヲ以テ、侵襲隊之ヲ追撃シ、突囲隊ハ賊線ヲ蟬
 脱勇進シ、朝霧ニ乗シテ水前寺ノ空屋ニ放火シ、予メ約
 セシ進路ヲ我カ兵ニ報シ、八丁馬場ヲ右折シ健軍村(たけみ)ヲ經
 テ魚取橋ヲ經過シ、中牟田村通り六ヶ村中央ニ至リテ暫
 ラク兵ヲ休息シ、川尻口両軍ノ所在ヲ土民ニ探知シ、且
 ツ之ヲシテ嚮導セシメ、再タヒ路ヲ御舟街道ニ取り陣ノ
 橋ヲ過キ、萬願寺村ヲ經テ緑川ノ浅瀬ヲ徒渉シ、隈ノ庄
 ニ到ルノ際、我カ先搜兵偶然旅団撰抜隊ノ斥候ニ遇フ、
 互ニ戦状ヲ談シ無窮ノ愉快ヲ覺フ、尋イテ木原山下ニ息
 ヒ、午后第四時遂ニ進シテ宇土駅ニ達シ、官軍ニ合スル
 コトヲ得、始メテ連絡ノ緒ヲ開ク、然シテ守城兵ハ先キ
 ニ突囲隊出城后其進路ヲ開キ、声援ノ為メ其方位ニ向フ
 テ猛戦シ、突囲隊ヲシテ、能ク目的ヲ達セシムルニ至レ
 リ、始メ侵襲隊ノ進撃スルニ当リテヤ、巡查数名先ツ進

ミテ九品寺村迄侵入ス、時ニ、老農来リ報スルニ、該村
 元郷藏ニ粮米數百苞ノ貯藏アルヲ以テス、又同村ニアル
 賊ノ炊事場ニモ亦タ白米數百俵アルヲ報ス、因テ直チニ
 之ヲ本營ニ報ス、乃チ會計部ヲシテ之ヲ聚糧セシメ、工
 砲兵ノ馬匹凡ソ百餘頭ヲ出タシ、雇夫・從僕等ヲ役シ、
 城中挙テ之ヲ運搬シ、遂ニ七百餘俵ヲ得タリ、九品寺ノ
 三方ニ賊ヲ驅除シ、且ツ戦ヒ且ツ聚糧シ、其他獲ル所ノ
 モノハ、小銃百挺余・彈藥三千発許・生擒四名ニシテ、
 其殺傷ノ如キモ又タ勘シトセス、土民ノ井川洩辺ニ潜匿
 セルモノ、賊声ノ熾ナルニ駭キ、遁逃セント欲スト雖
 トモ、事急遽ニシテ、遂ニ進退途ヲ失ヒ、城中ニ来ル
 者十七名、依テ出城ヲ請フモノハ輒チ之ヲ許シ、其他ノ
 婦女老少ハ、止ムヲ得ス之ヲ県庁内ニ居ラシム、本日突
 囲ノ策充分ニ行ハレ、殊ニ意外ノ糧米ヲ得、城中ノ人氣
 愈々百倍セリ、午后第四時侵襲隊全ク兵ヲ収ム、此日去
 月二十六日ヲ以テ、城中ノ消息ヲ通センカ為メ、高瀬ニ
 遣ハセシ仕丁坂田吉郎賊ノ為メニ殺サレ、及ヒ本月四日
 ヲ以テ発セシ密使熊野五藏モ亦タ賊ノ為メニ擒セラレ、
 其他県官、賊ノ為メニ斬殺セラル所トナルモノアリト云
 フ、

會計日誌

此日米七百二十俵・粟一俵ヲ九品寺村ニ得、並ニ精米二十六俵ヲ安巳橋ニ得タリ、

武庫日誌

突圍ノ令アルヲ以テ、勝田軍曹・梅藤伍長ヲシテ彈藥ノ分配ヲ司トラシメ、雇夫三十人ヲ付シ、小銃彈藥一萬五千發ヲ担ハシメテ之レニ随行ス、其他燒藥・抛擲彈等凡百ノ兵器ハ之ヲ藪ノ内近傍ニ出タシ、主管者ヲシテ各戰線ノ需要ニ応セシム、且ツ抛擲彈ヲ實際ニ試ミルハ、実ニ此日ヲ以テ始トス、侵襲ニ際シ之ヲ賊壘ニ抛擲シ、多少ノ賊兵ヲ殺傷セシカハ、頗ル其功ヲ奏スルヲ見ルニ足レリ、
四月九日、昨八日ヲ以テ我カ一大隊已ニ圍ヲ衝キ、遠ク川尻ニ赴クヲ以テ、守城ノ各隊、更ニ其守線ノ部署ヲ更定ス、

各隊防禦線配賦

- 嶽ノ丸及ヒ下馬橋 十四聯隊第一大隊第三中隊
- 県庁警視 四番組一小隊
- 古城 警視三番組一小隊
- 旧一日亭及ヒ法華坂 十三聯隊第二大隊第三中隊

○藤崎・片山邸・島邸及ヒ漆畑 十三聯隊第三大隊第一・

第二中隊

- 段山 警視五番組一小隊
 - 野砲營 十三聯隊第三大隊第四中隊
 - 新堀門左側 警視六番組一小隊
 - 京町右側 警視二番組一小隊
 - 京町右正面 十三聯隊第三大隊第三中隊
 - 京町正面 警視一番組一小隊
 - 京町左側 十三聯隊第二大隊第一中隊
 - 工兵營裏 十四聯隊第一大隊第四中隊
 - 千葉城及ヒ厩橋 十三聯隊第二大隊第四中隊
 - 埋門 予備隊十三聯隊第二大隊第四中隊
 - 別ニ步哨ヲ新堀門及ヒ材木小屋ニ置ク
- 此日賊壘ヨリ時々大小砲ヲ発ス、而シテ往生院外面ノ砲台ヨリ発スルモノヲ最モ多シトス、工兵隊野堡ヲ旧一日亭ニ、胸壁ヲ京町及ヒ下馬橋ノ櫓内ニ築ク、
- 會計日誌
- 昨八日ノ聚糧ニ於テ、役夫・馬丁及ヒ將校ノ從僕等総テ功勞アルモノヲ賞シ、金各一円乃至七十五銭ヲ与フ、
- 武庫日誌

山野砲ノ車台・裝藥杖其他工兵所用ノ丁子鋏等、毀損セシモノ少ナカラサルヲ以テ之ヲ修理セントセシニ、諸要品欠乏シテ用ニ供スヘキモノナケレハ、止ムヲ得ス臨機ノ処分ニ從ヒ、歩兵用体操器械ノ中適応ノモノヲ撰ミ、以テ裝藥杖ノ破毀セシモノニ代用シ、又夕裝頭ノ毀損セシ部分ヲ修理スルニハ馬尾ヲ以テセリ、困難已ニ茲ニ至ル、余ハ推シテ知ルヘキノミ、

四月十日、軍中ニ令シテ曰ク、当台守城已ニ五旬余ヲ經ルト雖トモ、守備倍嚴ニシテ最初ノ戦闘以來未タ曾テ賊ノ侵襲ヲ受ケス、我カ數回ノ攻撃毎戦捷ヲ奏シ、殊ニ一昨八日突圍進撃ノ如キハ、十分ニ成算外ノ勝利ヲ得ルト謂フヘシ、是偏ニ各隊各部ノ同心戮力シテ、我カ

天皇陛下ノ為メニ艱苦ヲ厭ハス、各其職務ヲ勉勵スルノ致ス所、屢々勝利ヲ得、賊勢ヲ挫折シ、不日其成功ヲ奏スヘキハ必然ニテ、深ク感賞ノ至リニ候、追テ其筋工上申ニ可及候条、此旨篤ト可申聞此旨相達シ候事、又夕曰ク、永々守城中各隊各部一同勉強奉職候ニ付、為慰勞別紙目錄ノ通り酒肴料下賜候条、右金員当台會計部ニ於テ可請取、此旨相達シ候事、

目録

奏任 金壹円二拾錢 判任 金壹円

諸卒 金八拾錢

又夕曰ク、今般征討ノ海陸軍已ニ東西ニ騰集シ、賊徒糧道ヲ斷切セラレシ上ハ敗散遠キニ非ス、此際彼レ究鼠ノ勢トナリ、突然死戦ヲ決スルモ計リ難シ、自今最モ警備嚴肅ヲ要スル時ニ候条、自今一層勵精候様篤ト可申聞、此旨諭達ニ及ヒ候也、

此日植木及ヒ小萩山地方ノ砲声最モ激烈ナルヲ覺フ、且ツ高橋方位ノ砲声ハ、是レ我カ海軍ノ賊ヲ攻撃セルモノナラン、而シテ城中各守地ノ如キハ殆ント休戦スルモノ、如シ、工兵隊野堡ヲ旧一日亭ニ、胸壁ヲ厩橋側ニ築ツキ、及ヒ交通路ヲ京町ニ開ク、

四月十一日、午前我カ法華坂ノ守兵花岡山ノ賊ヲ砲撃ス、已ニシテ賊本營ヲ二本樹村ニ移スト聞キ、飯田丸ノ守兵野砲ヲ以テ之ヲ射撃ス、午后ニ至リ賊兵我カ県庁ヲ撃ツコト數回、本日司令長官谷少將、伝令使牧伍長ヲ隨カヘ病院ヲ巡視シ、段山ノ砲台ニ登リ、遙カニ本妙寺ヲ望見セシカ、賊ノ狙撃スル所トナリ為ニ負傷ス、此日工兵隊ノ作業昨日ノ如シ、只別ニ二個ノ踏落シ地雷、二個ノ尋常地雷ヲ京町ニ埋メ、柳川町ノ横牆ヲ修理シ、夜ニ入り

テ又胸墻ヲ京町ニ築ク、

武庫日誌

貯藏品已ニ竭クルニ垂ントス、就中二十拇白砲彈ノ如キニ至リテハ、其數一百個ニ滿タス、而シテ「スナイトル」実包ハ四十九万五千五百発、「エンピール」実包ハ七十万零一千発ニ過キササルナリ、

會計日誌

千葉城並ニ新堀門外ニ聚糧シ、薪凡ソ一万貫目ヲ得ル、此日糧食ヲ算スルニ、米四百五十七石六合、粟三十一石一斗六升ナリ、之ヲ合スレハ即チ四百四十六石八斗六升六合トナル、以テ現今ノ消費ヲ一日十二石トスレハ三十七日間、即チ本日ヨリ翌五月十七日ニ至ルマテヲ支フルニ足ル、

四月十二日、昨夜賊兵小舸十艘ヲ艦シ、我カ段山ヲ襲ハントスルノ警報アリ、該守地益々哨兵ヲ嚴ニシ、兵卒ヲシテ徹夜警備ヲナサシム、且砲兵五名ヲ砲側ニ配布シ、其余ヲシテ警視隊ノ散布セル処ニ配当シ、以テ之ヲ俟ツニ、賊兵遂ニ到ラス、然ルニ昨夜土民一人、舟ニ竿シテ片山邸ノ守地ニ来ル、即チ之ヲ捕ヘ賊情ヲ問フ、曰ク、賊兵策尽キ力究マリ、將ニ近日ヲ以テ血戦セントノ説ア

リト、午前第九時我カ飯田丸ヨリ二本樹地方ノ賊ヲ砲撃ス、已ニシテ復タ賊ノ小荷駄、水前寺街道ヲ過クルモノ多シ、本丸ヨリ之ヲ砲撃ス、午后第四時三十分賊兵二十三人計リ本妙寺前ノ藪中ニアリシカ、須臾ニシテ該地ノ石層下ヨリ頻リニ彈藥函ノ如キモノヲ運搬ス、段山ノ守兵榴彈ヲ以テ之ヲ射撃ス、此日工兵隊野堡ヲ旧一日亭ニ築キ、交通路ヲ本町胸墻ヨリ柳川及ヒ金峯山町胸壁ニ至ルノ間ニ開キ、尋常地雷二個ヲ本町ニ埋メ、横墻ヲ金峯山町ニ築ク、

四月十三日、午后第四時本妙寺及ヒ四方地村ノ賊其衆漸ク増シ、殆ント二百名ナラントス、已ニシテ日向崎村ノ賊壘モ亦タ兵許多ナリ、且ツ容貌之レカ隊長タルカ如キモノ從容トシテ我カ守地ヲ窺フ、乃チ榴彈ヲ以テ之ヲ射撃ス、工兵隊野堡砲台ヲ旧一日亭ニ築キ、交通路ヲ金峯山町胸墻ヨリ本町胸壁ニ至ルノ間ニ開キ、尋常地雷ヲ本町ニ埋ム、此日城ノ周圍ニ配布セル砲數ヲ算スルニ、野砲六門、山砲十五門、白砲八門ナリ、

會計日誌

新堀門外ニ聚糧シテ、薪大約一万五千貫目ヲ得タリ、四月十四日、我カ川尻ノ援軍、漸ク將ニ近接セントスル

ヲ以テ、挾撃ヲ凶ラサルヲ得ス、乃チ更ニ突圍隊ヲ編制ス、

第二突圍隊

指揮官林少佐

參謀官黒澤中尉、内野伍長之レニ属ス、

軍医以下計官等列外ハ悉ク定則ニ準シ、傷者運搬役夫

十名コトニ取締二人

歩兵三中队第十三聯隊第二六大隊第二・第三・第四中队

警視二小隊三番組四番組

突圍隊ハ每一人ニ彈薬七十発、糧食一日分二回ヲ支フヘキ

モノヲ携ヘ、其突圍ノ方向ト進軍ノ時機等ハ、賊ノ動靜

ヲ窺ヒ變ニ応シテ以テ之ヲ決セン、依リテ城中モ亦太守

地ヲ變更セサルヲ得ス、

○法華坂右側 第十三聯隊第三大隊第四中队ノ一小隊

○旧一日亭 衛戍兵二十名

○古城 衛戍兵三十名

○県庁 工兵第六小隊

午前第六時三十分川尻ノ戦声甚タ近ツキ、賊軍往々圍ヲ

解キテ潰散セルヲ以テ、我カ城中各守地ノ兵争フテ之ヲ

砲撃ス、已ニシテ城外ノ砲声頓ニ収マリシカハ、城中ノ

兵且ツ疑ヒ且ツ憂フ、午后第四時俄然台下近傍銃声起ル、一軍伍ヲ整ヘ肅然トシテ長六橋辺ニ迫ル、城中ノ兵其未タ官賊ヲ判スルコト能ハス、已ニシテ其前鋒定製ノ服装ニテ手旗ヲ揮ヒ、漸ク進ミテ山崎ニ來ル、乃チ之ヲ熟視スルニ、我カ援軍ノ別働旅団兵已ニ川尻口ヲ破リ來ルモノナリ、下馬橋ニ達スルニ及ヒ、先鋒ノ將校山川中佐等呼テ曰ク、已ニ川尻口ノ賊潰散シ、斯ニ連絡スト、乃チ入城セリ、依リテ速ニ下馬橋ノ撤橋ヲ修理シ、以テ之ヲ便ニス、須臾ニシテ教導團撰抜隊一中隊、隊長目加田中尉之ヲ率イテ來会ス、城中ノ諸軍、五旬余ノ孤城ヲ固守シ、千辛万苦シテ本日旅団ニ会合スル、豈快然タルヘカラサランヤ、実ニ骨ニ肉シ、死ヲ起スノ思ヲナセリ、是ヨリ先キ北岡細工町及ヒ長六橋方位ノ賊兵、其守地ヲ捨テ木山ニ向テ潰走スルヲ以テ、直ニ突圍隊ヲ坪井ニ出シ、安巳・明午二橋地方ハ疾ク圍ヲ解キ退散スト雖トモ、建町ノ賊未タ固守スルヲ以テ之ヲ突キ、黄昏ニ及ンテ兵ヲ引キ揚ケタリ、是ニ至リテ各守地ノ兵頻リニ敗賊ヲ射撃シ、四面ノ賊概ネ解散スト雖トモ、出京町・建町ハ依然トシテ之ヲ守ル、此日工兵隊野堡ヲ旧一日亭ニ、胸牆ヲ厩橋ニ築キ、竹柵ヲ本町ニ結フ、

會計日誌

入援ノ官兵ニ給スル糧食ハ、第一・第二賄所ヨリス、而シテ別働第一旅団ノ兵一中隊ハ之ヲ新宮ニ置キ、寢具等ヲ給スルニ着手ス、明十五日ヨリ粥並ニ粟飯ヲ糜シ、新ニ米飯ヲ給スルヲ以テ、之ヲ各賄所ニ報ス、且ツ本日出戰ノ諸隊ヘハ之レニ小夜食ヲ給ス、

四月十五日、午前第六時、賊兵本妙寺近傍ニ屯集セルヲ以テ、榴彈ヲ放チテ之ヲ散乱セシム、已ニシテ賊再ヒ来リ、之ヲ火セントス、我カ兵復タ榴彈ヲ放チテ之ヲ拒ム、午后京町口賊兵ノ衆寡ヲ試ミンガ為メ、攻襲偵察歩兵一中隊・警視一小隊及ヒ砲兵一分隊トヲ出タシ交戦セシムルニ、賊猛烈ニ射撃ス、須臾ニシテ賊ノ銃砲俄然音響ヲ絶チテ寂寥タリ、既ニシテ忽チ出京町ヲ放火シテ遁逃ス、続テ植木口第二旅団ノ兵五六名我カ守線ニ来会ス、是ニ於テ木留ヨリ鳥ノ巢ノ賊線全面放火シ、炎焰天ヲ躍キ、兇賊屈疊シテ植木・川尻ノ両賊退路ヲ切斷セラレ、頗ル狼狽シテ悉ク木山ニ敗走ス、諸軍悉ク熊本ニ会合ス、去ル八日突圍セル一大隊モ亦タ御舟ヲ発シ、(辺嶺出)ヘハ山ノ賊ヲ破リテ午后第四時帰城ス、糧米、酒肉陸續トシテ各道旅団ヨリ運搬シ、城中ノ空庫一時ニ充塞シ、積日飢渴ノ苦ミ

ヲ免レタリ、此日工兵隊ヲシテ坪井・井芹ノ両川漲水ヲ落シ、諸道ノ便ヲ得セシム、

熊本守城概略

今般鹿兇島賊徒暴挙ノ勢有之ニ付、当台防戦ノ儀ニ付テハ、或ハ進ミテ之ヲ薩界ノ險ニ要シ、或ハ之ヲ半途ニ迎ルノ略ナキニ非ス、然ルニ当城ノ兵去冬不意ノ襲撃ヲ受ケシヨリ、兵卒ノ氣魄未タ全ク旧時ニ復セス、諸士官専ラ士氣ヲ淬励スルニ注意シ、招魂祭ニ依リ或ハ競馬、或ハ烟花或ハ角力等、総ヘテ士氣ヲ励マスノコト是レ勉ムト雖トモ、賊徒素ヨリ強兵ノ名アリ、且ツ其怒氣ノ発スル処容易ニ当リ難シ、加之ニ県下士族賊ニ消息ヲ通スルモノ少ナカラス、故ニ進ミテ熊本市街ヲ保護セントスレハ、賊脚下ニ生スルノ憂ナキニ非ス、且ツ殊死ノ兇賊ヲ平原広野ニ防ク、其勝算固ヨリ期シ難シ、一旦迎ヘ戦フテ敗ル、トキハ、兵氣沮喪シテ大ニ賊勢ヲ長スルニ足ル、已ニ沮喪ノ兵ヲ以テ初メテ守城ヲ謀ルトキハ、遂ニ堅守ヲ期シ難シ、是レ今般熊本城ヲ堅守シ、以テ賊ノ拠ル処ヲ失ハシムルニアリ、先キニ陸軍卿已ニ我ニ示スニ、攻守共ニ適宜ニスヘキノ命アリ、蓋シ本台ノ存亡ハ西国一般ノ人心ニ関スルヲ以テナリ、我カ輩所見モ亦タ全ク此

ニアリ、故ニ橋梁ヲ撤シ、柴柵ヲ結ヒ、道路ヲ塞キ、要地ニ地雷ヲ埋メ、障礙ノ家屋ヲ毀チ以テ展望ヲ便ニス、準備稍成ルニ垂ントシ本台忽チ火ヲ失シ、積実尽ク灰燼ニ歸シ、全キ処ノ者獨リ彈藥諸器械ノミ、故ニ不得已一時民家ニ徵収シ、以テ數旬ヲ支フルニ足ルヲ得タリ、賊素ヨリ本台ヲ輕侮ス、或ハ云フ、一朝之ヲ抜クヘシト、二月二十二日同二十三日力ヲ極メテ攻撃ス、我カ兵期スル所ノ略ニ依リ、別紙図面ノ通り歩砲工各兵ヲ配布シ、十分防戦ス、賊遂ニ退キ、長囲ノ策ヲ決スルニ似タリ、是ニ於テ本台賊軍中ニ孤立シ、外情ヲ偵知スルニ由ナシ、互ニ壘壁ヲ隔テ相守ルコト數日、我カ小倉營所ノ兵二月二十二日ヲ以テ着台ノ心算ノ処、途中障礙ヲ受クルヲ以テ來ル能ハス、故ニ兵數寡少守ル可クシテ攻ムルニ足ラス、益々堅守ノ方略ヲ固フス、賊已ニ兵ヲ分チテ官兵ノ熊本ニ入ルモノヲ防ク、賊兵已ニ分ルト雖トモ、県下土族等賊ニ同スル多キヲ以テ我カ隙ヲ伺フノ恐レアリ、且ツ官兵ノ小倉ヨリ來ルモノ其孰レノ地方ニアルヲ知ラス、是ヲ以テ進入ノ官兵及ヒ賊兵トノ間隔モ、亦タ知ルヘカラス、或ハ賊ノ後路ヲ突カサルヲ議スルモノアルヘシ、是又見ル所ナシト謂フヘカラス、官兵ノ情況ヲ知ラント

欲シ、人ヲ遣ル數度ニ及フト雖トモ能ク其功ヲ遂クル能ハス、獨リ監獄穴戸正輝ヲ遣リ其目的ヲ達スルアリ、彼我兩情悉ク知ルコトヲ得タリ、是ニ於テ策ヲ決シ、官兵ノ大軍山鹿・木ノ葉等ノ賊ヲ破ルヲ待チ、我レ敗賊ノ側面ヲ攻撃シ尾シテ川尻・八代ヲ占メ、賊ヲシテ足ヲ止ムルニ地ナカラシメントス、既ニシテ官兵漸次進撃スト雖トモ、賊田原其他ノ險ニ抛リ拔キ難キヲ聞ク、且ツ当台糧食ノ如キ百万聚収ノ策ヲナスト雖トモ、終ニ尽クル期アラントス、是ニ於テ策ヲ決シ、糧食未タ全ク尽キサルニ及ヒ周圍ノ守線ヲ短縮シ、兵若干ヲ以テ本月八日ヲ期シ植木口ニ向フテ囲ヲ突カントス、適前一日川尻口煩銃ノ音響盛ナルヲ聞キ、又タ之レガタメニ進路ヲ開カサルヘカラス、且ツ川尻口ノ如キハ道路平夷ニシテ容易ニ官兵ニ合スルヲ得ヘキヲ以テ、遂ニ前策ヲ転シ、八日払曉急ニ川尻口ニ突貫シ以テ官兵ノ進路ヲ開クニ至ル、是レ當城戦略ノ大概ナリ、書シテ以テ総督府殿下ニ獻ス、

二月二十二日午前三時川尻賊ノ屯ヲ襲フモノハ、蓋シ賊ノ情況ヲ試ミントスルノ主旨ニシテ、深く進撃ヲ謀ルニ非ス、然ルニ我カ兵発スル稍々遅々スルヲ以テ、賊軍已ニ覺ル事ノ不成ヲ計リ、輕ク兵ヲ挙げ

帰ル、決シテ迎へ戦フモノニ非サルナリ、

熊本鎮台司令長官

明治十年四月十五日

陸軍少将谷干城

征討総督有栖川熾仁殿

熊本籠城日誌（熊本県庁）

二月三日ノ夜、何人タルヲ不知、鹿兒島炮庫所蔵ノ彈藥ヲ悉皆強奪シタリト、

四日ノ夜ニ至リ、四方喧囂雜沓、或ハ兵器ヲ携持スル者、又ハ巡查等左走右奔ス、其事由タル鹿兒島県ヨリ東京ニ出仕スル某ノ術策ニヨリ、同県人ニテ旧警視庁警部或ハ書生等ニ、陽ニ帰省ヲ名トシ、陰ニ問者トナシ、多数人込シメタル趣発覚スルヲ以テ、巡查探索急ニ数名ヲ縛シ之ヲ糾スニ、果シテ某ノ依頼ニテ西郷ヲ始メ、他英名アルモノヲ刺殺スルノ企ナルヲ吐露シタリ、是ニ於テ、士族等之ヲ聞大ニ忿激シ、奴輩討ツヘシト、俄然私学校ニ屯集スル者五六万人余ニ及ヒタリト、
陸軍大将西郷隆盛・陸軍少将桐野利秋・陸軍少将篠原国

幹等モ不審ヲ抱キ、何故ニ刺客ヲ出サレタルヤ政府へ尋問ノ為メ出京セントシ、大山鹿兒島県令へ旧兵隊ノ者共隨行多数出立ニ付、人民動搖セサル様保護ノ義ヲ依頼シタリ、大山県令聞届ノ上、其旨報告ノ為メ、各鎮台・各府県エ專使トシテ二月八日ヨリ官員ヲ出サルト、

二月三日、蒸氣船三国丸鹿兒島湊エ伊集院郡平担任、薩州製造ノ銃器等受取トシテ東京ヨリ来着シタリ、私学校生徒之レヲ察知シ、器械軍ヲ警固シタルニ付、該船ハ直チニ帰帆セリ、然ルニ其器械庫ニ焼キ払ヒノ仕掛ケアルヲ生徒等ガ見出シ、忽チ疑惑ヲ生シ、急ニ国内エ触レテ郵便ヲ止メ、口ミヲ固メ、不審ノ者ヲ探偵シ、教導職大津鉄念外屯名、及ヒ黒江某・山下某・高木某・野間口某^(附)・園田某等数十名ヲ捕縛シ、其所持品ヲ査検スルニ、書翰数通アリ、文中蒸氣廻漕及ヒ器械庫焼キ払ヒノ義等記載シ、且ツ其他ノ百事明白スルニヨリ、之ヲ確証トシ、其非理ヲ糾サン為メ、兵器ヲ携へ東京ニ逼ラント議定シタリト、二月五日ヨリ守備ヲ嚴ニシ、商人体ノ者ニ至ルマデ一切国境ニ入レズ、県下ノ者ハ他出ヲ許サス、大口郷・出水郷境目間道等迄、刀劍ヲ帶ヒ銃器ヲ携フ者五六名宛出張シ、通行出船等ヲ制禁スト、

同日午前第十時、士族中エ兵器ヲ用意シ、ズボン・マン
 テルニテ急速宿元出立スヘキ旨布達シタリト、
 同日夜鹿兒島ヨリ米ノ津迄八小隊出張ノ上、戸毎ニ米式
 斗ヲ賦シ、出水郷ハ戸毎ニ梅干・漬物等ヲ出サシメタリ、
 而シテ平民ノ者共等ハ、梅干・草鞋ヲ名主ヨリ取寄せサ
 セ、且ツ麓ニ於テ十五歳ヨリ六十歳迄ノ者ヲ、尽ク米搗
 ノ夫方ニ喚ヒ出シ、其他追々百般ノ軍備ヲナセリト、
 私学校ノ内ニ教導団ト書シタル所ヲ本営ト改メ、陸軍大
 將西郷隆盛日々出頭スト、
 兵數ハ凡ソ式万四五千人ヨリ下ラス、而シテ出兵ノ人數
 ハ銃器等充分調フタリト、
 夫方ハ軍士百名ニ付五十名ノ割合ニテ、壱名ニ金拾円宛
 与へ、雨具其他必要ノ品物購求スヘキ旨達タリト、
 軍士ノ軍用金ハ壱人拾円宛ノ割賦ナリト、
 鹿兒島県エ入込ミタル真宗坊主ハ尽ク捕縛シタリト、
 内務省御用掛山田武雄・渡辺重石丸鹿兒島ヨリノ帰途、
 米津通行ノ際番兵ニ取巻レ、県庁ノ指令ニ付通行ヲ禁ス
 ルトテ、巡查本局エ拘引セラレタリ、依テ同人ヨリ何故
 ニ斯ノ処業ヲナスヤト詰問シタルニ、僧徒ノ者正教院ノ
 許可ヲ不經、県内エ入込ミ人民ヲ眩惑スルニヨリ、正教

院ノ依頼ヲ受ケ嚴重取締ヲナス旨答タリト、
 熊本鎮台ノ医官某、薩州エ帰省セントシ米津ニ至ル、番
 兵アリ、通行ヲ止ルニ付其次第ヲ問フニ、即今警戒ノ義
 アリト答フ、依テ重テ警戒ノ旨趣ヲ問フニ、近ロ海賊多
 ク、天草沖ニテ或ル商船ノ荷物ヲ掠奪シ、又津畑辺ニテ
 盜取スル者アルニ付、嚴重ニスト答フルニヨリ、自分ハ
 鹿兒島者ナリ、支障アルマジト云フタリ、然ルニ陸軍医
 官ノ証憑ナケレハ、決シテ通行ナラズトテ、已ニ捕縛ス
 ルノ勢ニヨリ其儘引返シタリト、
 長崎裁判所松本七等判事外三名鹿兒島ヘ往カントシ、薩
 摩国境ニ至ルニ、番兵アリ、入ルヲ許サス、終ニ引返シ
 タリ、
 私学校エ入ル者ハ一切帰宿ヲ許サス、其帰宿スル者ハ仙
 台大橋ノ左右エ番兵ヲ張りテ之ヲ押へ、校則ノ如キハ、親
 子兄弟タリトモ固ヨリ告クルヲ禁シ、総人數ハ大凡八万
 人計モ有之、其勢猖獗ニシテ、途上之レニ行逢フモノハ、
 皆ナ遠方ヨリ傍ラニ避ケ通行スト、
 肥前・土佐及ヒ当県ヨリモ數名鹿兒島エ入込ミタリト、
 鹿兒島県（願脱之旨毎芝舟傳達）今藤宏ノ弟勇、西郷大將等ノ随行ヲ希望シ、左
 ノ願書ヲ出シ、直チニ聞届ケラレタリト、

敢テ書面ヲ以テ申上候、私儀略々字ヲ識ルノ訳ニヨリ、
謬テ諸公ノ知ヲ受ケ、教員ニ相加里、一毫ノ補益ナキ
ハ素ヨリ知ル所ナレトモ、一旦緩急ノ節似合ノ一技ヲ
奏スルノ機会、今日ニ在リト奉存候間、願クハ一技ノ
長ヲ棄給ハス、区々ノ徵志ヲ御洞察之レ有リ、似合ノ
末役ニ相備ハリ度、此段申上候也、

明治十年二月六日

今藤 勇

西郷隆盛殿

私 学 校

御中

私学校ハ逐日盛大ニシテ、紛骨尽忠ハ此時ニ在リトテ、
頻リニ入校ヲ志願シ、蚩々ノ愚民等モ此際ノ出兵ニ漏洩
セハ、他日ノ面目ヲ失ストテ出兵ヲ願フト、

鹿児島県薬庫エ乱妨セシ者ハ、県庁ニテ尽ク取押へ、事
情具陳ノ為メ、同県元大属澁谷某及ヒ橋某ノ兩名、俄カ
ニ出京シタリト、

出兵ハ二月十六日迄ノ内ニハ愈発程ノ筈ナリト、

右鹿児島県形勢探偵ノ顛末、委細電報及ヒ郵便ヲ以テ、
時々其筋々へ上申ニ及ヒタリ、

二月十一日、鹿児島県形勢愈切迫ニテ、數百人打揃ヒ、

已ニ国境ヲ押シ出サントスル勢ヒニ付、若シ兵器ヲタズ
サエ県内エ押シ出セハ、鎮台エモ協議シ、尚巡查ハ勿論
有志ノ者ヲ募リ兵器ヲ持タセ、臨機処分シ宜シキヤ、電
報ヲ以テ内務卿へ伺フタリ、而シテ即日亦タ電報ヲ以テ、
左ノ通御指令アリ、

電報承知セリ、士族ニ兵器ヲ持タスルコトハナルベク
見合セ、都へテ鎮台へ協議シ、止ヲ得サル節ハ更ニ申
請スヘシ、巡查二百名昨日出帆、一兩日中ニハ着スヘ
シ、尚時々報知ヲ待ツ、

是ヨリ先キ、二月八日ニ於テ、県下人心未タ穩カナラス、
且ツ隣県ノ風聞モ有之、旁一時取締ノ為メ、巡查百名警
部引連レ臨時出張アリタキ旨、電報ヲ以テ川路大警視へ
請求シタリ、依テ翌九日左ノ電報アリ、

神足勘十郎始メ警部巡查二百余人、其地へ向ケ明日出
帆ノ筈ナリ、

二月九日、品川大書記官明日日出立其地へ赴クト、電報ニ
テ内務省ヨリ達アリ、

二月十二日、河村海軍大輔・林内務少輔ヨリ、尾道局発
ス電報ニテ左ノ如ク達アリ、

薩摩鎮定ナリガタク、尽ク兵器ヲ持テ玉込ヲシテ、我

カ船ニ乗り入ラントス、之レニテ承知アレ、肥後ニテ

陸地ヲ上ルトノコト、右ノ挙動ニテハ、其名義トスル
 処立チ難ク、我レ去ル九日薩摩港ヲ出帆ス、東京大山・

大坂山縣ヘモ報告セリ、右ノ趣谷少将ヘ通スヘシ、

鹿児島ヨリ海陸押シ出スノ風聞アリ、而シテ九日以来絶
 ヘテ郵便来ラス、

二月十一日、老万人程鹿児島米ノ津ヘ出兵ノ積リニテ、
 宿ヲ手配スル処、軍隊変シテ鹿児島ヘ向ケ、出水ヨリ千
 五百人出兵スト云フ風聞アリ、

鹿児島ヨリノ郵便九日以来着セサル所、十三日ニ至リ始
 メテ着セリ、右郵便状ノ中、同県米ノ津郵便局ノ附箋ア
 リ、云フ、野間ノ原トイフ所ニ農武士大勢集リ、郵便ヲ
 開封スルニヨリ発達ヲ見合セタリ、然ルニ農武士等昨夜
 退散セリト、

二月九日発鹿児島出立、十四日帰県シタル者アリ、其言
 ニ云フ、二月四日以来、警視局警部・巡查ノ内帰省或ハ
 免職ニテ帰県シタルモノ等式拾九名程各所ニテ捕縛シ、
 西郷・桐野・篠原等私学校ニ出会シ、専ラ上京ノ事ヲ議
 スルト、

二月十五日、河村海軍大輔ヨリ神戸局発電報ニテ左ノ通

達アリ、

鹿児島人船ヨリ突出スル勢ヒ相見ヘ、軍艦二艘伊藤少
 将指揮シ、当県ヘ向ケ今日正午ニ着艦スル積リ、海上
 警備ハ御懸念ナキ様御承知アルベシ、

二月十二日出立ニテ、鹿児島ヨリ帰県シタル巡查ノ探偵
 ニハ、鹿児島人ハ海路ニ出デス、総ヘテ陸路ニ出ツルト
 云フ、右ハ甲鉄艦ヲ恐ル、カ故ナリト、又鹿児島ニテ兵
 隊ヲ組ムヲ見タリ、人員凡ソ四万七八千人モアリ、帰途
 大口辺迄人民ヘ米ノ白ラゲヲ申付ケタリトイウ、

二月十五日、海陸二万五千人一応鹿児島ニ集リ、隊伍ヲ
 改編シ、二月十五日ヲ以テ愈出兵ノ風聞アリ、
 二月十六日、熊本電信局保護ニ注意スヘキ様、前島内務
 少輔ヨリ電報ヲ以テ達アリ、
 二月十六日午後第六時、警視局ヨリ出張ノ巡查博多ヘ着、
 十八日午後熊本着ノ筈ナル旨、神足一等警部ヨリ電報ア
 リ、

二月十七日、鹿児島人数水俣・人吉二道ヘ千人ツ、押シ
 出ス様子ニテ、既ニ水俣^(熊本県水俣市)ヘ宿取ノ者拾名余昨日着タリ、
 依テ兵器所持ノ上ハ一応談判シ、強テ通行セハ鎮古ヘ協
 議シ、臨機処分ノ積ニ付、政府ニ於テモ至急御着手アリ

議シ、臨機処分ノ積ニ付、政府ニ於テモ至急御着手アリ

タキ旨、内務卿へ上申セリ、

同日鹿兒島県人数兵器ヲ持テ県下へ押シ出スニ付、県官指出シ一応接指留ル積リナリ、依テ至急御指令アリタキ旨、内務卿へ上申セリ、即日内務卿ヨリノ御指令左ノ如シ、

鹿兒島人数兵器ヲ持テ押シ出ス趣承知セリ、速カニ鎮台ニ報シ、臨機ノ処分スヘシ、

二月十五日、御用有之上京ノ義ヲ桑原七等出仕へ申達、(向也)内人即夜出立セリ、

二月十八日

鹿兒島県人数愈我カ県内へ押シ出シタル旨、水俣詰警部ヨリ報告セリ、依テ一等属近藤幸止・四等属横田弁・七等属松村秀眞・持永義方ヲシテ、(熊本県八代市)応接ノ為メ八代迄指シ出シタリ、其達書左ノ如シ、

別紙之大意ヲ以テ応答可致候事、

明治十年二月十八日

別紙

今回諸子上京ト号シ、道ヲ本県ニ取テ出ントス、敬明未タ其事由ヲ審ニセスト雖モ、其形貌ヲ観ルニ、頗ル怪ムニ足ルモノ有リ、夫レ国家ニ法律アルハ諸子ノ固ヨ

リ諳知スル所也、蓋シ之ヲ施スハ政府ノ權利ニシテ、

之ヲ守ルハ人民ノ義務也、若シ已ムヲ得サル情由アリ、直ニ官ニ訴ント欲セハ、宜シク自ラ恭順シ、大義ノ在ル所名分ノ存スル所、誠意以テ之ヲ訴フレハ、官何ソ之ヲ聴サルノ理アララン哉、何ソ又猥ニ凶器ヲ携へ、多数ノ人員ヲ率ヒ、無智ノ人民ヲ動揺シ、県治ヲ妨クルニ至ン、如シ夫レ如此ハ、縦令ヒ名分ノ其間ニ存スルモノ有ト雖モ、其形貌ニ於ル、実ニ官法ノ容レサル所、敬明ニ於テ決シテ之ヲ許ス能ハス、若シ強テ其意ヲ遂ント欲スルカ如キハ、官自ラ別ニ処スル所アララン、諸子之ヲ了セヨ、

同夜一等属近藤幸止等、鹿兒島県人数宿配総轄同県士族河野四郎左衛門・宮内喜一郎・岩下次右衛門ノ三名、萩原ニ泊スルニ付、其宿ニ就キ応接ス、問答左ノ如シ、

問 今回多人数出京之趣、右ハ如何ノ次第ナルヤ、

答

先般来東京ヨリ西郷・桐野・篠原等ノ刺客トシテ、警視局警部奉職ノ者数拾人帰国ニ付、捕縛ノ上糺問スルニ、川路大警視ノ内命ヲ受ケ、刺客トシテ帰国ノ旨白

状シタリ、西郷等若シ罪跡アル有レハ、公然其罪ヲナ
ラスヘシ、何ソ刺客杯曖昧ノ御指置^(他)ヲナス、此義甚々
了解セス、依テ政府へ尋問ノ為メ上京セントス、然ル
ニ旧兵隊ノ面々何レモ随行シ、多人数ニ及ヒタリ、

問

御国法モ之レ有ルニ付、兵器ヲ携持シ通行ノ義ハ、何
分相成ガタシ、

答

前頭ノ如ク刺客等指向ケラレ、曖昧ノ御措置有之上ハ
途中如何ノ変事モ計リ難シ、依テ其為メ兵器ヲ所持シ
タリ、

我

兵器所持ノ上ハ決シテ難差通、

彼

拙者共出先ニテハ難差扣、其義ハ西郷大将へ談判セラ
レタシ、尤モ専使宿配等ハ兵器ハ所持セス、

我

専使宿配等帯刀モ無之哉、

彼

専使ハ知ラス、拙者共ハ帯刀セリ、

我

帯刀モ今日ハ国禁ナリ、其儘指通シガタシ、

彼

成ルベク平穩ニテ通行ノ積リナリ、然レトモ万一巡査
等ヨリ疎暴ニ指留ルヤモ難計、依テ用心ノ為メ帯刀セ
リ、

我

今回多人数上京ノ原由ハ、我カ権令ニ於テハ具サニ承
知セス、然レトモ形容上既ニ御国法ニ触レタレハ、何
分難差通、

朝廷ニ対シ伺ノ筋アラハ、法ニ触レサル様恭順申立ノ
道モ可有之、然ルニ法ヲ犯シ強テ通行スルカ如キハ、
不得止其筋エ通知シ別ニ処分アルヘシ、

彼

如何ニモ御尤ナリ、然レトモ拙者ニ於テハ難指扣、後
隊ノ者へハ早速其趣通スヘシ、

本日午後第一時、鹿児島県ヨリ専使トシテ、同県元権中
属原作藏・元権少属高木正榮・元等外一等出仕字宿行徳
ノ三名出庁シ、左書甲印ノ添翰及ヒ乙印ノ通知書ヲ指出
シタリ、権令一覽ノ上面会シ、多人数ヲ率ヒ兵器ヲ携へ

通行ノ義ハ、照会ニ応シ難キ旨決答ニ及フ所、西郷氏ハ大将ニ付兵器ヲ携フ、固ヨリ其権内ノ事故、右等ハ直チニ西郷氏へ談判セラレタシ、自分共ハ県令ノ通知書并書中不尽ノ廉等、演説ニ及フ迄ノ権限ナル旨申出退庁シタリ、甲印 書取

添翰ヲ以テ申進候、今般西郷隆盛外人員上京ニ付、万一御県下ニ於テ訛言浮説等相行ハレ、人民動揺ノ形況ドモ有之候テハ、上ハ朝廷下ハ人民ノ為メ、拙者心中ニ於テ憂慮致居候間、別紙御通知之趣ヲ以テ御管下へ告諭、人民動揺無之様御着手給度、御意中ノ事トハ存候へ共、此段更ニ内情ヲ以テ御依頼ニ及候也、

明治十年二月十四日 鹿兒島県令大山綱良印

熊本県権令富岡敬明殿

乙印 活版

甲第九号

今般陸軍大将西郷隆盛外二名、政府エ尋問ノ筋有之、旧兵隊等随行不日ニ上京ノ段届出候ニ付、朝廷へ届ノ上更ニ別紙之通各府県並ニ各鎮台へ通知ニ及ヒ候、就テハ此節ニ際シ、人民保護上一層注意着手ニ及ヒ候条、篤ク其意ヲ了知シ、益々安堵可致、此旨布達候事、

但凶徒中原尚雄以下ノ口供相添候、

明治十年二月十二日

鹿兒島県令大山綱良

今般当県官員エ専使申付、御通知ノ事件左ニ申進候、近日当県ヨリ旧警視庁へ奉職ノ警部中原尚雄、其外別紙人名ノ者共、名ヲ帰省等ニ託シ潜カニ帰県ノ処、彼等窃カニ國憲ヲ犯サントスルノ奸謀発覚シタルニ付、即チ御規則ニ本ツキ其筋へ申付、該人名捕縛ノ上鞠問ニ及候処、図ラスモ該犯ノ口供別紙之通ニ有之候、就テハ右事件陸軍大将西郷隆盛・陸軍少将桐野利秋・陸軍少将篠原國幹等ガ耳聞ニモ相触タルカ、右三名ヨリ今般政府へ尋問ノ筋有之、不日ニ当地発程致候間、御含ノ為メ此段届出候、尤旧兵隊之者共随行多數出立致候間、人民動揺不致様、一層御保護及御依頼候也トノ書面ヲ以テ届出候ニ付、県庁ニ於テ書面ノ趣聞届ノ上、朝廷へ御届申置候間、為御心得此段及御通知置候也、

明治十年二月

鹿兒島県令大山綱良

各鎮台

各府県

御中